



天保山砲台跡4トレンチ検出軌条



天保山砲台跡7トレンチ検出軌条



明治5年の磯地区 尚古集成館蔵



明治5年の鹿児島港 尚古集成館蔵

序 文

この報告書は、近代化産業遺産群世界遺産登録推進事業に伴って、平成22年度に実施した鹿児島市に所在する鹿児島紡績所跡・祇園之洲砲台跡・天保山砲台跡の発掘調査の記録です。

鹿児島紡績所跡では、集成館事業の一環として建設された、日本初の洋式紡績工場「鹿児島紡績所」の基礎部分と思われる遺構が発見され、当時の建物の構造を知る手がかりとなるものと期待されます。

祇園之洲砲台跡と天保山砲台跡では、薩英戦争時の砲台に関連する遺構が発見されました。祇園之洲砲台跡では、戦闘の激しさを物語る石垣や砲座の硬化面が発見されました。天保山砲台跡では、砲座部分の石組が検出されました。いずれも、幕末の台場の構造を知る有用な情報を得ることができました。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査に当たりご協力いただいた鹿児島市教育委員会、(株)島津興業、関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 寺 田 仁 志

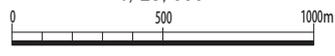
報 告 書 抄 録

ふりがな	かごしまぼうせきじょあと・ぎおんのすほうだいあと・てんぼざんほうだいあと							
書 名	鹿児島紡績所跡・祇園之洲砲台跡・天保山砲台跡							
副 書 名								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第172集							
編集者氏名	西園勝彦, 楸田岳志							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811							
発行年月日	2012年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
かごしまぼうせきじょあと 鹿児島紡績所跡	かごしまけん 鹿児島県 かごしまし 鹿児島市 よしのちよういそ 吉野町磯	46201	156	31° 36′ 58″	130° 34′ 31″	確認調査 2010.5.17～ 2010.7.28	140	保存目的 調 査
ぎおんのすほうだいあと 祇園之洲砲台跡	かごしまけん 鹿児島県 かごしまし 鹿児島市 しみずちよう 清水町	46201	146	31° 36′ 17″	130° 34′ 12″	確認調査 2010.9.9～ 2010.11.30	212	
てんぼざんほうだいあと 天保山砲台跡	かごしまけん 鹿児島県 かごしまし 鹿児島市 てんぼざんちよう 天保山町	46201	-	31° 34′ 23″	130° 33′ 53″	確認調査 2011.1.6～ 2011.3.11	398	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
かごしまぼうせきじょあと 鹿児島紡績所跡	生産遺構	近世	石垣, 坪地業, 緑青の三和土, 切石布基礎		染付, 薩摩焼, 窯道具 棧瓦, 耐火レンガ, 轆の羽口 銅製品, 寛永通宝, 琉球通宝			
ぎおんのすほうだいあと 祇園之洲砲台跡	戦跡遺構	近世	土塁, 石垣, 砲座の硬化面, 石列		染付, 陶器, 薩摩焼, 壺屋焼, 瓦 寛永通宝, 鉄製品			
てんぼざんほうだいあと 天保山砲台跡	戦跡遺構	近世	土塁, 石垣, 砲座 石畳		染付, 陶器, 薩摩焼, 瓦, 鉄製品			
遺跡の概要	<p>【鹿児島紡績所跡】 鹿児島紡績所は、薩摩藩第十二代藩主島津忠義によって1867（慶応三）年に建設された日本で最初の洋式機械紡績工場である。正確な位置などが不明だったが、今回の発掘調査で紡績所の建物の基礎と考えられる遺構が発見された。また、幕末の3時期にわたる遺構が検出された。</p> <p>【祇園之洲砲台跡】 西欧の進んだ科学技術を積極的に導入する契機となったのが1863（文久三）年の「薩英戦争」である。祇園之洲砲台は、生麦事件の交渉で圧力をかけにきたイギリス艦隊に砲撃を加え、激戦地となった場所である。今回の発掘調査で、薩英戦争当時の石垣や砲座・土塁などが広く残存していることが確認された。また、石垣・土塁を「薩英戦争前につくられたもの」と、「戦争後に改修されたもの」に分けて捉えることもできた。</p> <p>【天保山砲台跡】 天保山砲台は、1863（文久三）年の「薩英戦争」でイギリス艦隊と砲撃戦を交えた場所で、ここからの砲撃で戦いの火ぶたが切られたと言われている。天保山砲台跡では、半円形に2列の敷石が敷かれた軌条を2基検出した。この敷石には、轍が確認できる。また、甲突川に向かって下る石畳（荷揚場）を検出した。</p>							



遺跡位置図 (1/25,000)

1/25,000



例言

- 1 本書は、九州・山口近代化産業遺産群発掘調査事業に伴う鹿児島紡績所跡・祇園之洲砲台跡・天保山砲台跡の発掘調査報告書である。
- 2 鹿児島紡績所跡は鹿児島県鹿児島市吉野町磯に、祇園之洲砲台跡は鹿児島県鹿児島市清水町に、天保山砲台跡は、鹿児島県鹿児島市天保山町に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、県企画部世界文化遺産課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は平成22年度に実施し、整理・報告書作成は平成23年度に実施した。
- 5 掲載遺物番号は、各遺跡ごとの通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 7 本書で使用した方位はすべて磁北である。
- 8 発掘調査における図面作成の一部は、有限会社ジパングサーベイに委託した。
- 9 発掘調査における写真の撮影は、調査担当者が行った。
- 10 遺構図等の作成及びトレースは、楸田岳志が整理作業員の協力を得て行った。遺構図等のトレースの一部は、有限会社ジパングサーベイに委託した。
- 11 出土遺物の実測・トレースは、西園勝彦が整理作業員の協力を得て行った。
- 12 遺物の写真撮影は、西園が行った。
- 13 本書の編集は西園・楸田が担当し、執筆分担は次の通りである。

第1章～第2章	楸田
第3章 第1節～第4節、第6節	楸田
第5節	内山
第4章～第5章	西園
第6章 第1節	楸田
第2節	西園
第3節	世界文化遺産課
- 14 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、遺物注記等で用いた遺跡記号は、鹿児島紡績所跡は「BJ」、祇園之洲砲台跡が「GS」、天保山砲台跡が「TP」である。

凡例

- 1 基準方位は磁北であり、レベルは海拔絶対高である。
- 2 使用した土色は『新版標準土色帳 2004年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。ただし、陶磁器の胎土の色調や釉調については、『標準土色帳』を基準としながら、一般的な色調感も加味して表現した。
- 3 遺構・遺物実測図の縮尺は、挿図中に記した。
- 4 本書で用いる遺構の表現については次の通りである。

緑青 …………… 焼土 ……………

- 5 本書で用いる遺物の表現については次の通りである。

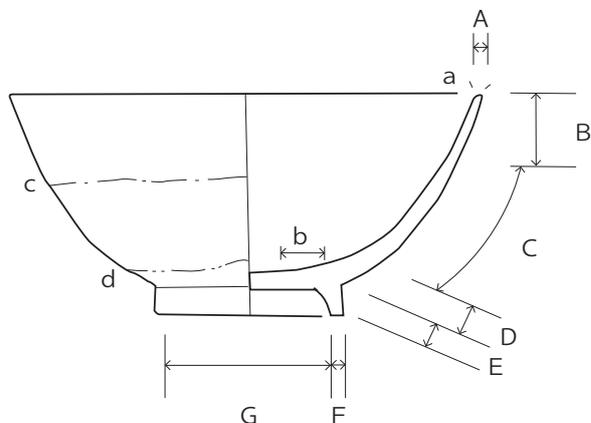
緑青 …………… 漆喰 ……………

煤 ……………

- 6 本書で用いる近世以降の陶磁器についての基本的な名称、及び表現方法は次の通りである。

【名称】 A 口唇部 B 口縁部 C 体部
D 腰部 E 高台脇 F 畳付
G 高台内面

【表現】 a 口唇部、畳付の釉剥ぎ位置
b 見込み蛇ノ目釉剥ぎ部
c 一次施釉ライン
d 二次施釉ライン



本文目次

巻頭カラー
序文
報告書抄録
例言
凡例
目次

第1章 発掘調査の経過	
第1節 発掘調査に至るまでの経緯	1
第2節 確認調査	1
第3節 整理・報告書作成	2
第2章 「九州・山口の近代化産業遺産群」の概要	
第1節 「九州・山口の近代化産業遺産群」の概要	3
第2節 鹿児島県内の構成資産	3
第3章 鹿児島紡績所跡	
第1節 遺跡の位置と環境	5
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
第2節 発掘調査の方法	9
1 発掘調査の方法	
2 整理作業の方法	
第3節 層序	9
第4節 発掘調査の成果	11
第5節 自然科学分析	38
第6節 調査総括	40

第4章 祇園之洲砲台跡	
第1節 遺跡の位置と環境	43
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
第2節 発掘調査の方法	45
2 整理作業の方法	
第3節 層序	45
第4節 発掘調査の成果	46
第5節 調査総括	67
第5章 天保山砲台跡	
第1節 遺跡の位置と環境	71
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
第2節 発掘調査の方法	73
2 整理作業の方法	
第3節 層序	73
第4節 発掘調査の成果	74
第5節 調査総括	93
第6章 総括	
第1節 鹿児島紡績所の位置	97
第2節 薩英戦争時の薩摩藩の砲台について	99
第3節 英文サマリー	103
写真図版	
附編 鹿児島紡績所について 薩摩藩の砲台整備事業	

挿図目次

鹿児島紡績所跡

第1図 構成資産候補一覧	4
第2図 周辺遺跡地図	8
第3図 鹿児島紡績所跡周辺地形図 及びトレンチ配置図	10
第4図 1トレンチ土層断面図	12
第5図 1トレンチ検出遺構① 及び出土遺物	13
第6図 1トレンチ検出遺構② 及び出土遺物	14
第7図 1トレンチ出土遺物①	16
第8図 1トレンチ出土遺物②	17
第9図 1トレンチ出土遺物③	18
第10図 1トレンチ出土遺物④	19
第11図 1トレンチ出土遺物⑤	20
第12図 1トレンチ出土遺物⑥	21
第13図 2トレンチ土層断面図	23
第14図 2トレンチ検出遺構	23
第15図 2トレンチ出土遺物①	24
第16図 2トレンチ出土遺物②	25
第17図 2トレンチ出土遺物③	26
第18図 3トレンチ土層断面図	27
第19図 3トレンチ検出遺構①	28
第20図 3トレンチ検出遺構②	29
第21図 3トレンチ遺構内出土遺物	30
第22図 3トレンチ出土遺物①	31
第23図 3トレンチ出土遺物②	32
第24図 3トレンチ出土遺物③	33
第25図 蛍光X線分析結果	39
第26図 各トレンチの検出遺構の レベル比較	41
第27図 鹿児島紡績所跡遺構の軸線	42

祇園之洲砲台跡

第28図 鹿児島城下屏風絵図	43
第29図 旧薩藩御城下絵図	43
第30図 薩州見取絵図	43
第31図 周辺遺跡地図	44
第32図 祇園洲臺場圖	45
第33図 祇園之洲砲臺之圖	46
第34図 祇園之洲砲台跡周辺地形図 及びトレンチ配置図	47
第35図 1・2トレンチ土層断面図	48
第36図 1トレンチ検出遺構	49
第37図 2トレンチ検出遺構	49
第38図 1トレンチ出土遺物	50
第39図 3トレンチ土層断面図	51
第40図 3トレンチ検出遺構	51
第41図 3トレンチ出土遺物	52
第42図 4トレンチ土層断面図	54
第43図 4トレンチ検出遺構	54
第44図 4トレンチ出土遺物	54
第45図 6・7トレンチ土層断面図	55
第46図 6・7トレンチ検出遺構①	56
第47図 6・7トレンチ検出遺構②	57
第48図 6・7トレンチ下層 確認断面図	57
第49図 6・7トレンチ出土遺物	58
第50図 8・11・12トレンチ周辺図	60
第51図 8トレンチ土層断面図 及び検出遺構	60
第52図 8トレンチ出土遺物	60
第53図 11トレンチ検出遺構	61
第54図 12トレンチ検出遺構	61
第55図 9トレンチ土層断面図 及び検出遺構	62

第56図 10トレンチ土層断面図 及び検出遺構	63
第57図 9トレンチ出土遺物	64
第58図 10トレンチ出土遺物①	65
第59図 10トレンチ出土遺物②	66
第60図 祇園之洲砲台跡残存範囲	67
第61図 鹿児島市調査の遺構位置図	68
第62図 鹿児島市調査の遺構図①	69
第63図 鹿児島市調査の遺構図②	69
第64図 明治5年撮影の鹿児島港 古写真部分拡大	70
第65図 「祇園洲砲臺之圖」『薩藩砲臺 圖稿本』部分拡大	70
第66図 祇園之洲砲台跡東側 現状写真	70

天保山砲台跡

第67図 向江船手略図	71
第68図 薩英戦争絵巻	71
第69図 旧薩藩御城下絵図	72
第70図 川尻訓練場(天保山)臺場圖	72
第71図 砂揚場臺場之圖	73
第72図 天保山砲台跡周辺地形図	74
第73図 天保山砲台跡 トレンチ配置図	75
第74図 1・2トレンチ検出遺構①	76
第75図 1・2トレンチ検出遺構②	77
第76図 20トレンチ土層断面図	78
第77図 3トレンチ土層断面図 及び検出遺構	79
第78図 3トレンチ出土遺物	81
第79図 4トレンチ土層断面図	82
第80図 4トレンチ出土遺物	82

第81図	4トレンチ検出遺構	83
第82図	5トレンチ土層断面図	84
第83図	6トレンチ土層断面図	84
第84図	5トレンチ検出遺構	85
第85図	5トレンチ出土遺物	85
第86図	7トレンチ土層断面図	87
第87図	7トレンチ検出遺構①	88
第88図	7トレンチ検出遺構②	89

第89図	7トレンチ出土遺物①	89
第90図	7トレンチ出土遺物②	90
第91図	8トレンチ土層断面図	91
第92図	8トレンチ出土遺物	91
第93図	17・18・19トレンチ 土層断面図	92
第94図	遺構位置推定図	93
第95図	天保山砲台跡	94

第96図	明治40年代の地図	94
第97図	残存範囲図	95
第98図	良好な残存範囲	95
第99図	砲台各部位の名称	96
第100図	鹿児島紡績所の推定位置	98
第101図	松ヶ瀬台場跡検出遺構①	102
第102図	松ヶ瀬台場跡検出遺構②	102

表目次

表1	鹿児島県内の近代化産業遺産群 発掘調査遺跡	3
表2	鹿児島紡績所跡 周辺遺跡地名表	7
表3	鹿児島紡績所跡の基本層序	9
表4	出土遺物観察表	33
表5	蛍光X線分析結果	39
表6	祇園之洲砲台跡周辺 遺跡地名表	44

表7	祇園之洲砲台跡の基本層序	45
表8	1トレンチ出土遺物観察表	51
表9	3トレンチ出土遺物観察表	53
表10	4トレンチ出土遺物観察表	55
表11	6・7トレンチ 出土遺物観察表	58
表12	8トレンチ出土遺物観察表	60
表13	9トレンチ出土遺物観察表	64
表14	10トレンチ出土遺物観察表	66

表15	祇園之洲砲台跡調査成果	67
表16	天保山砲台跡の基本層序	73
表17	3・4トレンチ 出土遺物観察表	81
表18	5トレンチ出土遺物観察表	84
表19	7トレンチ出土遺物観察表	90
表20	8トレンチ出土遺物観察表	91
表21	天保山砲台跡調査成果	95

附編中挿図

郡元水車館	149
郡元水車館、大幅織機図	149
舶来大砲図	142
百五十ポンドボンカノン砲	141

キスト砲架の大砲	137
弁天波止砲台図	137
新波止砲台	136
祇園之洲砲台	135

薩英戦争時の イギリス艦隊の進路	131
---------------------	-----

本文中写真目次

写真1	発掘調査状況	2
写真2	整理事業状況	2
写真3	建設中の鹿児島紡績所	6
写真4	明治35年頃の磯地区	6

写真5	1トレンチ土層断面	9
写真6	2トレンチ土層断面	9
写真7	3トレンチ土層断面	9
写真8	土壌試料画像	38

写真9	明治7年頃の磯地区	97
写真10	明治7年頃の鹿児島紡績所	97

図版目次

巻頭図版1	鹿児島紡績所跡1トレンチ
巻頭図版2	鹿児島紡績所跡2トレンチ
巻頭図版3	鹿児島紡績所跡3トレンチ
巻頭図版4	祇園之洲砲台跡
巻頭図版5	祇園之洲砲台跡
巻頭図版6	天保山砲台跡
巻頭図版7	天保山砲台跡
巻頭図版8	古写真

図版4	鹿児島紡績所跡3トレンチ
図版5	鹿児島紡績所跡1トレンチ遺物
図版6	鹿児島紡績所跡1トレンチ遺物
図版7	鹿児島紡績所跡1トレンチ遺物
図版8	鹿児島紡績所跡2トレンチ遺物
図版9	鹿児島紡績所跡2トレンチ遺物
図版10	鹿児島紡績所跡3トレンチ遺物
図版11	祇園之洲砲台跡1・2トレンチ
図版12	祇園之洲砲台跡3・4トレンチ
図版13	祇園之洲砲台跡6・7トレンチ
図版14	祇園之洲砲台跡 6・7・8トレンチ
図版15	祇園之洲砲台跡 5・11・12・13トレンチ
図版16	祇園之洲砲台跡9・10トレンチ

図版17	祇園之洲砲台跡遺物
図版18	祇園之洲砲台跡遺物
図版19	祇園之洲砲台跡遺物
図版20	天保山砲台跡1・2トレンチ
図版21	天保山砲台跡4トレンチ
図版22	天保山砲台跡7トレンチ
図版23	天保山砲台跡 3・5・8トレンチ
図版24	天保山砲台跡 その他のトレンチ
図版25	天保山砲台跡遺物
図版26	天保山砲台跡遺物

図版1	鹿児島紡績所跡1トレンチ
図版2	鹿児島紡績所跡1トレンチ
図版3	鹿児島紡績所跡1トレンチ 鹿児島紡績所跡2トレンチ

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまでの経緯

平成21年1月にユネスコの世界遺産暫定一覧表へ記載された「九州・山口の近代化産業遺産群」は、世界文化遺産登録に向けて取り組みを進めているところである。鹿児島県が会長県、事務局を務める「九州・山口の近代化産業遺産群」世界遺産登録推進協議会では、海外専門家9名、国内専門家7名からなる専門家委員会での議論をとおして、平成20年度から平成21年度にかけて、構成資産候補の検討を実施したところである。

鹿児島県の構成資産候補の調査は、平成21年1月11日(日)～1月13日(火)、2月12日(木)、4月19日(日)の3回にわたって実施された。3回の調査を踏まえ、平成21年10月に開催された第4回専門家委員会において、鹿児島県の構成資産候補として、旧集成館、旧集成館機械工場、旧鹿児島紡績所技師館の3か所が挙げられた。また、「今後の調査を踏まえて構成資産入りを検討する」とされたのが、薩英戦争砲台跡(祇園之洲砲台跡、天保山砲台跡)、関吉の疎水溝、鹿児島紡績所跡、寺山炭窯跡(いずれも鹿児島市)であった。

これらの提言を踏まえ、鹿児島県企画部企画課世界文化遺産登録推進室(平成21年度当時)、鹿児島県教育庁文化財課、鹿児島市教育委員会文化課の3者で協議を実施した結果、平成21年度に関吉の疎水溝の測量調査(調査担当、鹿児島県企画部企画課世界文化遺産登録推進室)を、平成22年度に薩英戦争砲台跡、鹿児島紡績所跡(調査担当、鹿児島県教育庁文化財課)、寺山炭窯跡(調査担当、鹿児島市教育委員会文化課)の発掘調査を実施することとなった。

薩英戦争砲台跡、鹿児島紡績所跡の報告書作成作業は、県立埋蔵文化財センターが担当することとなり、平成23年度に刊行した。

第2節 確認調査

鹿児島紡績所跡の確認調査は、平成22年5月17日から7月30日の期間で実施した。古写真・古絵図等を参考にトレンチを3か所設定し、140㎡の調査を行った。調査の結果、鹿児島紡績所とその関連施設のものと思われる建物の基礎部分を検出した。

祇園之洲砲台跡の確認調査は、平成22年9月9日から11月30日の期間で実施した。古写真・古絵図等を参考にトレンチを13か所設定し、212㎡の調査を行った。調査の結果、薩英戦争時のものと思われる砲台の遺構を検出した。

天保山砲台跡の確認調査は、平成23年1月6日から3月11日の期間で実施した。古絵図等を参考にトレンチを23か所設定し、398㎡の調査を行った。調査の結果、薩英戦争時のものと思われる砲台の遺構や船着場と思われ

る石畳を検出した。

調査体制(平成22年度)

事業主体	鹿児島県企画部世界文化遺産課		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
調査統括	県立埋蔵文化財センター		
	所長	山下	吉美
調査企画	次長兼総務課長	田中	明成
	次長兼南の縄文調査室長	中村	耕治
	調査第一課長	長野	真一
	主任文化財主事兼		
	調査第一課第一調査係長兼		
	南の縄文調査室室長補佐	富田	逸郎
調査担当	文化財主事	西園	勝彦
	〃	楸田	岳志
調査事務	総務係長	大園	祥子
	主査	高崎	智博

調査の詳細(日誌抄より)

鹿児島紡績所跡

5月			
1トレンチ	表土剥ぎ、掘り下げ、布基礎検出		
2トレンチ	表土剥ぎ、掘り下げ		
6月			
1トレンチ	掘り下げ		
2トレンチ	掘り下げ、硬化面検出、礫叩き・布基礎検出		
3トレンチ	表土剥ぎ、掘り下げ、遺構実測		
*6月2日	発掘調査指導委員会		
*6月26日	現地説明会(162名来跡)		
7月			
1トレンチ	掘り下げ、遺物取り上げ、遺構実測		

祇園之洲砲台跡

9月			
2トレンチ	表土剥ぎ、掘り下げ、石列検出		
6トレンチ	表土剥ぎ、掘り下げ、遺物取上		
8トレンチ	表土剥ぎ、遺物取上		
9トレンチ	表土剥ぎ、遺物取上、石列検出		
10トレンチ	表土剥ぎ、掘り下げ、石列検出		
10月			
2トレンチ	掘り下げ		
4トレンチ	表土剥ぎ、掘り下げ		
5トレンチ	表土剥ぎ、掘り下げ		
6トレンチ	掘り下げ		
7トレンチ	表土剥ぎ、掘り下げ		
8トレンチ	掘り下げ、遺物取上、土層実測		
9トレンチ	掘り下げ、遺物取上		

10トレンチ 掘り下げ, 遺物取上
 *10月9・10日 海外専門家委員による現地調査
 11月

- 1 トレンチ 掘り下げ, 遺構実測, 埋め戻し
- 2 トレンチ 掘り下げ, 遺構実測, 埋め戻し
- 3 トレンチ 表土剥ぎ, 掘り下げ, 埋め戻し
- 4 トレンチ 掘り下げ, 埋め戻し
- 6 トレンチ 掘り下げ, 遺物取上, 遺構実測
- 7 トレンチ 表土剥ぎ, 掘り下げ, 遺構実測
- 8 トレンチ 掘り下げ, 遺物取上
- 9 トレンチ 掘り下げ, 遺物取上
- 10 トレンチ 掘り下げ, 遺物取上
- 11 トレンチ 表土剥ぎ, 掘り下げ, 遺構実測
- 12 トレンチ 表土剥ぎ, 掘り下げ, 遺構実測
- 13 トレンチ 表土剥ぎ, 掘り下げ, 遺構実測

芝張り委託
 調査区の原状復旧
 *11月6日 現地説明会 (233名来跡)

天保山砲台跡

1月

- 安全対策, 表土剥ぎ
- 1～3トレンチ 掘り下げ, 石畳検出
- 5～7トレンチ 掘り下げ
- 9～13トレンチ 掘り下げ

2月

- 1～3トレンチ 掘り下げ
- 5～7トレンチ 掘り下げ
- 9～13トレンチ 掘り下げ
- 硬化面確認トレンチ掘り下げ

*2月1日 「鹿児島紡績所跡他」指導委員会
 *2月19日 現地説明会 (230名来跡)

3月

遺構実測, 埋戻し作業, 調査区の原状復旧

第3節 整理・報告書作成

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は, 平成23年4月～平成24年3月にかけて, 鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。出土遺物の水洗い, 注記, 接合, 復元, 実測, 遺構のトレース, レイアウト等の編集作業を行った。

また, 鹿児島大学法文学部渡辺教授に遺物に関する指導を, 尚古集成館松尾千歳副館長には史料・絵図等に関する指導をいただき, 附編を執筆していただいた。

整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

作成体制 (平成23年度)

事業主体 鹿児島県企画部世界文化遺産課
 調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括	県立埋蔵文化財センター 所長	寺田 仁志
調査企画	次長兼総務課長 次長兼南の縄文調査室長 調査第一課長 文化財主事兼 調査第一課第二調査係長	田中 明成 井ノ上秀文 堂込 秀人 大久保浩二
調査担当	文化財主事 〃	西園 勝彦 楸田 岳志
調査事務	総務係長 主査	大園 祥子 下堂園晴美
調査指導	鹿児島大学法文学部教授 尚古集成館副館長	渡辺 芳郎 松尾 千歳
	「鹿児島紡績所跡他」発掘調査指導委員会	11月17日 委員原口泉教授他4名
	報告書作成指導委員会	11月25日 井ノ上次長他10名
	報告書作成検討委員会	11月29日 寺田所長他13名



写真1 発掘調査状況



写真2 整理作業状況

第2章 「九州・山口の近代化産業遺産群」の概要

第1節 「九州・山口の近代化産業遺産群」の概要

九州・山口には、幕末から明治期の日本の近代化の原動力となった製鉄・造船・石炭などの基幹産業に関する産業遺産が数多く残されている。これらの産業遺産の一つ一つは、国内的には価値のあるものだが、それだけでは世界遺産にはならない。しかし、これらを一つのコンセプトでまとめ、グループとして評価すると、世界的な価値が認められる可能性が高い。こうして始まったのが、「九州・山口の近代化産業遺産群」の世界遺産登録を目指す活動である。

では、この「九州・山口の近代化産業遺産群」のコンセプトとはいったい何であろうか。それは、日本の近代化が、西洋以外の地域で、初めて、かつ極めて短期間のうちに成し遂げられたという点で世界的に高い価値を持っているということである。そして、その中心的役割をはたしたのが九州・山口なのである。そのような意味で、日本の近代化の先駆けであり、工業立国日本の原点といえるだろう。

九州・山口の諸藩は、古くから、アジア大陸に近いという地理的特性から、海外との窓口として役割を担ってきた。また、19世紀以降の欧米列強によるアジア進出に際して、植民地化への危機感を肌身に感じていたのが、この地域なのである。このため国防の観点から、西洋の科学技術を導入して、軍事を強化した。これが近代化の始まりなのである。こうして、九州・山口の諸藩は近代化を進める日本の先導的な役割を果たしていくことになる。この近代化は、①自力による近代化、②積極的な技術導入、③国内外の石炭需要への対応、④重工業化への転換、という4つのステップをへて進められていくのである。

こうして、「九州・山口の近代化産業遺産群」は、9つの候補エリアに30の構成資産候補を数えることになる。

- 1 萩の工業化初期の時代の関連資産と徳川時代の文化風景
- 2 集成館の先駆的工場群
- 3 佐賀藩の造船所施設
- 4 橋野鉦山と製鉄遺跡
- 5 三菱長崎造船所施設、炭坑の島、その他関連資産
- 6 下関砲台跡
- 7 三池炭坑、鉄道、港湾
- 8 八幡製鐵所
- 9 葦山反射炉

それぞれの構成資産候補については、次頁の構成資産候補一覧（第1図）を参考にされたい。

第2節 鹿児島県内の構成資産

「九州・山口の近代化産業遺産群」の構成資産候補として、鹿児島県内では、日本初の工業コンビナートである集成館事業の工場群が含まれている。具体的には、旧集成館・旧集成館機械工場・旧鹿児島紡績所技師館があげられている。また、幕末の薩摩藩が近代化を進めるきっかけとなった薩英戦争関連の遺跡として、祇園之洲砲台跡が構成資産候補としてあげられている。鹿児島県内の構成資産候補の概略は、下記のとおりである。

【旧集成館】

「集成館」とは、薩摩藩の藩主島津斉彬が建設した近代的な工場群のことである。鹿児島城下の郊外にある磯別邸（仙巖園）の隣接地に、反射炉・ガラス工場・鍛冶場・蒸気金物細工場など多くの工場が建ち並んでいた。現在は、反射炉跡を遺構として見ることができる。

【旧集成館機械工場】

島津忠義が、薩英戦争で焼失した工場群を復興していくなかで造らせた洋式機械工場である。日本の近代的工場の建物として最も初期のものである。洋風石造建築であったため、「ストーンホーム」と当時から呼ばれていた。現在は、尚古集成館の本館として利用されている。

【旧鹿児島紡績所技師館】

機械工場と同様に、薩英戦争後に建設された「鹿児島紡績所」のイギリス人技師たちの宿舎である。外観は洋風だが、柱などの寸法は寸尺法という和洋折衷の建物である。1862（明治15）年に鹿児島城本丸跡に移築され、1936（昭和11）年に、再び現在の場所に移築されている。

【祇園之洲砲台跡】

島津斉彬が築造した砲台である。薩英戦争時には、祇園之洲砲台の沖合に、イギリスの艦船が座礁した。このため、それを救おうとしたイギリス艦隊の集中砲火を浴びたといわれている。

近年、構成資産候補として可能性を探るための調査が行われた箇所を下の表にまとめておく。

表1 鹿児島県内の近代化産業遺産群発掘調査

年度	遺跡名	調査担当
21	関吉の疎水溝	鹿児島県企画部企画課 世界文化遺産登録推進室
22	寺山炭窯跡 鹿児島紡績所跡 祇園之洲砲台跡 天保山砲台跡	鹿児島市教育委員会管理部文化課 鹿児島県立埋蔵文化財センター 鹿児島県立埋蔵文化財センター 鹿児島県立埋蔵文化財センター
23	旧鹿児島紡績所技師館	鹿児島市教育委員会管理部文化課

1 萩エリア (山口県)

萩反射炉
 恵美須ヶ鼻造船所跡
 萩城下町
 大板山たたら製鉄遺跡
 松下村塾



2 集成館エリア (鹿児島県)

旧集成館
 旧集成館機械工場
 旧鹿児島紡績所技師館
 祇園之洲砲台跡



3 佐賀エリア (佐賀県)

三重津海軍所跡



4 釜石エリア (岩手県)

橋野高炉跡及び関連施設

6 下関エリア (山口県)

前田砲台跡

7 三池エリア (福岡県・熊本県)

三池炭鉱宮原坑施設
 三池炭鉱万田坑
 三池炭坑専用鉄道敷
 三池港
 三角西 (旧) 港施設

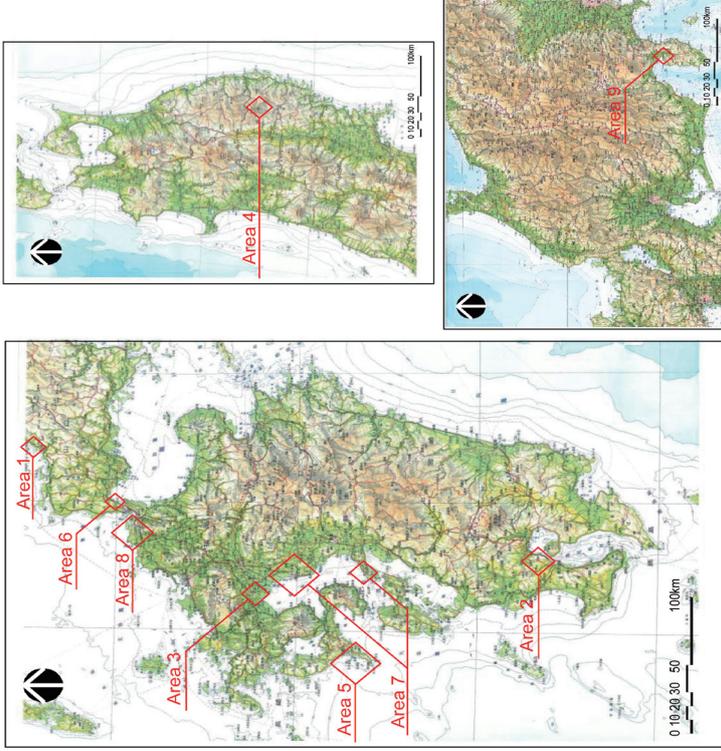


8 八幡エリア (福岡県)

旧本事務所
 修繕工場
 旧鍛冶工場
 遠賀川水源地ポンプ室

9 葦山エリア (静岡県)

葦山反射炉



地図は「九州・山口の近代化産業遺産群」専門委員会 2011「推薦書原案 (報告書)」
 「Emergence of Industrial Japan-Kyusyu-yamaguchi World Heritage Site」より転載

第1図 構成資産候補一覧 (2011年6月現在)

第3章 鹿児島紡績所跡

第1節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

鹿児島市は鹿児島県中西部、薩摩半島の北東部に位置する。同市は、北は薩摩川内市・始良市に、南は指宿市・南九州市に、西は日置市・南さつま市とそれぞれに接し、東は鹿児島湾（錦江湾）に面している。

鹿児島市の北東部は、始良カルデラの西側壁にあたり、200～400mの急崖で鹿児島湾に接している。市の西部や南部は、薩摩半島を南北に走る南薩山地がある。この南薩山地から、丘陵・台地が東側に向かって緩やかに傾斜しており、低地部そして鹿児島湾へとつながっていく。市内の低地部は、鹿児島湾へと注ぐ河川（稲荷川・甲突川・田上川・脇田川・永田川など）によって形成された沖積平野が多く、河口にはデルタが形成されている。

鹿児島紡績所跡は、鹿児島市吉野町磯に所在する。地形的には、吉野台地が南側に突出した舌状部の裾野にあたる。南東方向は鹿児島湾に面し、雄大な桜島を望むことができる。振り返って見ると、吉野台地の急崖がせまっており、天然の要害といえよう。

鹿児島紡績所跡一帯は、島津斉彬の集成館事業で中核をなした工場群「集成館」の跡地である。昭和34年には、「旧集成館」として国の史跡に指定されている。

また、「旧集成館」のすぐ隣には旧島津家別邸仙巖園があり、花倉御飯屋跡とともに、昭和33年に「名勝仙巖園附花倉御飯屋庭園」として指定を受けている。

さらに、「旧集成館」内に所在する石造建築の機械工場は、「旧集成館機械工場」として重要文化財に指定されている。鹿児島紡績所跡の西側には、イギリス人技師の宿舎として建設された「鹿児島紡績所技師館」があり、こちらも現在は史跡及び重要文化財に指定されている。

2 歴史的環境

島津家の28代藩主だった島津斉彬は、琉球貿易によりもたらされた西洋の綿糸を献上された。この糸の出来があまりに美しかったため、当時繊維工業の本場だった京都の西陣へ送って鑑定させたほどであった。

斉彬は、集成館事業に深く関わっていた蘭学者石河確太郎に、この綿糸と洋書を手渡し、「我国の膏血を絞るものは是れだ、汝宜しく拮据努力すべし」と述べ、綿糸が将来日本の産業に大きく影響を与えるであろうと予想している。

斉彬は、その殖産興業政策である集成館事業の中で、紡績に力を入れていた。そもそも薩摩藩が、紡績業に本格的に取り組み出したのはなぜだろうか。

それは、斉彬が海軍力の整備が必要と考えたからであ

る。海外との交易をするにも、外敵に対する備えにしても、船が必要だったのである。当時の船は帆船であり、その帆に使う木綿布の自給を目指して、紡績業に力を入れていったのである。

こうして、水車動力を利用した機械紡績の工場が、郡元・石谷・田上・永吉に「水車館」という名前で建設されていったのである。水車館で使用されていた機織りの機械は、独自に考案されたものだと考えられている。

このように集成館事業を進めてきた斉彬だが、1850（安政5）年、事業の半ば50歳で逝去してしまう。斉彬の死後、その考えを理解する者が少なく、集成館事業は大幅に縮小されてしまう。

しかし、斉彬の弟久光が薩摩藩の実権を握ったところから、集成館事業の再興の動きが芽生え始めた。そして、その動きは薩英戦争後に、さらに大きなものとなっていく。西洋の科学技術を目の当たりにした薩摩藩の人々は、それを導入しようとした斉彬の真意とその先見性を理解したのである。

斉彬に重用されていた石河は、斉彬の遺志を受け継ぎ、29代藩主の島津忠義に紡績工場の建設を勧めた。忠義もこれを受け入れ、大規模な洋式紡績工場の建設を計画した。そして、1865（慶応元）年に、新納久脩・五代友厚を薩摩藩の留学生とともにイギリスに派遣し、紡績機械の買入れと技師を薩摩に招く交渉にあたらせた。

当時はまだ鎖国の時代だったので、みな変名を用い、鹿児島島の申木野羽島の浜から出発したという。新納・五代の両名はヨーロッパに7ヵ月滞在し、各国の産業を視察した。そして、当時世界最大の紡績機械メーカーだった、イギリスのプラット社に技師の派遣や工場の設計を依頼した。その設計に基づき、紡績機械や蒸気機関を購入した。

1866（慶応2）年11月、イーホームら4人のイギリス人技師が鹿児島に到着し、集成館の西隣で紡績工場と技師館の建設が始まった。翌年1月には、プラット社製の紡績機械と共に、工務長のジョン＝テットロウら3人の技師も到着した。1867（慶応3）年5月には、石造平屋建ての工場が完成し、日本で最初の近代的な紡績工場が生産を始めたのである。

その後、鹿児島紡績所は1897（明治30）年まで操業したが、忠義の逝去もあり、明治30年10月に閉鎖されることになる。その後、紡績所の建物は壊されることになるが、詳細は不明である。

一方、技師館はイギリス人技師が帰国した後は、大砲製造支配所として使用された時期もあった。1877（明治10）年の西南戦争では、西郷軍の仮病院にもなっている。

そして、1882（明治15）年、旧鶴丸城内に移築され、鹿児島学校さらに中学造士館（七高造士館）の教官室として利用された。1936（昭和11）年、再び磯の現在地に移築されたため、戦災をまぬがれている。

参考文献

芳即正・塚田公彦『鹿児島県風土記』旺文社、1995

岩元庸造『献上本 薩摩の文化』1936

玉川寛治「綿糸紡績技術」『産業技術史』山川出版、2001

鹿児島県教育委員会『鹿児島県紡績所百年史』1967

鹿児島市教育委員会『鹿児島紡績所跡D地点』2000

鹿児島市教育委員会『鹿児島市の史跡めぐりガイドブック－四訂版－』1999

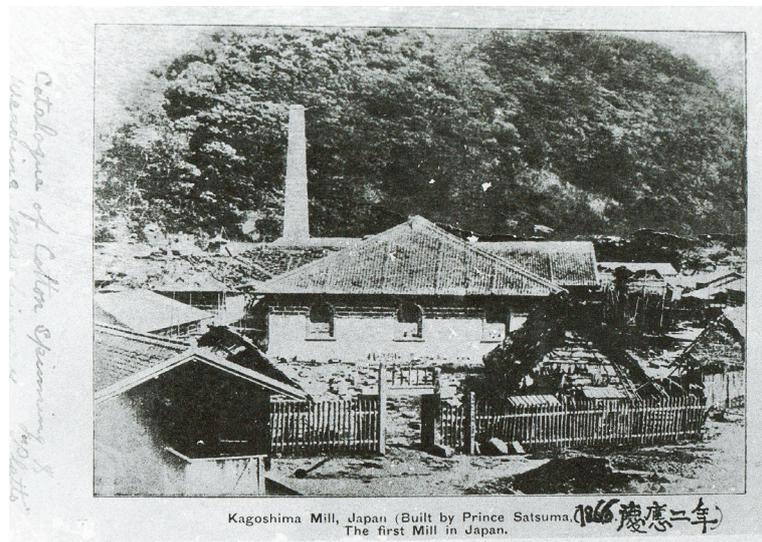


写真3 建設中の鹿児島紡績所

尚古集成館蔵



写真4 明治35年頃の磯地区

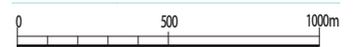
尚古集成館蔵

表2 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地		地形	時代	遺物等	備考
1	集成館跡	鹿児島市	吉野町磯	低地	近世(末)	建物跡・鍛冶場跡	市埋文報(29)
2	雀ヶ宮B	鹿児島市	吉野町雀ヶ宮	丘陵	縄文(草)	前平式・石坂式・吉田式	工事中発見
3	前平	鹿児島市	吉野町雀ヶ宮前平				
4	滝ノ上火薬製造所跡	鹿児島市	吉野町滝ノ上	低地	近世		市埋文報(22)
5	清水城跡	鹿児島市	清水町大興寺岡	丘陵	中世, 近世	陶磁器類	市埋文報(16)
6	大乘院跡	鹿児島市	稲荷町清水中校庭	丘陵	中世, 近世	排水溝・上水管	市埋文報(3)(6)
7	福昌寺跡	鹿児島市	池之上町玉龍高校 一帯	低地	中世～近世	建物跡・陶磁器類	市埋文報(14) (47)
8	東福寺城跡	鹿児島市	清水町田之浦	丘陵	平安, 中世	曲輪・空堀	
9	浜崎城跡	鹿児島市	清水町田之浦	丘陵	中世		
10	祇園之洲砲台跡	鹿児島市	清水町祇園之洲	低地	近世(末)		市埋文報(23)
11	浜町	鹿児島市	浜町1	低地	近世	暗渠・近世陶磁器	県埋文報(25)
12	大龍遺跡群	鹿児島市	大竜町・池之上町・ 春日町	段丘	縄文(前・中・後・ 晩), 弥生～古 墳, 中世～近世		
	大龍遺跡群(大龍)	鹿児島市	大竜町	段丘	縄文(前・中・後・ 晩), 弥生～古 墳, 中世～近世	深浦式・並木式・阿高式・ 指宿式・市来式・鐘ヶ崎 式・西平式・納曾式・上 加世田式・入佐式・成川式・ 土鈴・土錘・石匙・石鏃・ 石皿・軽石製品・スィジ ガイ	市埋文報告(1) (2)(7)(15)(32) (33)(34)(48)
	大龍遺跡群(若宮)	鹿児島市	池之上町	段丘	縄文(前・中・後・ 晩), 弥生～古 墳, 中世～近世	西平式・市来式・御領式	市埋文報(24)
	大龍遺跡群(春日町)	鹿児島市	春日町	段丘	縄文(前・中・後・ 晩), 弥生～古 墳, 中世～近世	春日式・阿高式・指宿式・ 西平式・鐘ヶ崎式・市来式・ 有孔軽石円盤	
13	豎野冷水窯跡	鹿児島市	冷水町豎野	丘陵	近世	窯跡・窯道具・陶磁器類	「豎野冷水窯跡」 (南風病院)
14	垂水・宮之城島津家 屋敷跡	鹿児島市	山下町14	低地	近世	屋敷境溝・陶磁器類	県埋文報(48)
15	名山	鹿児島市	山下町名山小校庭	低地	近世～近代	暗渠・近世陶磁器	市埋文報(8)(38)
16	造士館・演武館跡	鹿児島市	山下町中央公園内	低地	近世～現代	建物跡・近世陶磁器	市埋文報(13)
17	鹿児島城跡(鶴丸城)	鹿児島市	城山町5	低地	縄文, 奈良, 近 世, 近代	建物礎石群・石製水道管・ 排水溝・雨落溝・井戸・池・ 近世陶磁器・瓦他	県埋文報(55) (60) 市埋文報(5)(28)
18	上山城跡	鹿児島市	新照院町	丘陵	中世	土塁・空堀	



第2図 周辺遺跡位置図



第2節 発掘調査の方法

1 発掘調査の方法

今回の発掘調査は、鹿児島紡績所跡の推定地内に巻頭図版8の古写真と、薩摩のものづくり研究会報告書『薩摩藩集成館事業における反射炉・建築・水車動力・工作機械・紡績技術の総合的研究』で報告されている古写真のコンピュータ解析による配置復元図を参考に、トレンチを設定した。調査地は現況が商業地であり、トレンチの設定にあたってはかなりの制約があった。1トレンチは、鹿児島紡績所の西端部分の検出を目的として設定した。2・3トレンチは、それぞれ鹿児島紡績所の北側部分と南側部分の検出を目的として設定した。

調査は、基本的には人力で掘り下げを行い、表土剥ぎ、盛土層、攪乱層は重機を使用した。周辺地形測量、遺構実測は、(有)ジパング・サーベイに一部委託した。

遺物取上は、層ごとの一括取上を行い、調査担当者と発掘作業員で実施した。

また、地形測量は、世界測地系を基準に行った。検出遺構の実測や土層断面図の作成は、任意に設けた点を結び世界測地系を元に行い、一部実測測量を行った。

2 整理作業の方法

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、平成23年4月～平成24年3月にかけて、鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。出土遺物の水洗い、注記、接合、復元、実測、遺構のトレース、レイアウト等の編集作業を行った。

また、鹿児島大学法文学部渡辺芳郎教授に遺物に関する指導を、尚古集成館松尾千歳副館長には史料・絵図等に関する指導をいただいた。

第3節 層序

各トレンチを調査の結果、トレンチごとに層序が異なっていた。共通する点は、現地表面から約2.5メートルの深さまで、盛り土や住宅の建設等によって、攪乱を受けているという点である。

そして、その攪乱層の下に、幕末から明治のものと思われる生活面が検出された。1トレンチと3トレンチでは、黒褐色砂層がこの層にあたる。2トレンチでは硬化面がこれにあたる。この黒褐色砂層と硬化面を、掘り下げると、各トレンチで遺構が検出された。

さらに掘り下げると、各トレンチとも、地山と思われる白砂層がでてくる。

各トレンチの基本層序は、下表のとおりである。詳細については、各トレンチの頁で記述する。

表3 鹿児島紡績所跡の基本層序

1トレンチ	2トレンチ	3トレンチ
客土・攪乱土 造成土	客土・攪乱土	客土・造成土 攪乱土
黒褐色砂層	硬化面	黒褐色砂層
白砂層	白砂層	白砂層



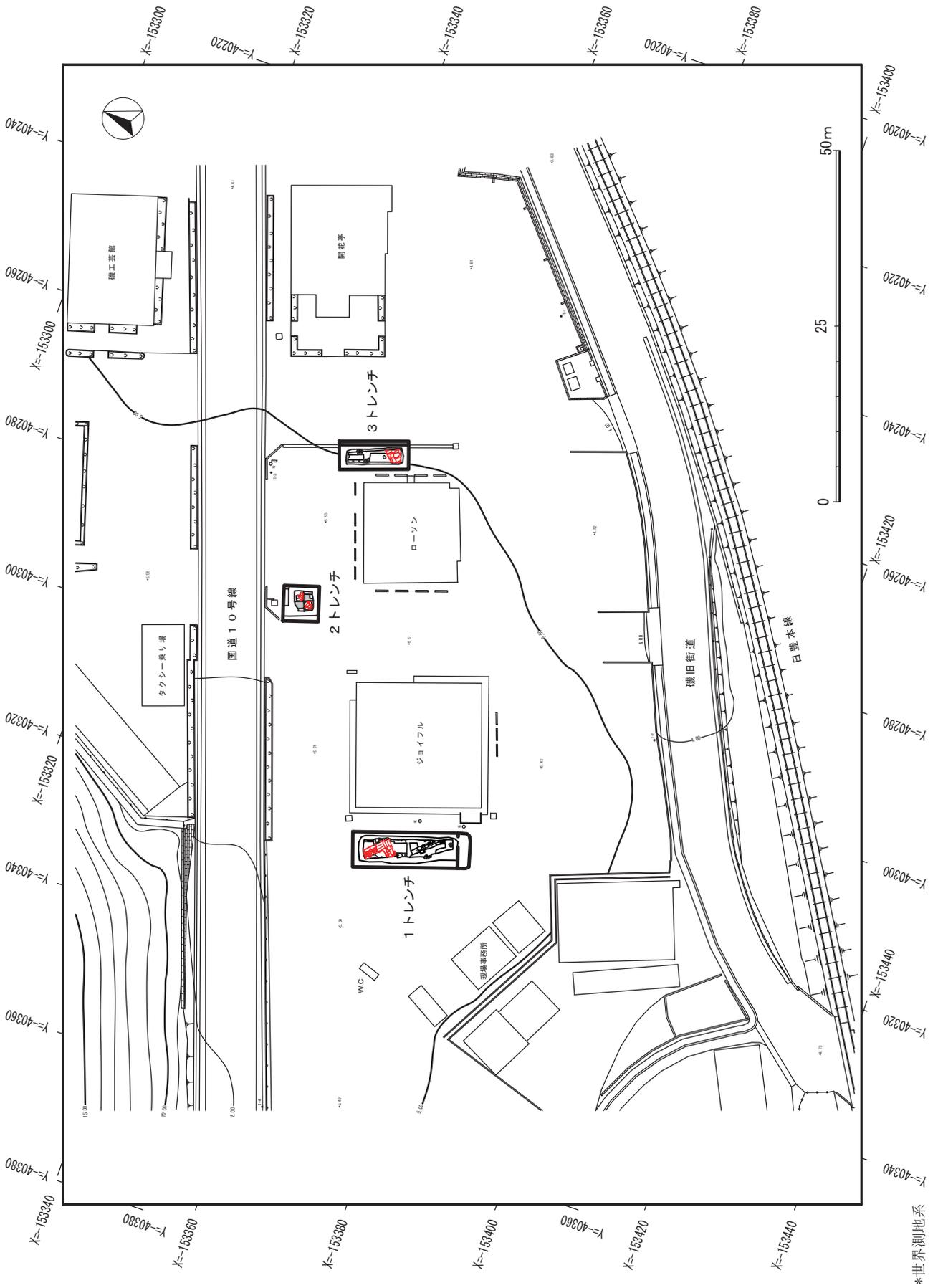
写真5 1トレンチ土層断面



写真6 2トレンチ土層断面



写真7 3トレンチ土層断面



第3図 鹿見島紡績所跡 周辺地形図及びトレンチ配置図

*世界測地系

第4節 発掘調査の成果

3箇所の特レンチ調査の結果、幕末の3時期にわたる遺構の残存を把握できた。そして各特レンチで、鹿児島紡績所関連の建物基礎と思われる遺構が検出された。

また出土した陶磁器については、コバルト釉のものが見られないことから、明治以降の遺物ではなく、幕末のものと判断した。

以下、特レンチごとに遺構・遺物について述べていきたい。

1 1特レンチ

先にも述べたが、特レンチの設定にあたっては、薩摩のものづくり研究会報告書『薩摩藩集成館事業における反射炉・建築・水車動力・工作機械・紡績技術の総合的研究』で報告されている古写真のコンピュータ解析による配置復元図を参考にした。

1特レンチは、鹿児島紡績所西側の基礎部分を確定することをねらって設定した。詳細は第6節で述べるが、鹿児島紡績所の関連施設の基礎部分と思われる遺構を検出した。

遺物は、陶磁器や窯道具が多く出土している。また、茶入が数点出土しており、窯道具と同様に何に由来するものか検討が必要である。

(1) 層序 (第4図)

層序については、第4図に示したように、堆積状況が複雑である。幕末、紡績所の時代から現代に至るまで、建築物を幾度となく建て替えている様子が、建物の基礎部分や廃棄されたものからうかがえた。

地表面から2.5mほどは客土や盛土に覆われていた。鹿児島市教委の報告書にもあった「鳥越トンネル掘削時の砂礫」と思われる層が1m以上堆積していた。

標高2.5mほどの部分で、黒褐色砂層(⑨層)が特レンチの大部分を覆っていた。この層から下層の遺物に明治以降の遺物らしきものがなかったため、この層を幕末頃の生活面と考え、調査を行った。

(2) 遺構 (第5～6図)

石垣 (第5図)

1特レンチの南側、標高2.5mの地点で検出した。北西から南東方向に約4mのびており、南東側は特レンチの壁面にもぐり込んでいるため、正確な規模はわからない。幕末の生活面と考えられる⑨層(黒褐色砂層)を、30cmほど掘り下げたところで検出している。

石垣は、西側を表にして造られており、60cm×30cm程度の凝灰岩の切石を積んである。石積みは3段検出しているが、下から2段は築造当時から地中に埋めてあったものと思われる。また、裏込めの中から、1の轆の羽口が出土している。この羽口の外面には、緑青が付着してお

り、鋳物に関するものと考えられる。

坪地業 (第5図)

1特レンチの南側、標高約3mの地点で検出した。凝灰岩の礫を並べ、直径60cm程度の地業をつくっている。2つの坪地業を検出したが、その坪地業の間隔が約3.8mである。ただし、2つの坪地業のちょうど中間あたりに、攪乱による掘り込みがあった。このため、この2つの中間地点にも坪地業があった可能性がある。すると、木造建築物の基礎部分である可能性もあり、屋敷地であった可能性がある。

緑青のある三和土 (第6図)

1特レンチの北側、標高3mの地点で検出した。地山である砂層の上に三和土を張り、その上に緑青が5～10cm程度堆積している。

この付近には、歴史的にみて、鋳銭所や鋳物場などが建てられており、それに関する遺構であると判断した。

切石布基礎 (第6図)

1特レンチの北側、標高約3mの地点で検出した。この切石は、北東方向から南西方向にのび、そこで90度南西方向に向きを変えてのびている。

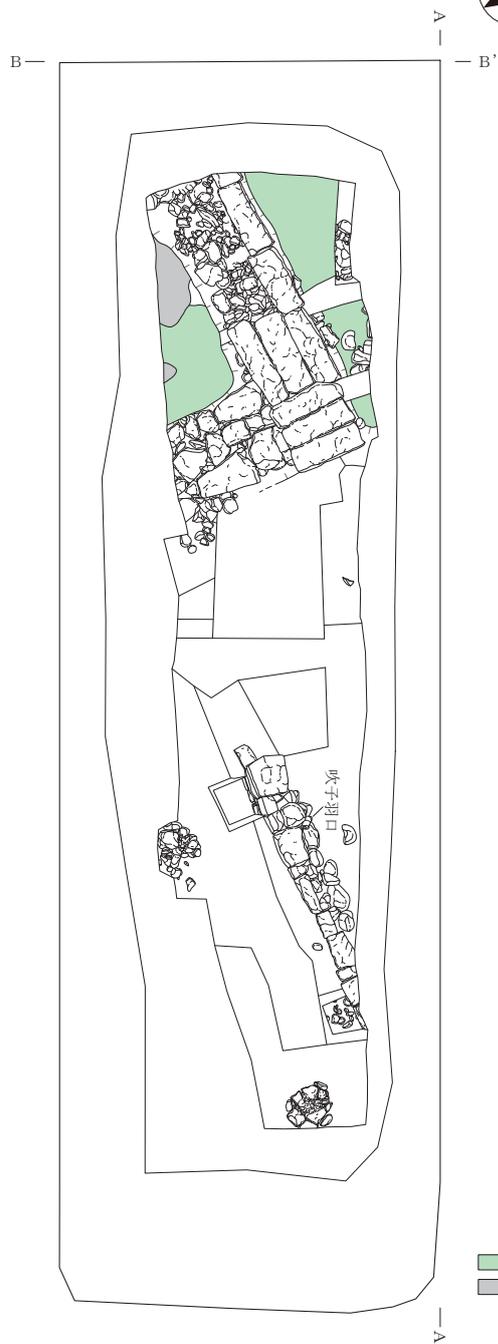
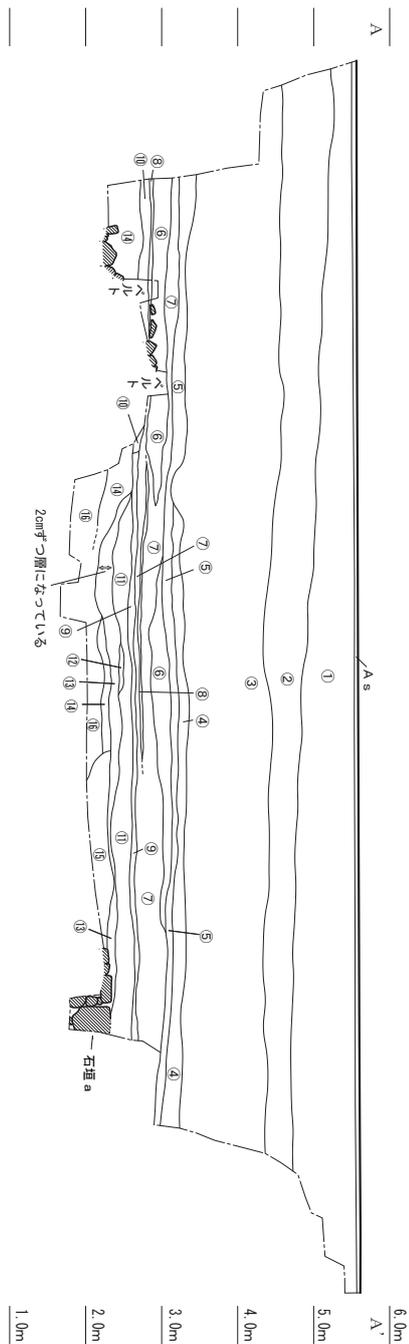
構造としては、上記の「緑青のある三和土」を切って溝を掘り、凝灰岩のズリを敷き並べ、凝灰岩切石(30cm×30cm×90cm)を3列敷いている。凝灰岩切石を敷く際には、砂を敷き高さの調整をしたことが確認できた。

北東方向の切石下の布基礎は、10～20cmのズリを敷き詰めてあるのに対し、南西方向にのびる切石下の布基礎は、40～80cm近くの平たい石を敷き込んであり、違いが見られる。この違いが何を意味するかは不明である。

また、この切石布基礎が北東方向にものびるのではないかと考え、確認のミニ特レンチを入れたが、何も確認できなかった。

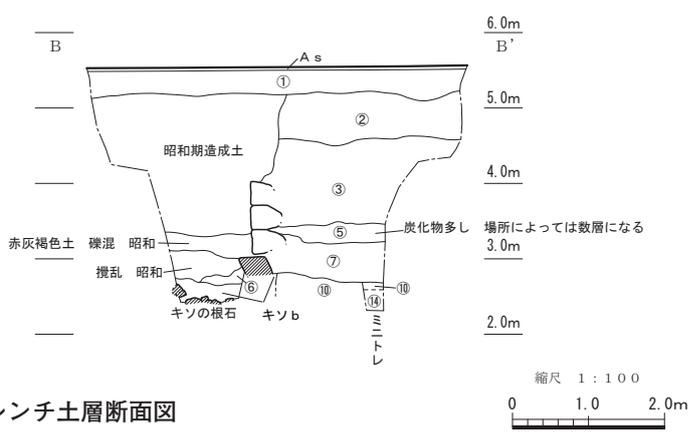
この布基礎の根切りの幅はほぼ1mである。このことから、このような基礎を持つ建物は、大型の木造建築物か石造建築物である可能性が高いと考える。

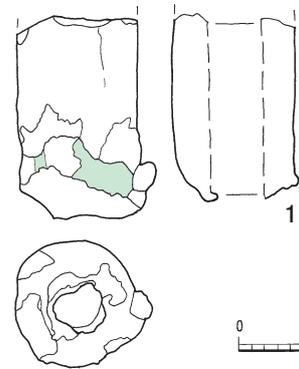
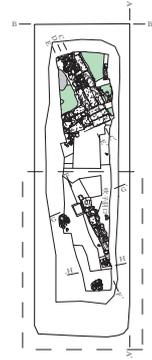
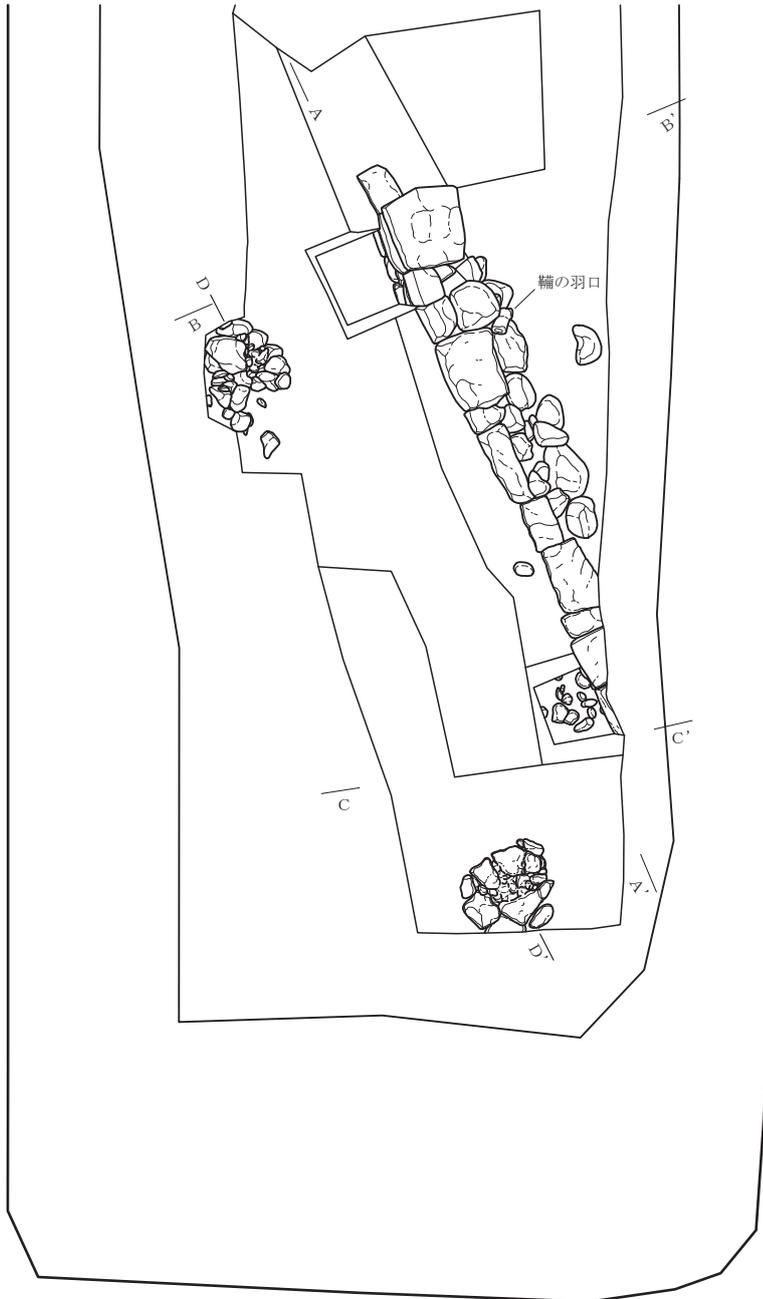
遺構内遺物として7点掲載する。出土場所は、切石の下部にあたる、キソb・キソc層である。この遺構が建てられるころの遺物と判断した。磁器については幕末の遺物と考えられるが、細かい時期については不明である。詳細は観察表を参考にされたい。



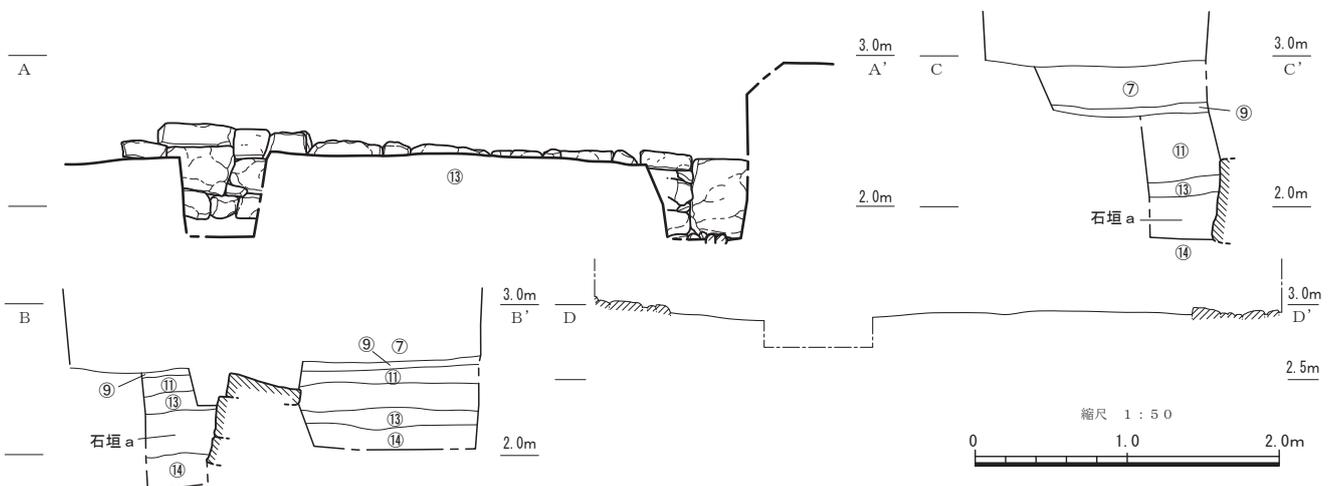
- ① 砂利層
 - ② 小豆色豆石層
 - ③ 鳥越トンネル掘削土
 - ④ 褐色土 昭和初期
 - ⑤ 昭和初期の黒褐色土 炭化物多し
 - ⑥ 黄褐色砂層
 - ⑦ 赤灰色砂質土 礫混、凝灰岩破砕礫が多く混じり固く締められている
 - ⑧ 茶(明)褐色粘質土 粘質強い
 - ⑨ 黒褐色砂質土
 - ⑩ 緑青色土
 - ⑪ 褐色砂、灰色砂が繰り返される 焼土あり
 - ⑫ 焼土
 - ⑬ 黒褐色砂層だが焼土っぽい
 - ⑭ 黄褐色粘質土
 - ⑮ 暗灰褐色砂層 サラサラ
 - ⑯ 灰色グライ土 鉄分多し 常に湿りあり
- 石垣 a 石の隙間は明褐色粘質造成土
 キソ b 赤灰褐色砂質土 礫混

第4図 1 トレンチ土層断面図

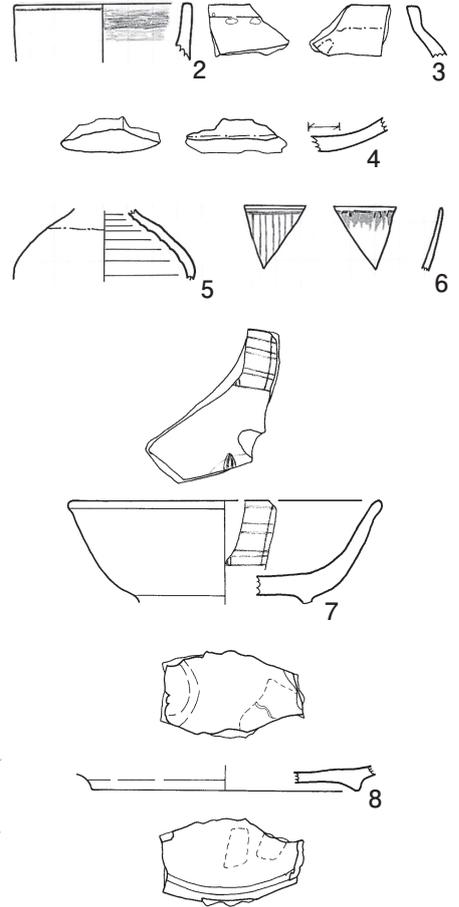




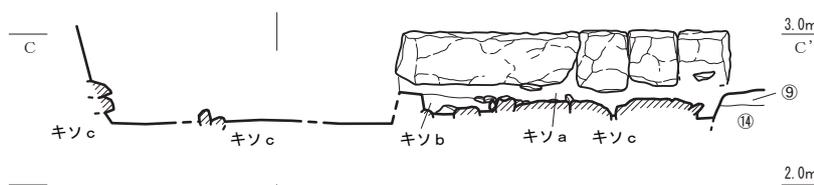
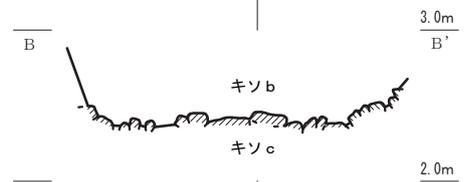
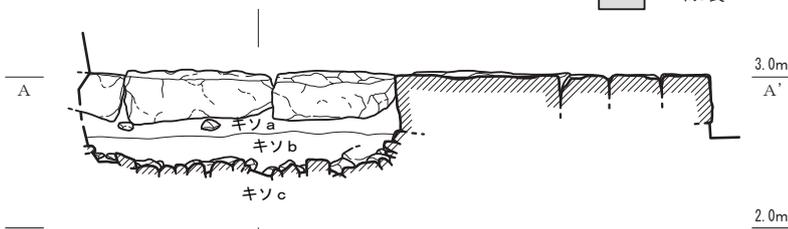
- ⑦ 赤灰色礫混層
- ⑨ 黒褐色砂質土層
- ⑪ 褐色砂層 複数の小層繰り返す
- ⑬ 暗灰褐色砂質土層 炭化物混じる
- 石垣 a 明褐色土層 造成土
- ⑭ 褐色砂層
黄褐色砂層 ⑪よりも海の砂に近いサラサラ



第5図 1トレンチ検出遺構①(石垣)及び出土遺物

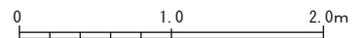


... 緑青色土
 ... 漆喰



キソa 明黄褐色砂層 海の砂という感じ
 キソb 赤灰色礫混層 小礫、中礫
 キソc 明褐色土層 造成土
 ⑨ 黒褐色砂質土
 ⑩ 褐色砂質土

縮尺 1 : 50



第6図 1 トレンチ検出遺構②(布基礎) 及び出土遺物

(3) 遺物 (第7～12図)

陶磁器の分類については、まず磁器、陶器等の材質別に大分類し、さらに器種ごとに細分化を行った。紙面構成の都合上、産地や生産年代等については前後することがあるが、それらの詳細については観察表にまとめた。以下、特徴的な所見が見られる遺物についてのみ述べることにしたい。

ア 磁器 (第7図)

磁器については、肥前系磁器の染付・白磁・色絵と、薩摩磁器の平佐系と思われる在地産の染付が出土している。

碗 (9～30)

碗については、形状から次の3つに分類した。

丸形…体部が丸みを帯び、口縁部は直交もしくはやや内湾するもの。

端反碗…口縁部が外反するもの。

筒丸形…体部が筒状を呈し、腰部が丸みを帯びるもの。
朝顔形…腰部で内側に屈曲し、体部は逆ハの字にまっすぐのびるもの。

9～16は、丸形のものである。9は帆掛け船が描かれたもので、外面に砂が付着している。10は二重格子文が描かれている。11は矢羽根文が描かれる。12、13は口縁部内面に格子文が描かれる。14は松葉文が描かれる、浅い碗である。16は外面に蝶文が、口縁部内面に二重襷文が描かれる。

17～22は、端反碗である。17は、いわゆる清朝磁器である。また、口唇部は口鏝を呈する。18は口縁部内面に二重圏線が施される。20は、口縁部内面に四方襷文が施される。

23は筒丸形の碗である。口縁部下位の外面～高台まで、轆轤の回転を利用した飛びカンナ様の技法で鏝文を施している。24は半筒形の碗である。口縁部外面には二重圏線が描かれる。25は朝顔形の碗で、外面に青磁釉を施す。また見込みに、二重圏線と手書き五弁花が描かれる。裏銘は二重枠の角福が描かれる。

26～30は、碗の底部である。26は見込みに宝文が描かれ、裏銘に「大明年製」をくずした文字が描かれる。27は見込みに圏線と遠山文が描かれる。29は高台に二重圏線が描かれる。30は高台が高く、小広東碗の底部の可能性もある。

小杯 (31～33)

31～33は、小杯である。31は口縁部が外反し、外面には一重編み目文が描かれる。

皿 (34～37)

34～37は稜花皿である。34の口縁部は口鏝を呈する。36は外面に唐草文、内面には唐草文が描かれる。37の口唇部は口鏝を呈し、見込みには山水文が描かれる。

鉢 (38)

38は厚手の鉢で、内面・外面ともに呉須で絵付けされている。底部に圏線が描かれる。

蓋 (39)

39は蓋である。外面に草花文が描かれる。

その他 (40～41)

40は燭台か灯明皿であろう41は内面が熱を受けているので香炉の可能性はある。外面は墨弾き技法を用いて文様を描いている。

色絵 (42～43)

42～43は色絵の角注である。同一個体の可能性がある。

イ 陶器 (第8図)

陶器については器種を大分類として分類した。

壙 (44～49)

44は壙の口縁部で、外面には暗赤灰色の釉が施されている。45は見込みに渦文の蛇の目釉剥ぎがみられる。

46～49は薩摩焼で、一般的に白薩摩と称される白色陶胎の壙である。48は外面腰部に呉須で千鳥が描かれる。

皿 (50～52)

50～52は皿である。52は琉球産で、腰部まで釉がかかり、底部は露胎する。

瓶類 (53～55)

徳利・酒瓶等を瓶類として分類した。53は徳利の頸部である。頸部と体部との接合部がやや雑である。54は琉球産の可能性はある。

水柱類 (56～64)

56～63は土瓶である。56は胴部がやや下垂した丸形である。58の茶止め穴は3穴のものである。59～60はカラカラである。61～63は土瓶の底部であるが、61は体部まで、62は腰部まで、63は脚部までと、施釉範囲に違いがみられる。

64は透明釉が施されており、底部の削りが浅いことから水柱類に分類した。

蓋類 (65～66)

65は薄手の蓋で、外面に褐釉が施される。66は外面に鉄が付着した状態で出土した。

鍋 (67～68)

67は口縁部の外面から内面のみ施釉されている。68は鍋の把手である。

鉢 (69～72)

69は鉢の口縁部で、外面に沈線が巡る。70～72は播鉢である。

甕 (73～74)

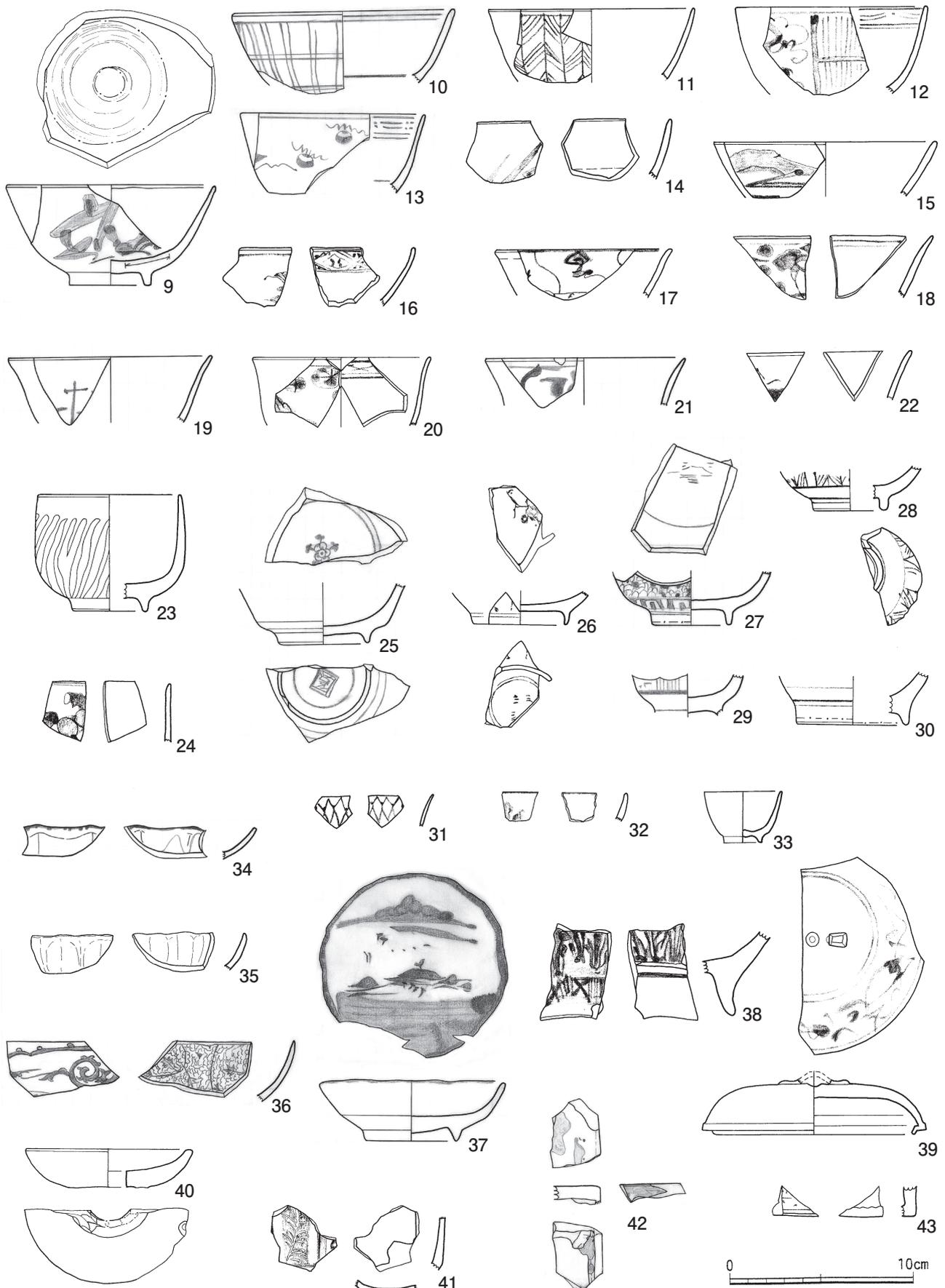
73～74は甕の口縁部である。

壺 (75)

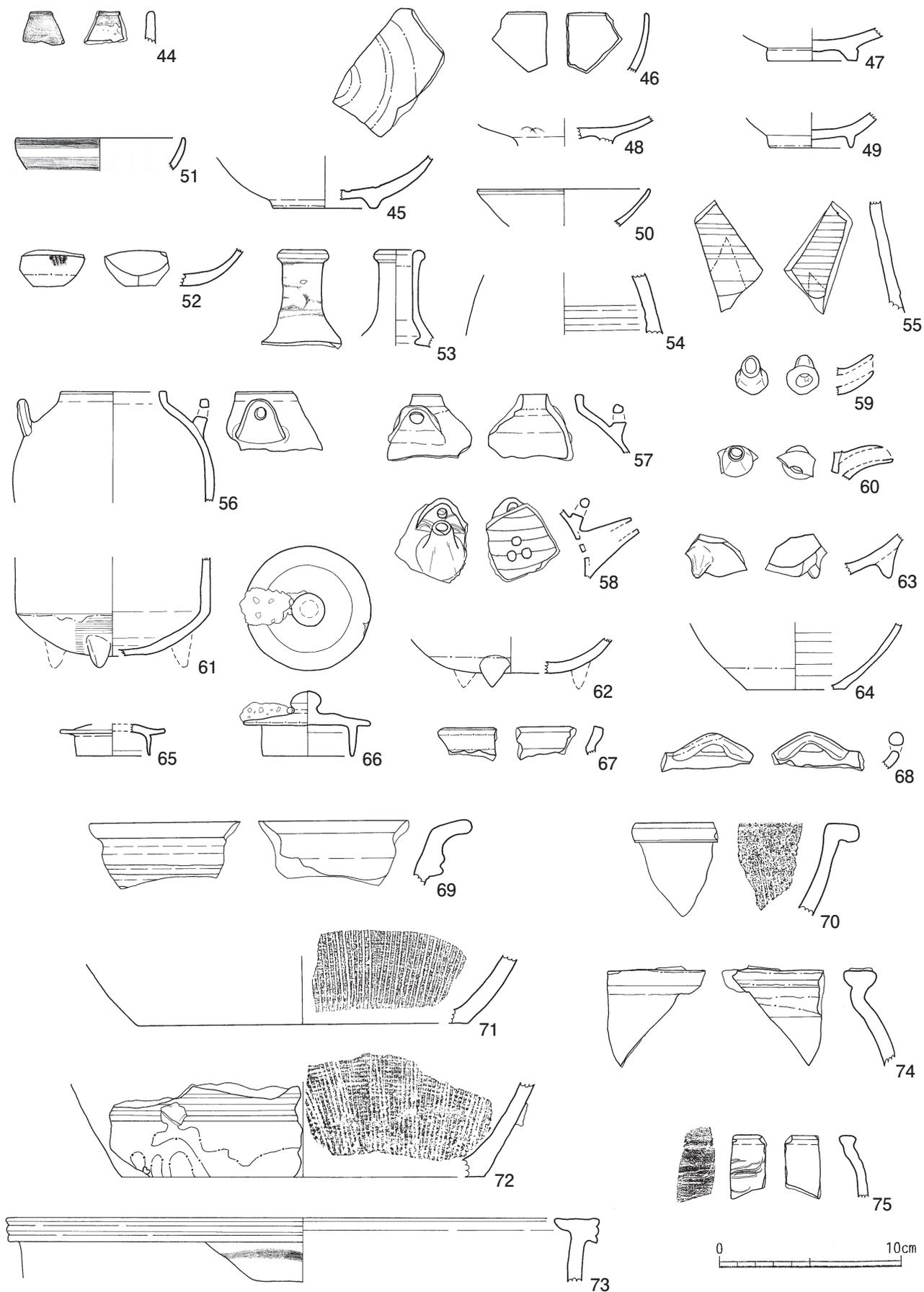
75は壺の口縁部である。

小壺・茶入 (76～82)

76は小壺で、油入れの可能性はある。77～81は茶入で



第7図 1 トレンチ出土遺物①



第8図 1トレンチ出土遺物②

ある。77～78は肩衝の茶入である。81の底部には糸切りが見られる。82は茶入のようだが、はっきりしない。

その他 (83～91)

分類ができなかったものを、「その他」として取り扱うこととした。

83～85は白薩摩である。器種はそれぞれ、83は手水鉢、84～85は仏花器の可能性ある。86は陶胎染付の仏飯具で、外面の体部と内面に白化粧土がかけられている。また、87～88は瓦質土器である。87は火鉢と考えられる。88は底部の中央に穿孔があるが、用途は不明である。89は茶道具の風炉の可能性ある。90は土錘である。91は轆の羽口である。

ウ 窯道具 (第10図)

匣鉢 (92～98)

92～98は匣鉢である。94は口縁部に、ツクが付着している。96の底部には釉薬が斑点状に付着している。98の見込みには、アルミナが付着している。

棚板 (99～101)

棚板と分類したが、匣鉢の蓋の可能性もある。99～100の表面にはアルミナが付着している。101の裏面には穿孔がみられる。

ツク (102～103)

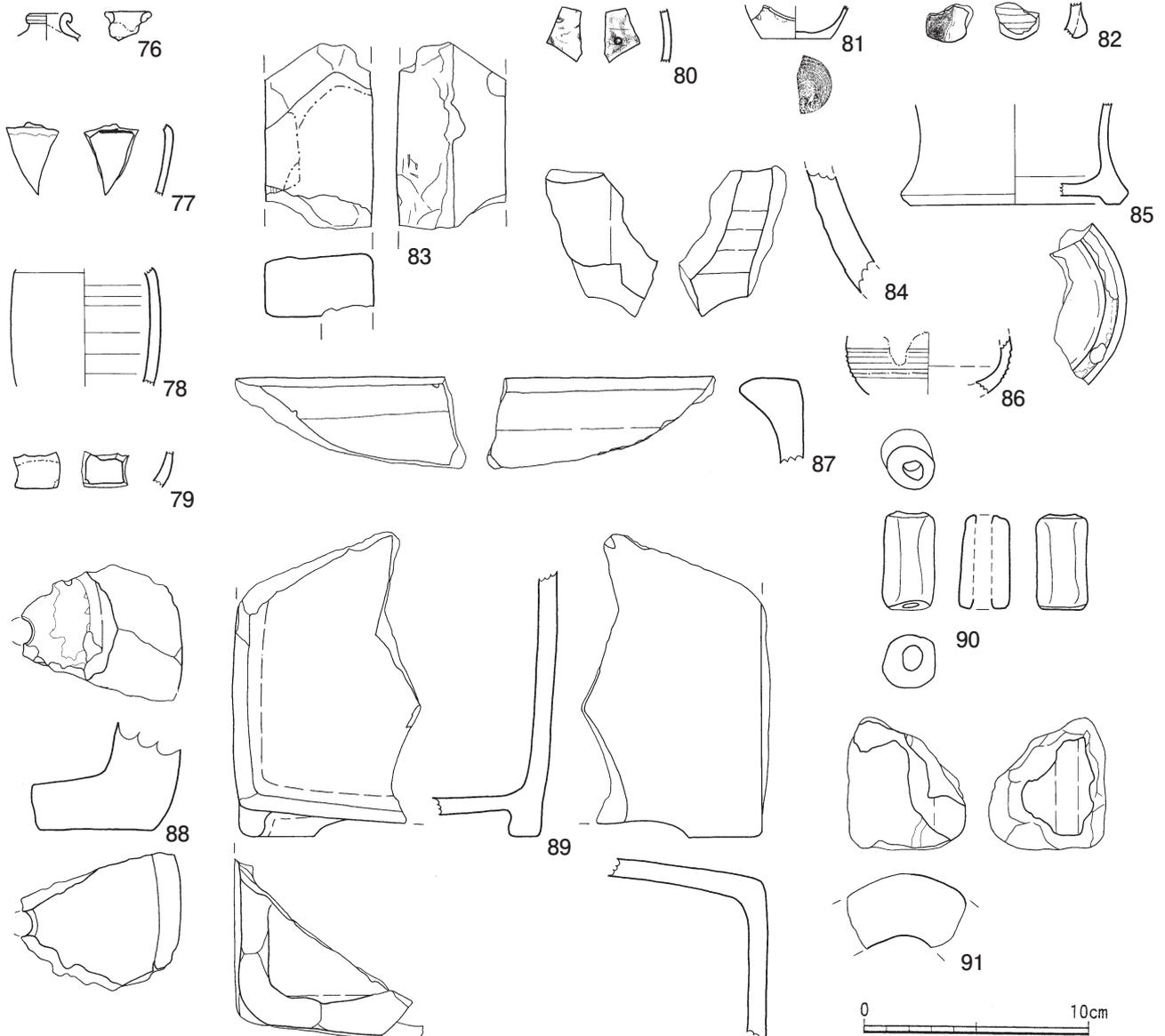
102は断面が扁平なもので、103は、断面が丸いものである。

ハマ (104～105)

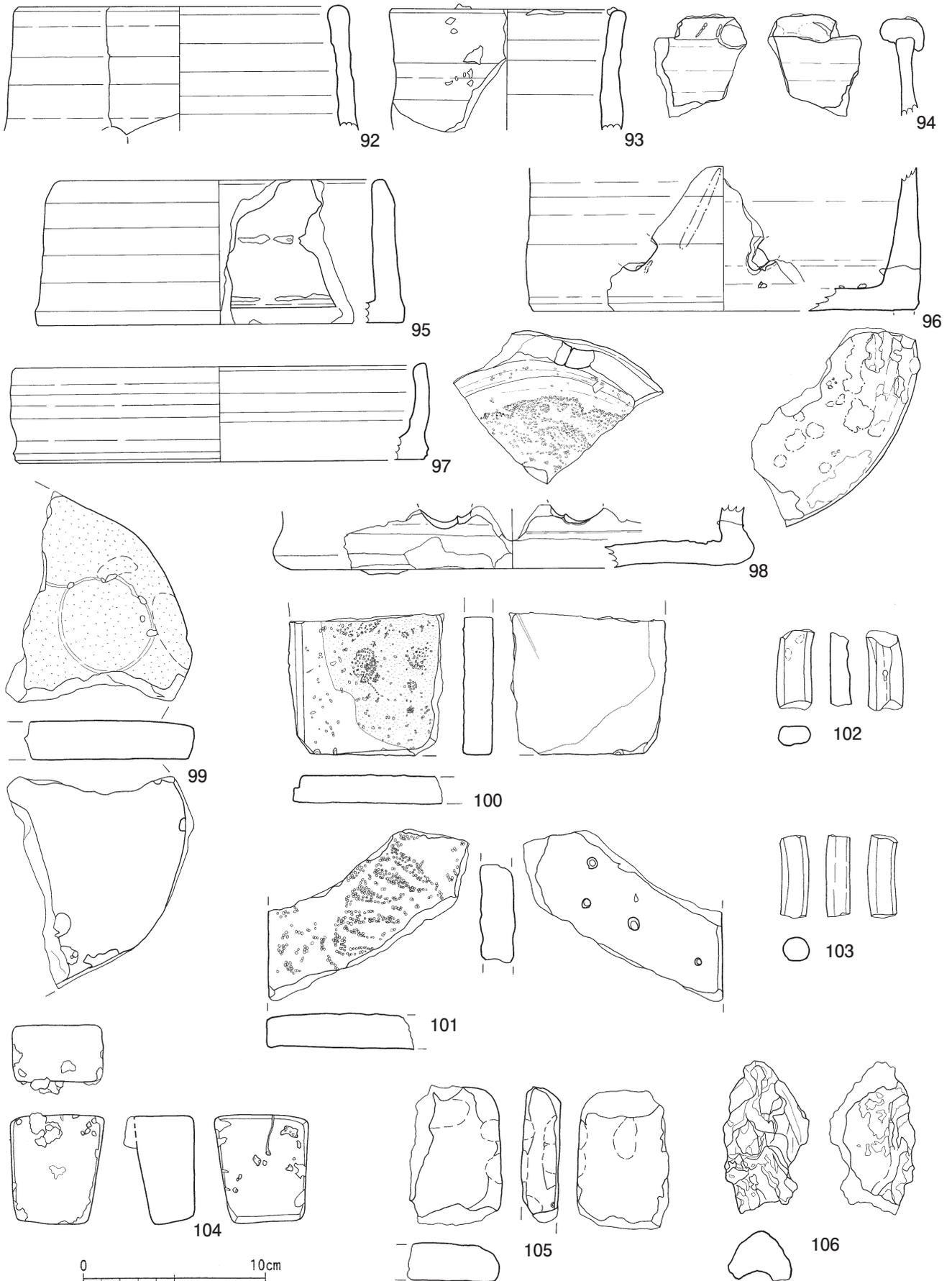
104は楔形のハマである。105は指頭圧痕がみられる。

その他 (106)

106は窯詰めする際の部材の一部と思われる。暗赤褐色に変色していることから、高温にさらされたことが伺



第9図 1 トレンチ出土遺物③



第10図 1トレンチ出土遺物④

える。

エ 瓦 (第11図)

瓦は大量に出土しているが、ほとんどが破損して小片になったものばかりである。ここでは、特徴的な瓦のみを掲載する。107~113は椽瓦である。平瓦の可能性もあるが、出土品を見る限り、平瓦と断定できるようなものが出土していないので、ここでは椽瓦とした。107~111は軒瓦で、瓦当はすべて均正唐草文である。112には刻印が認められるが、判読できない。114は丸瓦で、内面には布目が残る。115は袖瓦で、右袖になる。

オ その他 (第11図)

116は砥石である。

カ 古銭 (第12図)

117は琉球通宝である。⑧層からの出土であり、安定した堆積の層ではないので、鑄銭所時代の遺物ではない

と判断した。118~119は寛永通宝である。

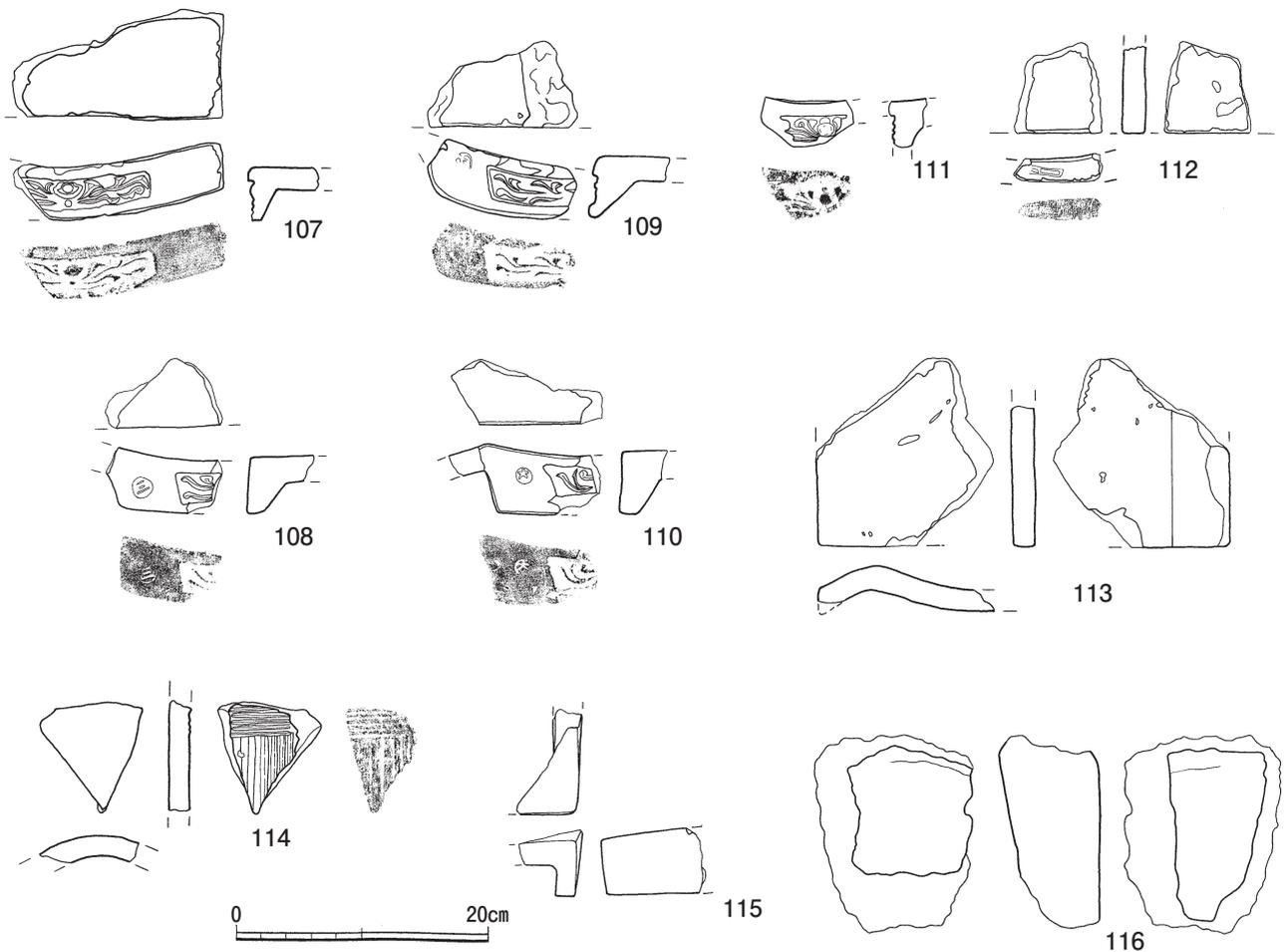
キ 金属製品 (第12図)

120はボタン、121はフック状製品である。いずれも、後世のもの可能性があるが、写真のみを掲載する。

122~128は青銅製品である。いずれも釘状の製品で、断面をみると角釘である。一般的な釘の頭部は、125・126のように基部上端を叩き潰すなどして形成するものである。ところが、122~124は頭部を丸く仕上げている。このことから、何らかの装飾品に用いられた釘であると判断した。

125~127は、折れ曲がった状態で出土した。使用による折れ曲がりかどうかは判断できなかった。127は頭部が欠損している。

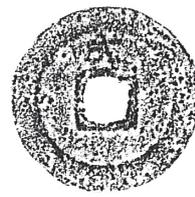
128は頭部が欠損しているが、長さは9.7cmである。断面は角状であるが、先端部にいくと丸く加工してある。



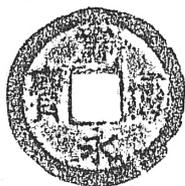
第11図 1 トレンチ出土遺物⑤



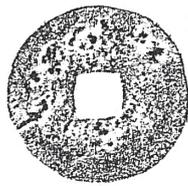
117



118



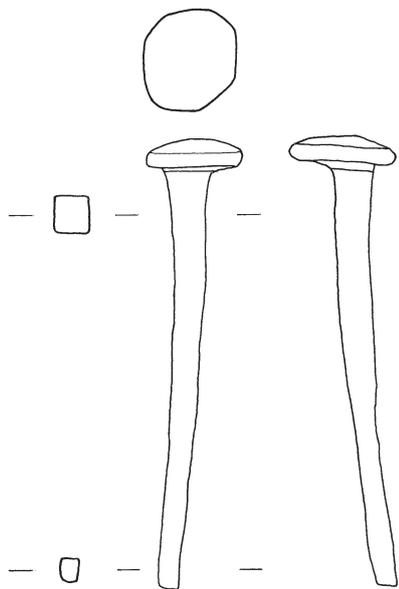
119



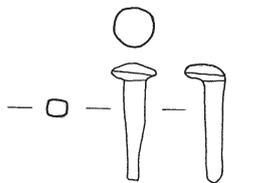
120



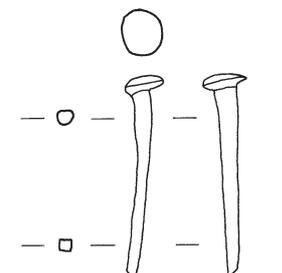
121



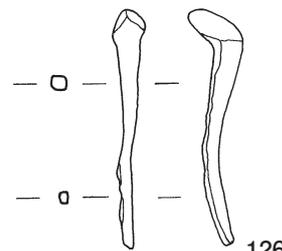
122



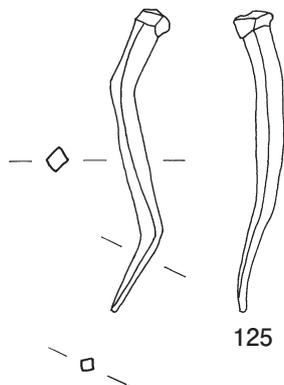
123



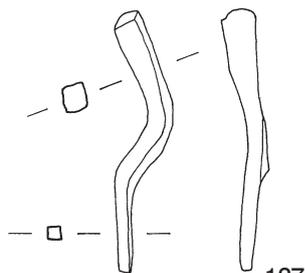
124



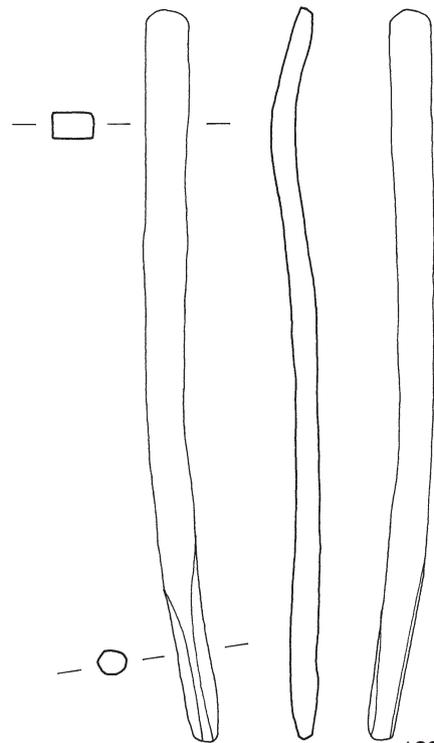
126



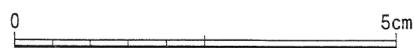
125



127



128



第12図 1トレンチ出土遺物⑥

2 2トレンチ

2トレンチは、鹿児島紡績所北側の基礎部分を確定することをねらって設定した。詳細は第6節で述べるが、ここで検出した布基礎は鹿児島紡績所の基礎部分と考えられる。

遺物は、陶磁器や窯道具が出土しているが、特に多かったのがレンガである。文字の入ったレンガや、耐火レンガなどが出土している。また、用途不明のパイプ状の鉄製品が多く出土しており、何に由来するものか、今後検討が必要である。

(1) 層序 (第13図)

層序については、第13図に示した。1トレンチ同様に堆積状況が複雑である。「鳥越トンネル掘削時の砂礫」と思われる層が2m以上堆積している部分もあった。

地表から1m付近で検出した石積みは、近現代の側溝と判断した。さらに下層の、標高3m付近で硬化面を検出した。ただし、この硬化面がどの時期のものかは特定できなかった。

この硬化面を検出した時点で、地表からの深さが2m近くなったので、これより下層は、この硬化面を1/4カットして調査した。

(2) 遺構 (第14図)

布基礎 (第14図)

前述したように、硬化面を1/4カットし掘り下げたところ、砂質土が1mほど堆積していた。この、砂質土中から、レンガやパイプ状の鉄製品が出土している。さらに砂質土を掘り進めると、また三和土を検出した。

この三和土を掘り進めると、こぶし大の凝灰岩のズリが敷き詰められており、それを掘り抜くと、70~80cm大の平石が検出された。この布基礎は、地山の砂層に直接埋め込まれており、不同沈下を防ぐ狙いがあるものと思われる。トレンチ自体が狭小で、さらに掘削深度の問題もあり布基礎の規模をすべて確認することができなかったが、確認できている部分だけでも、根切りの幅が1mを超えている。このことから、このような基礎を持つ建物は、かなり大型の木造建築物か石造建築物である可能性が高いと考える。

また、その規模が1トレンチの布基礎よりも大きいことから、1トレンチの布基礎とは別の建物で、より大きい建物の基礎部分であると考えられる。

(3) 遺物 (第15~17図)

陶磁器の分類については、まず磁器、陶器等の材質別に大分類し、さらに器種ごとに細分化を行った。紙面構成の都合上、産地や生産年代等については前後することがあるが、それらの詳細については観察表にまとめた。以下、特徴的な所見が見られる遺物についてのみ述べることにしたい。

ア 磁器 (第15図)

国内産磁器については、肥前系磁器の染付と、平佐系と思われる在産の染付が出土している。

碗 (129~131)

129は筒丸碗で、雪持笹が描かれる。130は半筒碗で、腰部と高台脇に二重圏線が描かれる。131は碗の底部で、高台脇と底部に二重圏線が描かれる。

皿 (132)

132は皿である。内面に呉須で二重格子文を描くが、呉須の発色が悪くやや緑がかっている。見込みには、蛇の目釉剥ぎされ、二重格子文が描かれる。

水注 (133)

133は水注の注口である。

イ 陶器 (第15図)

陶器については器種を大分類として分類した。

壙 (134~135)

134は陶胎染付の壙である。白化粧土をかけた上から、口縁部に呉須で網目文が描かれる。136は、いわゆる白薩摩である。腰部から大きく屈曲するタイプの壙である。

皿 (136)

136は内面に型押しで草花文が施してある。皿としたが高坏の可能性もある。

瓶 (137)

137は西餅田系の黒薩摩の瓶である。全体に褐釉が施されている。

甕 (138)

138は甕の口縁部である。

水注類 (139)

139は、土瓶の口縁部である。口縁部の内面と口唇部には、施釉されていない。

蓋 (140)

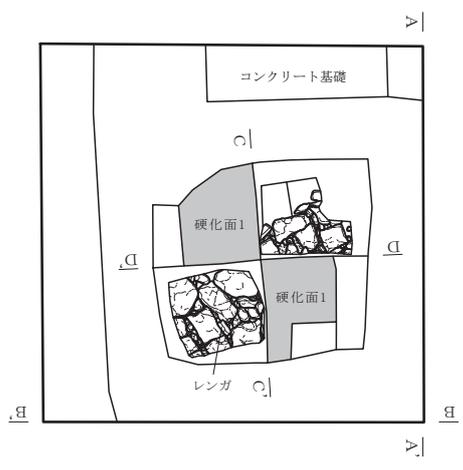
140は、蓋である。おそらく土瓶の蓋であろう。

その他 (141)

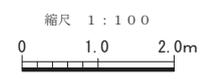
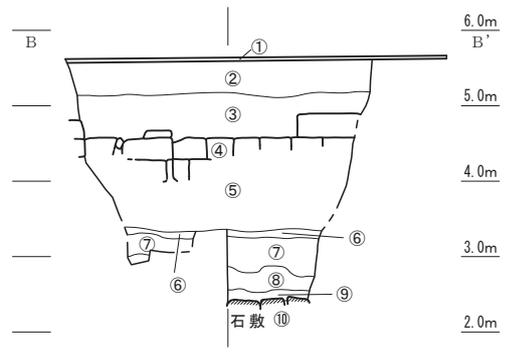
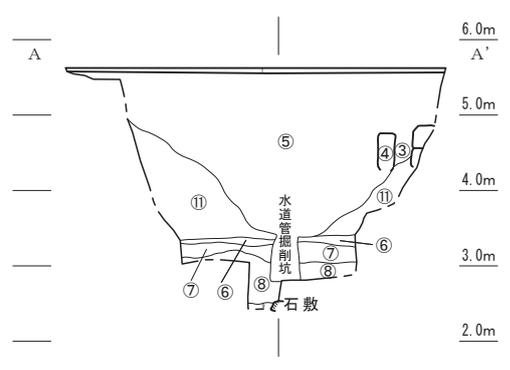
141は、白薩摩の蓋物の受け部である。重ね焼きされた目跡が残る。

ウ 窯道具 (第15図)

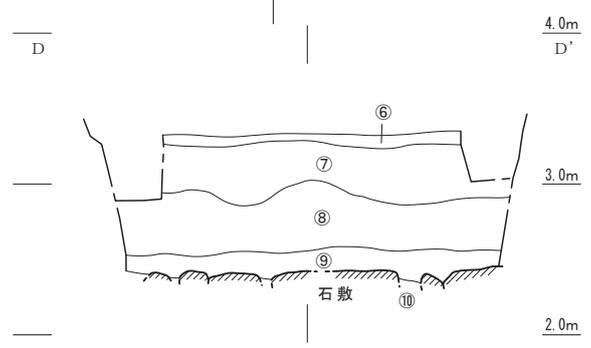
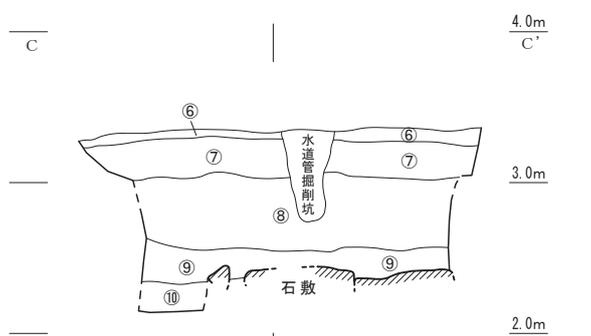
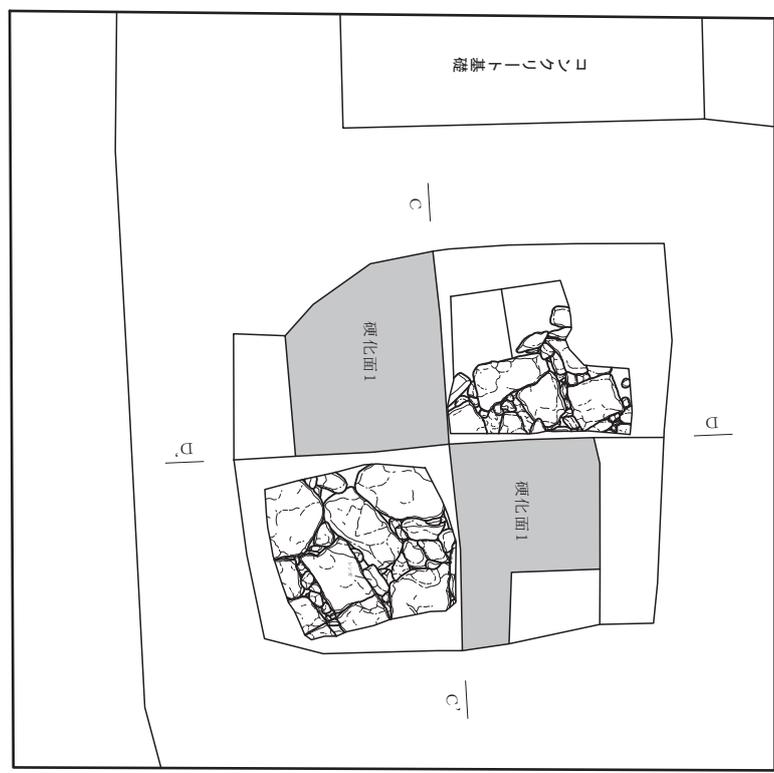
1トレンチ同様に窯道具が出土している。どの窯に由来するかは不明である。



- ① As (アスファルト)
- ② 小砂利層
- ③ 小豆色豆石層
- ④ 旧側溝石組
- ⑤ 黄褐色礫積層(鳥越トンネル掘削土礫)
- ⑥ 硬化面1
- ⑦ 混礫赤褐色砂質土
- ⑧ 灰褐色砂質土
- ⑨ 硬化面2
- ⑩ 灰黄褐色砂質土
- ⑪ 凝灰岩礫盛土層



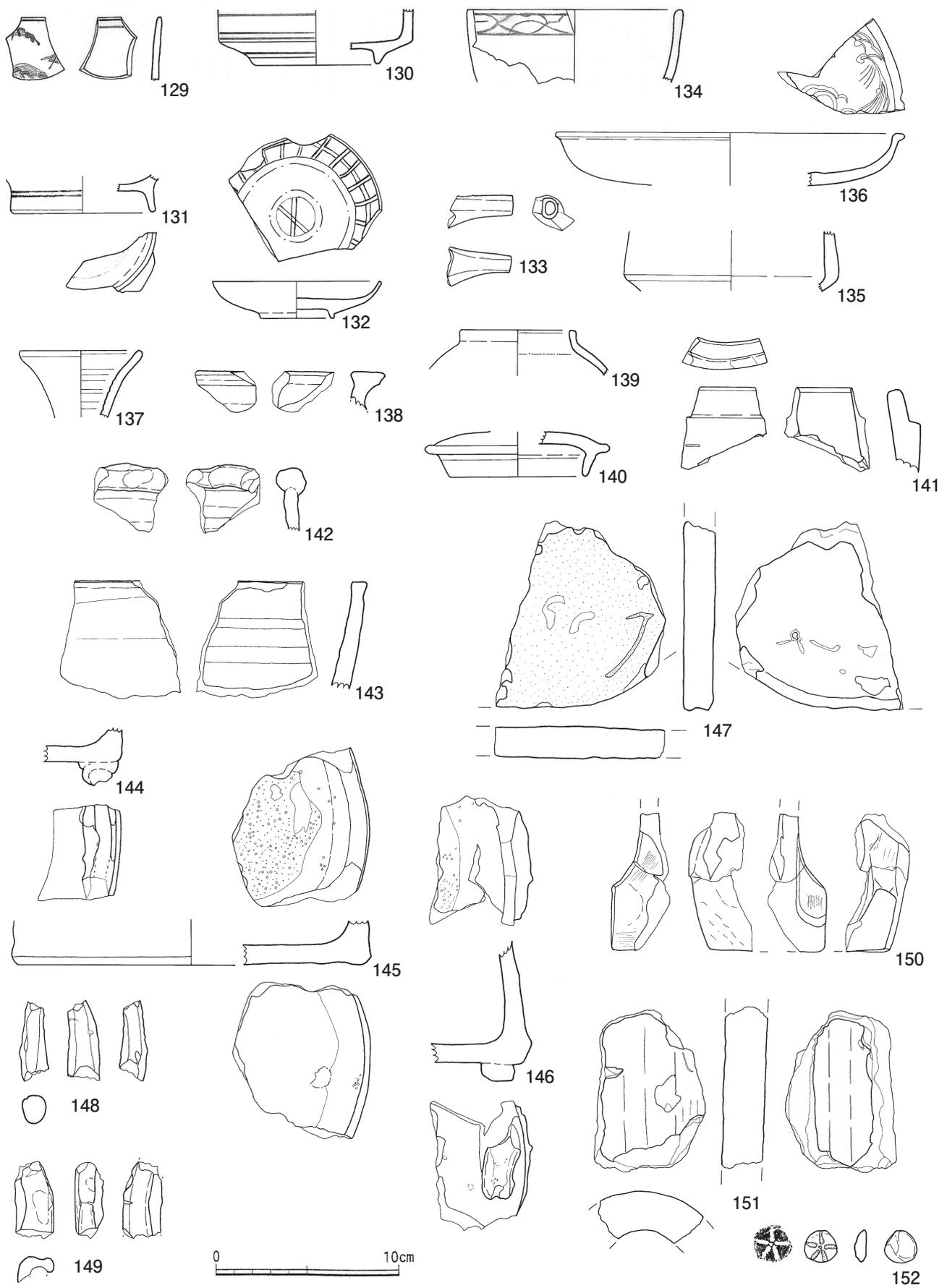
第13図 2トレンチ土層断面図



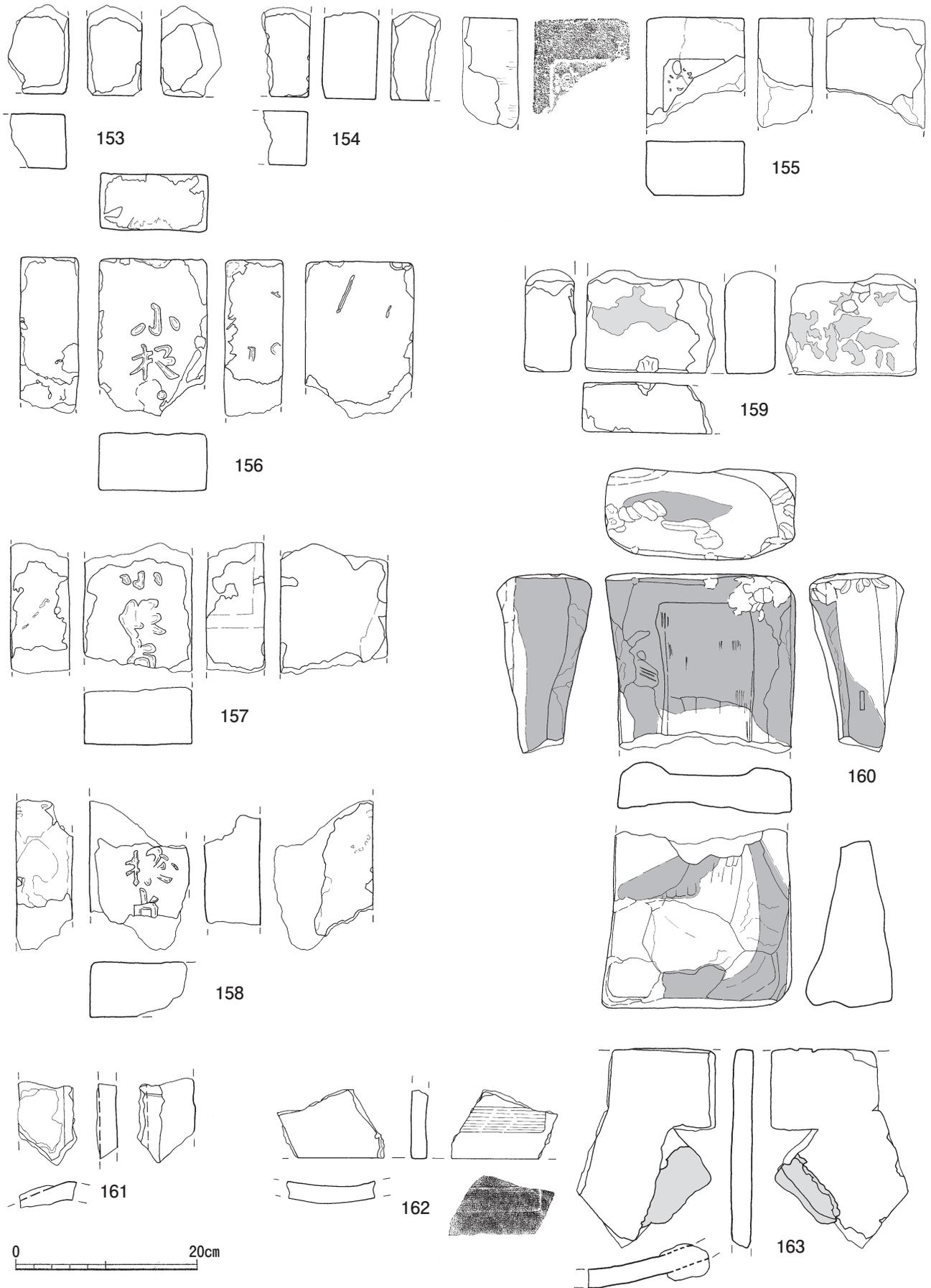
- ① As (アスファルト)
- ② 小砂利層
- ③ 小豆色豆石層
- ④ 旧側溝石組
- ⑤ 黄褐色礫積層(鳥越トンネル掘削土礫)
- ⑥ 硬化面1
- ⑦ 混礫赤褐色砂質土
- ⑧ 灰褐色砂質土
- ⑨ 硬化面2
- ⑩ 灰黄褐色砂質土
- ⑪ 凝灰岩礫盛土層



第14図 2トレンチ検出遺構



第15図 2トレンチ出土遺物①



第16図 2トレンチ出土遺物②

匣鉢 (142~146)

142~146は匣鉢である。142~143は口縁部で、142は口縁部にツクが付着している。143は口縁部がやや開くタイプの匣鉢である。144~146は底部で、144・146は底にツクが付着している。147は底部内面にアルミナが、外面にはツクが付着している。また重ね焼きした下段の匣鉢の口縁部もツクと一緒に付着している。

棚板 (147)

147は、棚板もしくは匣鉢の蓋である。表面には、重ね焼きの跡とアルミナが付着している。

ツク (148~149)

148は断面の形が丸く、149は断面の形が扁平である。

エ 土製品 (第15図)

150は、用途不明の瓦質の土製品である。植木鉢等の底部の可能性がる。151は轡の羽口である。152はボタン

状の土製品である。おはじき等の遊具の可能性がる。

オ レンガ (第16図)

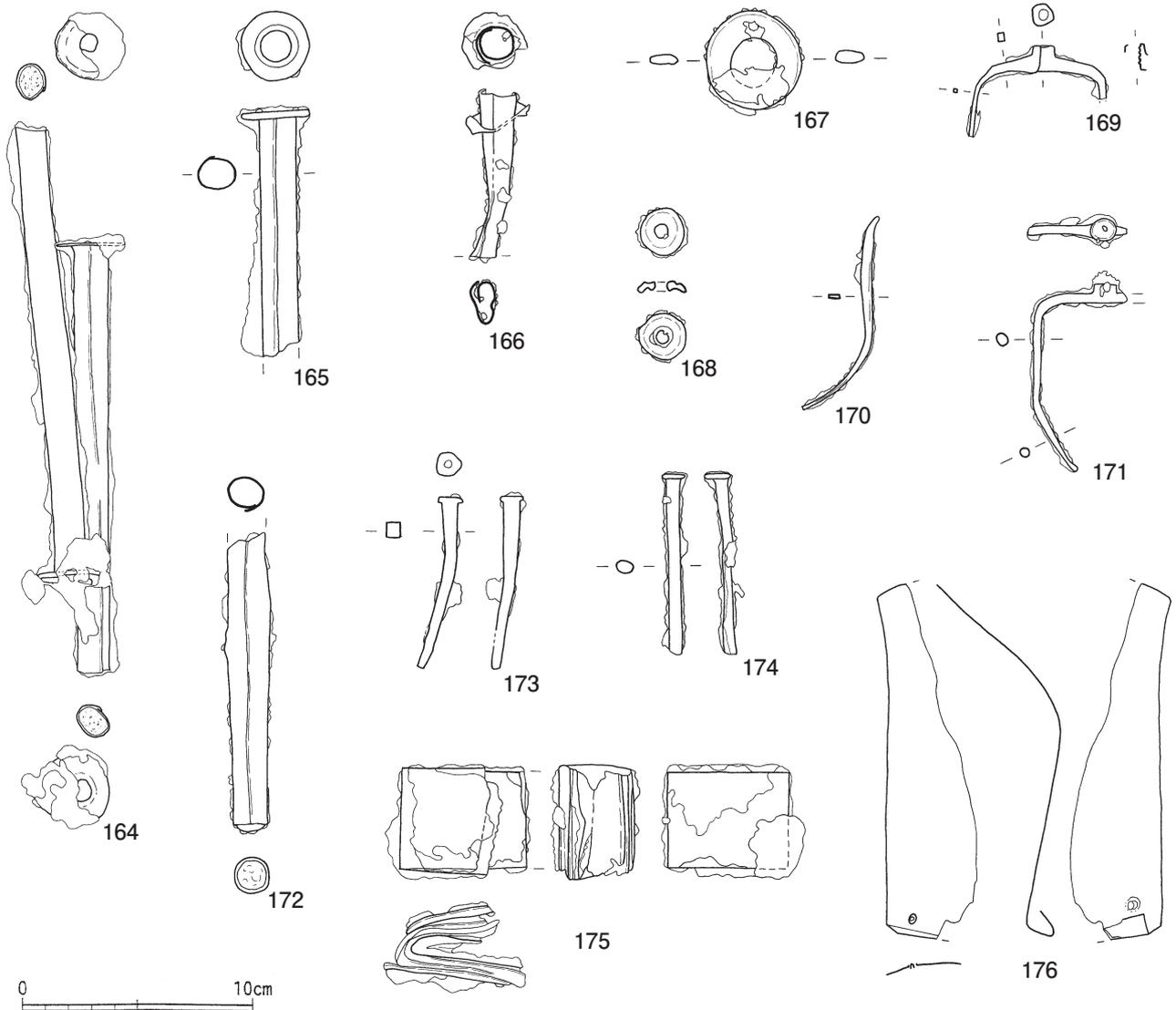
160のレンガを除き、すべて⑦層で出土したものである。160は、布基礎の石の間にはめ込んであったものである。

耐火レンガ (153~155)

153~155は耐火レンガである。この耐火レンガが、何に由来するかは反射炉などに由来するものかどうかは不明である。155は刻印があり、欠損して正確には読めないが、「減」という字に似ているようである。

その他 (156~159)

156~158は赤レンガで、赤褐色を呈しており、胎土は砂を多く含み粗い。156~158には文字が印されており、剥落している文字もあるが、「小根占」と読めそうである。159は淡黄色をしたレンガで、表面には漆喰が付着して



第17図 2トレンチ出土遺物③

いる。

凹みレンガ (160)

160は、2トレンチの布基礎中にはまり込んでいたものである。布基礎の工事をする際に、石の間に埋め込んだものであろう。レンガの全面に煤が付着している。表面の中央部が凹んでいるのだが、何かで削り込んでいるようである。欠損している部分が多く、全体の形状がはっきりしないが、その形状から判断すると、何かのカーブ部分を構成するためのレンガではないかと考えられる。

カ 金属製品 (第17図)

2トレンチからは多くの金属製品が出土しているが、用途は不明である。164~166は、パイプ状の鉄製品である。出土状況から考えて、本来はもっと長いものであると思われる。167はリング状の鉄製品である。169の中央部分の内面には、ネジがきつてある。175は、薄い鉄の板を折り曲げたような状態で出土した。

3 3トレンチ

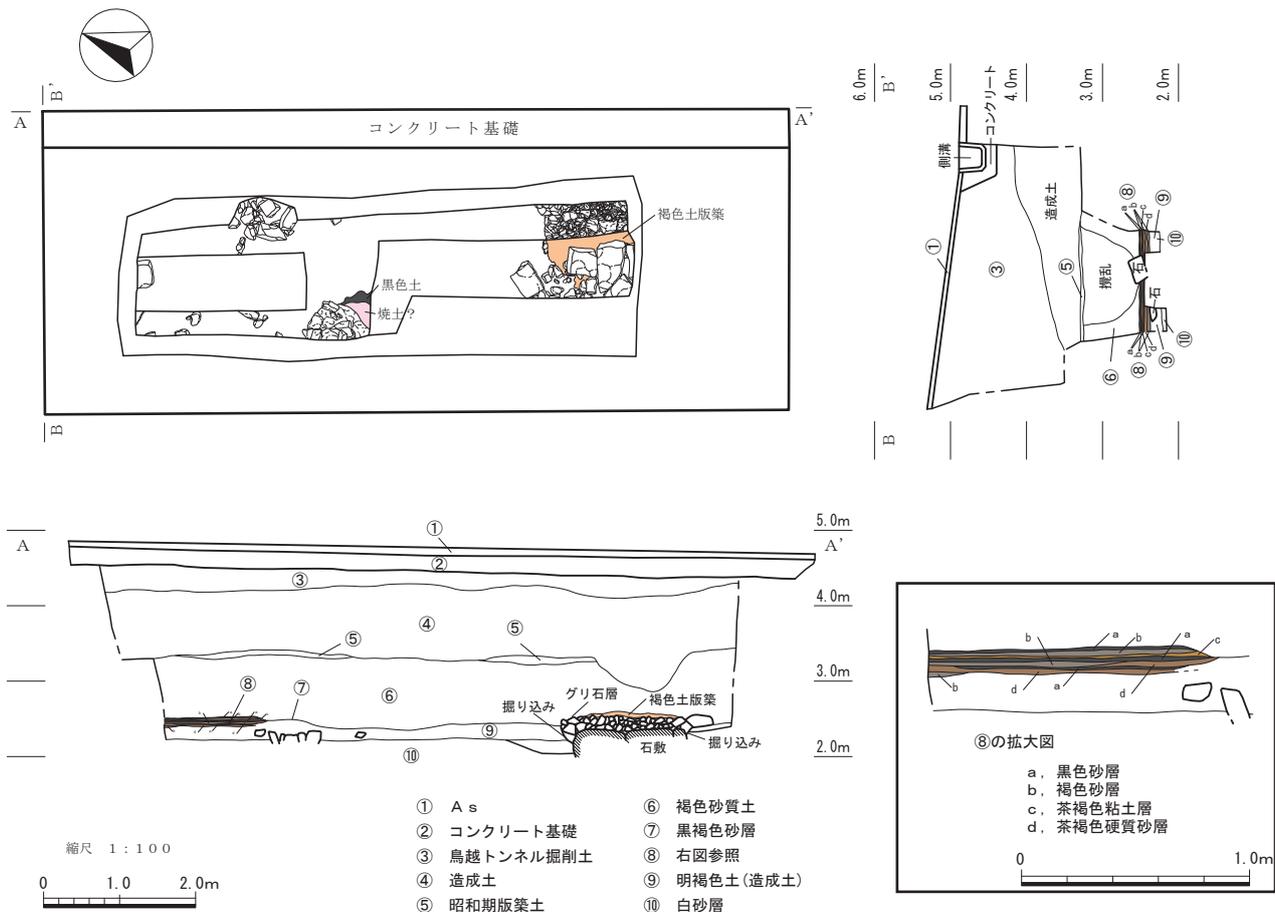
3トレンチは、鹿児島紡績所南側の基礎部分を確定することをねらって設定した。詳細は第6節で述べるが、ここで検出した布基礎は鹿児島紡績所の基礎部分と思われる。

遺物は、陶磁器や窯道具が出土している。攪乱層からではあったが、大量の鉄屑が出土した。これも、当地の特殊性を示すものであろう。

(1) 層序 (第18図)

層序については、第18図に示した。1トレンチ同様に堆積状況が複雑である。しかし、「鳥越トンネル掘削時の砂礫」と思われる層が50cm程度しか堆積していないところが、客土・造成土は1m以上も堆積していた。

また、標高3m付近では、2トレンチで見られたような硬化面が検出されている。2トレンチ同様、この硬化面がどの時期のものかは特定できなかった。



第18図 3トレンチ土層断面図

(2) 遺構 (第19～20図)

坪地業 (第19図)

3トレンチの北部で検出した。10～20cm大の礫で構成されており、直径80cm程度の円形をしている。2箇所の坪地業の間隔が約180cmであることや、その規模からみて、木造建築物の基礎と判断した。

1トレンチの石垣とほぼ同じレベル、標高2.4mで検出されていることから、この石垣と坪地業はほぼ同時期にあったものと考えられる。西側の坪地業には、すぐ隣に焼土があり、この木造建築物と関連があることが想定できる。

切石布基礎 (第20図)

3トレンチの南側、標高約3mの地点で検出した。この切石の一部は原位置にないものと思われる。

構造としては、1トレンチの布基礎とよく似ているが、「緑青のある三和土」は検出されなかった。しかし、一部に緑青を確認することはできた。

3トレンチの布基礎は、まず⑨層の明褐色土層を掘込み、地山の砂層に40～100cm近くの平石を敷き込む。その上に凝灰岩のズリを敷き並べ、さらに褐色土の三和土をしき、その上に凝灰岩切石(30cm×30cm×90cm)を敷

いている。

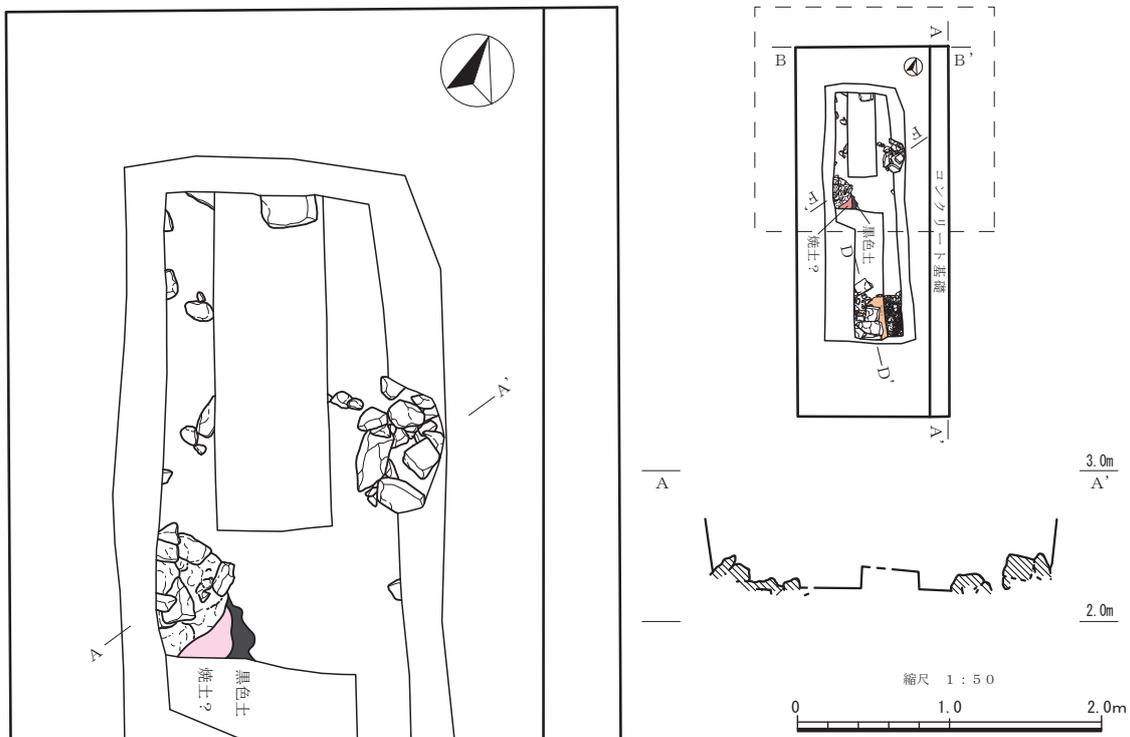
1トレンチの布基礎に比べ、切石の下に三和土があることから、1トレンチよりもより規模の大きな建造物基礎の可能性はある。これは、根切りの幅もかぼ2mあることからいえよう。このことから、2トレンチと3トレンチの布基礎が同一の建物の基礎部分で、1トレンチは別のもつと判断した。

遺構内遺物を第21図に7点掲載した。いずれも切石布基礎を検出中に出土したものである。

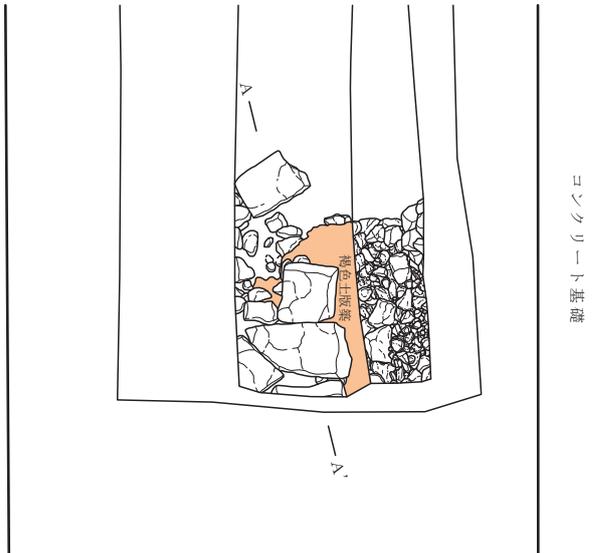
177が磁器である。177は水注の把手で、白化粧土の上に銅緑釉が施されている。

178～181が陶器である。178は京焼風の丸碗で、灰釉が施され高台脇から下部が露胎する。また上絵で緑色の絵付けがされている。179は丸碗で、透明釉が施され高台脇から下部が露胎する。181は白薩摩で鉢であろう。

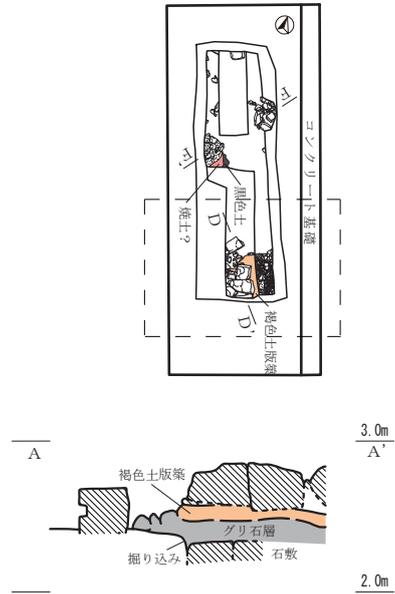
182は窯道具の匣鉢である。底部内面にはアルミナが付着し、底部外面には重ね焼きをしたと思われるツクが付着している。



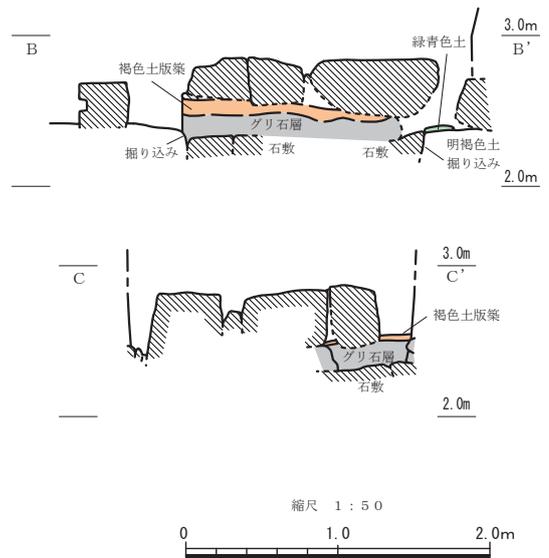
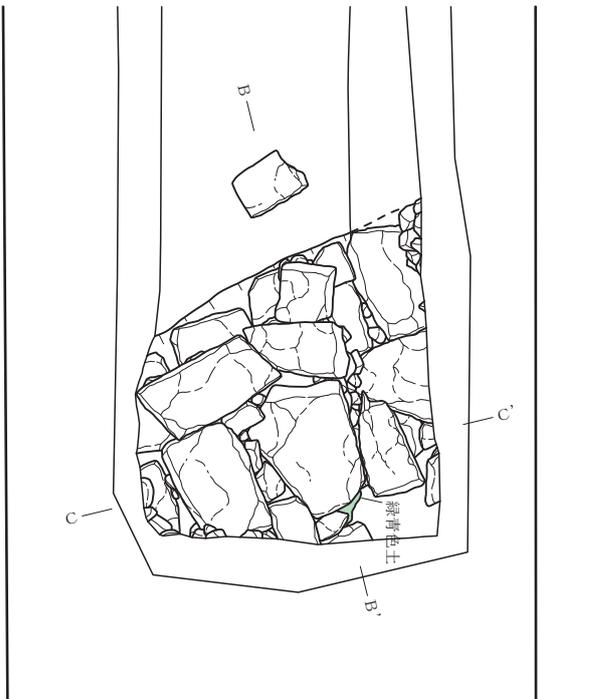
第19図 3トレンチ検出遺構① (坪地業)



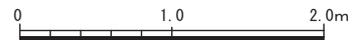
モックアップ基礎



第1面（拡張前）



縮尺 1:50



第2面（拡張後）

第20図 3トレンチ検出遺構②（布基礎）

(3) 遺物 (第22~24図)

陶磁器の分類については、まず磁器、陶器等の材質別に大分類し、さらに器種ごとに細分化を行った。紙面構成の都合上、産地や生産年代等については前後することがあるが、それらの詳細については観察表にまとめた。以下、特徴的な所見が見られる遺物についてのみ述べることにしたい。

ア 磁器 (第22図)

国内産磁器については、肥前系磁器の染付と、薩摩磁器の平佐系と思われる在地産の染付が出土している。

碗 (183~189)

碗についての分類は1トレンチと同様である。

183は丸形のもので、外面には二重格子文が描かれ、口縁部内面と見込みに二重圈線が描かれる。

184は筒丸碗で、外面に草花文、口縁部内面に雷文が描かれる。

185~189は端反碗である。185は外面に変様性の強い花唐草文が描かれる。187と189は同じような草花文が描かれ、同一個体の可能性がある。

皿 (190~192)

190は、折縁の皿である。口縁部外面には針支えの跡が見られる。191は見込みに山水文が描かれており、蛇ノ目凹型高台を呈する。192は見込みに山水文が、高台脇には三重圈線が描かれる。

イ 陶器 (第22図)

陶器については器種を大分類として分類した。

皿 (193~194)

194は、白薩摩の皿の底部である。見込みには、二重圈線と二重鋸歯文が描かれる。

合子 (195)

195は合子である。暈付と底部が釉剥ぎされ、合口や暈付には重ね焼きの跡が残る。

鉢 (196)

196は白薩摩の鉢で、底部には焼成時の砂が付着する。

蓋 (197)

197は白薩摩の蓋である。土瓶などの蓋であろう。

播鉢 (198~199)

198は~199は口縁部で、ハケ目の調整痕が残る。

壺 (200~201)

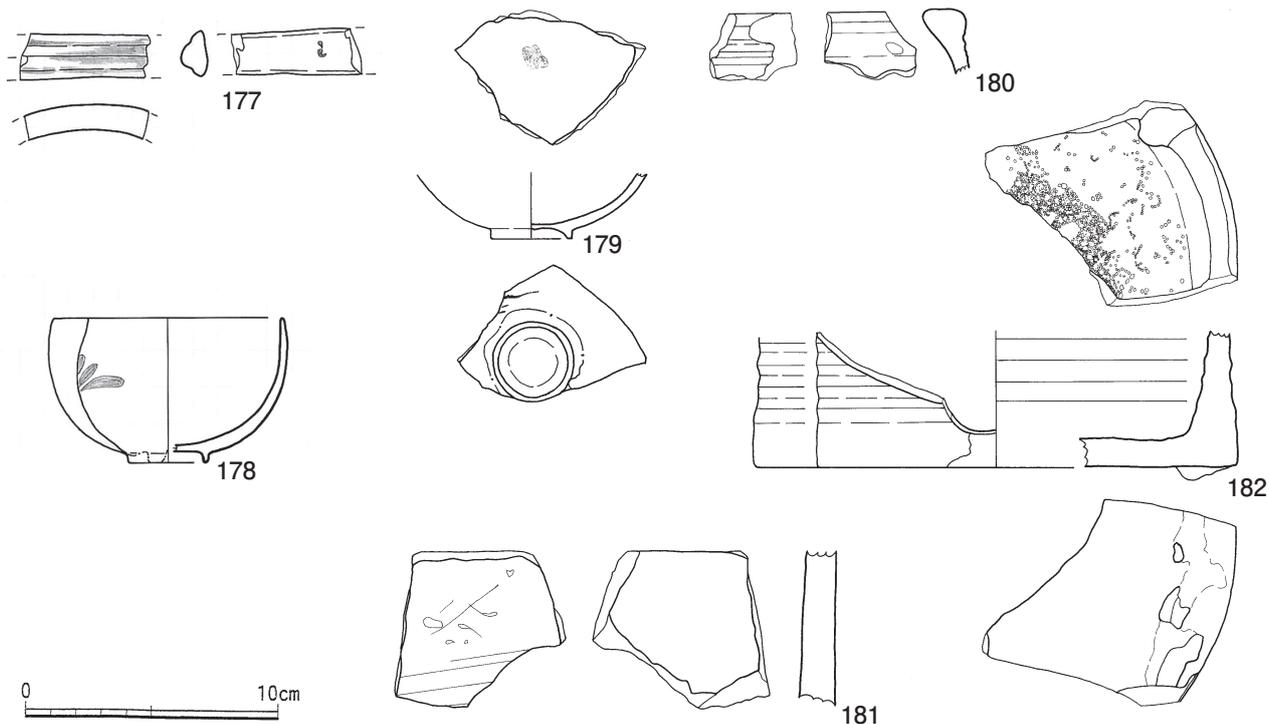
200~201は琉球産の壺である。200は外面に沈線が二条めぐる。

ウ 窯道具 (第23図)

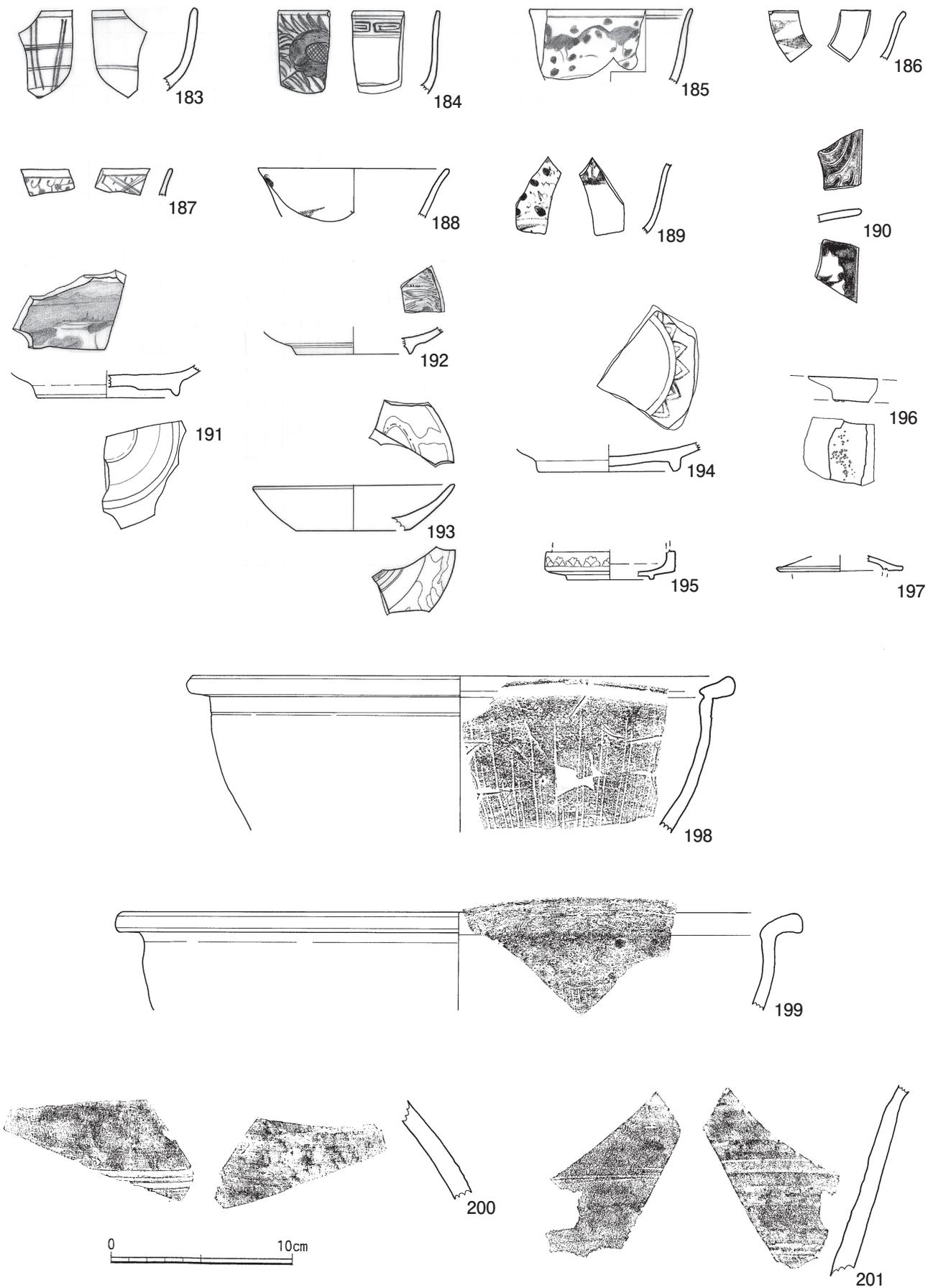
1トレンチ同様に窯道具が出土している。この地にあったどの窯に由来するかは不明である。

匣鉢 (202~205)

202~203は口縁部である。203は、ほぼ口縁部から底部まで残存しており、全体の形がわかる資料である。



第21図 3トレンチ遺構内出土遺物



第22図 3トレンチ出土遺物①

204～205は底部で、重ね焼きした下段のツクが付着する。
ツク (207)

207はツクである。使用時についたと思われる、匣鉢の口縁部の跡が確認できる。

エ その他土製品 (第23図)

208は埴塙である。外面は激しい熱を受けた跡が見られ、内面には緑青が付着していることから、鋳物に使われたものと判断した。

209は、轆の羽口である。外面は熱を受けかなりもろくなっており、使用した様子が伺える。

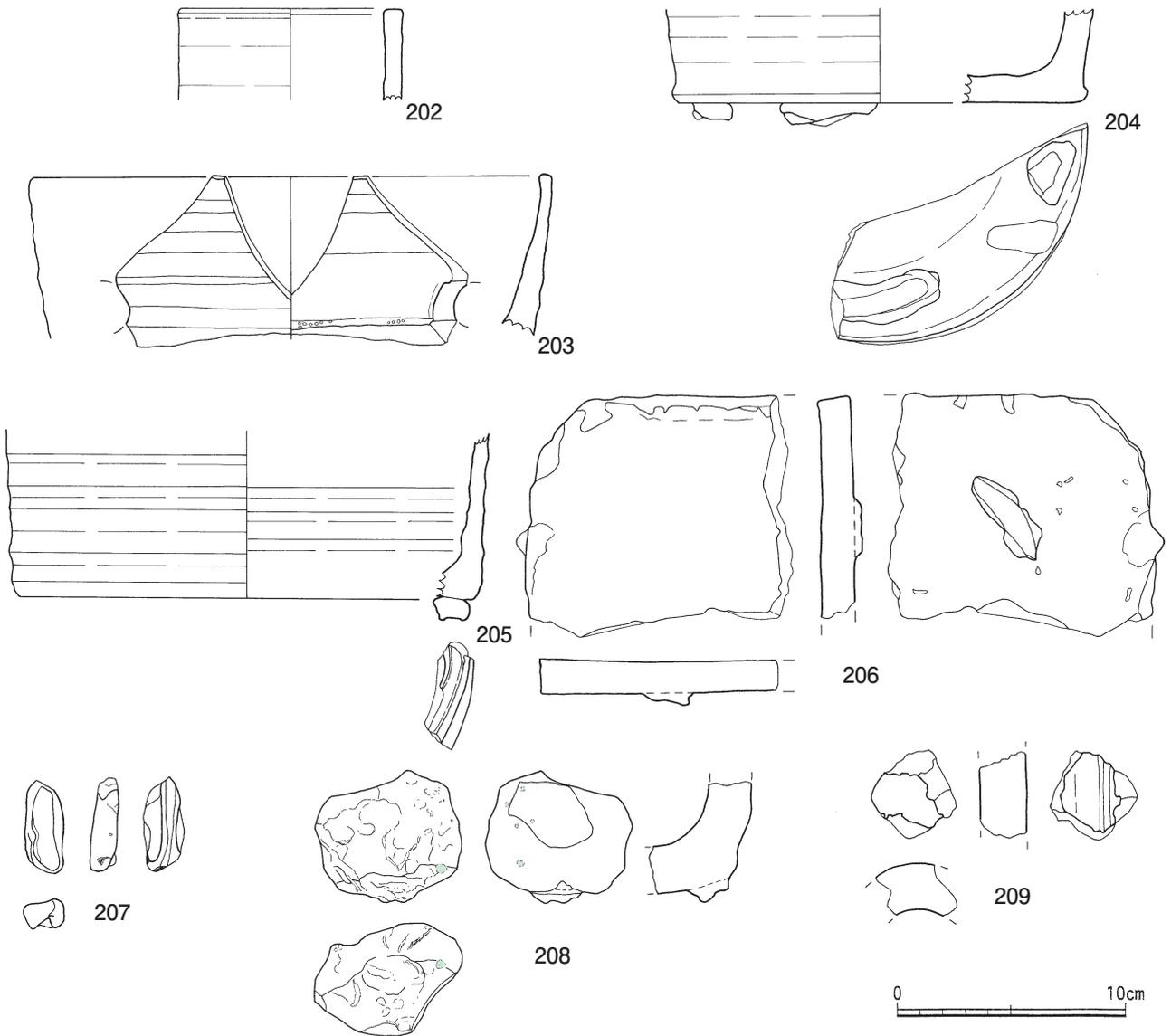
オ 瓦 (第24図)

1 トレンチ同様に、瓦は大量に出土しているが、ほと

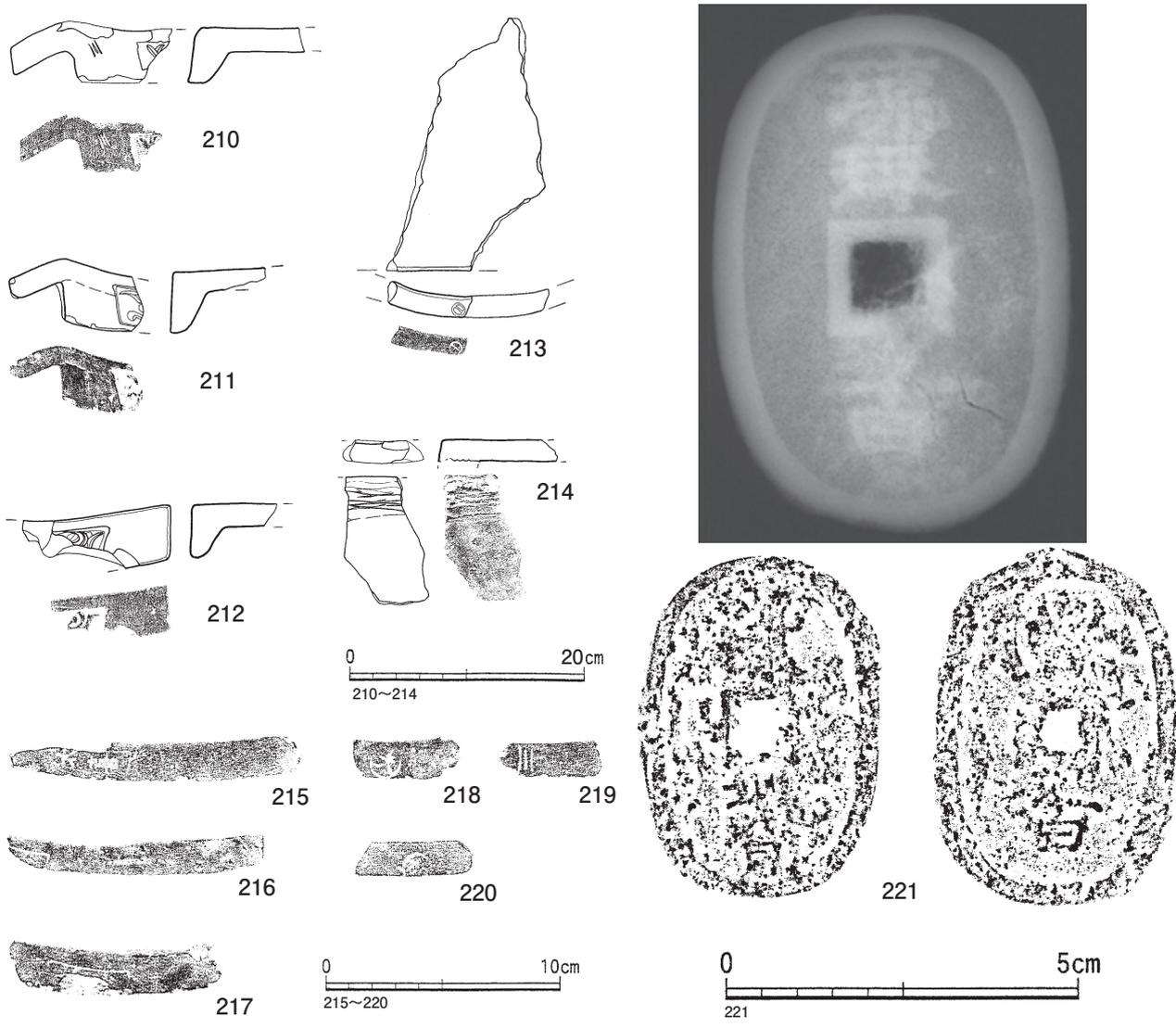
んどが破損して小片になったものばかりである。ここでは、特徴的な瓦のみを掲載する。210～220は棧瓦である。平瓦の可能性もあるが、出土品を見る限り、平瓦と断定できるようなものが出土していないので、ここでは棧瓦とした。210～212は軒瓦で、瓦当はすべて均正唐草文である。215は、凸面の端部をヘラ状の工具で何条も掻いた跡が見られる。215～220は刻印された瓦の拓本のみを掲載した。文字は「太喜」「三」「加」などが見られる。

カ 古銭 (第24図)

221は琉球通宝である。出土した⑥層は、攪乱を受けた層であるが、ほぼ完形に近い形である。側面に「サ」の文字が刻印されていないことから、初期のものと思われる。



第23図 3 トレンチ出土遺物②



第24図 3トレンチ出土遺物③

表4-1 出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量 (cm)			胎土の色調	釉薬		時期	備考
								口径	底径	器高		釉薬	部位		
5	1	土製品	鞆	鞆の羽口	-	1T	石垣A	-	-	-	灰黄色	-	-	-	長さ16.3/幅9.7/孔径4.3 cm。先端に銅滓溶着，被熱部分表面の剥落激しい
6	2	陶器	碗	碗	肥前系	1T	キノb	7.0	-	-	灰白色	緑釉	残存部全部	-	
	3	陶器	瓶	土瓶	苗代川	1T	キノb	-	-	-	褐灰色	鉄釉/褐色	口唇部～口縁部内面無釉	18世紀末	緑青土付着
	4	陶器	碗	碗	加治木・始良系	1T	キノb	-	-	-	にぶい橙色	-	蛇ノ目釉剥ぎ	18世紀代	
	5	陶器	壺	油壺碗	-	1T	キノb	-	-	-	にぶい赤褐色	鉄釉/黒褐色	内面無釉	-	
	6	染付	碗	小広東	肥前系	1T	キノc	-	-	-	白色	透明釉	残存部全部	18世紀末～幕末	外面に梵字文
	7	染付	皿	皿	肥前系	1T	キノc	12.4	7.0	3.9	白色	透明釉	畳付釉剥ぎ	19世紀前半	内面に二重格子文
	8	陶器	皿	皿	-	1T	キノa	-	10.6	-	淡黄色	透明釉	畳付釉剥ぎ	18C末～幕末	

表4-2 出土遺物観察表

挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法 量 (cm)			胎土の 色 調	釉 薬		時 期	備 考	
								口径	底径	器高		釉 薬	部 位			
7	9	染付	碗	丸碗	在地	1T	⑦	11.4	4.4	5.4	白色	透明釉	蛇ノ目釉剥ぎ、 量付釉剥ぎ	18C末～幕末	帆掛け船、外面に砂が付着	
	10	染付	碗	丸碗	在地	1T	⑨、⑩	12.0	—	—	灰白色	透明釉	残存部全部	18C末～幕末	二重格子文	
	11	染付	碗	丸碗	肥前系	1T	⑧	11.2	—	—	白色	透明釉	残存部全部	18C末～幕末	矢羽文	
	12	染付	碗	丸碗	肥前系	1T	⑦	10.4	—	—	白色	透明釉	残存部全部	—	口縁部内面に格子文	
	13	染付	碗	丸碗	肥前系	1T	⑨	10.0	—	—	白色	透明釉	残存部全部	—	口縁部内面に格子文	
	14	染付	碗	丸碗	肥前系	1T	⑧	—	—	—	白色	透明釉	蛇ノ目釉剥ぎ	—	松葉文	
	15	染付	碗	丸碗	肥前系	1T	⑨	12.0	—	—	灰白色	透明釉	残存部全部	18C末～ 19C前半		
	16	染付	碗	丸碗	肥前系	1T	⑦	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部	—	蝶文、口縁部内面に四方禪文	
	17	染付	碗	端反碗	—	1T	⑨	9.6	—	—	白色	透明釉	残存部全部	19C代	清朝磁器、口錆	
	18	染付	碗	端反碗	在地	1T	⑨	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部	19C末～ 幕末	口縁部内面に二重園線	
	19	染付	碗	端反碗	肥前系	1T	⑮	11.0	—	—	白色	透明釉	残存部全部	19C末～ 幕末		
	20	染付	碗	端反碗	在地	1T	⑨	9.6	—	—	白色	透明釉	残存部全部	19C末～ 幕末	口縁部内面に四方禪文	
	21	染付	碗	端反碗	在地	1TB	⑭	10.8	—	—	灰白色	透明釉	残存部全部	—		
	22	染付	碗	端反碗	—	1TB	⑪	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部	—	山水文	
	23	磁器	碗	筒丸碗	平佐	1T	⑮	7.7	4.0	6.3	白色	透明釉	量付釉剥ぎ	18C末～ 19C前半	飛びガンナ	
	24	染付	碗	半筒碗	在地	1T	⑨	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部	19C末～ 幕末	口縁部外面に二重園線	
	25	磁器	碗	朝顔形	肥前	1T	⑧	—	4.9	—	白色	銅釉	量付釉剥ぎ	18C後半	外面青磁釉、見込みに呉須で二重園線と手書き五分花、裏銘に角福	
	26	染付	碗	碗	肥前	1T	⑦	—	5.0	—	白色	透明釉	量付釉剥ぎ	18C代	見込みに宝文、裏銘に「大明年製」のくずし字	
	27	染付	碗	碗	肥前系	1T	⑧	—	4.3	—	灰白色	透明釉	量付釉剥ぎ	—	見込みに園線と遠山文	
	28	染付	碗	碗	肥前系	1T	⑨	—	4.0	—	灰白色	透明釉	量付釉剥ぎ	19C末～ 幕末	外面に矢羽根文、高台脇に二重園線	
	29	染付	碗	碗	肥前系	1T	⑧	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部	19C末～ 幕末	高台脇に二重園線、二次焼成をうける	
	30	染付	碗	広東?	在地	1T	⑫	—	5.8	—	白色	透明釉	量付釉剥ぎ	—		
	31	染付	小杯	小杯	肥前系	1T	⑧	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部	19C後半	口縁部が外反、外面に網目文	
	32	染付	小杯	小杯	肥前系	1T	⑦	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部	18C末～ 19C前半	口唇部が口錆	
	33	磁器	小杯	小杯	肥前系	1T	⑨	4.2	2.1	2.8	白色	透明釉	量付釉剥ぎ	19C代		
	34	染付	皿	稜花皿	在地	1T	⑧	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部	—	口唇部が口錆	
	35	磁器	皿	稜花皿	—	1T	⑮	—	—	—	灰白色	透明釉	残存部全部	—		
	36	染付	皿	稜花皿	肥前	1T	⑦	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部	18C代	外面に蛸唐草文、内面に唐草文	
	37	染付	皿	稜花皿	肥前系	1T	⑨	10.0	4.9	3.3	灰白色	透明釉	量付釉剥ぎ	19C前半	口唇部が口錆、見込みに山水文、量付きにアルミナ付着	
	38	染付	鉢	鉢	肥前系	1T	⑧	—	—	—	白色	透明釉	量付釉剥ぎ	—	底部に園線	
	39	染付	蓋	蓋	肥前系	1T	⑭	—	—	—	白色	透明釉	身受部無釉	18C末～ 幕末		
	40	磁器	灯明皿		肥前系	1T	⑨	9.0	4.0	—	白色	透明釉	残存部全部	—	底面穿孔施釉有り、高台欠損?	
	41	染付		香炉	—	1T	⑦	—	—	—	灰白色	透明釉	残存部全部	—		
	42	磁器	色絵	角水注?	—	1T	⑪	—	—	—	白色	透明釉	内面無釉	19C後半	青色・赤色・緑色	
	43	磁器	色絵	角水注?	—	1T	⑭	—	—	—	白色	透明釉	内面・底部外面無釉	19C後半	青色・赤色・緑色	
	8	44	陶器	碗	碗	—	1T	⑧	—	—	—	灰白色	銅釉? / 暗赤 灰色	残存部全部	19C代	
		45	陶器	碗	碗	肥前	1T	⑨	—	5.8	—	橙色	透明釉 / 灰色	量付釉剥ぎ	18C代	見込みに蛇の目釉剥ぎを隠す白化粧土
		46	陶器	碗	丸碗	—	1T	⑭	—	—	—	淡黄色	透明釉	残存部全部	—	
		47	陶器	碗	碗	—	1T	⑧	—	4.8	—	灰白色	透明釉	残存部全部	18C代?	量付にアルミナ付着
		48	陶器	碗	碗	—	1T	⑨	—	—	—	淡黄色	透明釉	残存部全部	—	外面腰部に呉須で千鳥文
		49	陶器	碗	碗	—	1T	⑭	—	4.6	—	白色	透明釉	量付釉剥ぎ	—	
		50	陶器	皿	皿	加治木・ 始良系	1T	⑮	9.2	—	—	橙色	鉄釉 / オリー ブ褐色	残存部全部	18C後半～ 幕末	
		51	陶器	皿	皿	—	1T	⑪	9.2	—	—	淡黄色	透明釉	残存部全部	—	
52		磁器	皿	皿	琉球	1T	⑧	—	—	—	灰色	透明釉	内面・ 底部外面無釉	—		
53		陶器	瓶	德利	加治木・ 始良系	1T	⑮	2.8	—	—	灰赤色	鉄釉 / オリー ブ褐色	内面頸部 ～肩部無釉	19C代		
54		陶器	瓶	德利?	琉球?	1T	⑮	—	—	—	暗赤褐色	鉄釉 / 暗赤褐 色	内面無釉	—		
55		陶器	瓶	瓶	—	1T	⑧	—	—	—	黄灰色	鉄釉 / 暗赤褐 色	—	—		
56		陶器	水注	土瓶	苗代川	1T	⑭	5.8	—	—	にぶい 赤褐色	鉄釉 / オリー ブ褐色	口唇部～口縁部 内面無釉	18C後半		
57		陶器	水注	土瓶	苗代川	1T	⑨	—	—	—	明赤褐色	鉄釉 / 暗褐色	口唇部～口縁部 内面無釉	18C後半		
58		陶器	水注	土瓶	加治木・ 始良系	1T	⑭	—	—	—	にぶい 黄褐色	鉄釉 / 赤褐色	残存部全部	—		
59		陶器	水注	カラカラ	—	1T	⑨	—	—	—	灰赤色	鉄釉 / 黒色	残存部全部	—		
60	陶器	水注	カラカラ	加治木・ 始良系	1T	⑭	—	—	—	暗灰色	鉄釉 / 黒色	残存部全部	—			
61	陶器	水注	土瓶	苗代川	1T	⑦	—	—	—	にぶい 赤褐色	鉄釉 / オリー ブ褐色	腰部～底部 外面無釉	18C後半	煤付着		
62	陶器	水注	土瓶	苗代川	1T	⑨	—	—	—	にぶい 赤褐色	鉄釉 / 黒色	脚部～底部 無釉	18C後半			
63	陶器	水注	土瓶	豎野系	1T	⑭	—	—	—	黒褐色	鉄釉 / 暗赤褐 色	残存部全部	—			

表4-3 出土遺物観察表

挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法 量 (cm)			胎土の 色 調	釉 薬		時 期	備 考	
								口径	底径	器高		釉 薬	部 位			
8	64	陶器	水注?	土瓶?	豎野系?	1T	⑥	-	5.4	-	灰黄色	透明釉	腰部~底部 外面無釉	-	豎野系の土瓶?	
	65	陶器	蓋	蓋	加治木・ 始良系	1T	⑦	-	-	-	赤灰色	鉄釉/灰褐色	上面施釉	-		
	66	陶器	蓋	土瓶蓋?	苗代川	1T	⑦	-	-	3.5	にぶい 赤褐色	鉄釉/オリ ブ黒色	上面施釉	-	外面に鉄付着	
	67	陶器	鍋	鍋	-	1T	⑧	-	-	-	にぶい 赤褐色	鉄釉/?褐色	外面釉剥ぎあり	19C代		
	68	陶器	鍋	鍋	-	1T	⑦	-	-	-	灰褐色	鉄釉/?褐色	残存部全部	-	把手	
	69	陶器	鉢	鉢	在地	1T	⑦	-	-	-	橙色	鉄釉/暗赤褐 色	口唇部無釉	18C前半		
	70	陶器	鉢	播鉢	苗代川	1T	⑮	-	-	-	にぶい 赤褐色	鉄釉/灰オ リーブ色	口唇部無釉	18C後半		
	71	陶器	鉢	播鉢	苗代川	1T	⑮	-	18.0	-	にぶい 赤褐色	鉄釉/灰オ リーブ色	底部, 外面無釉	18C後半		
	72	陶器	鉢	播鉢	苗代川	1T	⑦	-	19.8	-	明赤褐 色	鉄釉/灰黄色	内面・底部 外面無釉	19C代		
	73	陶器	甕	甕	苗代川	1T	⑦	32.3	-	-	明赤褐 色	鉄釉/オリ ブ黒色	口唇部無釉	18C末~ 19C前半		
	74	陶器	甕?	甕?	苗代川	1T	⑧	-	-	-	黄灰色	鉄釉/オリ ブ灰色	口唇部無釉	-	ツク付着	
	75	陶器	壺	壺	苗代川	1T	⑪	-	-	-	褐灰色	鉄釉/暗褐色	口唇部無釉	-	-	
	9	76	陶器	壺	小壺	-	1T	⑨	2.0	-	-	褐灰色	透明釉	内面頸部 以下無釉	-	口縁部内面から外面に白化粧土
		77	陶器	茶道具	茶入	豎野?	1T	⑨	-	-	-	灰黄色	鉄釉/暗褐色	残存部全部	-	肩衝
		78	陶器	茶道具	茶入	豎野?	1T	⑧	-	-	-	灰色	鉄釉/にぶい 赤褐色	残存部全部	-	肩衝
79		陶器	茶道具	茶入	豎野?	1T	⑬	-	-	-	灰黄色	鉄釉/暗赤褐色	底部, 外面無釉	-	土見せ薬灰釉	
80		陶器	茶道具	茶入	豎野?	1T	⑥	-	-	-	灰黄色	鉄釉/暗褐色	残存部全部	-	-	
81		陶器	茶道具	茶入	豎野?	1T	⑭	-	3.1	-	黄灰色	鉄釉	底部, 外面無釉	-	糸切り底	
82		陶器	茶道具	茶入?	豎野?	1T	⑭	-	-	-	灰白色	鉄釉/黒褐色	残存部全部	-	-	
83		陶器	鉢	手水鉢	苗代川	1T	⑨	-	-	-	灰白色	透明釉	残存部全部	-	-	
84		陶器	仏具	仏花器	苗代川	1T	⑧	-	-	-	灰白色	透明釉	残存部全部	-	-	
85		陶器	仏具	仏花器	苗代川	1T	⑮	-	9.3	-	灰白色	透明釉	残存部全部	-	畳付にアルミナ付着	
86		陶器	仏具	仏飯具	-	1T	⑭	-	-	-	灰黄褐 色	透明釉/灰オ リーブ色	残存部全部	-	外面体部と内面に白化粧土	
87		瓦質土 器	鉢	火鉢?	-	1T	⑪	-	-	-	灰黄色	-	-	-	-	
88		瓦質土 器	白状 土製品	白状 土製品	-	1T	⑬	-	-	-	灰白色	-	-	-	底部に孔あり	
89		土師質 土器	茶道具	風炉	-	1T	⑯	-	-	-	明褐色	-	-	-	-	
90		土製品	土鉢	土鉢	-	1T	⑭	-	-	-	-	-	-	-	最大長4.3/幅2.3/厚さ2.3cm	
91	土製品	罎	罎の羽口	-	1T	⑧	-	-	-	淡黄色	-	-	-	-		
10	92	窯道具	窯道具	匣鉢	-	1T	⑦	18.0	-	-	にぶい 褐色	-	-	-	透かしあり, ツク痕あり	
	93	窯道具	窯道具	匣鉢	-	1T	⑪	12.8	-	-	にぶい 黄褐色	-	-	-	口唇部にツク付着, 透かし	
	94	窯道具	窯道具	匣鉢	-	1T	⑧	-	-	-	にぶい 黄褐色	-	-	-	ツク付着	
	95	窯道具	窯道具	匣鉢	-	1T	⑦	17.8	20.0	7.9	にぶい 黄褐色	自然釉/?暗 赤褐色	内面無釉	-	アルミナ	
	96	窯道具	窯道具	匣鉢	-	1T	⑦	-	21.0	-	にぶい 黄褐色	自然釉	底部外面	-	斑点状, 透かし, アルミナ, ツク痕	
	97	窯道具	窯道具	匣鉢	-	1T	⑦	22.6	22.0	5.3	にぶい 黄褐色	-	-	-	-	
	98	窯道具	窯道具	匣鉢	-	1T	⑪	-	26.3	-	-	にぶい 黄褐色	-	-	-	アルミナ, 透かし, ツク痕
	99	窯道具	窯道具	棚板?	-	1T	⑨	-	-	-	浅黄色	自然釉/暗赤 褐色	側面	-	厚さ2.1cm, アルミナ	
	100	窯道具	窯道具	棚板?	-	1T	⑧	-	-	-	浅黄色	自然釉/暗赤 褐色	側面	-	厚さ1.5cm, アルミナ	
	101	窯道具	窯道具	棚板?	-	1T	⑩	-	-	-	にぶい 黄色	自然釉/暗赤 褐色	側面	-	厚さ1.7cm, アルミナ	
11	102	窯道具	窯道具	ツク	-	1T	⑧	-	-	-	にぶい 黄褐色	-	-	-	匣鉢口縁部痕	
	103	窯道具	窯道具	ツク	-	1T	⑤	-	-	-	にぶい 黄褐色	-	-	-	-	
	104	窯道具	窯道具	ハマ	-	1T	⑧	-	-	-	にぶい 黄色	-	-	-	最大長6.0/幅5.2/厚さ3.9cm, 付着物あり	
	105	窯道具	窯道具	焼台	-	1T	⑦	-	-	-	明 赤褐色	-	-	-	厚さ1.8cm, 指頭圧	
	106	窯道具	窯道具	窯用品	-	1T	⑬	-	-	-	黒色	自然釉/暗赤 褐色	ほぼ残存部全部	-	-	
	107	瓦	棧瓦	軒瓦	-	1T	⑦	-	-	-	にぶい 黄褐色	-	-	-	厚さ1.7cm, スタンプ	
	108	瓦	棧瓦	瓦	-	1T	⑨	-	-	-	灰色	-	-	-	厚さ2.0cm, スタンプ	
	109	瓦	棧瓦	軒瓦	-	1T	⑨	-	-	-	灰色	-	-	-	厚さ1.8cm, スタンプ	
	110	瓦	棧瓦	瓦	-	1T	⑩	-	-	-	灰色	-	-	-	厚さ2.0cm, スタンプ	
111	瓦	棧瓦	軒瓦	-	1T	⑤	-	-	-	灰色	-	-	-	スタンプ		
112	瓦	棧瓦	瓦	-	1T	⑧	-	-	-	にぶい 黄褐色	-	-	-	厚さ1.8cm, スタンプ		
113	瓦	棧瓦	瓦	-	1T	⑧	-	-	-	褐灰色	-	-	-	厚さ1.8cm		
114	瓦	丸瓦	瓦	-	1T	⑨	-	-	-	灰色	-	-	-	厚さ1.5cm, 布目		
115	瓦	棧瓦	瓦(サイド)	-	1T	⑦	-	-	-	灰色	-	-	-	左右不明		
116	砥石?	砥石?	砥石?	-	1T	⑮	-	-	-	灰白色	-	-	-	厚さ3.9cm		

表4-4 出土遺物観察表

挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法 量 (cm)			胎土の 色 調	釉 薬		時 期	備 考
								口径	底径	器高		釉 薬	部 位		
12	117	古銭	銅銭	琉球通宝	—	1T	⑧	-	-	-	—	—	—	琉球通宝當百, 長2.0, 幅3.3, 厚0.3	
	118	古銭	銅銭	寛永通宝	—	1T	⑨	-	-	-	—	—	—	裏に文字有り?, 外径2.5, 厚0.1	
	119	古銭	銅銭	寛永通宝	—	1T	⑨	-	-	-	—	—	—	外径2.4, 厚0.1	
	120	銅製品	銅製品	ボタン(写真)	—	1T	⑨	-	-	-	—	—	—	外径2.5, 厚1.0	
	121	銅製品	銅製品	フック(写真)	—	1T	⑦	-	-	-	—	—	—	長1.3, 幅1.7, 厚0.1以下	
	122	銅製品	銅製品	釘	—	1T	⑨	-	-	-	—	—	—	長6.0, 頭部径1.4, 軸部厚0.3~0.5	
	123	銅製品	銅製品	釘	—	1T	⑨	-	-	-	—	—	—	長1.6, 頭部径0.6, 軸部厚0.2	
	124	銅製品	銅製品	釘	—	1T	⑩	-	-	-	—	—	—	長2.7, 頭部径0.6, 軸部厚0.2~0.3	
	125	銅製品	銅製品	釘	—	1T	⑨	-	-	-	—	—	—	長4.1, 頭部径0.4, 軸部厚0.2~0.4	
	126	銅製品	銅製品	釘	—	1T	⑨	-	-	-	—	—	—	長3.2, 頭部径0.9, 軸部厚0.2	
	127	銅製品	銅製品	釘	—	1T	⑨	-	-	-	—	—	—	長3.5, 頭部径0.5, 軸部厚0.2~0.4	
	128	銅製品	銅製品	釘	—	1T	⑩	-	-	-	—	—	—	長9.7, 最大幅0.6, 軸部厚0.4	
15	129	染付	碗	筒形碗	肥前系	2T	⑦	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部	—	—
	130	染付	碗	半筒碗	肥前系	2T	⑦	—	7.0	—	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	—	腰部と高台脇に二重圍線
	131	染付	碗	碗	肥前系	2T	⑦	—	8.0	—	白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	—	高台脇と底部に二重圍線
	132	染付	皿	皿	肥前系	2T	⑦	9.2	4.0	2.0	白色	透明釉	蛇ノ目釉剥ぎ, 畳付は釉剥ぎ	18C後半~幕末	内面と見込みに二重格子文
	133	磁器	水注	急須?	肥前系	2T	⑦	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部	19C代	注口0.9~1.1 / 注口穴0.5cm
	134	陶器	碗	丸碗	肥前系	2T	⑦	11.4	—	—	灰色	透明釉	残存部全部	—	陶胎染付, 口縁部に呉須で網目文
	135	陶器	碗	碗	肥前?	2T	⑦	—	—	—	淡黄色	透明釉	残存部全部	—	貫入
	136	陶器	碗	高坏? 皿?	苗代川	2T	⑦	19.0	—	—	淡黄色	透明釉	残存部全部	18C代	内面に型押しで草花文
	137	陶器	瓶?	瓶?	加治木・始良系	2T	⑦	6.8	—	—	灰褐色	鉄釉/黒褐色	残存部全部	—	—
	138	陶器	甕	甕	苗代川	2T	⑦	—	—	—	明赤褐色	鉄釉/暗オリ — 褐色	口唇部無釉	—	—
	139	陶器	壺	土瓶	苗代川	2T	⑦	6.2	—	—	赤褐色	鉄釉	口唇部・ 口縁部内面無釉	18C後半	—
	140	陶器	土瓶蓋	蓋	苗代川	2T	⑦	—	—	—	にぶい 赤褐色	鉄釉	上面施釉	18C後半	最大径10.0cm
	141	陶器	蓋	蓋	苗代川	2T	⑦	—	—	—	淡黄色	透明釉	口唇部外面無釉	18世紀末~ 19世紀初頭	重ね焼痕?
	142	窯道具	匣鉢	匣鉢	—	2T	⑦	—	—	—	にぶい 黄褐色	—	—	—	ツク付着, ツクはアルミナ含む
	143	窯道具	匣鉢	匣鉢	—	2T	⑦	—	—	—	にぶい 黄褐色	—	—	—	—
	144	窯道具	匣鉢	匣鉢	—	2T	⑦	—	—	—	にぶい 黄褐色	—	—	—	重ね焼痕, ツク, 下部匣鉢付着
	145	窯道具	匣鉢	匣鉢	—	2T	⑦	—	19.4	—	浅黄色	—	—	—	底部内面・円形にアルミナ?
	146	窯道具	匣鉢	匣鉢	—	2T	⑦	—	—	—	浅黄色	—	—	—	ツク付着, 底部内面に円形にアルミナ?
	147	窯道具	棚板	棚板	—	2T	⑦	—	—	—	にぶい 黄褐色	—	—	—	厚さ1.2cm, 重ね焼痕, アルミナ
	148	窯道具	ツク	ツク	—	2T	⑦	—	—	—	赤褐色	—	—	—	厚さ1.5cm
149	窯道具	ツク	ツク	—	2T	⑦	—	—	—	にぶい 褐色	—	—	—	使用後綺麗に剥がれる, アルミナ含む	
150	土製品	瓦質土器	植木鉢?	—	2T	⑦	—	—	—	にぶい 橙色	—	—	—	指, ハケナデ	
151	土製品	羽口	羽口	—	2T	⑦	—	—	—	灰黄色	—	—	—	先端部灰白色に変色あり	
152	土製品	土製品	おはじき?	—	2T	⑦	—	—	0.7	にぶい 赤褐色	—	—	—	最大1.2cm	
16	153	レンガ	レンガ	耐火レンガ	—	2T	⑦	—	—	—	淡黄色	—	—	—	黄色, 浅黄褐色, 厚6.1
	154	レンガ	レンガ	耐火レンガ	—	2T	⑦	—	—	—	灰白色	—	—	—	浅黄褐色, 厚6.1
	155	レンガ	レンガ	耐火レンガ	—	2T	⑦	—	—	—	灰白色	—	—	—	スタンプ, 短辺10.9, 厚6.1
	156	レンガ	レンガ	赤レンガ	—	2T	⑦	—	—	—	明赤褐色	—	—	—	小根占, 短辺10.9, 厚6.5
	157	レンガ	レンガ	赤レンガ	—	2T	⑦	—	—	—	明赤褐色	—	—	—	小根占, 漆喰?, L字に変色有り, 短辺11.7, 厚6.2
	158	レンガ	レンガ	赤レンガ	—	2T	⑦	—	—	—	明赤褐色	—	—	—	小根占, 漆喰?, 短辺10.7, 厚6.5
	159	レンガ	レンガ	赤レンガ	—	2T	⑦	—	—	—	淡黄色	—	—	—	モルタル? 漆喰?, 厚5.4
	160	レンガ	レンガ	凹みレンガ	—	2T	キノ	—	—	—	明赤褐色	—	—	—	基礎中より出土, 煤付着, 短辺19.4, 最大厚10
	161	瓦	棧瓦	瓦	—	2T	⑦	—	—	—	灰色	—	—	—	漆喰
	162	瓦	棧瓦	瓦	—	2T	⑦	—	—	—	灰色	—	—	—	くすべ瓦?
163	瓦	棧瓦	瓦	—	2T	⑦	—	—	—	灰白色	—	—	—	厚さ2.0cm, 漆喰	
17	164	鉄製品	パイプ状製品	鉄	—	2T	⑦	—	—	—	—	—	—	—	最大長23.7, 最大幅4.3, 最大径3.3
	165	鉄製品	パイプ状製品	鉄	—	2T	⑦	—	—	—	—	—	—	—	長10.8, 頭部径3.0, 軸部径1.7
	166	鉄製品	パイプ状製品	鉄	—	2T	⑦	—	—	—	—	—	—	—	長7.5, 頭部径1.7, 軸部径1.2
	167	鉄製品	リング状製品	鉄	—	2T	⑦	—	—	—	—	—	—	—	外径4.4, 内径3.9, 厚0.5
168	鉄製品	パイプ状製品	鉄	—	2T	⑦	—	—	—	—	—	—	—	—	外径2.1, 内径0.7, 厚0.5

表4-5 出土遺物観察表

挿図 番号	掲載 番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法 量 (cm)			胎土の 色 調	釉 薬		時 期	備 考
								口径	底径	器高		釉 薬	部 位		
17	169	鉄製品	釘	鉄		2T	⑦	-	-	-	-	-	-	長6.0, 頭部径0.9, 軸部径0.2~0.4	
	170	鉄製品		鉄		2T	⑦	-	-	-	-	-	-	長8.8, 幅0.5, 厚0.2	
	171	鉄製品	釘	鉄		2T	⑦	-	-	-	-	-	-	長8.6, 頭部径1.5, 軸部径0.3~0.5	
	172	鉄製品	パイプ状製品	鉄		2T	⑦	-	-	-	-	-	-	長13.0, 径1.5~2.0	
	173	鉄製品	角釘	鉄		2T	⑦	-	-	-	-	-	-	長7.6, 頭部径1.1, 軸部厚0.7	
	174	鉄製品	角釘	鉄		2T	⑦	-	-	-	-	-	-	長7.8, 頭部径1.2, 軸部径0.6	
	175	鉄製品		鉄		2T	⑦	-	-	-	-	-	-	長5.0, 幅5.4, 厚3.5	
21	176	鉄製品	板状製品	鉄		2T	⑦	-	-	-	-	-	-	長15.4, 幅3.9, 厚さ0.1以下	
	177	磁器	水注?	水注?		3T	ソセキ	-	-	-	淡黄色	銅釉	残存部全部	19C代	把手
	178	陶器	色絵	碗	京焼風	3T	ソセキ	-	3.2	-	淡黄色	透明釉	外面腰部~高台内底は無釉	18C前半	
	179	陶器	色絵	碗	-	3T	ソセキ	9.0	3.2	5.8	灰白色	透明釉・銅釉?	外面腰部~高台内底は無釉	18C前半	
	180	陶器	鉢	火鉢?	-	3T	ソセキ	-	-	-	にぶい黄褐色	白化粧土?	口唇部~外面にある	-	
	181	陶器			-	3T	ソセキ	-	-	-	灰白色	透明釉	残存部全部	-	
22	182	窯道具	匣鉢	匣鉢	-	3T	ソセキ	-	19.0	-	明褐色	自然釉	外面, 底部外面	-	ツク付着
	183	染付	碗	丸碗	肥前系	3T	⑥	-	-	-	白色	透明釉	残存部全部	-	外面に二重格子文, 口縁部内面と見込みに二重圓線
	184	染付	碗	筒丸碗	-	3T	⑥	-	-	-	白色	透明釉	残存部全部	-	外面に草花文, 口縁部内面に雷文
	185	染付	碗	端反碗	-	3T	⑦	8.8	-	-	白色	透明釉	残存部全部	-	外面に変様性の強い花唐草文, 口縁部内面に二重圓線
	186	染付	碗	端反碗	在地	3T	⑨	-	-	-	白色	透明釉	残存部全部	-	
	187	染付	碗	端反碗	在地	3T	⑥	-	-	-	白色	透明釉	残存部全部	-	口縁部内面に四方禪文
	188	染付	碗	端反碗	在地	3T	⑥	10.4	-	-	灰白色	透明釉	残存部全部	-	
	189	染付	碗	端反碗	-	3T	⑥	-	-	-	白色	透明釉	残存部全部	-	
	190	染付	皿	折縁皿?	肥前	3T	⑥	-	-	-	白色	透明釉	残存部全部	18C後半	口縁部外面に針支えの跡
	191	染付	皿	皿	-	3T	⑥	-	7.8	-	白色	透明釉	量付釉剥ぎ, 底部外面蛇ノ目釉剥ぎ	18C後半~19C	見込みに山水文, 蛇の目凹型高台
	192	染付	皿?	皿?	肥前? 波佐見	3T	⑦	-	6.4	-	白色	透明釉	残存部全部	-	高台脇に三重圓線
	193	陶器	皿	皿	在地	3T	⑥	11.0	6.2	2.5	橙色	黄褐色釉	外面口縁部のみ	-	
	23	194	陶器	皿	皿	苗代川	3T	⑥	-	7.6	-	淡黄色	透明釉	量付釉剥ぎ	-
195		陶器	合子	合子	豎野系	3T	⑥	-	4.7	-	灰白色	透明釉	合口無釉	18C後半	
196		陶器	鉢	鉢	苗代川	3T	⑥	-	-	-	白色	透明釉	-	-	アルミナ
197		陶器	蓋	蓋	苗代川	3T	⑥	-	-	-	淡黄色	透明釉	上面施釉	-	
198		陶器	鉢	播鉢	薩摩	3T	⑥	30.0	-	-	明赤褐色	鉄釉/灰オリープ色	口唇部無釉	-	ハケ目
199		陶器	鉢	播鉢	薩摩	3T	⑥	37.6	-	-	にぶい赤褐色	鉄釉/オリープ褐色	口唇部無釉	-	ハケ目
200		陶器	壺	壺	琉球	3T	⑥	-	-	-	赤褐色	-	-	-	沈線2条
201		陶器	甕	甕	琉球	3T	⑥	-	-	-	橙色	-	-	-	
24		202	窯道具	匣鉢	匣鉢		3T	⑥	9.8	-	-	にぶい黄褐色	自然釉	外面のみ	-
	203	窯道具	匣鉢	匣鉢		3T	⑥	22.4	-	-	にぶい黄褐色	自然釉	外面のみ	-	アルミナ, 透かし
	204	窯道具	匣鉢	匣鉢		3T	⑥	-	17.6	-	にぶい黄褐色	自然釉	底部外面無釉	-	ツク付着, 下の匣鉢口唇部ツクと一緒に剥がれる, アルミナ
	205	窯道具	匣鉢	匣鉢		3T	⑥	-	20.0	-	にぶい黄褐色	-	-	-	ツク付着
	206	窯道具	蓋	蓋		3T	⑥	-	-	-	浅黄色	-	-	-	ツク付着, 匣鉢口唇部ツクと一緒に剥がれる, 四角
	207	窯道具	ツク	ツク		3T	⑥	-	-	-	にぶい黄褐色	-	-	-	長4.1, 幅1.8, 厚1.3
	208	土製品	埴塙	埴塙		3T	⑨	-	-	-	暗灰色	-	-	-	外面銅燻着, 緑青錆付着
	209	土製品	轆の羽口	轆		3T	⑥	-	-	-	浅黄色	-	-	-	外面熱変
	24	210	瓦	棧瓦	軒瓦		3T	⑥	-	-	-	灰色	-	-	-
211		瓦	棧瓦	軒瓦		3T	⑥	-	-	-	灰白色	-	-	-	スタンプ
212		瓦	棧瓦	軒瓦		3T	⑥	-	-	-	灰色	-	-	-	スタンプ
213		瓦	棧瓦	瓦		3T	⑥	-	-	-	灰黄色	-	-	-	スタンプ
214		瓦	棧瓦	軒瓦		3T	⑥	-	-	-	灰色	-	-	-	櫛状の溝
215		瓦	棧瓦	瓦		3T	⑥	-	-	-	灰黄色	-	-	-	スタンプ
216		瓦	棧瓦	瓦		3T	⑥	-	-	-	にぶい黄褐色	-	-	-	スタンプ
217		瓦	棧瓦	瓦		3T	⑥	-	-	-	灰黄色	-	-	-	スタンプ
218		瓦	棧瓦	瓦		3T	⑥	-	-	-	灰色	-	-	-	スタンプ
219		瓦	棧瓦	瓦		3T	⑥	-	-	-	灰白色	-	-	-	スタンプ
220		瓦	棧瓦	瓦		3T	⑥	-	-	-	灰白色	-	-	-	スタンプ
221		銭	銅銭	琉球通宝		3T	⑥	-	-	-	-	-	-	-	琉球通宝當百, 側面に「サ」の刻印なし 長5.0, 幅3.4, 厚0.3

第5節 自然科学分析

本遺跡で、I層の一部に緑青によるものと思われる青灰色に変色した土塊が見られた。変色部分は周辺よりも硬く締まっており、重金属を含む液が流れ込んだような印象であった。この一帯は藩政時代に反射炉をはじめとした近代的な工場群が立ち並んだところであり、その工場から流れ出た可能性もある。そこで、これらについて形状観察と成分分析を試みたので、ここに報告する。

1 試料・資料

I層内で採取した青灰色土塊の中から、特徴ある塊を4点選別し、分析試料とした。また、I・II層の青灰色変色が見られない部分からも試料を採取した。出土遺物では、銅釘(122, 125, 127)、琉球通宝(221)を分析対象とした。

試料1 (11M10021~23,101~02)：緑青部分が鮮明

試料2 (11M10031~33,111~13)：一部硬化面あり

試料3 (11M10041~43,121~22)：礫を多く含む

試料4 (11M10051~59)：層状の塊

試料5 (11M10091~93)：I層

試料6 (11M10081~83)：II層 ※11M…は測定No.

2 観察・分析方法

(1) 形状観察

目視による観察のほか、双眼実体顕微鏡(NIKON SMZ1000)による8~30倍観察を行った。

(2) 成分分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置(堀場製作所製XGT-1000, X線管球ターゲット：ロジウム, X線照射径100 μ m)を使用して、次の条件で分析した。

X線照射径	100 μ m	X線フィルタ	なし
測定時間	200s	試料セル	なし
X線管電圧	50kV	パルス処理時間	P 2
	15kV/50kV		P 3
電流	自動設定	定量補正法	スタンダードレス

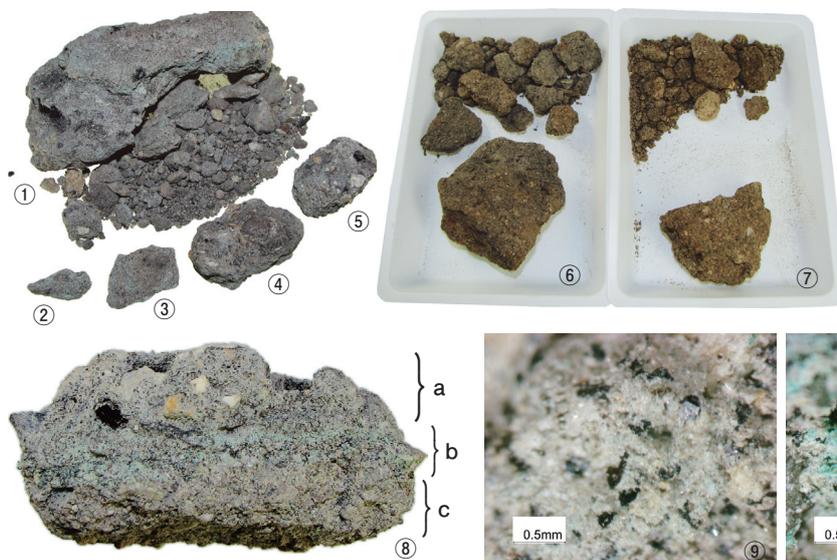


写真8 土壌試料画像

3 結果

(1) 形状観察

双眼実体顕微鏡観察により、いずれの試料にも緑青(塩基性炭酸銅 $\text{CuCO}_3 \cdot \text{Cu}(\text{OH})_2$ など)と思われる結晶を確認した。試料4は、炭化物を含む層と緑青の結晶を多く含む層を確認できる(写真8-⑧, ⑨, ⑩)。いずれの層にも0.2~0.3mm程度の金属光沢を持つ黒色粒が見られる。この粒は、磁石に反応した。銅釘は全体が緑青色を呈し、琉球通宝は表面の腐食層に砂礫が強固に付着している。

(2) 蛍光X線分析

分析の結果、青灰色の土塊からはいずれも銅(Cu)鉛(Pb)、鉄(Fe)のピークが得られた(次頁図1参照)。検出された主な金属元素はこれら3種類であり、試料ごとに比較すると同じ試料でも分析ポイントにより差が大きい。試料1からはごく微量の錫(Sn)を検出したが、そのほかの試料及び銅釘からは検出されず、琉球通宝では明らかな錫のピークが見られた。

青灰色以外の試料(I層, II層)からは銅・鉛はほとんど検出されず、鉄のピークも青灰色層に比べて低い結果が得られた。鉄についてはこれらの値が土壌本来の含有値であろう。

アルミニウム(Al)やけい素(Si)など、上記3元素以外の元素は土壌に由来するものと考えられる。

4 考察

分析値の重量%濃度は、標準試料による補正のない値であるため参考値として扱うが、3つの金属元素については分析ポイントによる分析値のばらつきが大きい。この点については、土塊自体が砂礫の塊であること、銅が緑青の形で砂礫の表面に結晶化していることなどが考えられる。鉄については、磁性を持つ粒子の影響が大きいと思われる。この粒子については、国内の砂鉄分析例で

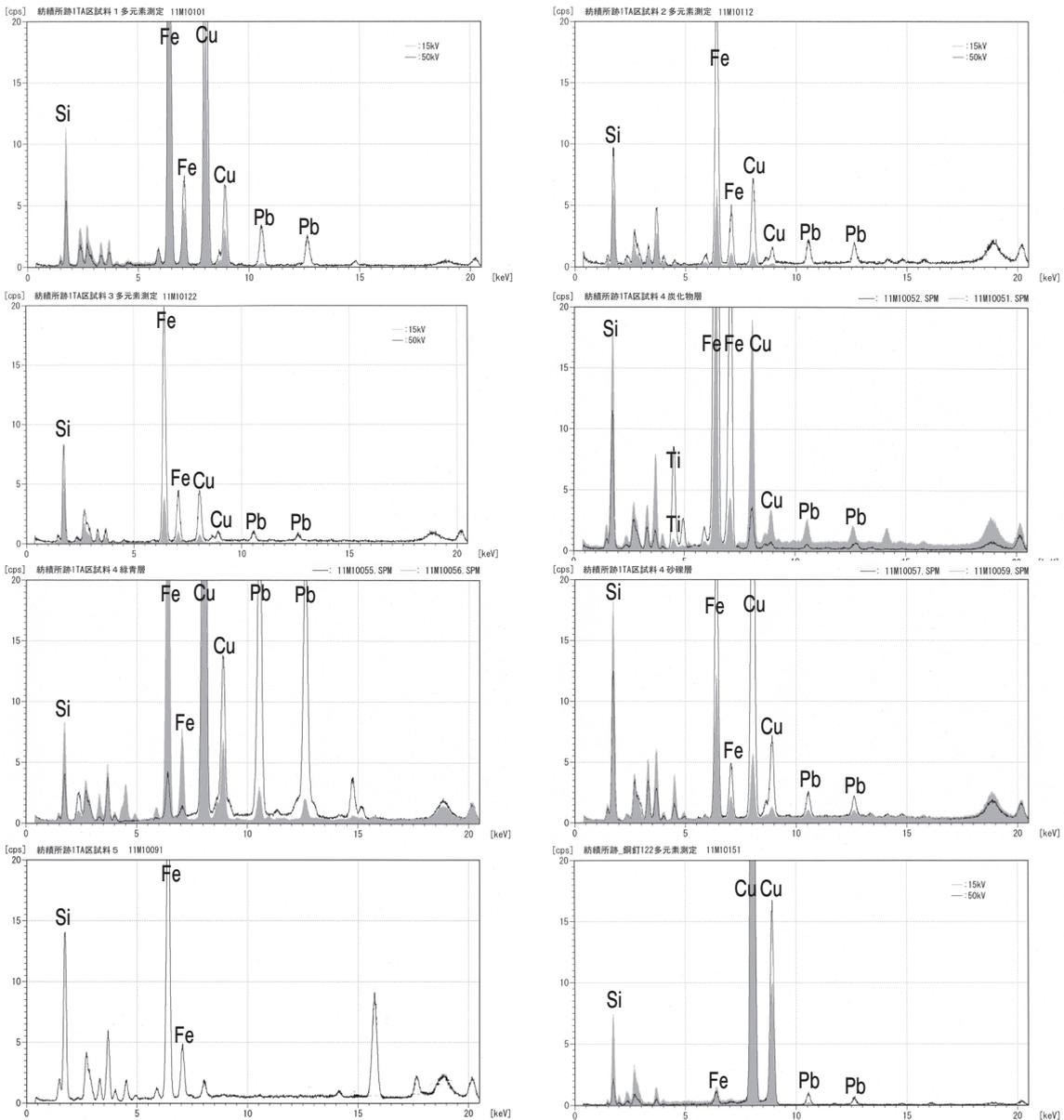
- ① I層内青灰色土塊
- ② 試料1
- ③ 試料2
- ④ 試料3
- ⑤ 試料4
- ⑥ 試料5
- ⑦ 試料6
- ⑧ 試料4断面
- a：炭化物を含む層
- b：緑青を多く含む層
- c：砂と小礫の層
- ⑨ 試料4炭化物層拡大
- ⑩ 試料4緑青層拡大

は硫黄が確認されている例が多いが、今回の分析では、土塊試料の分析ポイント25箇所のうち24箇所は硫黄 (S)

が検出されていないことや、砂鉄の中には非磁性のものもあるため、さらに詳細な検討が必要である。I・II層の試料ではほとんど検出されなかった銅、鉛が高い濃度で検出されたことは、この青灰色層がこの2種類の金属により汚染されたことを示している。また、試料4のように土塊の中にも層状の緑青帯が見られることから、付近の工場群の中でこれら2種類の金属を扱っていたこと（銅釘製造など）、そしてその廃液が流れ出ていたことが推察される。

表5 蛍光X線分析結果

測定No.	11M10101	11M10112	11M10122	11M10051	11M10052	11M10055	11M10056	11M10057	11M10059	11M10091	11M10151
Al アルミニウム	5.4	8.4	5.5	8.3	4	—	5.3	8.1	7.4	11.1	2.5
Si けい素	32.5	53.8	64.9	60.1	38.1	14.4	39.8	49.5	60.8	61	22.9
P リン	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.1
S 硫黄	—	—	0.4	—	—	—	—	—	—	0.4	—
K カリウム	2.2	3.7	4.3	5.5	1.8	0.7	3.2	6.2	9.9	3.7	0.1
Ca カルシウム	1.7	11.3	3.4	9.4	1	4.8	5.3	3.8	9.3	8.4	1.1
Ti チタン	—	0.5	0.3	0.6	3.6	—	2.1	1.2	4	1.6	—
Mn マンガン	0.7	0.5	—	—	0.5	—	0.5	—	—	0.5	—
Fe 鉄	20.7	14.2	15.9	8.2	49.3	1.4	18.1	10.6	5.8	12.6	0.4
Cu 銅	27.6	3.9	3.5	5.5	1.6	28	20.4	16.6	2	0.5	67.4
Zn 亜鉛	0.5	0.3	—	0.2	0.2	—	0.6	0.5	—	—	—
Rb ルビジウム	—	—	—	—	—	—	—	0.1	0.1	—	—
Sr ストロチウム	—	0.2	—	0.4	—	—	—	0.1	—	0.1	—
Sn 錫	0.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pb 鉛	8.1	3.2	1.8	1.8	—	50.7	4.9	3.4	0.7	—	4.6



第25図 蛍光X線分析結果

第6節 調査総括

1 遺構

今回の調査で確認された遺構をトレンチごとにまとめると、次の通りである。これらの遺構の時期差について、検出レベル（第25図）や古写真（写真4）・文献等から考えてみたい。

トレンチ	遺構
1 T	切石布基礎、坪地業 緑青のある三和土、石垣
2 T	布基礎
3 T	切石布基礎、坪地業

まず、1トレンチである。坪地業は、切石布基礎の切石とほぼ同じレベルで検出されている。そして切石布基礎は、緑青のある三和土を掘り込んでつくられている。石垣は、布基礎と緑青色をした三和土（⑩層）および同時期の旧地表面と考えられる黒色砂層（⑨層）に覆われている。このことから、Ⅰ期（石垣）→Ⅱ期（緑青のある三和土）→Ⅲ期（切石布基礎・坪地業）と変遷したと、考古学的層位関係から考えられる。

また、2トレンチの布基礎は、1トレンチのものと同レベルで検出され、構造もほぼ同じなので、Ⅲ期のものと判断した。

3トレンチの切石布基礎は、他の2つのトレンチの布基礎と同レベルで検出され、構造もほぼ同じなので、Ⅲ期のものと判断した。坪地業については、⑨層の明褐色土層に覆われており、切石布基礎は⑨層を掘り込んで造られている。よって、坪地業は切石布基礎よりも古いと判断し、Ⅰ期あるいはⅡ期の遺構と判断した。

次に、それぞれの時期の遺構が何に関連するものかという点である。Ⅲ期の遺構であるが、これだけの基礎をもつ石造建築物は、文献の面から考慮してみても、鹿児島紡績所であるということは、まず間違いないだろう。また、鹿児島紡績所の建設場所は、琉球通宝を鑄造していた鑄銭所の跡地であった。また鑄銭所の建設場所は、今和泉島津家の礎屋敷跡であった。このような土地の来歴と、今回の発掘調査の結果から、次のように遺構を区分した。

時期	トレンチ	遺構
Ⅰ期 木造建築の屋敷 (今和泉島津家の礎屋敷?)	1 T	石垣
	3 T	坪地業(Ⅱ期?)
Ⅱ期 鑄銭所?	1 T	緑青の三和土
Ⅲ期 石造建築物 (鹿児島紡績所)	1 T	切石布基礎 坪地業
	2 T	布基礎
	3 T	切石布基礎

このことを出土遺物から検討してみる。1トレンチで

は、⑦層の赤灰色砂質土層が切石布基礎を完全にパッキングしている状態だったので、遺物を取り上げる際に⑦層から下は、特に注意を払い遺物取り上げを行った。その結果、⑥層より上では、コバルト釉の施された磁器が見られたが、⑦層から下ではそれが見られなかった。鹿児島大学の渡辺芳郎教授の遺物指導でも、それを確認していただくことができた。また、時期を特定できるような磁器を見ていただいたが、「いずれも幕末～明治期よりも古いものである」との指導をいただいた。このことから、⑦層より下層は、明治時代よりも古い時期の層であると考えられる。

このように、遺構・文献史料・出土遺物から判断すると、今回の調査で検出した遺構は鹿児島紡績所のものであると判断することができる。

2 遺物

出土遺物の特徴として2点挙げられる。

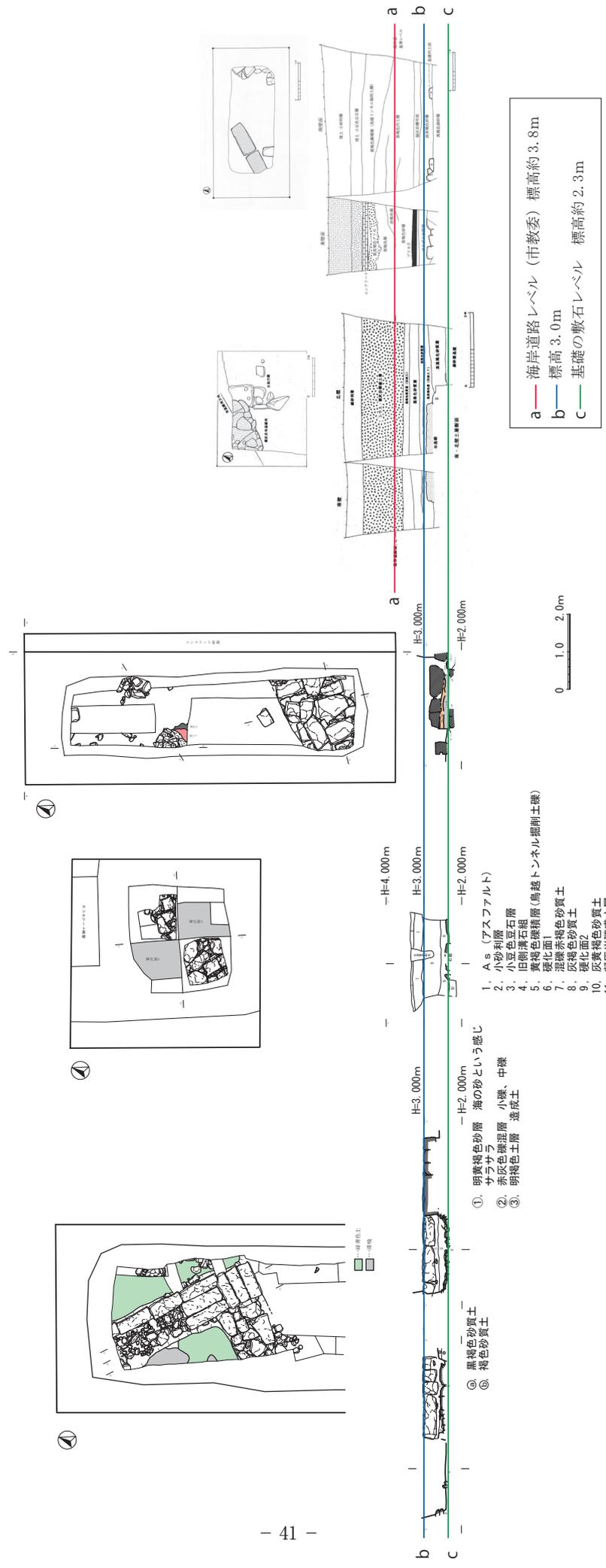
まず第一に、窯道具についてである。すべてのトレンチで窯道具が出土した。当初、この窯道具は大正時代の仙巖焼に関連するものであるかと思っていた。しかし調査を進めるなかで、かなり下層まで窯道具が出土した。先に述べたように、⑦層あたりが幕末から明治の境界になると考えられるので、それより下層から出土しているものは、仙巖焼のものとは考えにくい。

では、どの窯に由来するものなのであろうか。

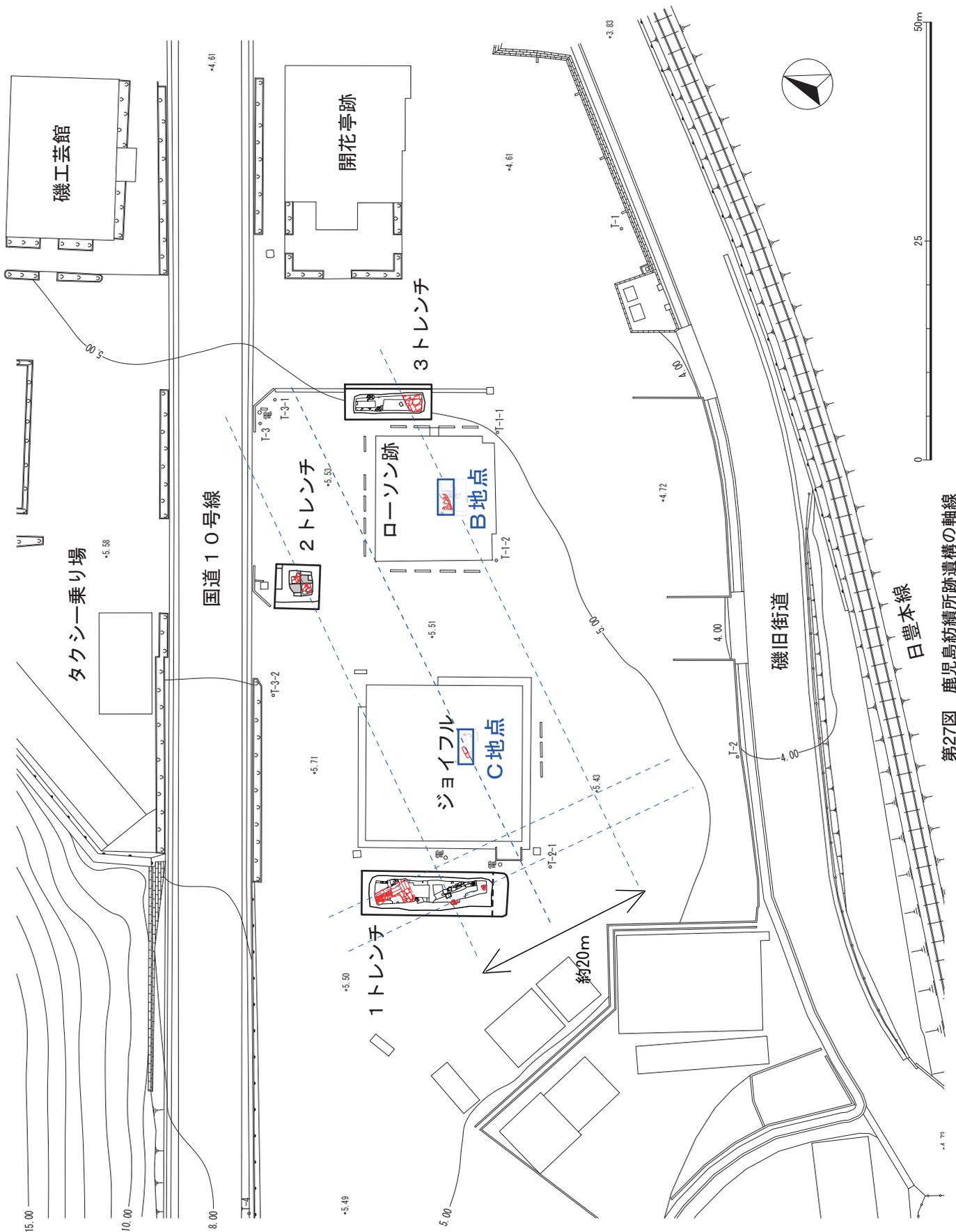
渡辺教授によると、「礎窯」の可能性があるということであった。礎窯は島津斉彬が集成館と礎御殿の中間地点のあたりに造らせた窯で、陶磁器や反射炉用の耐火レンガが生産されていたと考えられている。「礎御庭焼」ともいわれることから、窯道具も堅野系のものであることが推測される。出土した窯道具も堅野系のものであるので、その点は矛盾しない。いずれにしても、礎窯本体の様子ももう少し解明されることを待ちたい。

二番目としては、茶入についてである。幕末当時、茶入を持つ人々はごくわずかしかなかったはずである。今回の調査で、茶入が数点出土している。茶入は火を受けた様子もなく、火災等の被害によるものではなさそうである。文献にあるように、この地には今和泉島津家の別邸があったようなので、そのような上級武士の屋敷に関連する可能性がある。あるいは、さきほどの「礎窯」で焼かれたものの破片という可能性もあるのではないだろうか。

1トレンチ 2トレンチ 3トレンチ B地点（市教委） C地点（市教委）



第26図 各トレンチの検出遺構のレベル比較（鹿児島紡績所跡）



第27図 鹿児島紡績所跡遺構の軸線

第4章 祇園之洲砲台跡

第1節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

祇園之洲砲台跡は、鹿児島県鹿児島市清水町10番に所在する。(遺跡位置図)

吉野台地から錦江湾に流れる稲荷川の河口に立地し、川に沿って舌状に延びる多賀山の急峻な崖下にある。眼前に桜島を眺め、錦江湾を臨む地に、幕末期に造られた埋立地上に築かれた砲台である。

稲荷川を挟んで、対岸も江戸期の埋立地である。遺跡の立地する河口より少し奥からは沖積地が広がり、その奥に吉野台地、城山が控えている。

2 歴史的環境

(1) 祇園之洲砲台跡略歴

砲台の所在する埋立地は、第十代藩主島津斉興の命により稲荷川の浚渫土で造られ、埋立て後、兵士の屯集所として使用された。

1853(嘉永3)年に第十一代藩主島津斉彬によって砲台が築造され、1858(嘉永8)年に第十二代藩主島津忠義によって改修が行われ、1863(文久3)年の薩英戦争(島津忠義)では激戦地となり、壊滅的打撃を受け、戦争直後に改修が行われた。

その後、1872(明治5)年の明治天皇行幸の際には御召艦隊との砲撃演習が行われ、このときに撮影された古写真が残っている(巻頭図版8)。

また、1877(明治10)年に起きた西南戦争では政府軍によって使用不可能にされ、西南戦争終結後は官軍墓地として使用された。墓地は、荒廃が進み、1951(昭和26)年に来襲したルース台風により甚大な被害を受けた。

1952(昭和27)年には市営アポルトが建設され、その後1955(昭和30)年に官軍墓地の収骨を行い、合葬碑が建てられ、公園として利用されるようになった。

1974(昭和49)年に鹿児島市は、史的評価を考慮し、祇園之洲砲台跡を鹿児島市指定史跡とした。

平成9年度には、8.6水害により甲突川の河川改修が必要となり、川に架かっていた高麗橋と玉江橋を祇園之洲砲台跡に移設し、公園整備をするため、移設地の発掘調査が行われた。

(2) 祇園之洲砲台跡周辺の歴史

遺跡の背後にある多賀山には、島津氏が鹿児島に勢力拡大する際に居城とした東福寺城(8)、浜崎城(9)があり、八坂神社(祇園神社)に隣接している。

また、稲荷川の奥には一時島津氏の内城であった大竜遺跡(12)、寺社、城下町等があり、このほかに武器・武術関連の施設としては、1847(弘化4)年設置された砲術館があり、稲荷川の対岸には、1847(弘化4)年に

設置され青銅砲等の武器を製造した鑄製方などがあったことが知られている(第30図)。

第28図の天保年間頃の絵図を見るとまだ埋立等が行われておらず、安政年間作成の第29、30図を見ると埋立が行われ砲台が築造されている。明治以降、海岸部は次々と埋立てられ、港や水路が整備され現在に至っている。



第28図 鹿児島城下屏風絵図(鹿児島市立美術館蔵) 天保年間



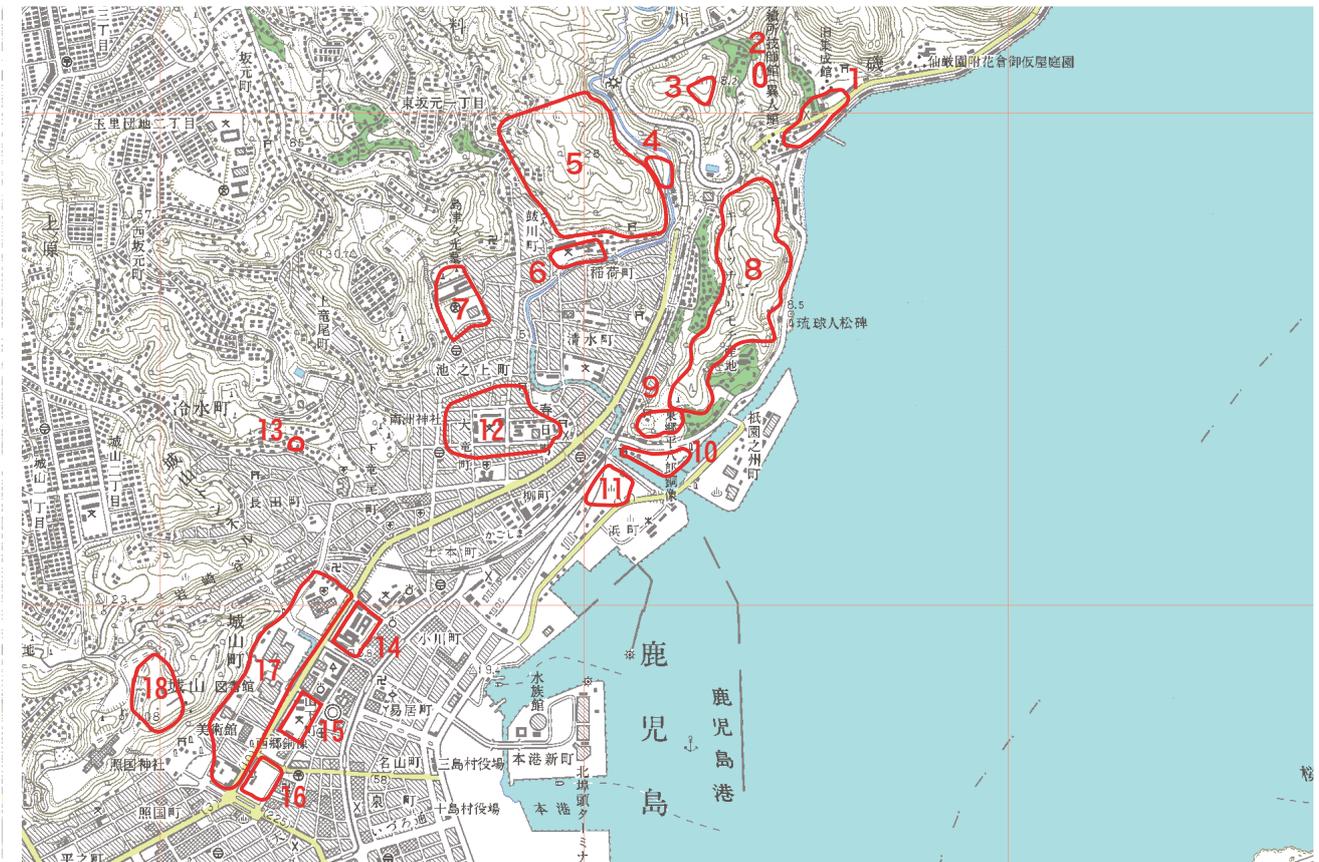
第29図 旧薩藩御城下絵図(鹿児島県立図書館蔵) 安政年間



第30図 鑄製方「薩州見取絵図」(武雄市歴史資料館蔵) 安政4年

表6 祇園之洲砲台跡 周辺遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	集成館跡	鹿児島市 吉野町磯	低地	近世(末)	建物跡・鍛冶場跡	市埋文報(29)
2	雀ヶ宮B	鹿児島市 吉野町雀ヶ宮	丘陵	縄文(草)	前平式・石坂式・吉田式	工事中発見
3	前平	鹿児島市 吉野町雀ヶ宮前平				
4	滝ノ上火薬製造所跡	鹿児島市 吉野町滝ノ上	低地	近世		市埋文報(22)
5	清水城跡	鹿児島市 清水町大興寺岡	丘陵	中世, 近世	陶磁器類	市埋文報(16)
6	大乘院跡	鹿児島市 稲荷町清水中校庭	丘陵	中世, 近世	排水溝・上水管	市埋文報(3)(6)
7	福昌寺跡	鹿児島市 池之上町玉龍高校一帯	低地	中世~近世	建物跡・陶磁器類	市埋文報(14)(47)
8	東福寺城跡	鹿児島市 清水町田之浦	丘陵	平安, 中世	曲輪・空堀	
9	浜崎城跡	鹿児島市 清水町田之浦	丘陵	中世		
10	祇園之洲砲台跡	鹿児島市 清水町祇園之洲	低地	近世(末)		市埋文報(23)
11	浜町	鹿児島市 浜町1	低地	近世	暗渠・近世陶磁器	県埋七報(25)
12	大龍遺跡群	鹿児島市 大竜町・池之上町・春日町	段丘	縄文(前・中・後・晩), 弥生~古墳, 中世~近世		
	大龍遺跡群(大龍)	鹿児島市 大竜町	段丘	縄文(前・中・後・晩), 弥生~古墳, 中世~近世	深浦式・並木式・阿高式・指宿式・市来式・鐘ヶ崎式・西平式・納曾式・上加世田式・入佐式・成川式・土鈴・土鍾・石匙・石鏃・石皿・軽石製品・スイジガイ	市埋文報告(1)(2)(7)(15)(32)(33)(34)(48)
	大龍遺跡群(若宮)	鹿児島市 池之上町	段丘	縄文(前・中・後・晩), 弥生~古墳, 中世~近世	西平式・市来式・御領式	市埋文報(24)
	大龍遺跡群(春日町)	鹿児島市 春日町	段丘	縄文(前・中・後・晩), 弥生~古墳, 中世~近世	春日式・阿高式・指宿式・西平式・鐘ヶ崎式・市来式・有孔軽石円盤	
13	豎野冷水窯跡	鹿児島市 冷水町豎野	丘陵	近世	窯跡・窯道具・陶磁器類	「豎野冷水窯跡」(南風病院)
14	垂水・宮之城島津家屋敷跡	鹿児島市 山下町14	低地	近世	屋敷境溝・陶磁器類	県埋七報(48)
15	名山	鹿児島市 山下町名山小校庭	低地	近世~近代	暗渠・近世陶磁器	市埋文報(8)(38)
16	造土館・演武館跡	鹿児島市 山下町中央公園内	低地	近世~現代	建物跡・近世陶磁器	市埋文報(13)
17	鹿児島城跡(鶴丸城)	鹿児島市 城山町5	低地	縄文, 奈良, 近世, 近代	建物礎石群・石製水道管・排水溝・雨落溝・井戸・池・近世陶磁器・瓦他	県埋文報(55)(60) 市埋文報(5)(28)
18	上山城跡	鹿児島市 新照院町	丘陵	中世	土塁・空堀	



第31図 周辺遺跡地図

第2節 発掘調査の方法

1 発掘調査の方法

今回の発掘調査は、祇園之洲公園内に石垣、土塁、護岸が露出している箇所を中心に、第32、33図の古絵図、巻頭図版古写真（明治5年鹿児島港）を参考にトレンチを設定して行った。各トレンチは、露出している石垣を境に砲座の構造と残存状況、石垣正面の構造と残存状況を調査するトレンチと石垣の天端や裏込の構造・残存状況と土塁の構築法や残存状況を調査するトレンチの2つを対にして、東側から1、2トレンチ、3、4トレンチ、6・7、8トレンチと設定し、石垣が露出していない箇所に5トレンチ、9トレンチ、10トレンチを設定し、これらのトレンチを補完する目的で11～13の3つのトレンチを設定した。

また、地形測量は、世界測地系を基準に行った。検出遺構の実測や土層断面図の作成は、任意に設けた点を結び世界測地系を基に行い、一部実測測量を行った。

2 整理作業の方法

整理作業は、鹿児島紡績所跡、祇園之洲砲台跡、天保山砲台跡の3遺跡を総じて行った。

第3節 層序

本遺跡は、大まかに砲座、土塁、護岸、中央の弾薬庫を含むその他の砲台関連施設、官軍基地の地区（遺構）に区分できる。13か所のトレンチを設定して調査を行ったところ、層序は地区毎に異なっていた。

各地区の基本層序は、下表のとおりであり、詳細については、各トレンチ毎に図示する。

表7 祇園之洲砲台跡の基本層序

砲 座	土 塁	そ の 他
表土 公園造成土含む	表土 公園造成土含む	表土 公園造成土含む
砲座を構成する土層	土塁を構成する土層	その他の造成土
埋立地の造成土（砂層）	埋立地の造成土（砂層）	埋立地の造成土（砂層）

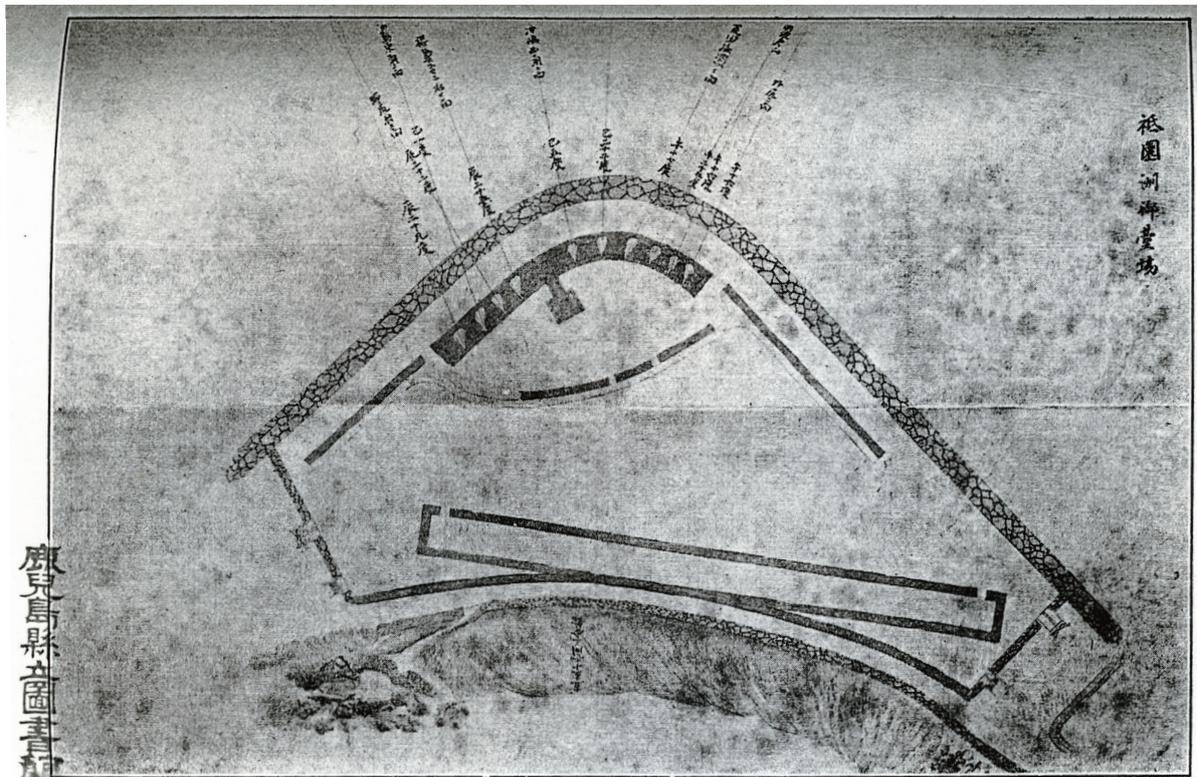


圖 場 臺 洲 園 祇

第32図 祇園洲臺場圖『薩藩海軍史』

第4節 発掘調査の成果

第34図のように13箇所の特レンチを設定して調査を行った結果、遺跡の残存状況を把握できた。これについては、第5節で記述する。更に、石垣に「チキリ工法」が用いられていることが分かり、それを手掛かりに、築造時のまま残存している箇所と再構築されている箇所を分別する結果を得ることができた。以下、特レンチ毎に遺構・遺物について述べていきたい。

1 1・2特レンチ (第35図～第38図)

1・2特レンチは、1993(平成5年)年の豪雨水害後、鹿児島市教育委員会が平成9年度に発掘調査を行い、五石橋の一つであった玉江橋が移設復元された場所のところに設定した。今回は平成9年度調査成果との比較と、砲座、胸牆の構造調査、残存度の把握を目指した。

その結果、前回の調査の成果とほぼ同様の遺構が残存していることが分かった。また、出土遺物は、砲台の時期とそれ以前の遺物が混在して出土した。これは、祇園之洲砲台が稲荷川河口の浚渫土砂で築造されたためと考える。

(1) 遺構 (第35図～第37図)

ア 石列1 (第36図)

1特レンチの地表下約1.5mで検出した。

覆土は、砂と土を交互に積んだ版築層ではないが、砂と土が混在する層で、下部の層は、砲台の基盤となる浚渫の土砂である。

石列1の石付近では層が乱れており、再構築された可

能性もある。

石列1は砲台の土塁の最初期の端で、最初期の土塁は両面石で置かれたものであったのか、それとも石列1が砲台築造前の屯集所のものであるのかは不明である。また、鹿児島市教委の調査でもこれとよく似た石列が検出されており、石列1と1直線上に並ぶ。(第61図～63図)イ 石列2 (第37図)

2特レンチで地表下約1mで検出した。胸牆の石垣の石と異なり、正面が海側を向き、また、形も不揃いである。この石列は胸牆の石垣の下に潜っており、この場所で胸牆の石垣が6段と7段に分かれる。

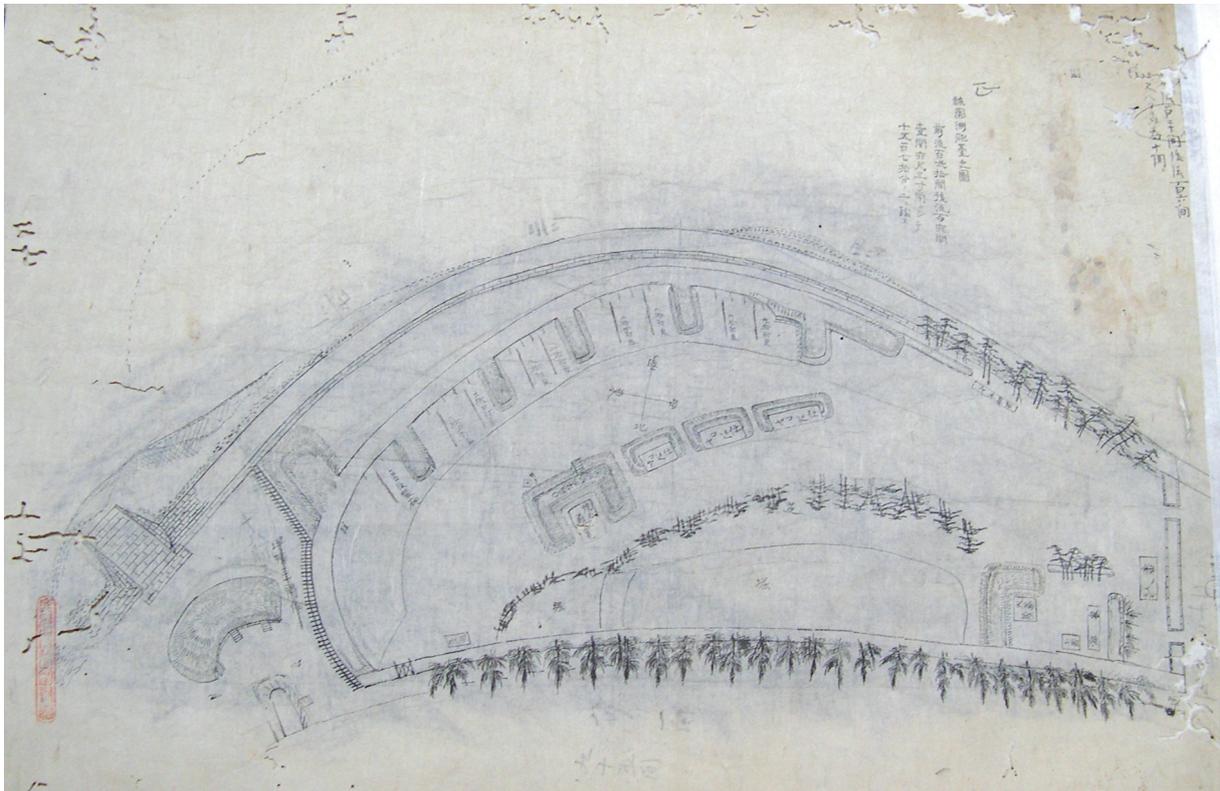
埋立が行われた浚渫土と考えられる砂層の上に構築され、砲台築造前の遺構の可能性がある。

ウ 石垣 (第37図)

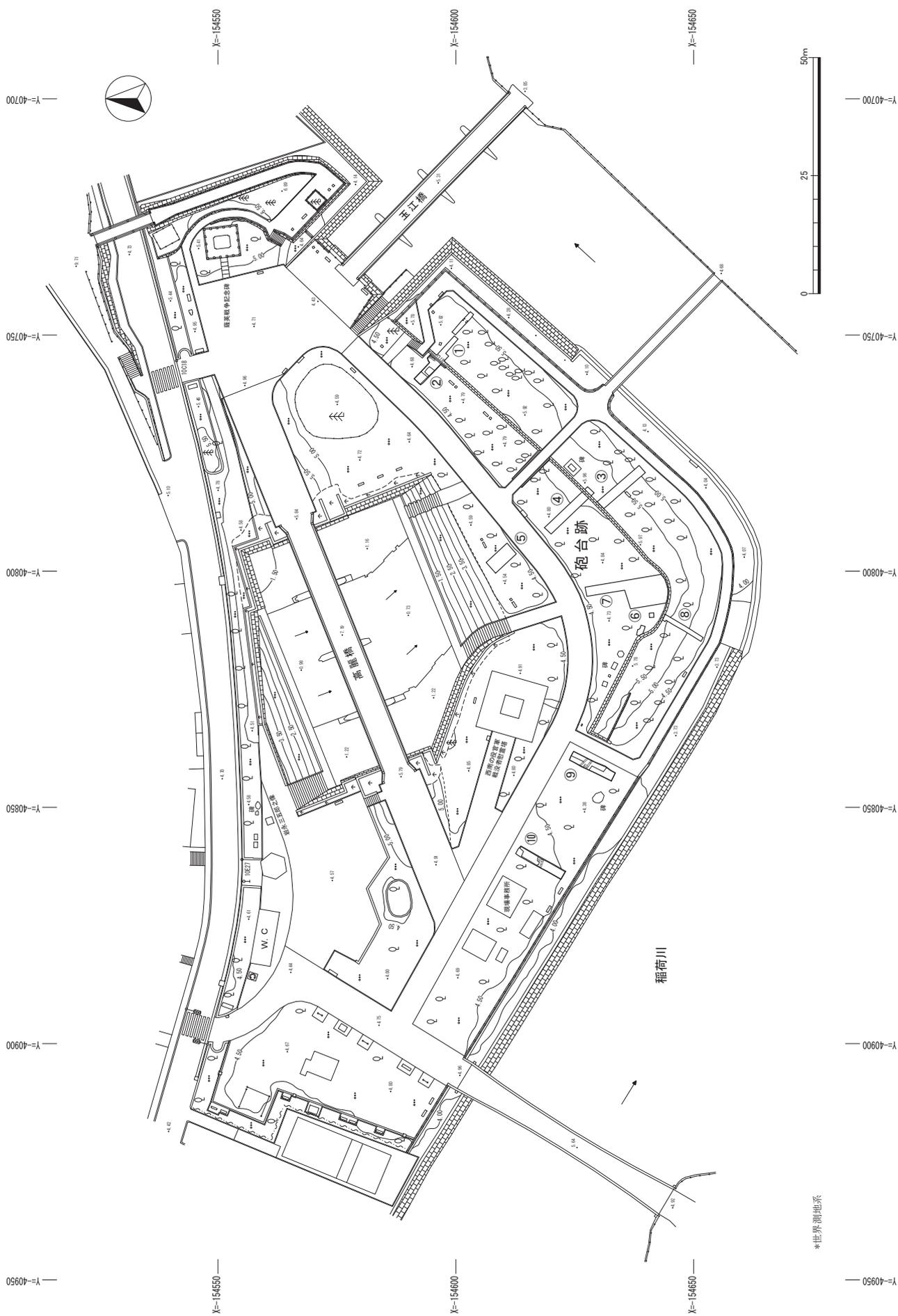
イの石列の上に構築されていた。イでも記載したが、石列2の左右で6段と7段に分かれている。石列を避けたためか、構築時に一段低い箇所があったためかは不明である。

天端の標高は約6mで最下段から2～3段は石垣の構築時から地中となっており、3～4段(1m～1.2m程度)が地表に出ていたと考える。

石は、スタレ加工ではなく、その他の特レンチと異なり、加工全体が雑で正面から先細りに加工され、成層積みである。「チキリ石」及び「チキリ穴」が見られず、裏込石もさほど多くない。



第33図 祇園之洲砲臺之圖『薩藩砲臺圖稿本』



第34図 祇園之洲砲台跡周辺地形図及びトレンチ配置図

*世界測地系

エ 土塁 (第35図)

土塁は、版築状に土と砂を交互に混ぜて積み上げられている (③, ⑪層)。

1 トレンチの表土から⑨⑩の層までは昭和以降の遺物と江戸時代・明治時代の遺物が混在しているが、⑨⑩より下層からは江戸時代の遺物のみが出土したことから、⑨⑩は昭和期までの旧表土と考えられる。更に層⑨⑩は段差を持ち、斜めに上がる箇所がある。

昭和期と思われる表土⑨⑩の観察から、現在は整備され見えないが、護岸から平場を持ち、胸墻の土塁が堤防状にせり上がっていたと考えられ、昭和期のある時期までその形状を保っていたと考えられる。

この⑨⑩が、傾斜しているラインを下層に延長していったところから、石列1を検出した。

オ 砲座 (第35図)

2 トレンチ土層図の①である。

固く締まり、礫等は含まない。出土遺物もなかった。

大きく攪乱を受けているが、攪乱を受けていない箇所では、残存していることが分かった。

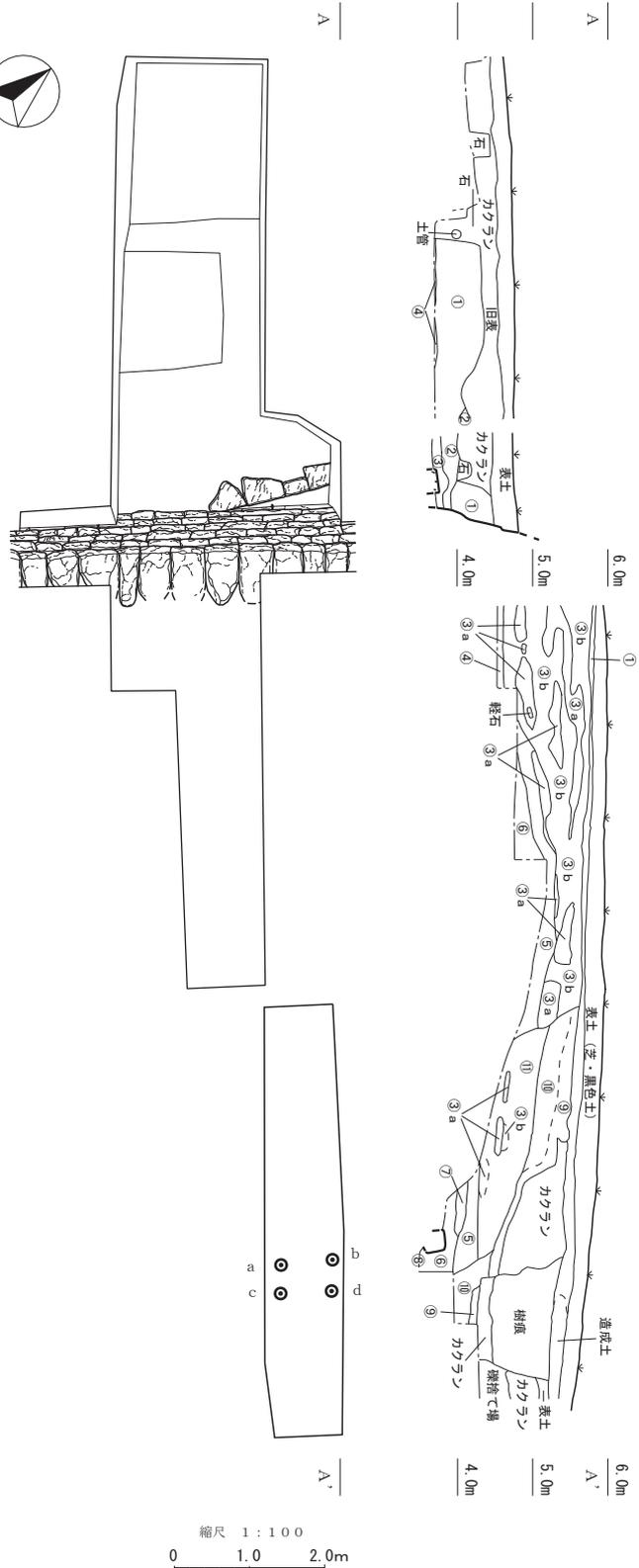
(2) 遺物 (第38図)

出土遺物の詳細は表8の遺物観察表に示した。

1 トレンチの⑨層の出土遺物は図化できるものが少なかったが、レンガや、明治以降の染付け、ガラスの小片、江戸時代の薩摩焼片などが混在しているため昭和期の表土と考える。③, ⑪層は、胸墻の土塁であり、出土遺物は在地産や肥前産の碗・皿類や薩摩焼の生活用具、白薩摩の仏花器、琉球産の小型の瓶などの江戸時代の複数の時期の遺物が混在している。摩滅したものもあり、出土した遺物は砲台使用時のものの他に埋立地に由来するものも含まれていると考える。

2 3・4トレンチ (第39図～第44図)

1・2トレンチと6・7トレンチの間に、砲座、胸墻の構造調査と残存度の把握を目指し設定した。その結果、遺構が残存していることが分かった。また、出土遺物は、砲台の時期とそれ以前の遺物が混在して出土した。これは、祇園之洲砲台が稲荷川河口の浚渫土砂で築造されたためと考える。



1 トレンチ

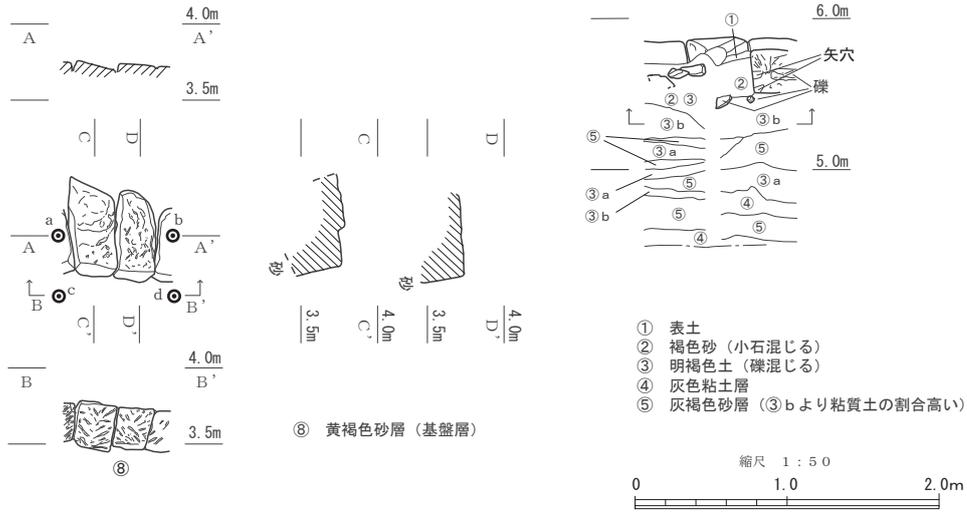
- 表土
 ① 黒色火山灰層
 ② 褐色砂層
 ③ a 白色砂層
 ③ b 灰白色砂層 (礫・粘質土混じり)
 ④ 灰色粘質土
 ⑤ 灰褐色砂層
 (③ bより粘質土の割合が高い)

- ⑥ 暗灰褐色砂層
 (⑤より粘質土の割合が高い)
 ⑦ 混礫砂層
 ⑧ 黄褐色砂層 (基盤層)
 ⑨ 旧表土 (灰色土)
 ⑩ ⑨に礫が混じる
 ⑪ 褐色硬質土
 (③ a・③ bともにつき固められてる)

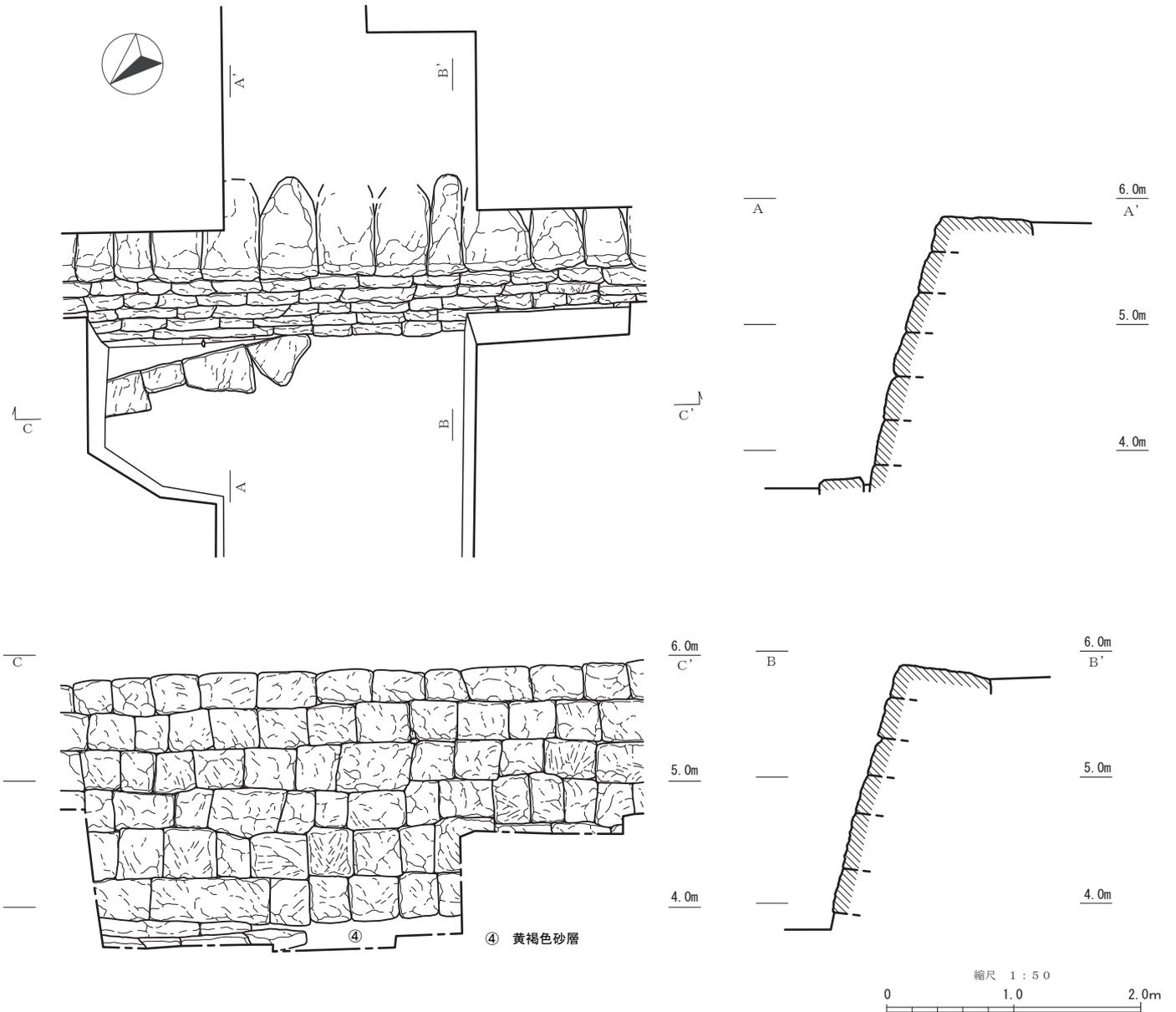
2 トレンチ

- 表土
 ① 明褐色砂質土
 (砲座硬化面・礫含まない)
 ② 黄褐色砂質土
 ③ 褐色砂質土
 ④ 黄褐色砂層 (基盤層・浚渫)

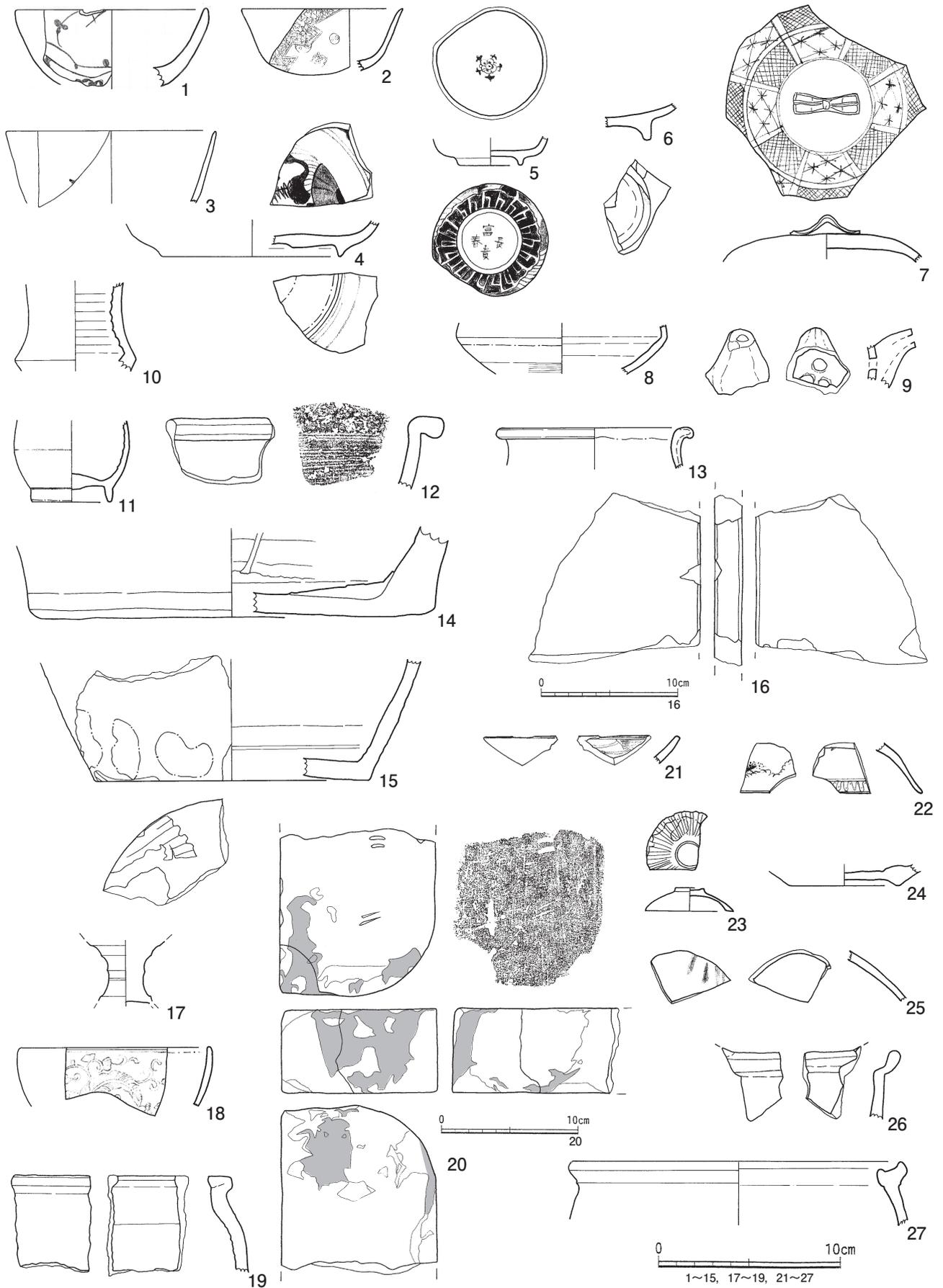
第35図 1・2トレンチ土層断面図



第36図 1 トレンチ検出遺構 (石列)



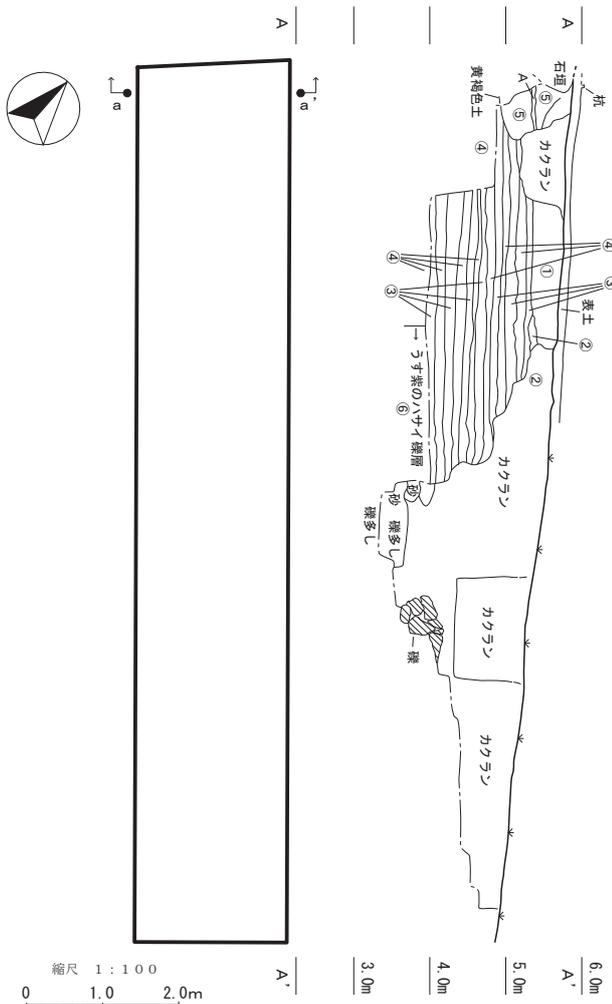
第37図 2 トレンチ検出遺構 (石垣)



第38図 1 トレンチ出土遺物

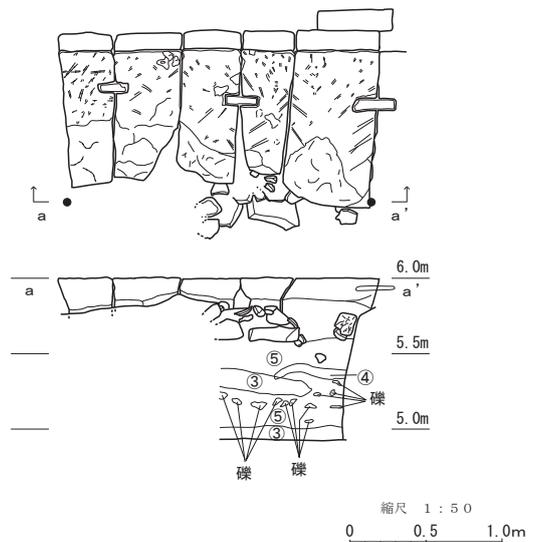
表8 1トレンチ出土遺物観察表

挿入番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量 (cm)			cm	胎土の色調	釉薬		時期	備考
								口径	底径	器高			種類/色調	部位		
	1	磁器	碗	碗	波佐見	1T	③	10.5	-	-		淡橙色	透明釉	残存部全部	18世紀後半~	鉄絵
	2	染付	碗	碗	-	1T	③	8.8	-	-		白色	透明釉	残存部全部		明治以降
	3	染付	碗	碗	-	1T	③	11.6	-	-		白色	透明釉	残存部全部		
	4	染付	皿	皿	-	1T	③	-	9.8	-		白色	透明釉	底部蛇ノ目釉剥ぎ		
	5	染付	碗	碗	肥前	1T	③	-	7.2	-		白色	透明釉	量付は釉剥ぎ	18世紀代	富貴長春
	6	陶器	碗	碗	白薩摩	1T	③	-	5.4	-		淡黄色	透明釉	残存部全部		重ね焼痕
	7	染付	蓋	蓋	-	1T	③	-	-	-		白色	透明釉	残存部全部		つまみ
	8	陶器	瓶	土瓶	薩摩	1T	③	-	-	-	最大径11.6	橙色	鉄釉/オリブ褐色	底部付近無釉		煤付着, 回転ハケ目, 回転ナデ
	9	陶器	瓶	土瓶・急須	薩摩	1T	③	-	-	-		にぶい赤褐色	鉄釉	残存部全部		穴の所 指おさえ
	10	陶器	仏具	花器	白薩摩	1T	③	-	-	-	最大径6.7	淡黄色	透明釉	残存部全部		回転ナデ
	11	染付	瓶	小型瓶	琉球?	1T	③	-	4.6	-		灰白色	透明釉	内側量付は釉剥ぎ	17世紀後半~ 18世紀初頭	内: 回転ナデ 外: 回転ヘラ
38	12	陶器	鉢	播鉢	薩摩	1T	③	-	-	-		にぶい赤褐色	鉄釉/暗灰黄色	口唇部無釉		ローリング, 回転ハケ目
	13	陶器	壺	小壺	薩摩	1T	③	10.8	-	-		褐灰色	鉄釉/暗オリブ褐色	口唇部無釉		貝目?, 回転ナデ
	14	陶器	壺	琉球	1T	③	-	22.2	-	-		赤褐色	自然釉/暗赤褐色	内面無釉		内: ナデ (重ね焼)
	15	陶器	鉢	鉢	薩摩	1T	③	-	15.0	-		灰褐色	鉄釉/暗オリブ褐色	残存部全部		貝目, 回転ナデ, 指頭圧
	16	瓦	瓦	棧瓦	-	1T	③	-	-	-	厚さ2.1	灰白色	-/灰色	-		
	17	磁器	仏具?	仏具?	-	1T	⑧	-	-	-	最大径2.6(稜)	白色	透明釉	残存部全部		
	18	染付	碗?	碗?	肥前	1T	⑨	10.4	-	-		白色	透明釉	口唇~ 口縁部内面釉剥ぎ		色絵, 赤金
	19	陶器	甕	甕	薩摩	1T	⑨	-	-	-		にぶい赤褐色	鉄釉/オリブ灰色	口唇部無釉		回転ナデ, 回転ハケ目
	20	レンガ	レンガ	レンガ	-	1T	⑨	-	-	-	厚さ6.2	橙色	-/明褐色	-		文字?加工痕, 付着物
	21	染付	皿	皿	-	1T	⑩上	-	-	-		白色	透明釉	残存部全部	明治以降	口唇部茶色釉
	22	染付	蓋	蓋	肥前	1T	⑩下	-	-	-		白色	透明釉	残存部全部		
	23	磁器	蓋	蓋	-	1T	⑩	4.8	-	1.3		白色	透明釉/白色	内面のみ		放射状
	24	陶器	瓶	土瓶	薩摩	1T	⑩上	-	6.0	-		灰赤色	鉄釉/オリブ灰色	底部外面無釉		回転ナデ
	25	染付	壺	壺	-	1T	⑩上	-	-	-		灰白色	透明釉	内面無釉	明治以降	回転ナデ
	26	陶器	瓶	鍋	薩摩	1T	⑩上	-	-	-		褐灰色	鉄釉/暗オリブ色	残存部全部		把手?
	27	陶器	鍋	鍋	苗代川	1T	⑩上	18.2	-	-		赤褐色	鉄釉/暗オリブ褐色	口唇部無釉		回転ナデ



第39図 3トレンチ土層断面図

- ① 明褐色土 (凝灰岩破砕礫混じる)
- ② 褐色土 (客土)
- ③ 明褐色土
- ④ 黄白色砂層
- ⑤ 明褐色土 (凝灰岩破砕礫混じる)
- ⑥ 赤灰色凝灰岩破砕礫層



第40図 3トレンチ検出遺構 (チキリ石)



第41図 3トレンチ出土遺物

(1) 遺構 (第39, 40, 42, 43図)

ア 砲座 (第42図)

4トレンチで調査を行った。2トレンチ同様に大きく攪乱されていたが、攪乱を受けていない箇所では残存していた。土層図中の①である。

固く締まっているが、6・7トレンチで検出した下部の敷石は見られなかった。

また、胸墻の石垣付近に石が配してあったが、攪乱を受け形状を保っておらず、用途などは不明である。

イ 石垣 (第40図, 43図)

胸墻の石垣は7段で天端の標高が約6m、2～3段は地中であった。正面にはスタレ加工が施され、長方形に丁寧に成形されている。

成層積みでつくりが全体としてしっかりしているが、裏込の石はさほど多くない。下部に胴木等はなく、直接基盤層の砂層に構築されている。

3トレンチでは石垣の天端にホゾを開け、石を入れて2つの石を結合させる「チキリ工法」が取られており、4トレンチでは「チキリ石」が見られる箇所と「チキリ穴」が揃わない石垣天端の石が積み直されたと考えられる箇所があった。

ウ 土塁 (第39図)

3トレンチで調査を行った。

土と砂を交互に積んだ版築工法が採られ(③④層)、きれいな互層をなしている。しかし、海側半分は大きく攪乱され8トレンチ同様に新しい客土が入っていた。この3・4トレンチの前の護岸がコンクリートであることから、ここが昭和26年に襲来したルース台風の被害箇所であり、客土は修復が行われたためと考える。

(2) 遺物 (第41, 44図)

ア 3トレンチ

出土遺物の詳細は表9の遺物観察表に示した。

③④層からの出土遺物は、器種も豊富で図化できるものが多かった。また、摩滅の激しい遺物も見られ、複数の時期のものが混在している。このことは、出土した遺物は砲台使用時のものの他に埋立地に由来するものも含まれているためと考える。

出土した碗や皿類は、在地産のと肥前産のものがあり、複数時期のものが混在している。

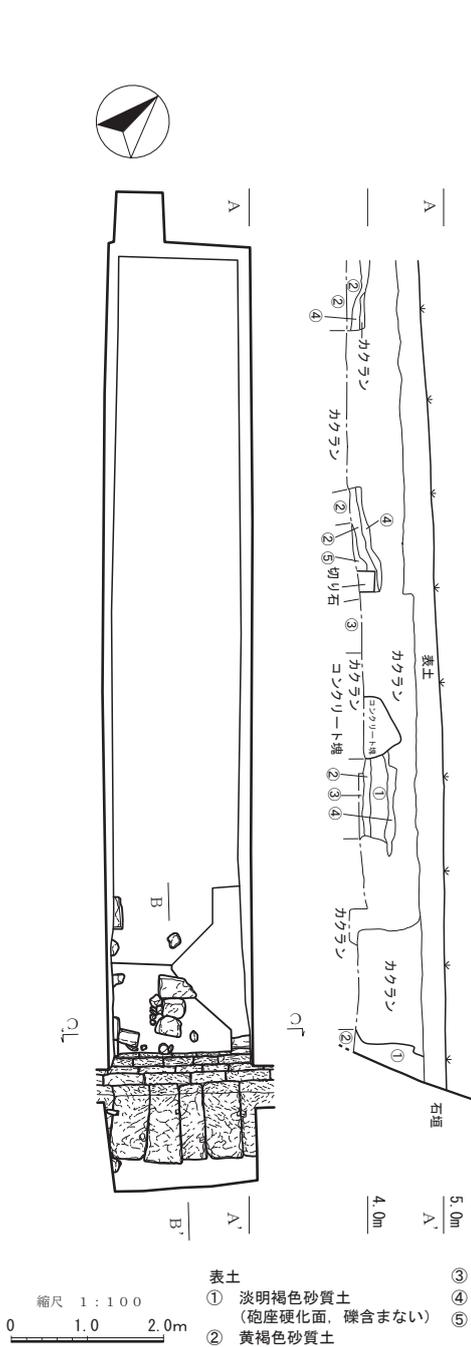
その他、薩摩焼の生活用具や45の琉球産の播鉢、48の棧瓦が出土した。

⑤(裏込)の遺物は、50の1点のみ図化できた。

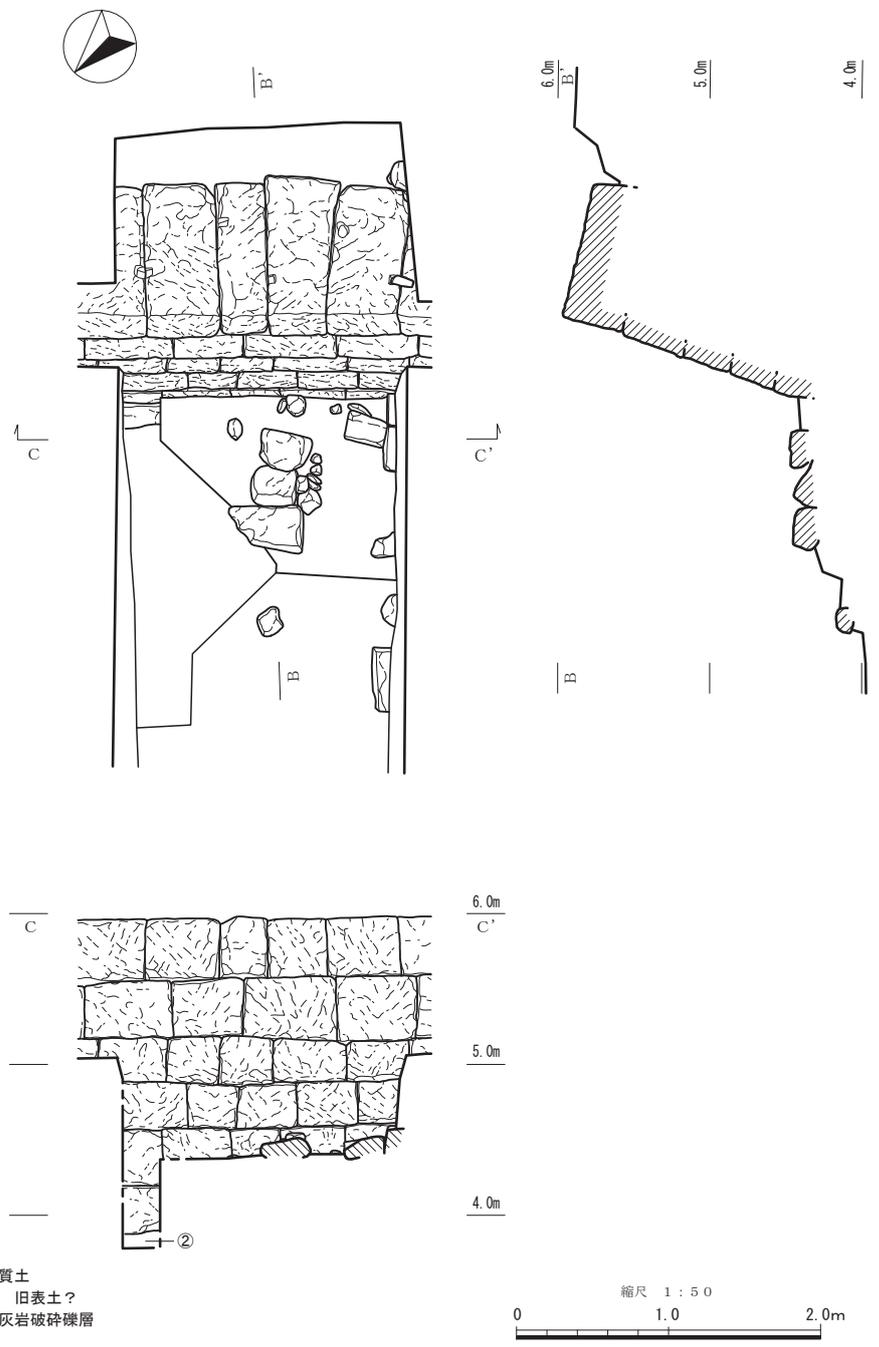
19世紀の丸型碗である。

表9 3トレンチ出土遺物観察表

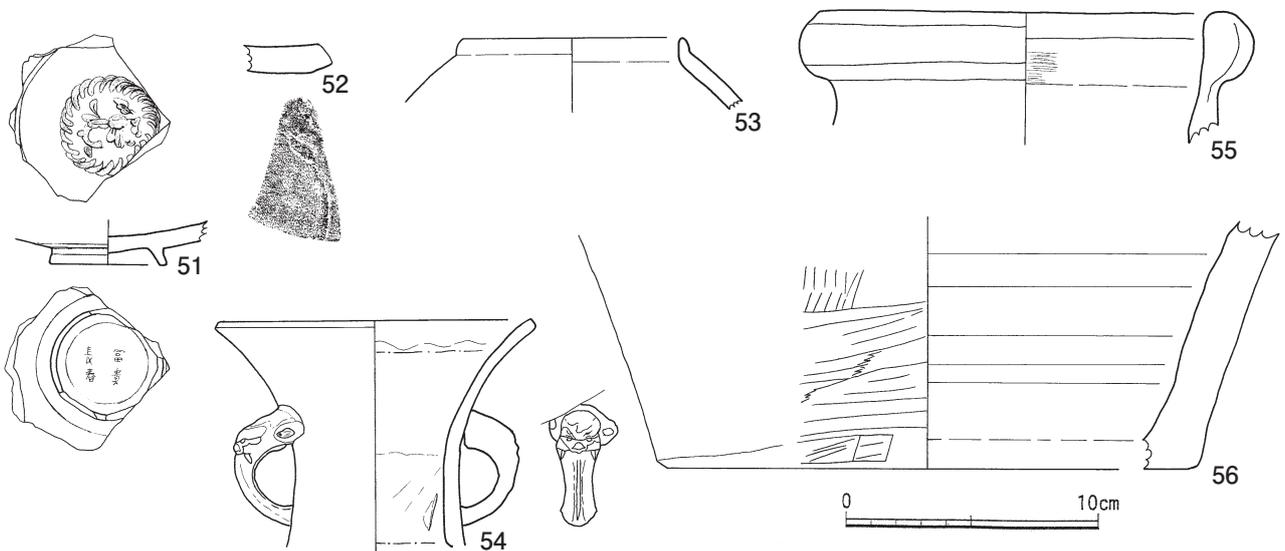
挿 入 番 号	掲 載 番 号	種 別	分 類	器 種	産 地	出 土 区	層 位	法 量 (cm)			cm	胎 土 の 色 調	釉 薬		時 期	備 考
								口 径	底 径	器 高			種 類 / 色 調	部 位		
41	28	染付	皿	皿	—	3T	表	14.0	4.8	3.5		白色	透明釉	蛇ノ目釉剥ぎ 量付は釉剥ぎ		アルミナ
	29	染付	碗	碗	—	3T	③④	—	3.6	—		白色	透明釉	残存部全部		呉須緑色っぽい
	30	染付	碗	端反碗	在地	3T	③④	10.2	—	—		白色	透明釉	残存部全部		
	31	染付	碗	端反碗	清朝 磁器	3T	③④	10.2	—	—		白色	透明釉	残存部全部		
	32	染付	碗	端反碗	在地	3T	③④	9.0	—	—		白色	透明釉	残存部全部		
	33	染付	碗	端反碗	在地? 肥前?	3T	③④	—	—	—		白色	透明釉	残存部全部		
	34	染付	皿	皿	—	3T	③④	—	5.2	—		白色	透明釉	量付は釉剥ぎ		ローリング
	35	陶器	碗	碗	薩摩	3T	③④	—	4.4	—		明赤褐色	鉄釉/オリーブ灰色	底部付近無釉		ローリング
	36	青磁	碗	碗	—	3T	③④	—	4.4	—		灰白色	青磁釉	蛇ノ目釉剥ぎ; 量付は釉剥ぎ	18世紀後半	
	37	染付	碗	筒形碗	—	3T	③④	—	—	—		灰白色	透明釉	残存部全部		
	38	染付	碗?	筒形 碗? 花器?	—	3T	③④	11.6	—	—		白色	透明釉	残存部全部		口唇部茶色釉
	39	染付	皿	皿	肥前	3T	③④	—	10.0	—		白色	透明釉	量付は釉剥ぎ	18世紀代	文字「大明?」
	40	染付	皿	皿	—	3T	③④下	—	8.9	—		白色	透明釉	底部蛇ノ目釉剥ぎ		
	41	陶器	皿	皿	—	3T	③④下	—	4.4	—		褐灰色	鉄釉/暗赤褐色	底部無釉		回転ナデ
	42	染付	皿	稜花皿	—	3T	③④	18.2	—	—		白色	透明釉	残存部全部		
	43	染付	皿	皿	—	3T	③④	—	—	—		白色	透明釉	量付は釉剥ぎ		
	44	陶器	鉢	土瓶	薩摩	3T	③④	—	—	—		にぶい赤褐色	鉄釉/オリーブ黒色	底部無釉		2次加工, 回転ハケ目
	45	陶器	鉢	播鉢	—	3T	③④	—	—	—		にぶい赤褐色	—	—		回転ナデ, 砂粒多い
	46	陶器	鉢	播鉢	薩摩	3T	③④	27.8	—	—		にぶい赤褐色	鉄釉/暗オリーブ褐色	口唇部無釉		回転ハケ目, 回転ナデ
	47	陶器	鉢? 甕?	鉢? 甕?	薩摩	3T	③④	—	15.6	—		赤褐色	鉄釉	底面無釉		重ね焼痕, 回転ハケ目
48	瓦	瓦	棧瓦	—	3T	③④	—	—	—	厚さ1.75	灰白色	—/暗灰色	—			
49	瓦	瓦	棧瓦	—	3T	③④下	—	—	—	厚さ1.6	灰白色	—/灰色	—		ローリング	
50	染付	碗	丸碗	波佐見	3T	⑤	6.8	3.6	5.4		灰白色	透明釉	量付は釉剥ぎ	19世紀代	底部回転ヘラケズリ, 回転ナデ	



第42図 4 トレンチ土層断面図



第43図 4 トレンチ検出遺構



第44図 4 トレンチ出土遺物



- 表土
- ① 黄褐色砂層
 - ② 黄褐色粘質土
 - ③ シルト質明褐色土
 - ④ 明褐色砂層
 - ⑤ 褐色砂質土（砲座硬化面、礫混じる）
 - ⑥ 灰色砂層
 - ⑦ 黄色がかった灰色砂質土
 - ⑧ 明褐色砂質土
 - ⑨ 赤灰色凝灰岩破砕礫

第45図 6・7トレンチ土層断面図

イ 4トレンチ

出土遺物の詳細は表10の遺物観察表に示した。

図化できる遺物は少なく、砲座（層①）からの遺物の出土はなかった。その下層の②から遺物の出土があったが、複数の時期のものが混在している。埋立時の浚渫に由来するためと考える。

51, 52は、皿である。

53は、薩摩焼の土瓶で、54は白薩摩の仏花器である。

55, 56は、琉球産の壺である。

3 6・7トレンチ（第45図～第49図）

(1) 遺構（第45～48図）

現在露出している胸牆の石垣の平面形状は、への字状を呈している。この頂点となる箇所は更に膨らみを持つ構造である。また、明治5年に撮影された古写真（巻頭図版8下）にも同様な構造で写っており、キスト砲架の大砲が設置されている。

そのため、この箇所に砲床やその他の遺構が残存しているか、更には砲座の構造を調べるためにトレンチを設定して調査を行った。

調査の結果、砲座の硬化面やその下に敷かれた多量の敷石を検出した。また胸牆の石垣の構造調査も行った。

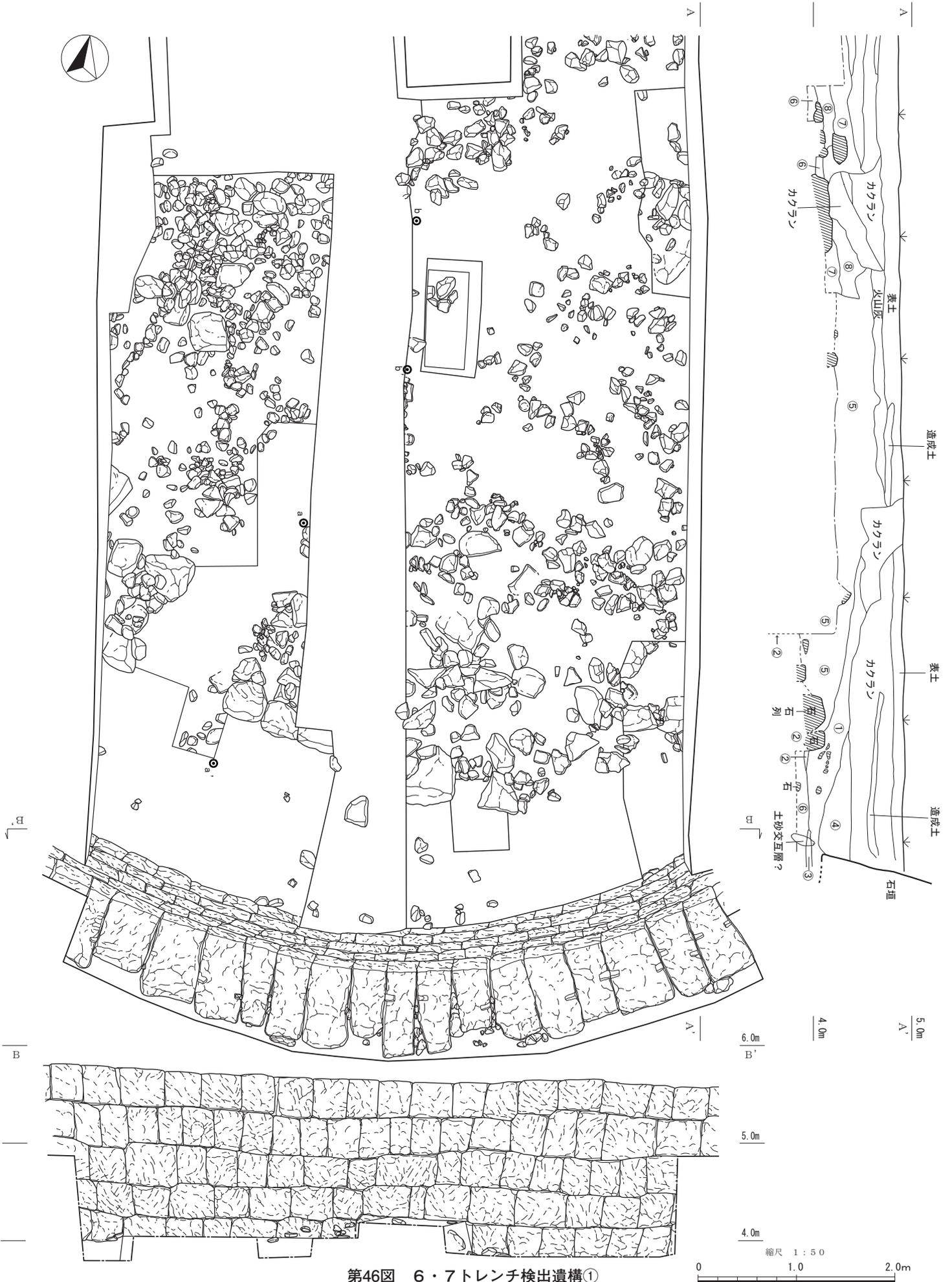
ア 石垣（第46図）

6トレンチの胸牆の石垣は、7段で構成されている。天端の標高は約6mで下部の2～3段は地中にあり、砲台の基盤層である浚渫土に直接積まれており、胴木等はなかった。正面はスタレ加工が施され、長方形に成形されている。つくりが全体としてしっかりし、成層積みである。裏込は石がさほど多くない。

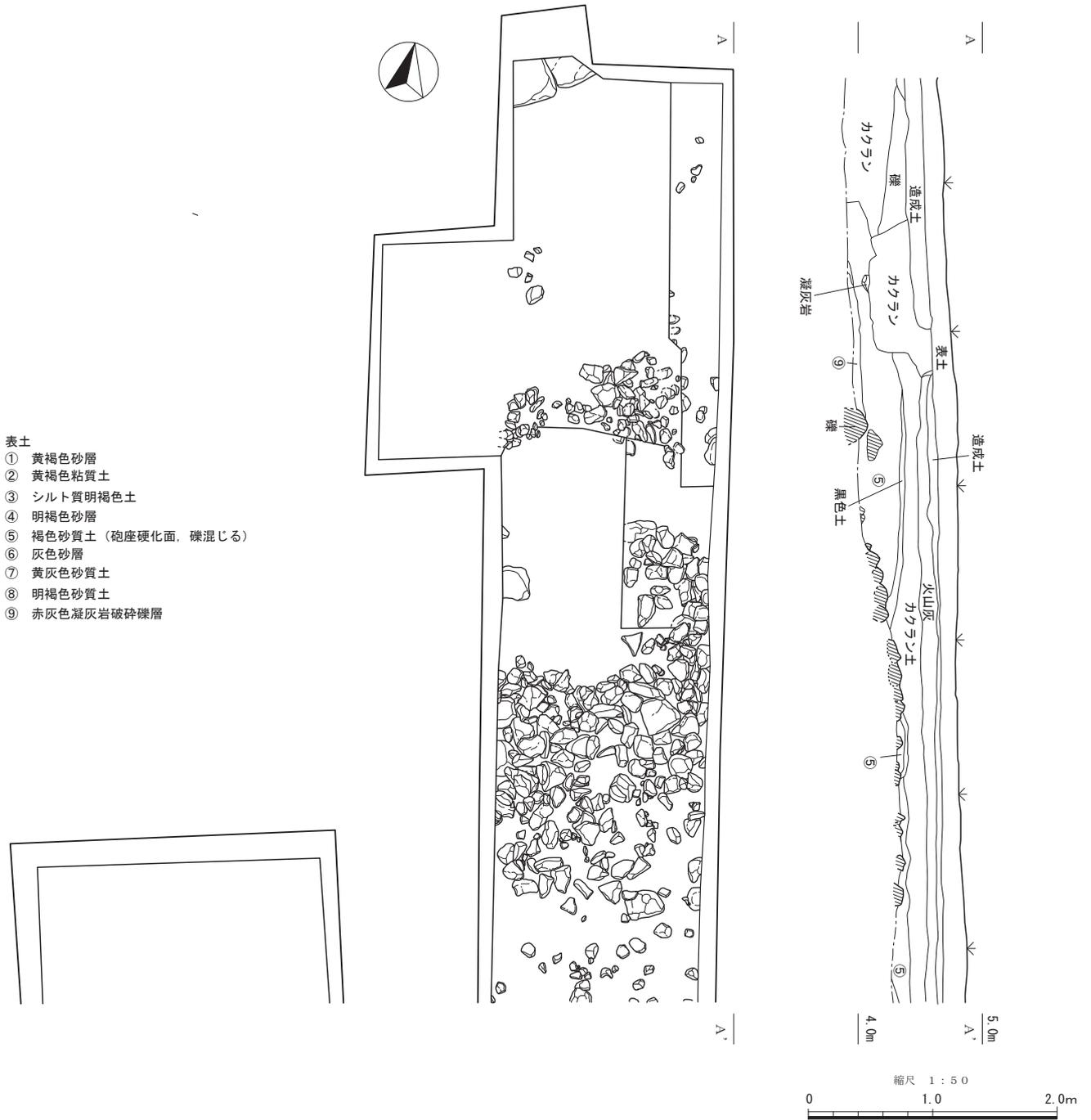
石垣の天端の石は「チキリ穴」が整合せず、「チキリ工法」が取られていた石が積み直されている。また、「チキリ穴」のない石もあった。

表10 4トレンチ出土遺物観察表

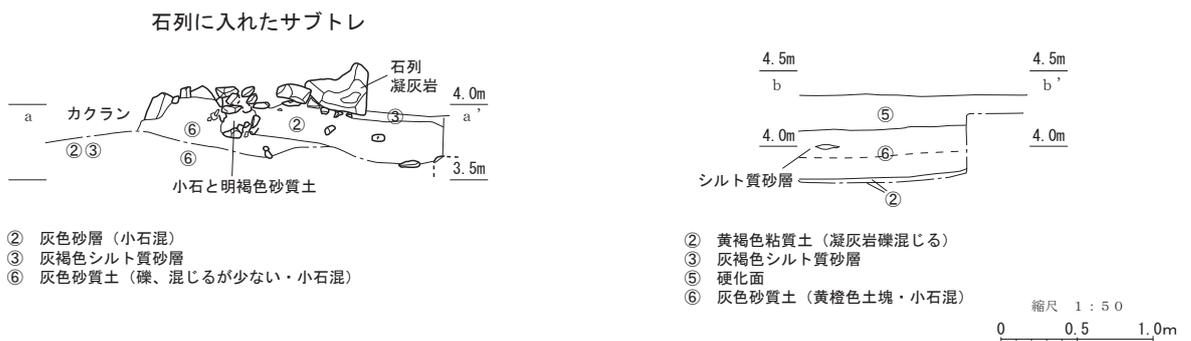
挿入番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量 (cm)			cm	胎土の色調	釉薬		時期	備考
								口径	底径	器高			種類/色調	部位		
44	51	染付	皿	皿	—	4T	②	-	4.4	-		白色	透明釉	量付は釉剥ぎ		富貴長春
	52	陶器	皿	皿	—	4T	②	-	-	-		浅黄色	—/淡黄色	—		糸切り底
	53	陶器	瓶	土瓶	薩摩	4T	②	9.2	-	-		明赤褐色	鉄釉/灰黄色	口唇部無釉		回転ナデ
	54	陶器	仏具	仏花器	白薩摩	4T	②	12.6	-	-		淡黄色	透明釉	内：頸部無釉		把手（獅子）、内：首へラ
	55	陶器	壺	壺	琉球	4T	②	17.8	-	-		にぶい赤褐色	—/暗灰色	—	19世紀代	回転ナデ
	56	陶器	壺	壺	琉球	4T	②	-	21.2	-		赤褐色	—/にぶい赤褐色	—		底部自然釉、黄色



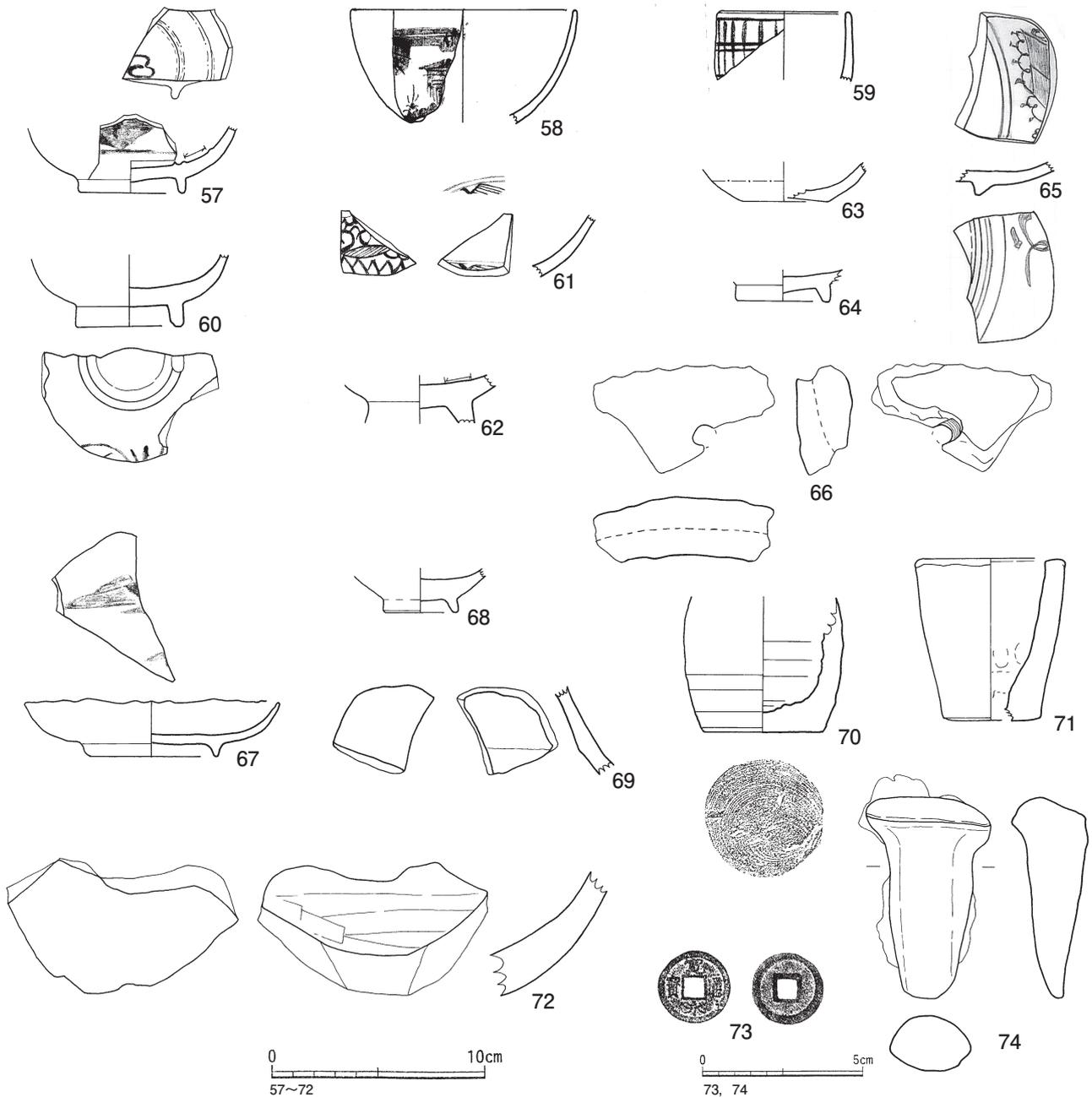
第46図 6・7トレンチ検出遺構①



第47図 6・7トレンチ検出遺構②



第48図 6・7トレンチ下層確認断面図



第49図 6・7トレンチ出土遺物

表11 6・7トレンチ出土遺物観察表

挿 図 番 号	掲 載 番 号	種 別	分 類	器 種	産 地	出 土 区	層 位	法 量 (<small>cm</small>)			<small>cm</small>	胎 土 の 色 調	釉 薬		時 期	備 考
								口 径	底 径	器 高			種 類 / <small>色調</small>	部 位		
	57	染付	碗	碗	—	6T		—	5.0	—		灰白色	透明釉	壘付は釉剥ぎ		蛇ノ目釉剥ぎ, 重ね焼痕, ローリング
	58	染付	碗	丸碗	—	6T	⑤下	10.6	—	—		白色	透明釉	残存部全部		
	59	染付	碗	筒形碗	—	6T		6.2	—	—		白色	透明釉	残存部全部		
	60	染付	碗	碗	—	6T	⑤下	—	5.0	—		白色	透明釉	壘付は釉剥ぎ		
	61	染付	碗	碗	肥前	6T		—	—	—		白色	透明釉	残存部全部		清朝
	62	陶器	碗	碗	薩摩	7T	⑤	—	—	—	高台径4.8	明黄褐色	鉄釉/オリブ黄色	蛇ノ目釉剥ぎ		ローリング
	63	陶器	皿	皿	白薩摩	6T		—	4.0	—		淡黄色	透明釉	底部無釉		回転ナデ
	64	磁器	碗	碗	—	6T	⑤下	—	4.4	—		灰黄色	透明釉	底部無釉		底部回転ヘラケズリ
	65	染付	皿	皿	—	6T	⑤下	—	—	—		白色	透明釉	壘付は釉剥ぎ		
	66	瓦	瓦	丸瓦	—	6T	⑤下	—	—	—	厚さ2.6	明黄褐色	—/明黄褐色	—		穿孔あり
	67	染付	皿	稜花皿	在地	7T	⑤	11.8	6.0	2.6		白色	透明釉	壘付は釉剥ぎ		
	68	陶器	碗	碗	—	7T	⑤	—	3.6	—		灰黄褐色	透明釉/白釉	壘付は釉剥ぎ		重ね焼痕, 蛇ノ目釉剥ぎ
	69	陶器	壺	壺	白薩摩	7T	⑤	—	—	—		淡黄色	透明釉	内面無釉		内面ヘラケズリ
	70	陶器	瓶	瓶	元立碗	7T	⑥	—	5.6	—		にぶい褐色	鉄釉/黒	底部無釉	18世紀代	米切り底, 底部内面成形あまい, 回転ナデ
	71	素焼	焼塩壺	在地	7T	⑤	6.4	4.7	7.6			橙色	—/橙色	—	19世紀代	内側指頭圧, 外側ナデ
	72	瓦器	壺	壺	—	7T	⑤	—	—	—		浅黄褐色	—/浅黄褐色	—		ナデ
	73	銭	銭	古銭	—	6T		—	—	—	径1.9/厚さ0.09 /孔0.6	—	—	—		
	74	鉄	鉄	矢	—	6T	⑤下	—	—	—	長さ5.9/幅2.5 /厚さ1.6	—	—	—		

イ 石列（第46図）

砲座硬化面の下部から弧状に並ぶ石列を検出した。これより胸牆の石垣へは、礫が配されていない。また、全体像は不明だが、そのラインは12トレンチを經由し、11トレンチで検出した積み直し前の石垣へとつながるようである。

ウ 砲座（第46・47図）

大砲を据えた砲座の硬化面を検出した。層④⑤である。⑤は多量の石を含んでおり、基盤層が浚渫の砂層であることから不動沈下防止に置かれたものである可能性が高い。

硬化面は礫等を含まない最大厚さ30cmの上部と多量の礫を含む下部で構成される。

(2) 遺物（第49図）

調査面積に対して遺物の出土が少なかった。

出土遺物の詳細は表11の遺物観察表に示した。摩滅の激しい遺物も見られ、複数の時期のものが混在している。出土した遺物は砲台使用時のものの他に、埋立地に由来するものも含まれているためと考える。在地産や肥前産の生活用具の他に71の焼塩壺が出土した。武家で使用されるものであるが、周辺は鹿児島城下であり、対岸に重富島津家邸があったため、このような遺物があるものとする。

74は、石切の矢である。石材の現場合わせに使用されたと考える。

4 8トレンチ（第50図～第52図）

6・7トレンチで砲座と胸牆の石垣の調査を行ったが、樹木があるため同一の主軸で胸牆土塁の調査を行えなかった。そのため調査が行える箇所に8トレンチを設定して、胸牆の土塁の調査を行った。

(1) 遺構（第51・52図）

8トレンチ（1×10m）では、胸牆の土塁と思われた箇所は、空き缶やビニル、ビニルパイプ等が混じり、全て昭和期の盛り土であった。ここも3トレンチ同様に護岸がコンクリートでつくられており、昭和26年のルース台風で大きく欠損したため、周囲と同じように修復した箇所と考える。

しかし、胸牆の石垣の裏込と石垣については、台風被害を受けておらず、薩英戦争時もしくは薩英戦争後に改修されたものが残っている。この修復土と砲台の土とはほぼ垂直に分れ、ここに鉄分の沈着が見られた。

石垣の天端は、6・7トレンチと同様に「チキリ穴」が整合せず、「チキリ石」も見られない。石は長方形に成形され、正面はスタレ加工が施され、成層積みで積まれている。

また、裏込は石を多く含まず、土で構成される。裏込中より出土した遺物が75、76である。

第51図（裏込）の図中左半分より下半は、3トレンチ

同様に砂と土が交互に積まれる版築土で、この層から76が出土した。第51図（裏込）右半分は土の裏込土である。

更に、裏込の下面からは大きな成形されていない礫が出土した。これが6・7トレンチの弧状の石列と関係するのかは不明である。

(2) 遺物（第52図）

8トレンチの出土遺物は、(1)で述べたように層の残存が少なかったため、裏込から出土した2点だけであった。時期も砲台よりも古いものであり、浚渫土に由来するものである。

5 11・12トレンチ（第53・54図）

6・7トレンチで検出した硬化面下部の石列と現在露出している石垣の大きく屈曲する箇所の構造を調査した。

(1) 遺構（第53・54図）

12トレンチ（1×1m）では砲座の硬化面も検出したが、6・7トレンチで検出したような多量に礫を含むものはなかった。

更に、6トレンチで検出した砲座の硬化面下部とつながるとされる石列を検出した。同様のものであるとすると6トレンチから12トレンチを通り11トレンチにつながる弧状を呈する。構築時の設計を変更して改修を行った結果である可能性があり、への字状の石垣が不自然にこの箇所できく屈曲している。石列を設計時の石垣とすると、石垣は自然な形のへの字状を呈することもそれを裏付ける。

11トレンチ（1×1.5m）でも、硬化面も検出したが、6・7トレンチで検出したような多量に礫を含む層はなかった。

更に、砲座の硬化面よりも下層で現在露出している石垣の下から石垣を検出し、石垣が積み直されていることが分かった。下層の石垣には「チキリ石」があることから、「チキリ石」がある石垣は古いものであり、6・7・8トレンチの石垣の天端は「チキリ石」を入れた穴が整合していないためこの石垣も積み直されたものとする。

また、11トレンチの積み直しの箇所は、正面を整えるために面取りの成形がしてある。しかし全体には施されず、下部は積み直し前の状態であり、作業の省略である。

(2) 遺物

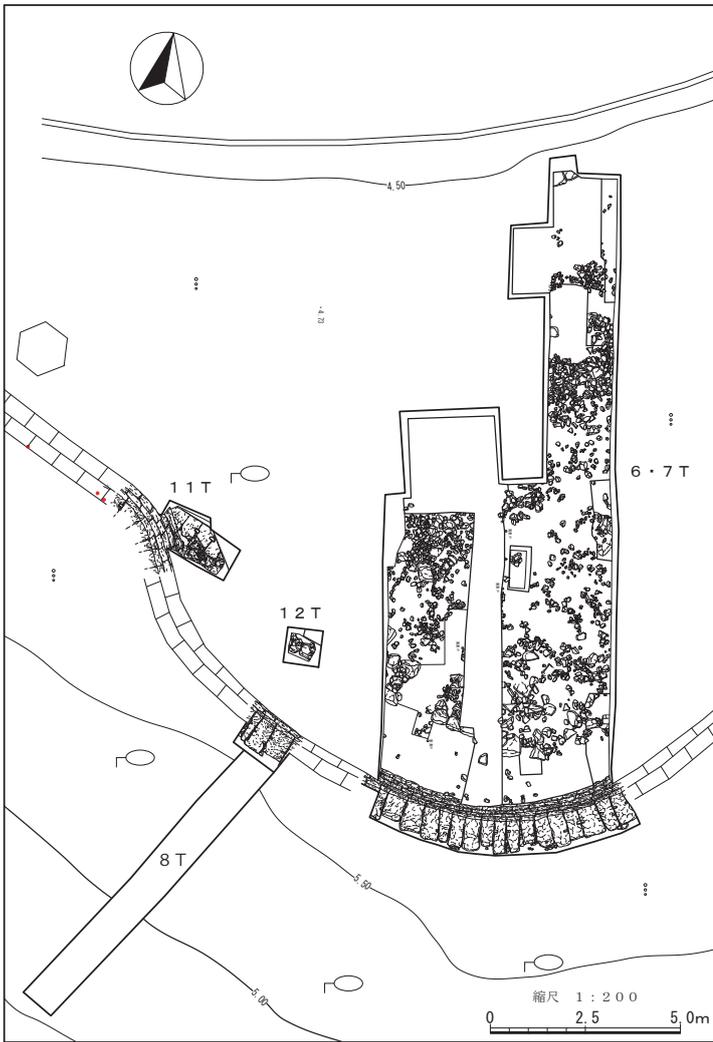
11・12トレンチから遺物の出土は無かった。

6 13トレンチ

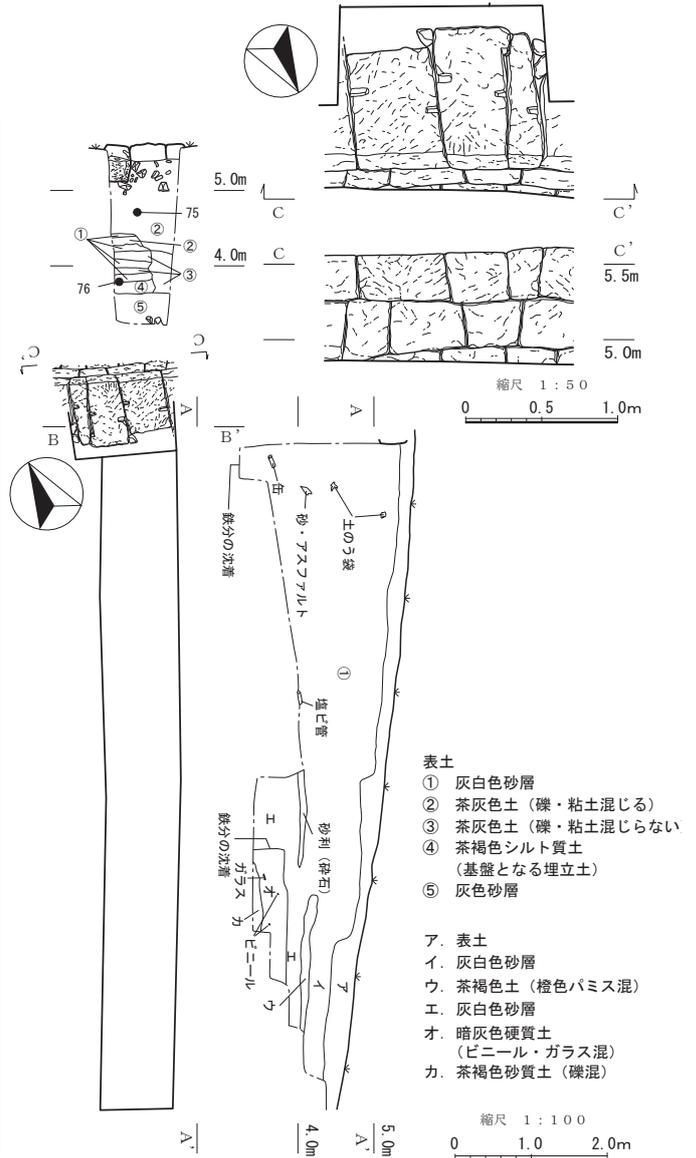
13トレンチ（1×1m）は2トレンチと4トレンチで砲座の硬化面を検出したため、その中間で砲座の硬化面が残存しているか否かを調査した。

砲座の硬化面を検出したところで調査を止めたため、層厚等は不明である。

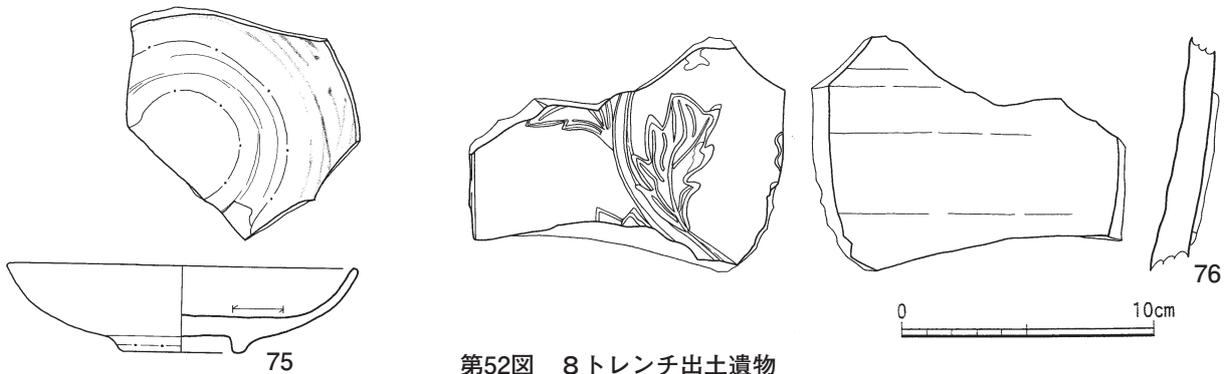
13トレンチからは遺物の出土は無かった。



第50図 8・11・12トレンチ周辺図



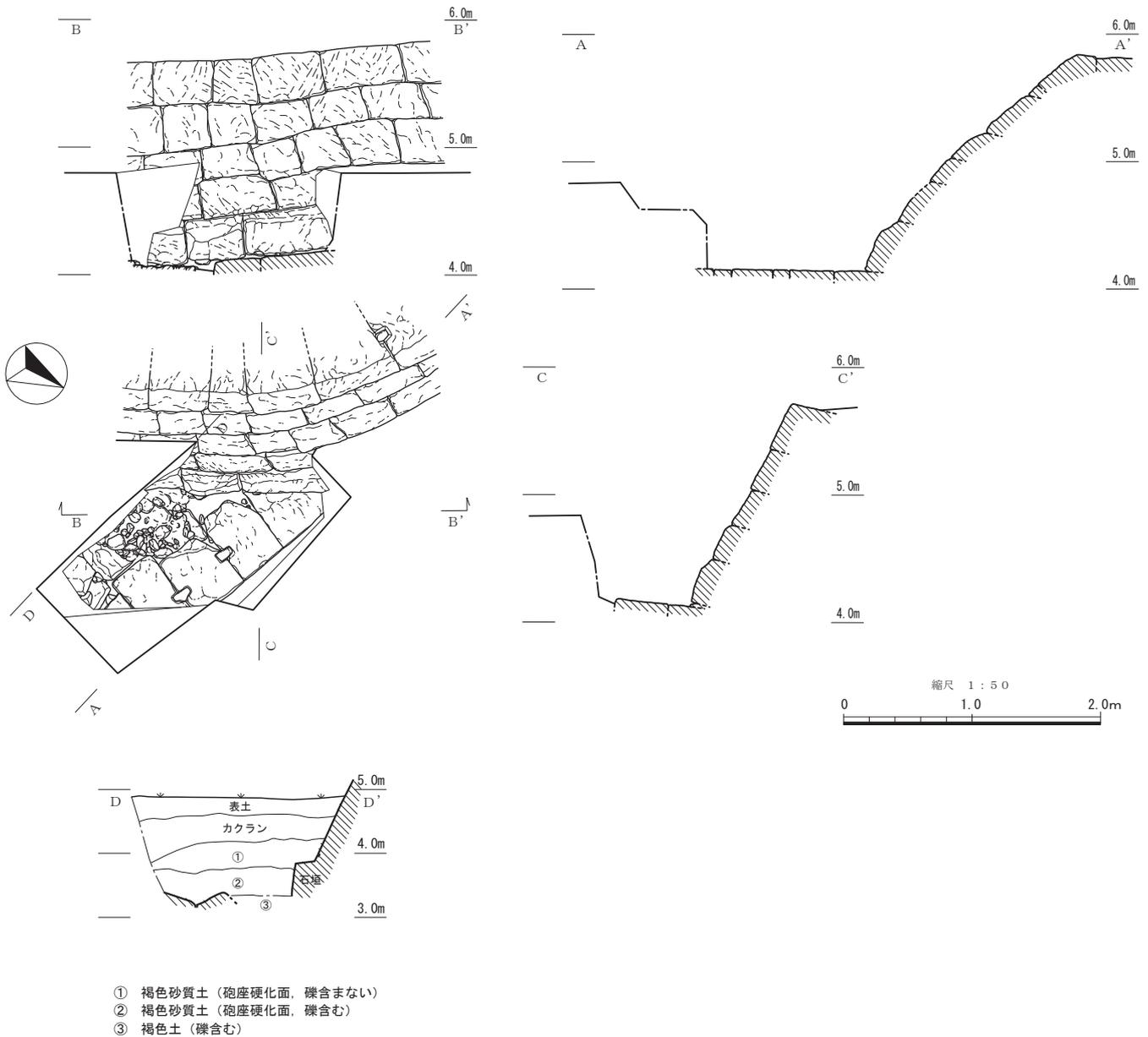
第51図 8トレンチ土層断面図及び検出遺構



第52図 8トレンチ出土遺物

表12 8トレンチ出土遺物観察表

挿入番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量 (cm)			cm	胎土の色調	釉薬		時期	備考
								口径	底径	器高			種類/色調	部位		
52	75	染付	皿	皿	—	8T	②	13.8	4.8	3.4		白色	透明釉	量付は釉剥ぎ	19世紀代	蛇ノ目釉剥ぎ, アルミナ
	76	陶器	鉢?	鉢?	—	8T	③	-	-	-		明赤褐色	—/褐色	—		貼付植物



第53図 11トレンチ検出遺構

7 9・10トレンチ（第55図～第59図）

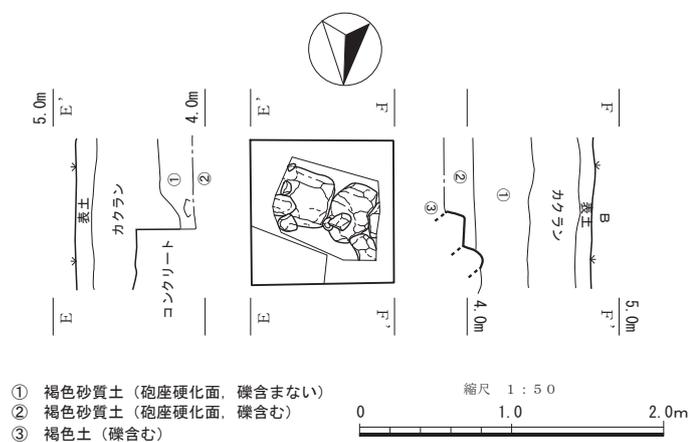
現在砲台の胸壁の石垣や土塁がない場所に設定した。その結果砲台跡に関連する遺構は検出できなかったが、異なる時期の石列や石敷を検出した。

(1) 遺構

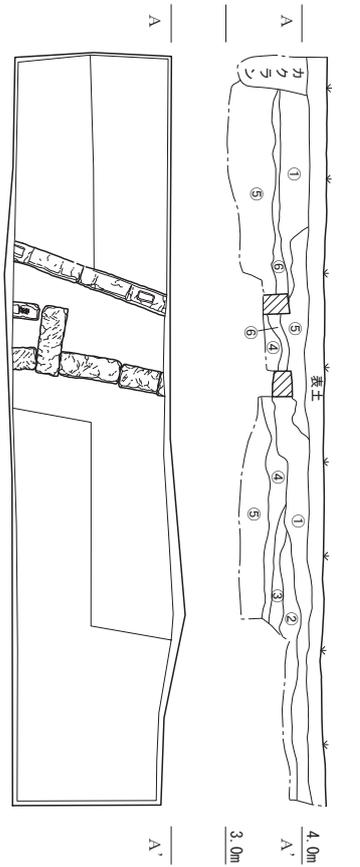
ア 9トレンチ（第55図）

凝灰岩の切石が並べられた石列を検出した。層位が不安定で時期は不明である。間地石があり、一段のみ検出し、砂層に直接構築されている。時期や用途は不明である。

北西端に大きさの違う切石が配してあるが、これに「献灯」と掘られており、官軍墓地の献灯石を再利用したものと思われる。層も石周辺が攪乱されていることから後世のものである。これより北側の石列は、コンクリートで固められ、層も攪乱が激しいことから石列の側につく

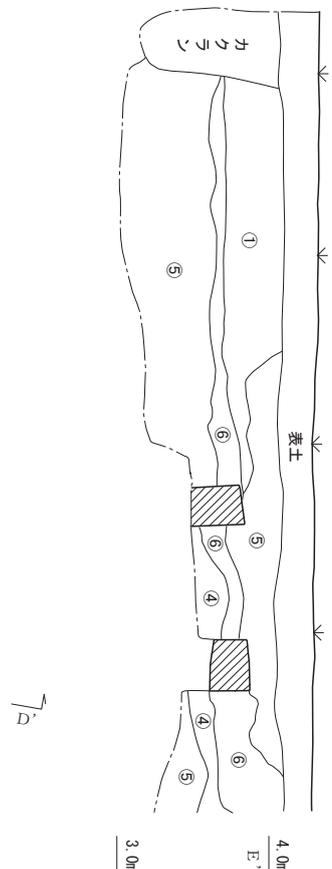
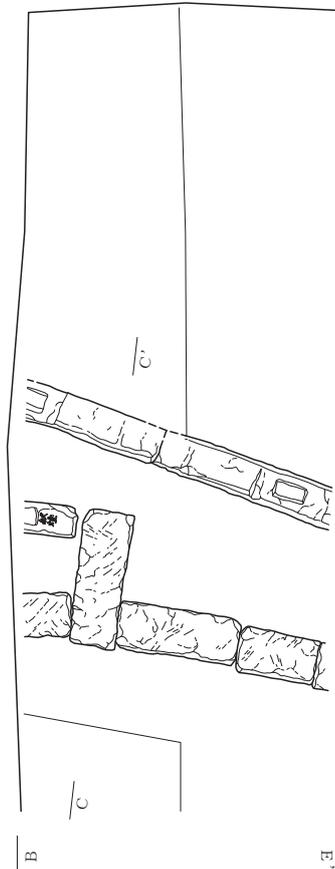
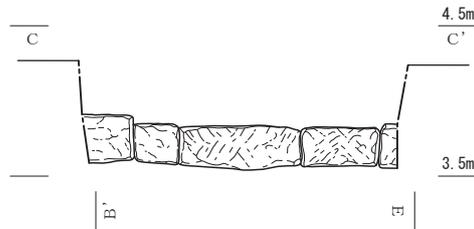
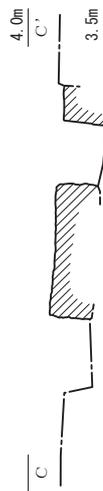
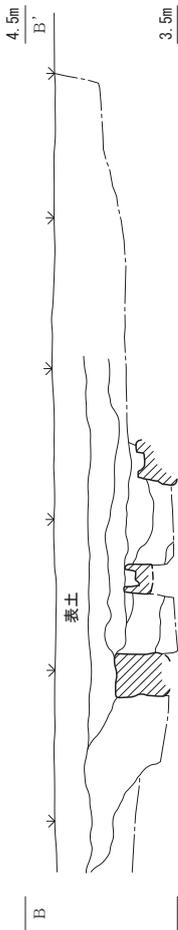


第54図 12トレンチ検出遺構



- ① 明灰色砂層
- ② 白色砂層
- ③ 明褐色砂層
- ④ 黄色砂層
- ⑤ 灰色砂層
- ⑥ 火山灰

縮尺 1 : 100
0 1.0 2.0m



縮尺 1 : 50
0 1.0 2.0m

られた後世のものである。

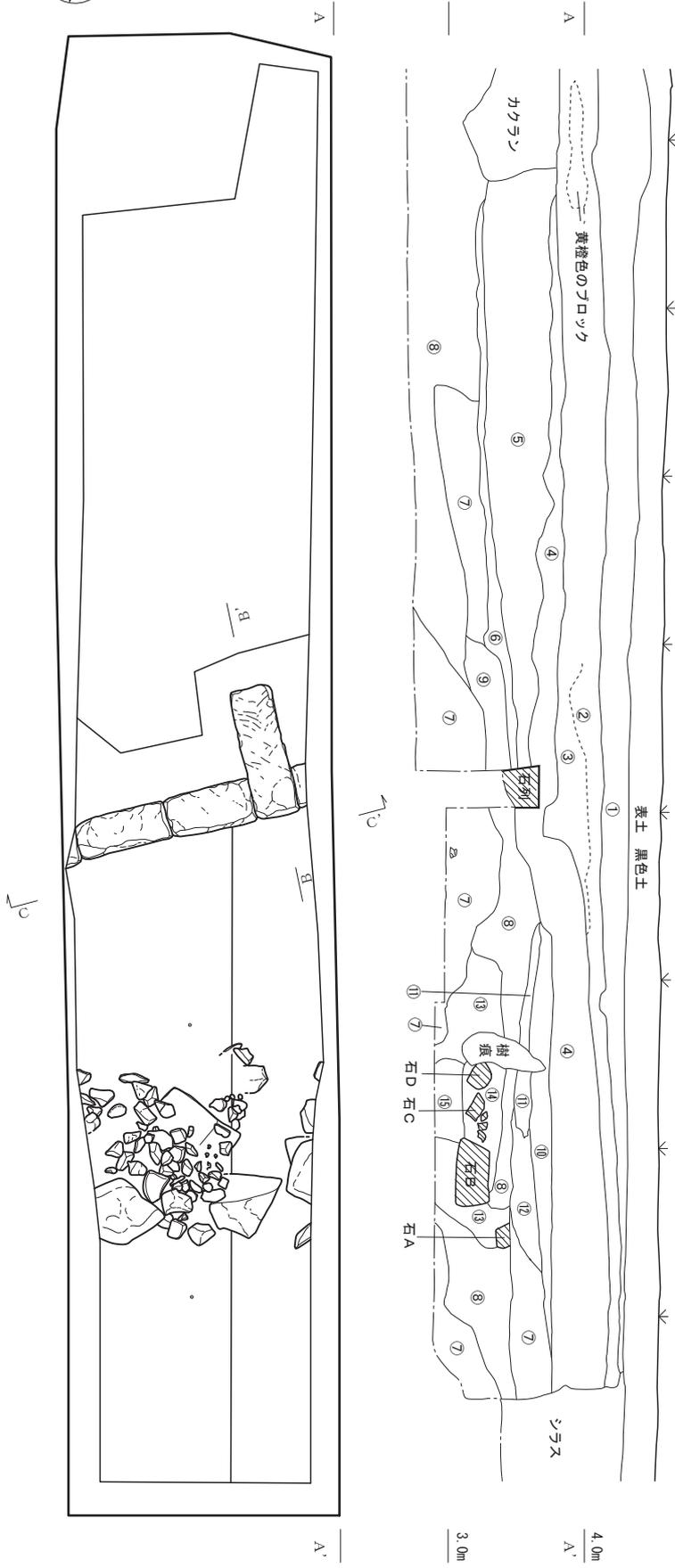
イ 10トレンチ (第56図)

9トレンチと同様に間地石を持つ石列を検出した。9トレンチ同様に一段のみの検出で直接砂層に構築されている。

この9・10トレンチで検出した石列は、砲台跡に伴うものか不明であるが、元々は数段積み重ねられていたと考えられる。

10トレンチでは地表下1.5mから礫敷を検出した。幅約2.5mを測る。標高が砲台の硬化面よりも低いため、それ以前のものとする。

第55図 9トレンチ土層断面図及び検出遺構



(2) 遺物

ア 9トレンチ

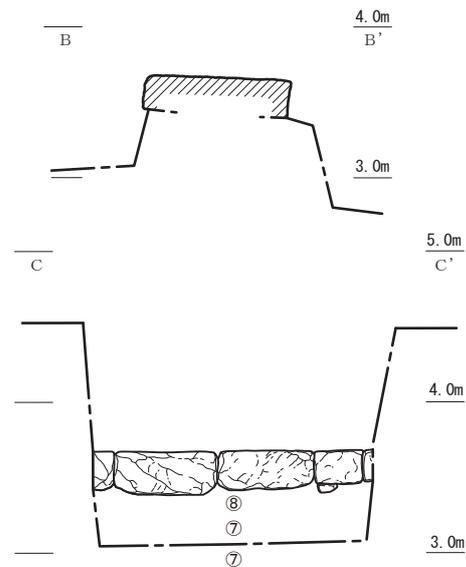
多くの遺物が出土した。表土や攪乱された箇所からは、官軍墓地に伴う仏具や陶磁器類が出土したが、近年のものとの混在して出土したため、図化せずその下層から出土したものを図化した。砲台が構築された時期だけでなく複数の時期の遺物が混在しており、浚渫土によるものとする。

イ 10トレンチ (第58・59図)

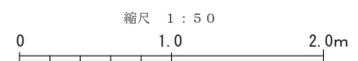
多くの遺物が出土した。表土や攪乱された箇所からは、官軍墓地に伴う仏具や陶磁器類が出土したが近年のものとの混在して出土したため、図化せずその下層から出土したものを図化した。ここには官軍墓地に伴うと思われるものは出土していないが、砲台が構築された時期だけでなく複数の時期の異物が混在しており、浚渫土によるものとする。

8 5トレンチ

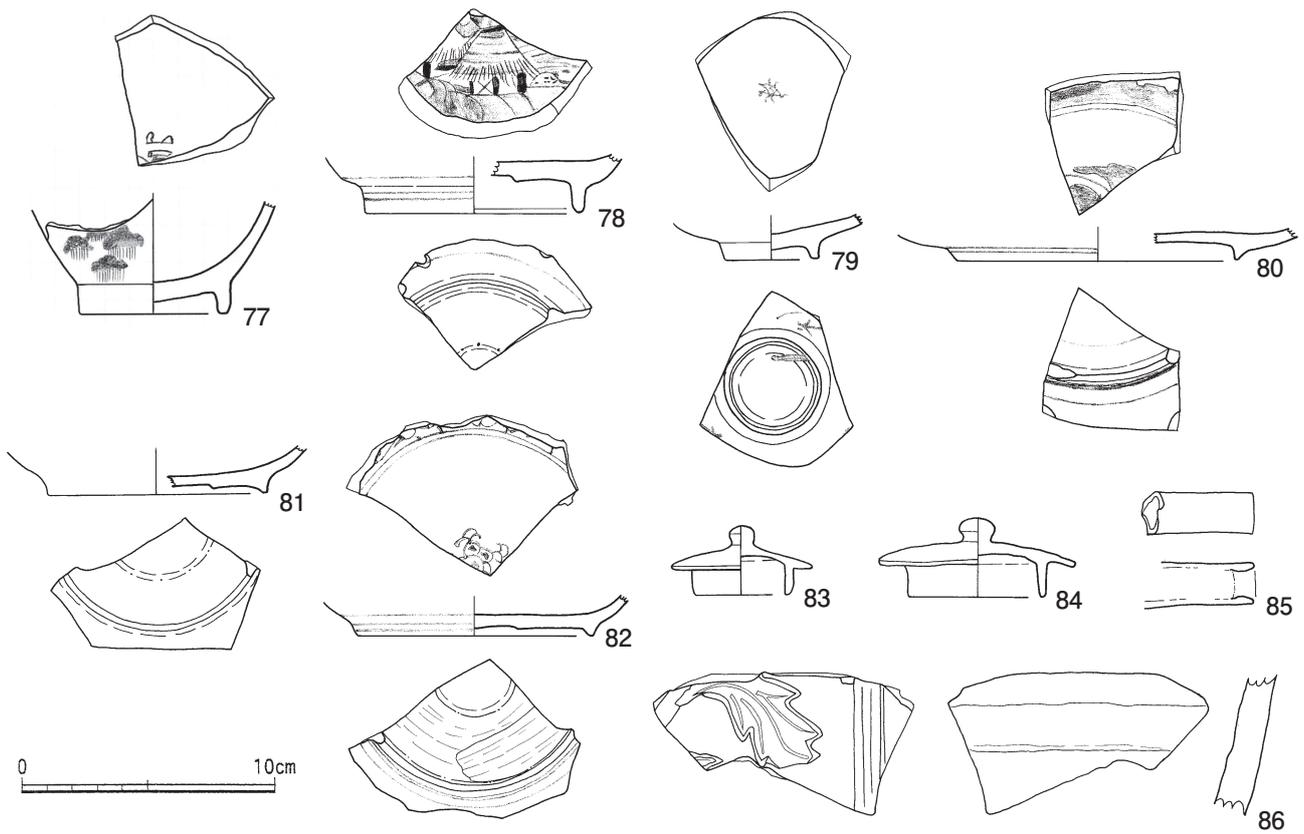
遺構・遺物ともに検出しなかった。また、攪乱が激しく砲台の時期やそれ以前の層も検出できなかった。



- 表土
- ① 公園の造成土
 - ② 火山灰
 - ③ 黄橙色のブロック混じり
 - ④ 瓦礫混じりの層
 - ⑤ 黄褐色土 硬化面
 - ⑥ 旧地表面の灰色土 (炭化物混じり)
 - ⑦ 色砂層
 - ⑧ 黄褐色砂層
 - ⑨ 明褐色砂層
 - ⑩ 灰褐色砂層 ラミナ
 - ⑪ 炭化物
 - ⑫ 茶色混灰色砂層
 - ⑬ 明茶褐色砂層
 - ⑭ 赤灰色凝灰岩
 - ⑮ 混礫明茶褐色砂層



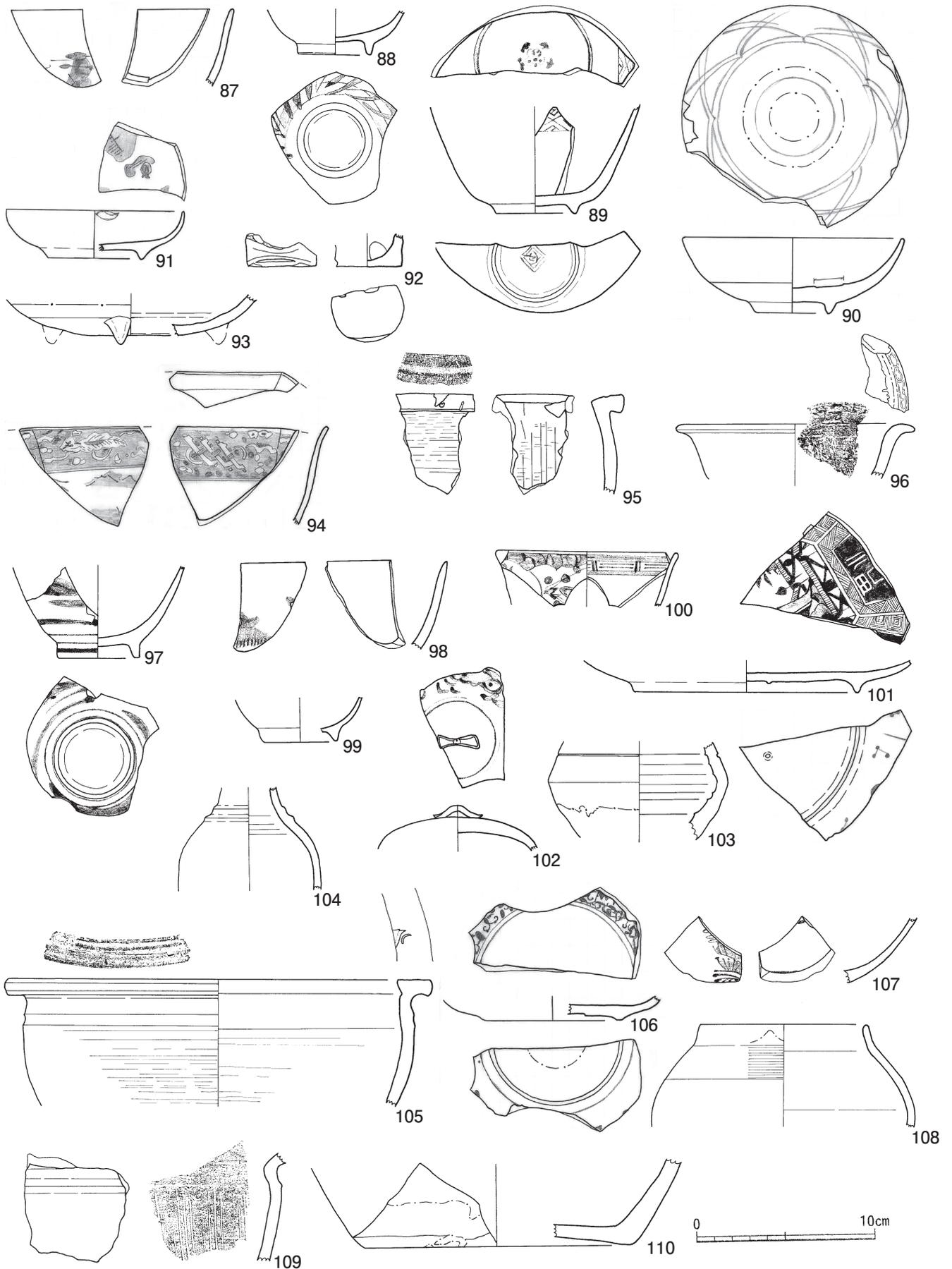
第56図 10トレンチ土層断面図及び検出遺構



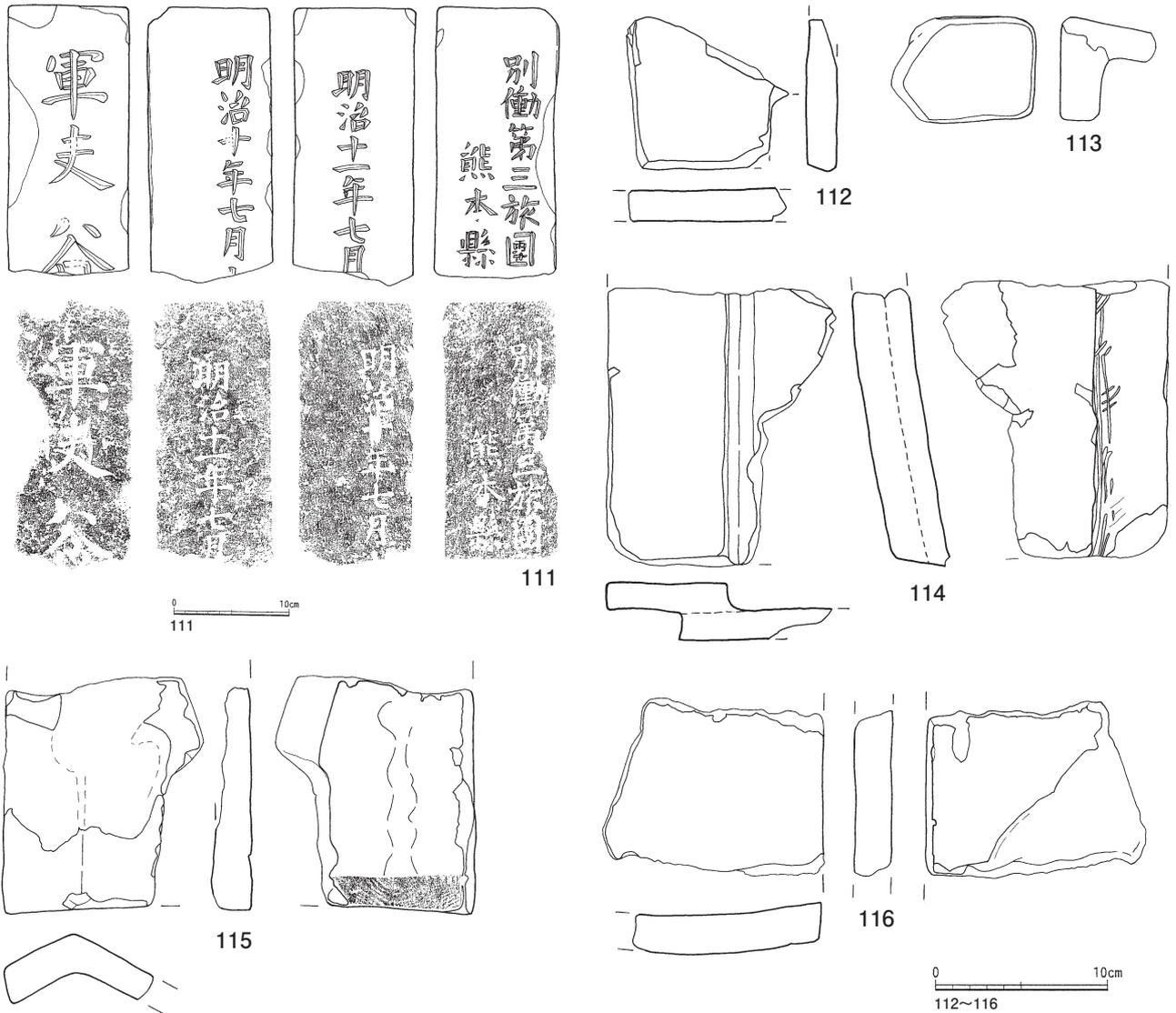
第57図 9トレンチ出土遺物

表13 9トレンチ出土遺物観察表

挿入番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量 (cm)			cm	胎土の色調	釉 薬		時 期	備 考
								口径	底径	器高			種類/色調	部 位		
	77	染付	碗	碗	—	9T	⑤	-	5.7	-		白色	透明釉	壘付は釉剥ぎ		
	78	染付	皿	皿	—	9T	⑤	-	8.6	-		白色	透明釉	底部蛇ノ目釉剥ぎ		底部, 重ね焼痕
	79	染付	皿	皿	—	9T	⑤	-	3.8	-		白色	透明釉	壘付は釉剥ぎ		
	80	染付	皿	皿	—	9T	⑤	-	11.2	-		灰白色	透明釉	残存部全部		
	81	磁器	皿	皿	—	9T	⑤	-	8.6	-		白色	透明釉	底部蛇ノ目釉剥ぎ, 壘付は釉剥ぎ		
	82	染付	皿	皿	—	9T	⑤	-	9.4	-		白色	透明釉	底部蛇ノ目釉剥ぎ		
	83	陶器	蓋	蓋	白薩摩	9T	⑤	-	-	2.8	最大径5.5	淡黄色	透明釉	外面のみ		回転ナデ
	84	陶器	蓋	蓋	薩摩	9T	⑤	-	-	3.1	最大径7.8	橙色	鉄釉	外面のみ		回転ナデ
	85	磁器	瓶	瓶? 急須?	—	9T	⑤	1.7	-	-		灰白色	透明釉	内側, 口唇部のみ	18世紀代	瓶の口? 急須? 把手?
	86	陶器	鉢	楠木鉢	琉球	9T	⑤	-	-	-		赤褐色	—/にぶい橙色	—		回転ナデ, 貼付植物



第58図 10トレンチ出土遺物①



第59図 10トレンチ出土遺物②

表14 10トレンチ出土遺物観察表

挿入番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量 (cm)			cm	胎土の色調	釉薬		時期	備考
								口径	底径	器高			種類/色調	部位		
	87	染付	碗	丸碗	—	10T	⑦	—	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部		
	88	磁器	碗	碗	在地	10T	⑦	—	4.2	—	—	白色	透明釉	量付は釉剥ぎ		
	89	青磁	染付碗	碗	—	10T	⑦	—	4.4	—	—	白色	透明釉	量付は釉剥ぎ		青磁
	90	染付	皿	皿	波佐見	10T	⑦	12.4	4.2	4.2	—	灰白色	透明釉	量付は釉剥ぎ		蛇ノ目釉剥ぎ、重ね焼
	91	磁器	皿	皿	—	10T	⑦	10.0	5.2	2.7	—	白色	透明釉	量付は釉剥ぎ		カケ、補修
	92	磁器	人形?	人形?	—	10T	⑦	—	—	—	最大径3.7	白色	透明釉	外側のみ		
	93	陶器	土瓶	土瓶	薩摩	10T	⑦	—	5.4	—	—	橙色	鉄釉	脚部無釉		回転ナデ
	94	染付	鉢	角鉢	—	10T	⑦	—	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部	18世紀代	上手
	95	陶器	鉢	播鉢	薩摩	10T	⑦	—	—	—	暗赤褐色	鉄釉	口唇部無釉		ハケ目、口唇部回転ナデ	
	96	陶器	鉢	播鉢	薩摩	10T	⑦	13.6	—	—	—	にぶい橙色	鉄釉	口唇部一部無釉		口唇部重ね焼、回転ナデ内かきあげ
	97	染付	碗	碗	在地	10T	⑧	—	4.4	—	—	白色	透明釉	量付は釉剥ぎ		幕末
	98	染付	碗	丸碗	—	10T	⑧	—	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部		
	99	磁器	坏	小坏	福建省	10T	⑧	—	4.0	—	—	白色	透明釉	量付~高台内底無釉	18世紀末~19世紀初頭	徳化窯
	100	磁器	碗	端反碗	—	10T	⑧	10.2	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部		
	101	染付	皿	皿	肥前	10T	⑧	—	12.6	—	—	白色	透明釉	量付は釉剥ぎ	18世紀代	はりささえ、上手
	102	磁器	蓋	蓋	—	10T	⑧	—	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部		つまみ
	103	磁器	壺	壺	—	10T	⑧	—	—	—	最大径10.0	灰黄色	透明釉	底部付近無釉・内側無釉		回転ナデ、沈線
	104	磁器	壺	壺	—	10T	⑧	—	—	—	最大径8.0	灰白色	透明釉	内側無釉		かまぼこけずり出し(首段差)
	105	陶器	鉢?	鉢?	薩摩	10T	⑧	23.8	—	—	—	黄灰色	鉄釉	口唇部無釉		貝目、ハケ目、回転ナデ
	106	磁器	皿	皿	—	10T	⑩	—	7.6	—	—	白色	透明釉	量付は釉剥ぎ		底部蛇ノ目釉剥ぎ
	107	磁器	碗	碗	—	10T	⑩	—	—	—	—	白色	透明釉	残存部全部		
	108	陶器	瓶	土瓶	薩摩	10T	⑩	8.2	—	—	最大径14.4	にぶい赤褐色	鉄釉	残存部全部		回転ナデ、ハケ目
	109	陶器	鉢	播鉢	薩摩	10T	⑩	—	—	—	—	にぶい赤褐色	鉄釉	残存部全部		三角(ケズリ出し、回転ナデ)
	110	陶器	鉢?	鉢?	薩摩	10T	⑩	—	15.0	—	—	にぶい赤褐色	鉄釉	底部無釉		ハケ目、底部外面ヘラ
	111	墓石	墓石	墓石	—	10T	—	—	—	—	縦10.5/横10.5/長さ4	黄灰色	—	—	—	四面文字書き
	112	瓦	瓦	棧瓦	—	10T	⑦	—	—	—	厚さ1.7	灰白色	—/暗灰色	—	—	
	113	瓦	瓦	(サイド)	—	10T	⑧	—	—	—	厚さ1.9	灰白色	—/灰色	—	—	ローリング
	114	瓦	瓦	棧瓦	—	10T	⑩	—	—	—	厚さ1.6	褐灰色・灰白色	—/灰色	—	—	2枚重ね
	115	瓦	瓦	棧瓦	—	10T	⑩	—	—	—	厚さ2.1	灰白色	—/灰色	—	—	ローリング
	116	瓦	瓦	棧瓦	—	10T	⑩	—	—	—	厚さ2.2	灰白色	—/灰色	—	—	ローリング

第5節 総括

1 調査成果

第4節の調査成果を砲座、胸牆の石垣・土塁、チキリ、護岸についてまとめると表15のようになる。

表15 祇園之洲砲台跡調査成果

砲座	大砲を置いた砲座の硬化面を検出し、広範囲に残存している状況をつかむことができた。
胸牆	胸牆石垣の造り方や形状、土塁の残存状況をつかむことができ、チキリ石と土塁の構築法から薩英戦争前のものが残存している範囲と薩英戦争直後に改修が行なわれた範囲を区別できた。
護岸	石垣・石畳について薩英戦争前の砲台建設時のものも残っており、薩英戦争後の改修時の姿を留めていると考えられる。
遺物	薩英戦争前（1853年～1863年）とその直後の改修及び明治10年の官軍墓地設営以後（1863年～1877年）などについて、細かな層位的差異は出土遺物では判断できなかった。

この成果を基に残存範囲を下図に示した。

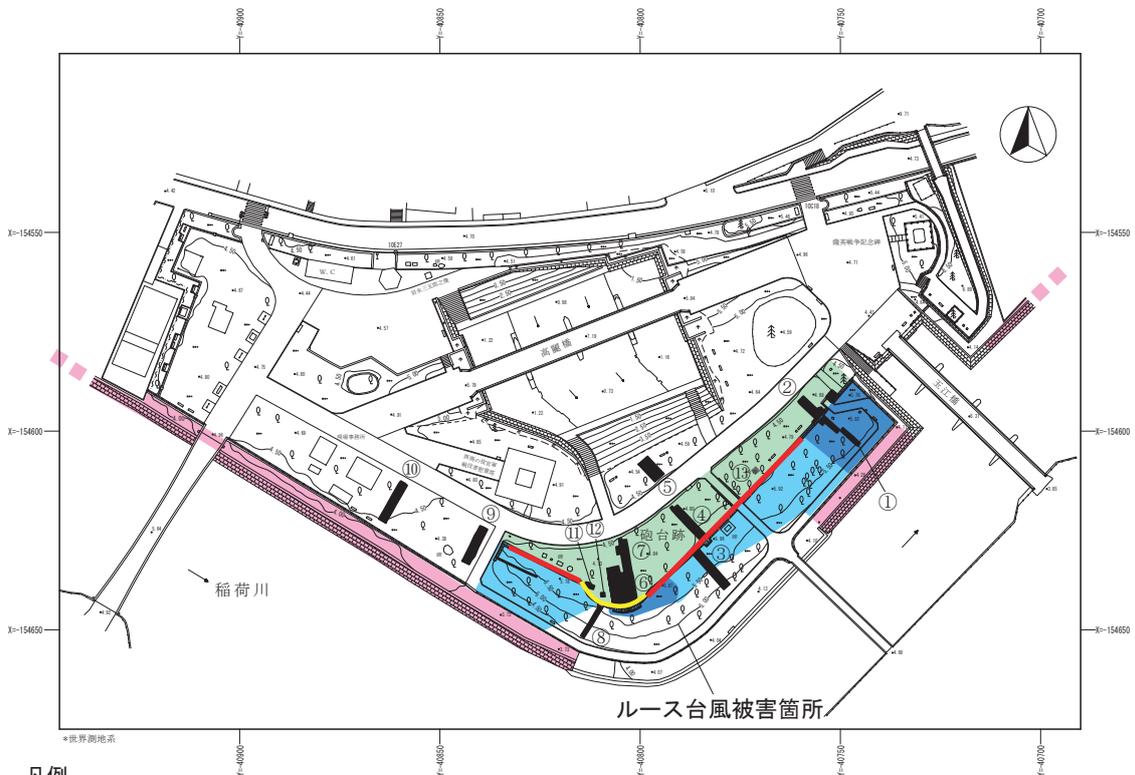
胸牆の石垣は、現在露出しているもの全てが祇園之洲砲台のもので、「チキリ石」の残存範囲を赤で示した。砲座は、攪乱を受けているが、2・4・6・7・11・12・13トレンチで検出できたため、胸牆の石垣が残存している範囲で公園の園路より内側全てに残存していると

考える。なお石垣の傾斜は、いずれのトレンチでも75度前後であった。

胸牆の土塁については、3、8トレンチの調査結果から、ルース台風の被害箇所が推測される箇所を除いた胸牆石垣に伴う箇所に残存していると考ええる。

更に、胸牆石垣の天端の「チキリ石」の残存の有無と土塁の構築法とを対比してみると、「チキリ石」が残る3トレンチでは土塁が砂と土が交互に積まれた版築土であるのに対し、「チキリ石」も「チキリ穴」もない1トレンチでは砂と土を交互に使用するものの、整然とした版築層とはなっていない。「チキリ石」については、11トレンチの調査で、「チキリ石」のあるものが古いものであることが分かっている。史料に見られる祇園之洲砲台跡の改修は、1858（安政5）年の改修と薩英戦争後の改修である。二つの改修のうち大規模であったと考えられるものは薩英戦争後の改修であるため（附編参照）、「チキリ石」がある箇所が、砲台築造時や薩英戦争前の胸牆が残る箇所、「チキリ石」の無い箇所が薩英戦争後に改修された箇所であると考えられる。（巻頭図版4・5）

胸牆のない9、10トレンチでは、官軍墓地に伴う可能性のある石列が検出できたため、砲台以外の層が残存していると考えられる。



凡例

- : 砲座の硬化面残存範囲
 - : 胸牆の石垣・土塁の残存範囲（砲台築造時）
 - : 胸牆の石垣・土塁の残存範囲（薩英戦争直後の改修？）
 - : 胸牆の石垣「チキリ」の残存範囲（砲台築造時のまま残存）
- : 護岸石垣、石畳の残存範囲
 - : 薩英戦争直後に改修した石垣が残っている部分
 - はトレンチ
 - はトレンチ番号

第60図 祇園之洲砲台跡残存範囲

2 鹿児島市調査との比較

(1) 胸牆石垣 (第62図)

平成9年度に鹿児島市教育委員会(以下市教委)が現在玉江橋が移設されている箇所を調査を行った際に、7段の胸牆の石垣が確認されている。今回調査した4、6トレンチは6段の石垣であるため、2トレンチで石列の左右で6段と7段に分かれたものが段数を維持してそのまま続いているようである。今回の調査と同様に、石垣は砲台跡の基盤層である砂層の上に直接構築され、胴木等は使用されていない。また、市教委の調査では石垣に付随した階段も調査されているが、今回調査を行った箇所には残存していなかった。石垣天端の「チキリ石」については、特に記載がないため不明である。砲座についても硬化面が検出されているが、6・7、12トレンチで検出した敷石や、弧状に並ぶと考えられる石列も検出されていない。

(2) 胸牆土塁の石列(石組)(第61~63図)

1トレンチで胸牆の土塁の下部から石列を検出した。1段のみの検出であるが、基盤層である砂層に直接構築され、正面が胸牆の石垣と反対の海側を向き、胸牆の石垣から約10m離れて並行する。これと同様の石列(石組と報告)が、市教委が調査した際にも検出されており、

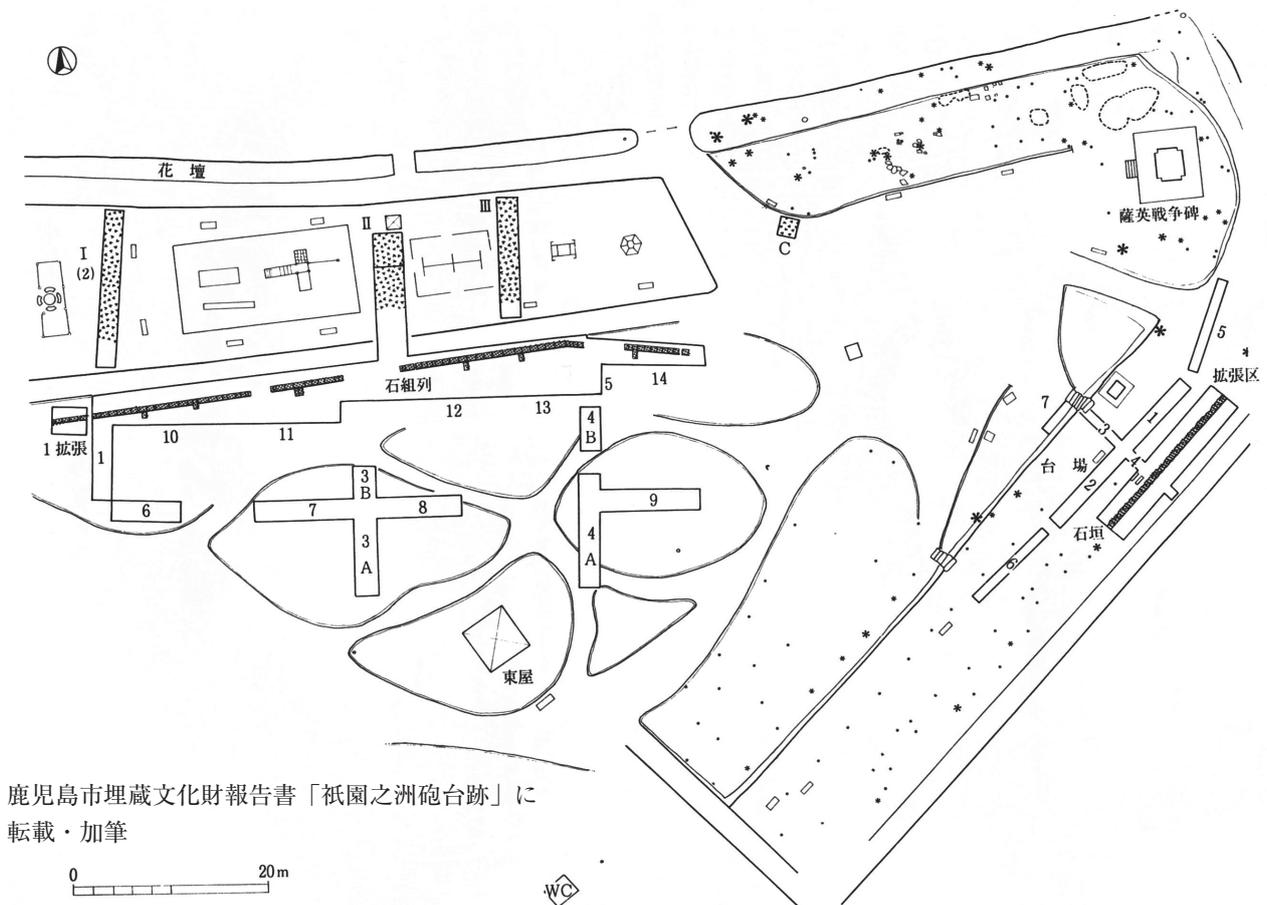
正面が海側を向くこと、胸牆石垣との幅が約10mであり、胸牆に並行することは共通する。市教委の調査で検出したものは、数段積まれていることが異なるものの同じ遺構であると考えられる。

市教委の調査では更に、石列(石組)に伴う階段が検出されているが、今回の調査では検出できなかった。

(3) 石列(石組列)(第61図)

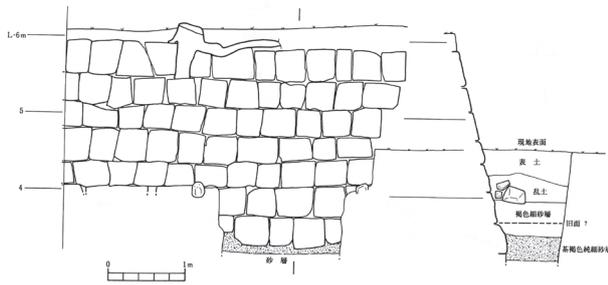
9、10トレンチで間地石を持つ石列を検出した。同様の遺構が市教委の調査でも現在西田橋が移設されている箇所でも検出されている。今回調査のものは1段で市教委の調査時のものは数段と段数に差があるが構造はよく似ている。しかし、市教委の発掘調査報告書の中では、「祇園洲砲臺圖」『薩藩海軍史』の図で砲台の山側に記載されている長方形もしくは弧状のものに比定している。この図を見ると胸牆が太いへ字で描かれ、その両脇に細い線で石垣もしくは土塁のようなものが描かれている。9・10トレンチで検出したものがここにあたるものか層が安定しておらず、不明である。

また、10トレンチの下部で検出した礫敷もこの石列と並行しているが、標高に大きな開きがあり、これが前述のものであり、間地石を持つ石列が砲台以後のものであるかも不明である。

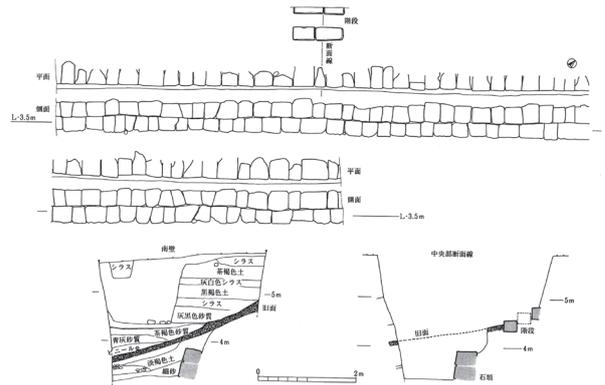


鹿児島市埋蔵文化財報告書「祇園之洲砲台跡」に
転載・加筆

第61図 鹿児島市調査の遺構位置図



第62図 鹿児島市調査の遺構図①



第63図 鹿児島市調査の遺構図②

3 古絵図・古写真との比較

調査成果と古写真・古絵図との比較を行っていくが、まず、比較する古絵図・古写真に見える祇園之洲砲台について記載し、その後、検討を行うことにする。

(1) 薩英戦争絵巻 (附編参照)

薩英戦争絵巻に見える祇園之洲砲台については、附編にも記載されているが、備砲は、キスト砲架が採用されていることがうかがえる。残念ながら胸墻や弾薬庫などについては、詳細な記述がされていない。

(2) 明治5年撮影 (巻頭図版8下) の古写真

明治5年に明治天皇が鹿児島へ行幸された折り、鹿児島港に浮かぶ軍艦を撮影したものに祇園之洲砲台の一部が写っている。

その部分から、砲座には内陸側へ張り出す半円形の砲床の軌条があり、そこにキスト砲架の大砲が配備され、軌条の両サイドには胸墻に階段が設置されていること、胸墻は大きく屈曲して広がる部分があること、砲座の内陸側に弾薬庫があることが分かる。

(3) 「祇園洲砲臺圖」『薩藩海軍史』(第32図)

描かれた年代が不詳の図である。同本中には祇園之洲砲台の他に新波止砲台、弁天波止砲台、大門口砲台、天保山砲台を描いたものもある。

この絵から、祇園之洲砲台が海側に護岸を持ち、護岸から平場を隔ててへの字状の胸墻の土塁が盛り上がり、その後方に砲座があることがわかる。胸墻は平行な太い線で表現され、そこに方眼もしくは大砲と思われるものを10箇所描いている。また、ここには方位を示す文字と海へと延びる線も描かれている。

更に火薬庫と思われるものが、胸墻の真中付近に描かれる。

(4) 「祇園洲砲臺之圖」『薩藩砲臺圖稿本』(第33図)

明治5年頃に描かれた図である (鹿児島市教育委員会編「祇園之洲砲台跡」田村省三氏付論77～82頁)。同稿

本中には、祇園之洲砲台の他に天保山砲台、新波止砲台、弁天波止砲台、大門口砲台に加えて薩英戦争後の築造である東福寺ヶ城砲台と風月亭砲台も描かれている。

この絵図からも「祇園洲砲臺圖」同様な砲台の構造がうかがえる。しかし、への字状を呈する胸墻の頂点になる部分は古写真や現在の胸墻の状態と同じく大きく屈曲しており、「祇園洲砲臺圖」と異なる。火薬庫の位置については古写真と同じである。また、横墻についてもよく描かれ、備砲を直線で描き、その両サイドに階段と思われる短い直線を描いている。

更に、胸墻等の軍事的な場と離れた箇所にも新波止砲台の古絵図、現状や天保山砲台の古絵図や発掘調査成果に見られるような荷揚場も描かれている。

(5) 調査成果との比較

以上3点の古絵図、1点の古写真について概要を記載した。

この中で現状に近いものは、(2)の古写真と(4)の「祇園洲砲臺之圖」である。このことは、胸墻の石垣がへの字状を呈する頂点部分で大きく屈曲することによる。この2点には、軌条や軌条脇の階段、横墻、荷揚場、火薬庫など現在は見られないものも描かれている。これらは、祇園之洲砲台に官軍墓地が造営され、その後収骨されたことや市営アパートが建設されたこと、数度にわたる公園整備、眼前の埋立地の構築、高麗橋と玉江橋の移設等この地において幾度と無く大規模な土地の改変があったため、その都度少しずつ改変されてきた結果であると考えられる。

しかし、護岸と胸墻についてはルース台風で破壊された箇所を除きよく残存しており、今回の調査成果と市教委の調査成果から、高麗橋、玉江橋の周辺についても祇園之洲砲台と官軍墓地の層や遺構が広範囲に残存していることが予想される。

次いで古絵図中での遺構の位置について考えたい。

「祇園洲砲臺圖」『薩藩海軍史』、「祇園洲砲臺之圖」『薩

『薩藩砲臺圖稿本』の2点の図はともに胸墻はへの字状に描かれ、胸墻から延びる細い土塁のようなものが両脇に描かれている。また、2点ともに砲台は、土塁もしくは石垣で周辺と仕切られた空間として描かれている。

胸墻の形状と、への字状の頂部の屈曲については先述したとおりであり、現状と重なる。

この胸墻から延びる細い土塁・石垣のようなものは、胸墻の西側に設置した9トレンチで明確な痕跡をとらえることができなかった。検出した間地石を持つ石組がそれに当たる可能性もあるが、攪乱を受け、増築のような痕跡もあり、官軍墓地に関する遺物も多く出土していることから、時期の特定ができなかったため不明である。胸墻の西端も今回の調査で検出できなかったが、現状は西端は近年積み直されたものであるものの、古絵図中での胸墻の屈曲部と現状の屈曲部が同一箇所であることからすると、この積み直しがある現状の西端から9トレンチまでの間に本来の胸墻の西端があると考えられる。

次は砲台全体の両端についてであるが、西側は第60図に祇園之洲砲台の現況測量図を示している範囲が2点の古絵図に土塁もしくは石垣で周辺と仕切られた空間として描かれている箇所にはほぼ相当すると考える。

砲台西側の家屋は官軍墓地の直ぐ脇に建てられた家屋であること（家主談、地籍図より）による。

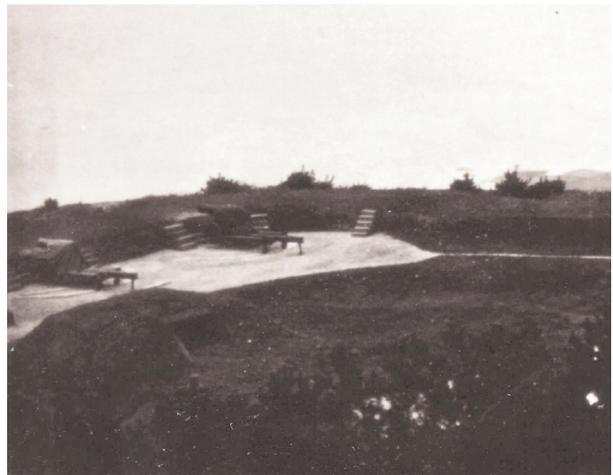
東側については、市教委が玉江橋移設地の調査を行った際の調査成果を見ると、ここはまだ胸墻のあった場所であり、砲台の東端は、更に東側、現在マンション等が立ち並ぶ場所にあると考える。

その詳細な場所については、砲台跡から連続して延びる護岸の石垣が途中でとぎれ、コンクリートを使い新しく造り直されており、一部破壊されているものの砲台跡の石垣はその新しく造られた石垣の内側にあるようであり、不明である。

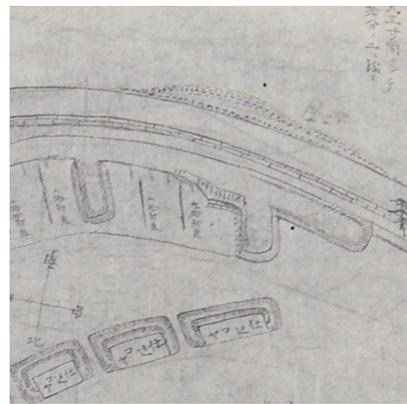
このように、祇園之洲砲台跡の発掘調査成果は、古絵図や古写真とよく対比でき、古絵図中で検出遺構の位置を特定できた。また、残存している層や遺構も広範囲に及び古絵図に描かれた範囲の推測もできた。

薩摩藩が欧米列強の軍事力、国力を知り、近代化へと向かうきっかけとなった薩英戦争において実際に砲撃戦を交えた砲台跡についてこのような成果を得られたことは、非常に意義が大きい。

他に類を見ない砲台跡であり、後世に引き継ぐべき遺産である。



第64図 明治5年撮影の鹿児島港 古写真部分拡大



第65図 「祇園洲砲臺之圖」『薩藩砲臺圖稿本』部分拡大



第66図 祇園之洲砲台跡東側現状写真
図中の白線が砲台の護岸の石垣痕跡
現在の護岸が図中右で砲台の石垣を隠すようにつくり
られている

第5章 天保山砲台跡

第1節 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

天保山砲台跡は、鹿児島県鹿児島市天保山町24番に所在する。(遺跡位置図)

遺跡は、鹿児島湾に流れる甲突川の河口に位置し、眼前に桜島を眺める。遺跡周辺は沖積平野であり、度重なる洪水で河口が土砂で埋まり流れが遮られたため、幕末期に河口を浚渫して広げているうちに土砂置き場が埋立地となり、その上に築かれた砲台である。

2 歴史的環境

(1) 天保山砲台跡略歴

砲台の所在する埋立地は、天保年間に甲突川河口に土砂がたまり支障をきたしたため、河口の浚渫を繰り返すうちに土砂置き場が大きな埋立地となり、天保年間にできたので天保山と呼ばれるようになった。

以下が天保山砲台の略歴である。

1850(嘉永3)年に第十一代藩主島津斉興によって砲台が築造され、以後、数度にわたり砲撃訓練、練兵訓練が行われた場所である。

1858(安政5)年 島津斉彬は天保山砲台での訓練の帰路急病にかかり死去した。近くには島津斉彬の碑が残る。

1863(文久3)年の薩英戦争(島津忠義)では打撃を受け戦争直後に改修が行われた。

明治以降になると、明治5年の明治天皇行幸の際にお召艦隊との軍事訓練が行なわれた記事はあるが、それ以後は、明治10年の西南戦争後に管轄が兵部省に写ったこと以外に天保山砲台についての記載が激減する。

その後、来歴は不明な点が多いが、昭和7年には、天保山砲台の一部を含む大規模な護岸工事が行われ、現在も幕末期の遺構をこの護岸が護っている。

鹿児島市は、史的評価を考慮し、1974(昭和49)年に天保山砲台跡を鹿児島市指定史跡とした。

(2) 天保山砲台跡周辺の歴史

『薩藩海軍史』に「向江船手略圖」(第67図)があり、図から砲台の背後となる場所に水路が巡らされていることが分かる。

また、『旧薩藩御城下絵図』(第69図)を見ると安政年間には甲突川の奥には城下町が広がり、甲突川河口付近には向江船手等があり、天保山砲台も描かれている。

安政年間に佐賀藩で描かれた『薩州見取絵図』、薩英戦争を記録した「薩英戦争絵巻」には天保山砲台に築山が描かれている。

(1)でふれたように、明治以降天保山砲台跡の記載が激減する。

周囲にすむ住人も少なかったようであるが、天保山砲

台周辺は松林越しに桜島を望む絶好の景観から、以後、旅館などが建ち並ぶ景勝地となっていったようである。

また、鹿児島湾に面した砲台南側には、塩田がつくられ、塩の生産が盛んに行われるようになっていった。

大正3年の桜島の大爆発の際には、噴火の影響で起きた津波により周辺の塩田が水に浸かり、塩田は大きく破壊されたということも知られている。

江戸時代において軍事的にも、物流拠点としてもよく整備された鹿児島港は、明治時代になると、大型船舶による大量輸送を行うために一部を取り壊したり埋め立てるなどして大きく姿を変えていった。そのなか、鹿児島港とは甲突川で隔たれた天保山砲台は、この港湾工事からまぬがれて形を変えずにいたが、昭和になり、先づ天保山砲台の河口に面した北側部分の前面が埋立てられ姿を変え、1970年代以降海岸部が次々と埋立てられ、与次郎ヶ浜が整備されていった。



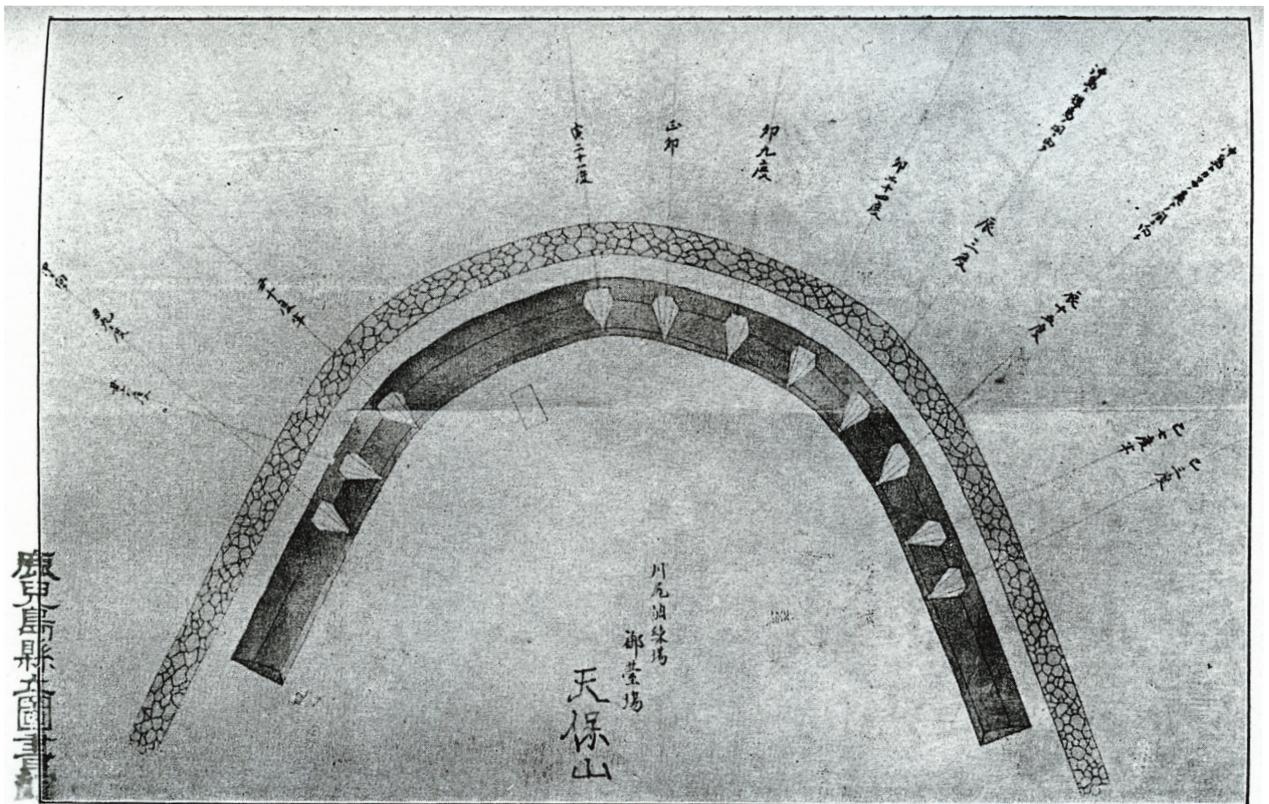
第67図 向江船手略図 「薩藩海軍史」より



第68図 薩英戦争絵巻 尚古集成館蔵



第69図 旧薩藩御城下絵図 鹿児島県立図書館蔵



第70図 川尻調練場(天保山)臺場圖 『薩藩海軍史』

第2節 発掘調査の方法

1 発掘調査の方法

今回の発掘調査は、天保山公園内に砲座石列、石垣、土塁が露出している箇所を中心に、古絵図を参考にトレンチを設定して行った。各トレンチは、古絵図で石畳状のものが描かれている場所に1・2トレンチと20トレンチ、露出している石垣を境に、砲座の構造と残存状況及び石垣正面の構造と残存状況を調査するトレンチと石垣の天端や裏込の構造・残存状況及び土塁の構築法や残存状況を調査するトレンチの2つを対にして、東側から3トレンチ、4トレンチ、5トレンチ、6トレンチ、7トレンチを設定し、築山に8トレンチ、石垣が露出していない平場に17トレンチ、18トレンチ、19トレンチを設定した。また昭和7年に護岸工事が行われている周辺に9、10、11、12トレンチを設定し、17トレンチから12トレン

チの中間に15トレンチを設定した。

また、地形測量は、世界測地系を基準に行った。検出遺構の実測や土層断面図の作成は、任意に設けた点を結び世界測地系を基に行い、一部実測測量を行った。

2 整理作業の方法

整理作業は、鹿児島紡績所跡、祇園之洲砲台跡、天保山砲台跡の3遺跡を総じて行った。

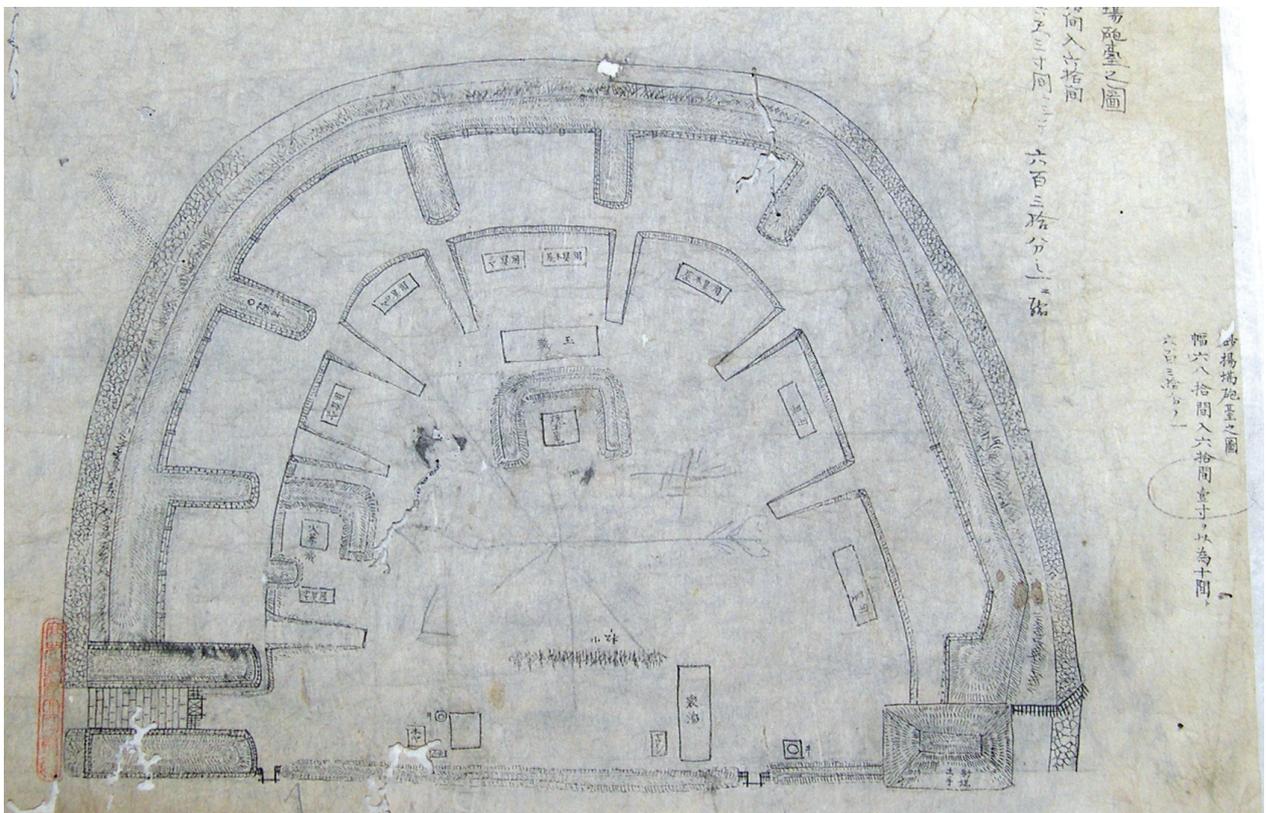
第3節 層序

本遺跡は、大まかに砲座、胸牆の土塁、護岸、中央の焼玉竈を含むその他の砲台関連施設の地区（遺構）に区分できる。23か所のトレンチを設定して調査を行ったところ、層序は地区毎に異なっていた。

各地区の基本層所は、下表のとおりであり、詳細については、各トレンチ毎に図示する。

表16 天保山砲台跡の基本層序

砲座	土塁	その他
表土	表土	表土
公園造成土含む	公園造成土含む	公園造成土含む
砲座を構成する土層	土塁を構成する土層	
埋立地の造成土（砂層）	埋立地の造成土（砂層）	埋立地の造成土（砂層）



第71図 砂揚場臺場之圖「薩藩砲臺圖稿本」

第4節 発掘調査の成果

今回の天保山砲台跡の発掘調査は、天保山砲台跡の地下の残存状況と現在露出している遺構の構造調査を目指し、現状と「川尻訓練場(砂揚場)臺場圖」『薩藩海軍史』(第70図)、「砂揚場臺場之圖」『薩藩砲臺圖稿本』(第71図)の古絵図を参考に23箇所のトレンチを設定して調査を行った。

調査は、まず、1～12トレンチを設定して行った。

この12箇所のトレンチについては調査状況をふまえながら必要に応じて拡大し、更にそれらを補うために13トレンチから23トレンチを設定して調査を行った。

その結果、キスト砲架を設置した軌条の敷石と、大砲発砲のために砲兵が昇降したと考えられる階段の組み合わせを2箇所、海(河口)から砲台内部へとほぼる荷揚場の石畳と側壁の石垣を1箇所など、複数の遺構を検出した。これらは、全国的に見ても検出例が少なく、貴重なものである。

更に検出遺構は、「砂揚場臺場之圖」の古絵図と一致

するところが多く、「砂揚場臺場之圖」の古絵図中で検出遺構の位置を特定できたことから古絵図のとおりに残存していることも分かった。

また、遺跡の残存状況についても把握することができた。遺跡の残存範囲については、第5節で述べる。

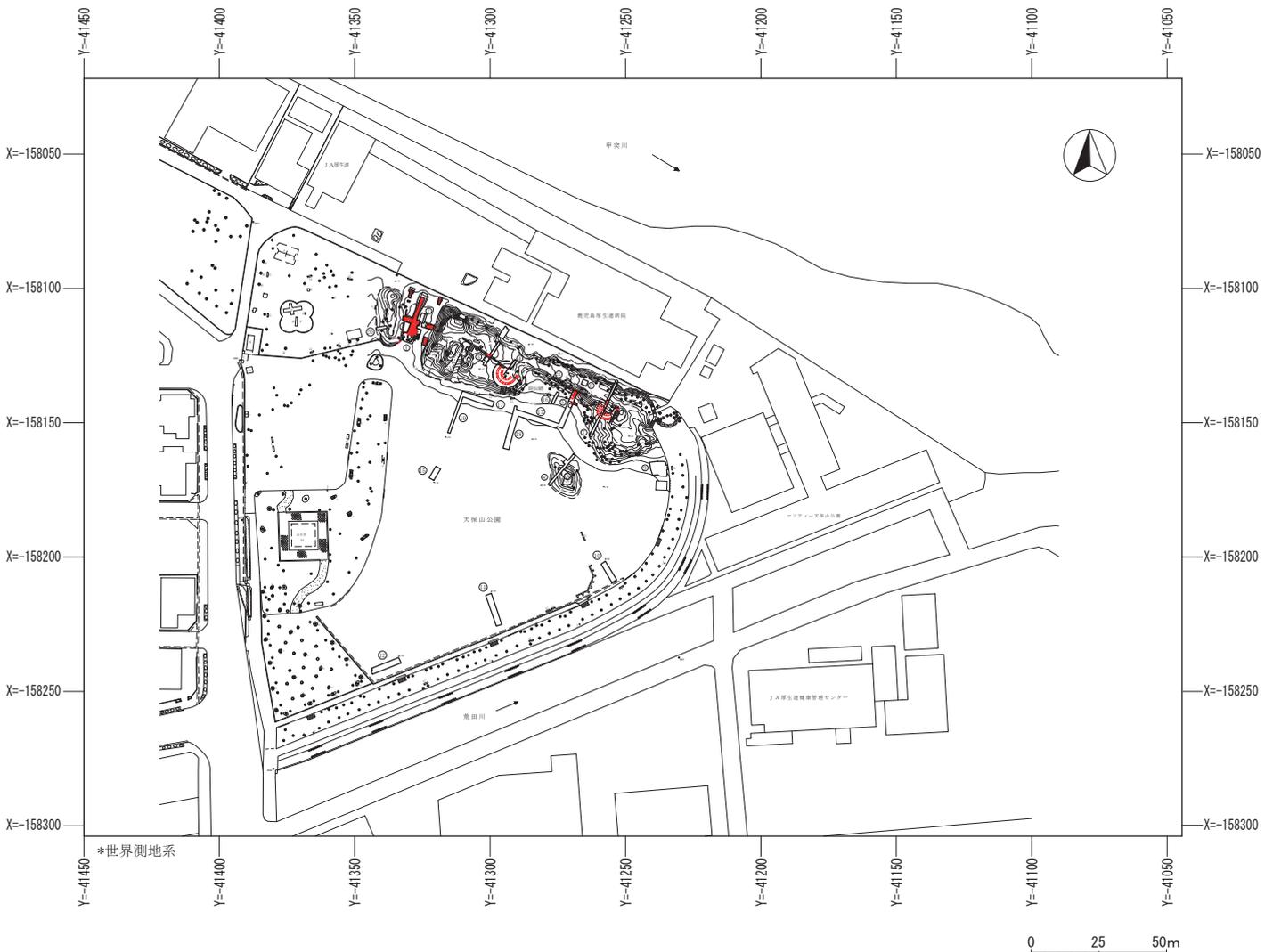
出土した遺物の量は多くはなかったが、砲座や胸墻の土塁から出土している。

出土した遺物の時期は、砲台の時期だけでなくそれ以前の遺物も出土している。

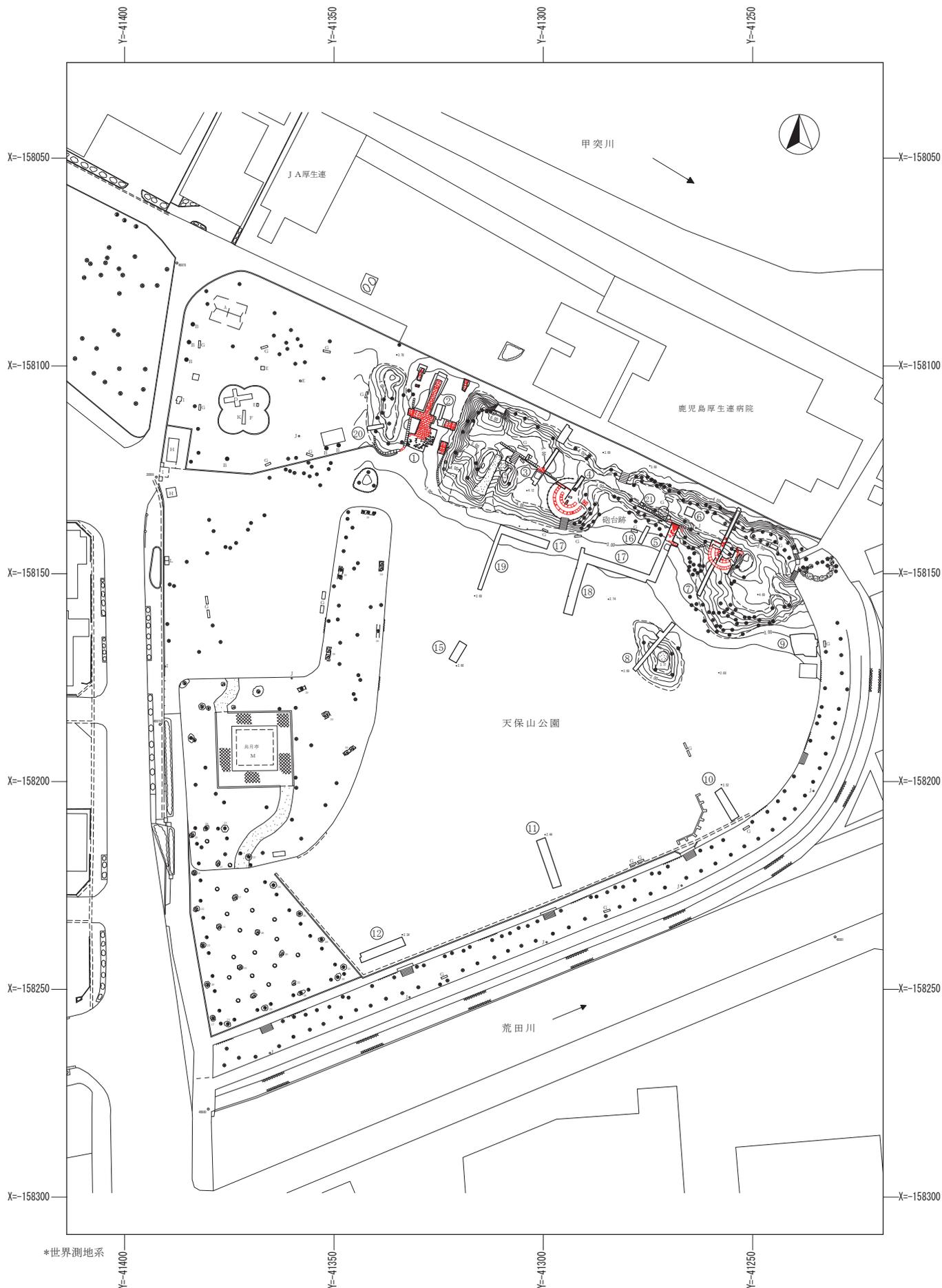
更に、遺跡全体でも陶磁器だけでなく瓦器なども出土しており、種類も生活用具から仏具までと豊富である。

このことは、砲台築造に使用された土砂が、甲突川の浚渫土であるため、様々な時期の遺物が混在しているものと考えられる。

以下トレンチ毎に遺構・遺物等の調査成果について説明していきたい。

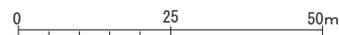


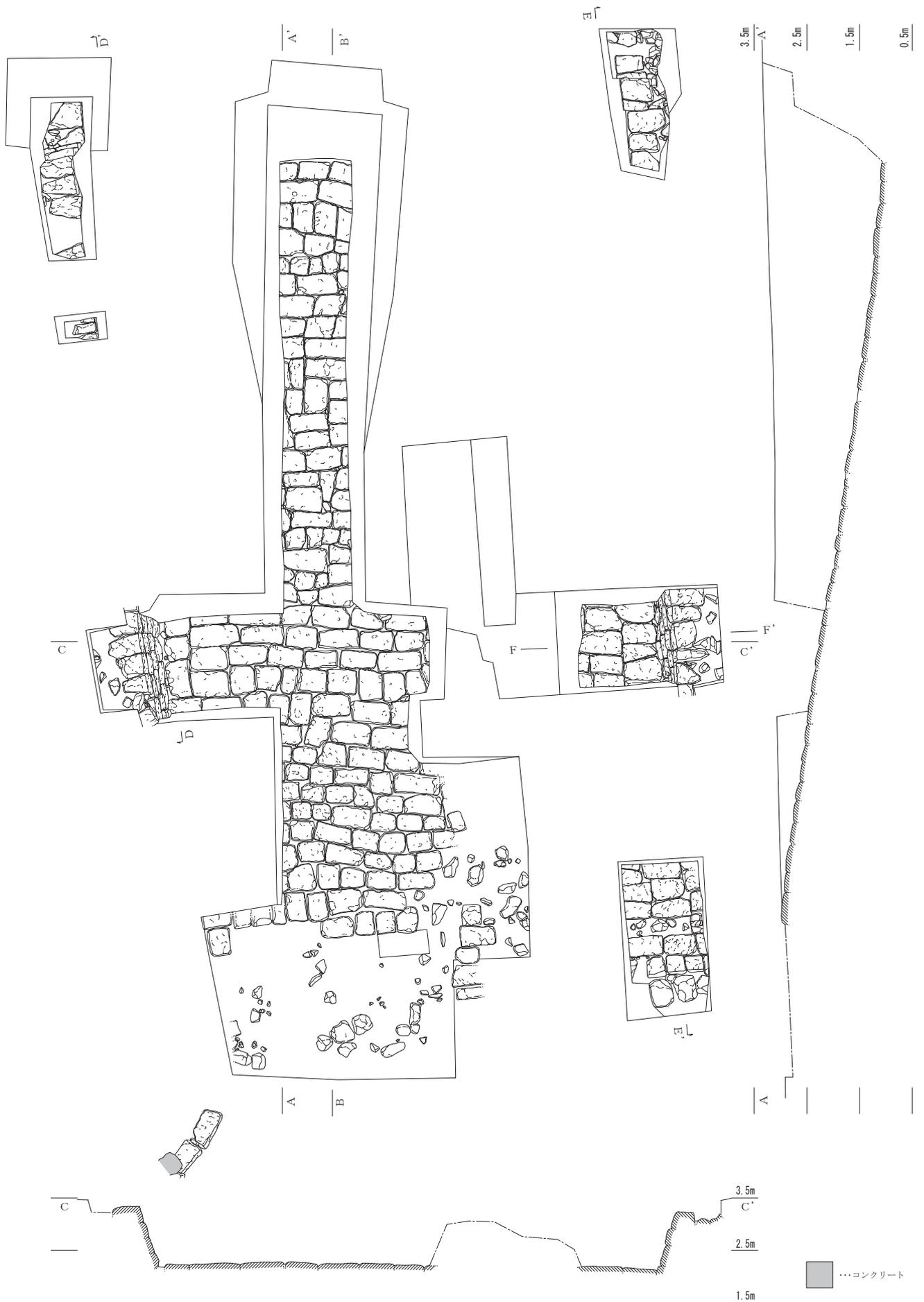
第72図 天保山砲台跡周辺地形図



*世界測地系

第73図 天保山砲台跡トレンチ配置図

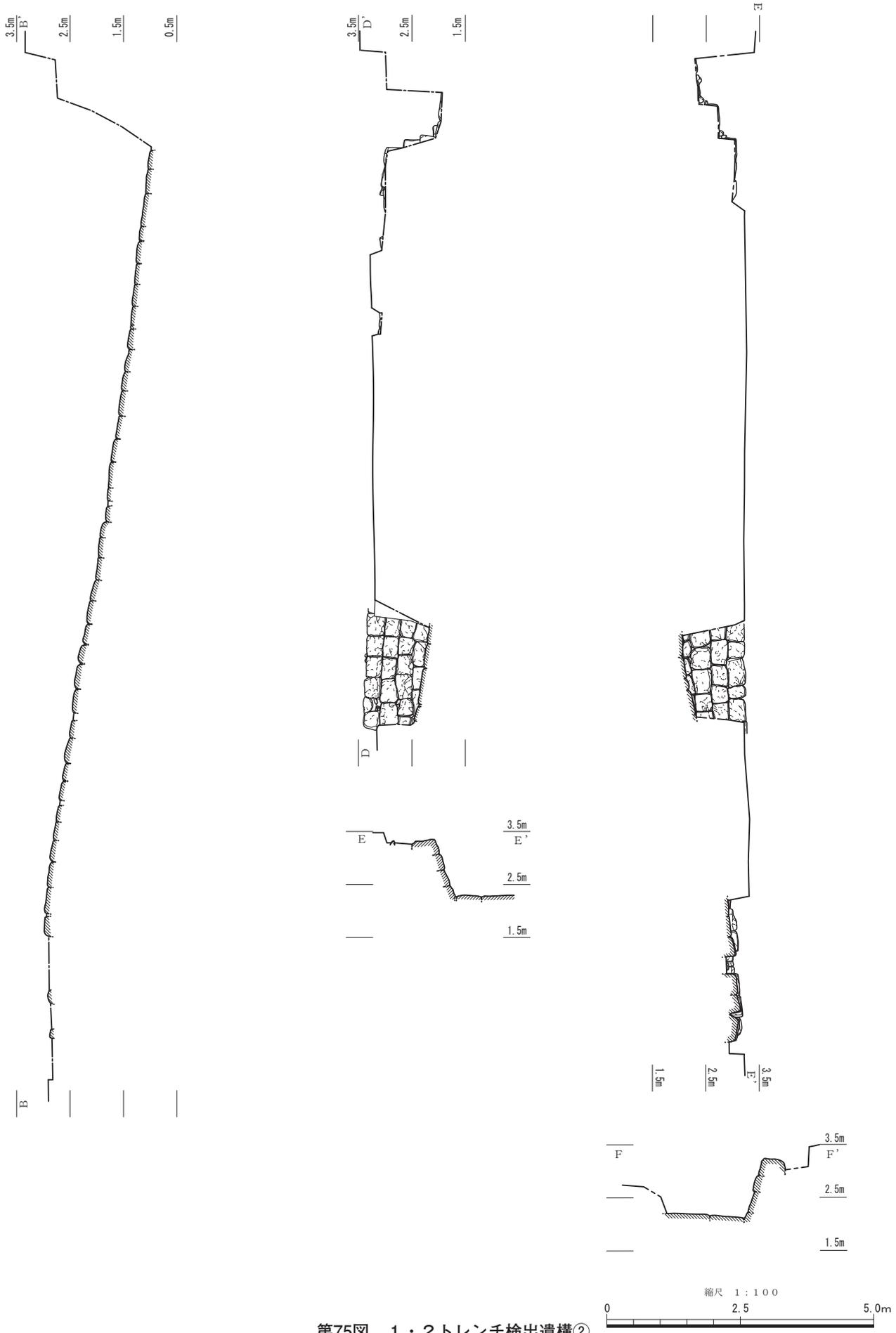




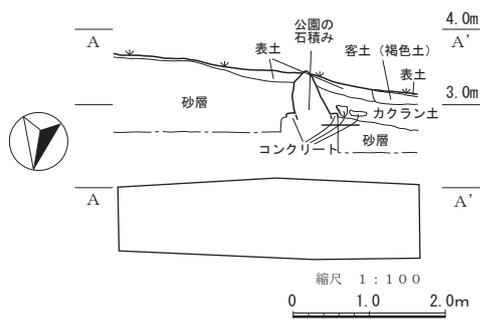
第74図 1・2トレンチ検出遺構①

縮尺 1 : 100
2.5

0 2.5 5.0m



第75図 1・2トレンチ検出遺構②



第76図 20トレンチ土層断面図

1 1・2トレンチ (第74・75図)

(1) 遺構 (第74・75図)

1・2トレンチの調査では、石畳とそれに伴う石垣を検出した。石畳の一部は壊されて残っていなかったが、残存状況は極めて良好である。「砂揚場臺場之圖」『薩藩砲臺圖稿本』に格子目が描かれている位置にあたりと考える。

海（河口）からの荷揚場であり、このような遺構が砲台跡に付随する例は全国的にも珍しい。

検出した石畳は砲台内側最端部で標高が約3m、海側で標高1.3m、全長10mを測り、傾斜角約10度である。また、石畳の両側は石垣で囲われている。砲台内側最端部の下部で幅約9m、石垣天端で約9.2mを測り、Cラインでの石垣の傾斜角が75度である。

また、海側の最奥部の石垣天端で幅約10.5mを測り、石垣の上部は砲台内から海側へ向かい徐々に開いていく形となっている。

石畳に敷かれた敷石は丁寧に成形された切石が並べてある。長辺は不規則であるが、短辺は0.3m程度にそろえられており、表面に凹凸はなく滑らかである。

石垣の石は正面にスダレ加工が施され、その他はつくりの粗い先細りの加工が施され、不規則な形状をしている。横に目地が走る成層積であり、現場合わせの加工も粗い。石は全て凝灰岩であった。

下部構造の調査を行っていないため、胴木などがあったかは不明であるが、少なくとも2～3段は地中に埋設されているようであり、裏込は石がさほど多くない。

覆土は、全て昭和期の遺物が入るシラスの客土であった。客土で覆われた時期については不明である。

また、検出した最下面が標高1.3mほどであることから、河口（海）からの荷揚場であるとする、石畳は今回設定したトレンチの外にまだ続いており、残存しているものと考えられる。

深さが2mを越えたことと、公園・病院との境であることから、安全を記すためこれ以上の拡張をしての調査

は行わなかった。

(2) 遺物

特筆すべき遺物は無かった。

2 20トレンチ (第76図)

20トレンチで古絵図に見られる荷揚場の土塁の調査を行ったが、土塁の端をつかむことができなかった。東側には現在も標高差約3mの土手が残っているため、元来は、絵図に描かれているようなしっかりとした横壁にあたる土塁があったと考えられる。

(1) 遺構 (第76図)

1, 2トレンチで検出した石畳と石垣に伴う横壁の検出を目的として、「砂揚場臺場之圖」『薩藩砲臺圖稿本』で横壁の石垣が推定できる箇所にて20トレンチを設定して調査を行った。

しかし、石垣等は検出できず、公園整備に伴い積まれた石列を検出したのみであった。

(2) 遺物

特筆すべき遺物は出土しなかった。

3 3トレンチ (第77・78図)

3トレンチでは、砲台南西部に露出している砲座と胸壁の石垣、土塁の構造や残存状況の調査を行った。

しかし、軌条や階段などの遺構は検出できなかった。また、層も複数分層できる状態ではなく、表土や攪乱層以外は黄褐色の砂質土のみであった。

(1) 遺構 (第77図)

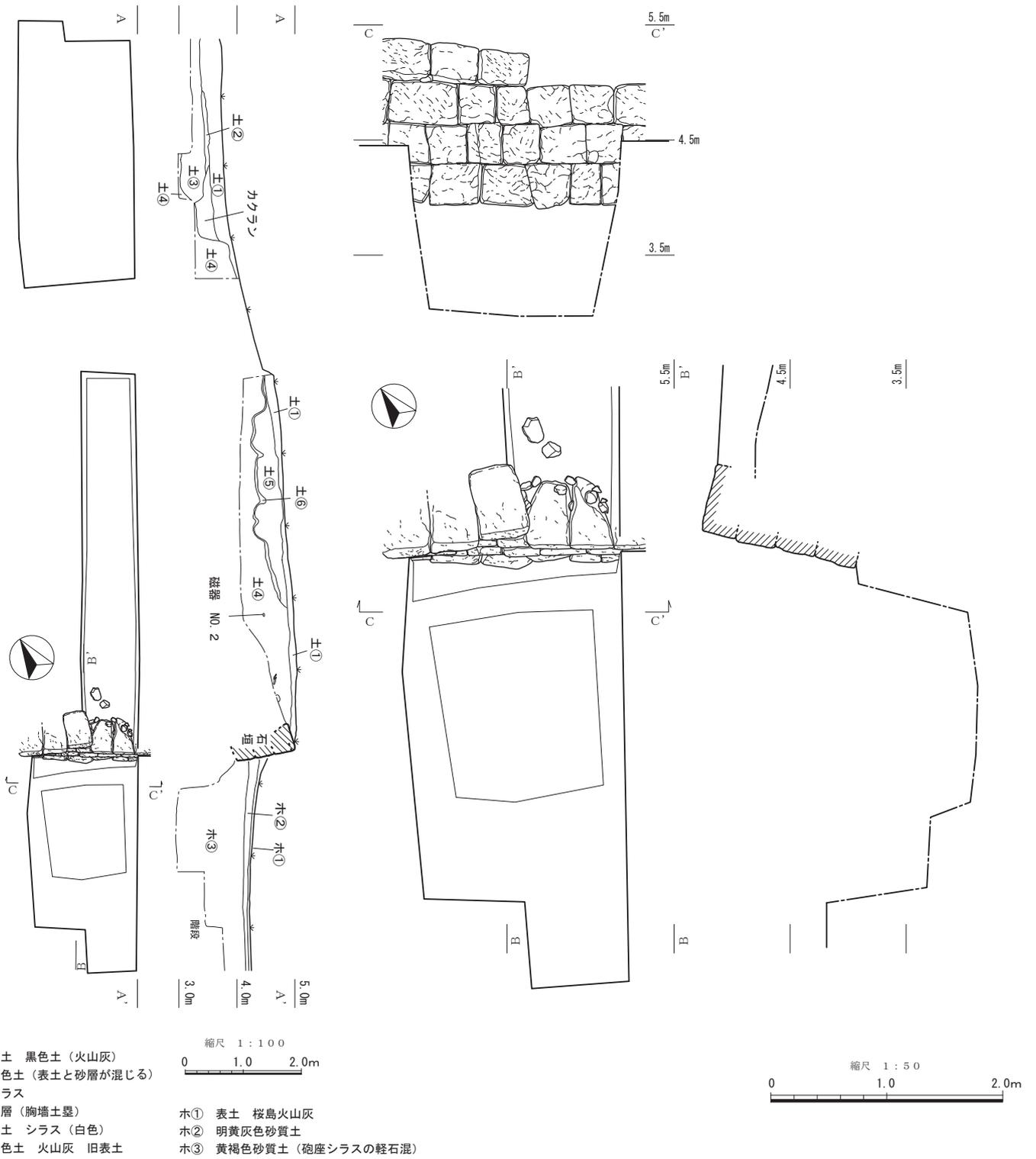
砲座について、硬化面やその他の遺構を検出することはできなかった。表土下は砂層であり、上部は若干攪乱を受けていたが、4トレンチで検出した砲座の軌条との標高差が少ないため、砲台本来の砲座の層が残存しているようである。絵図中の位置特定については後述するが、3トレンチは軌条と軌条の間に位置しているため明瞭な砲座の遺構が検出されなかったものとする。

ア 石垣

4段積まれた石垣を検出した。最下部の標高は約3.8mで、2段程度が地中だったと考える。正面にスダレ加工が施され、成層積みである。

つくりは全体として雑で、裏込の石も多く入らない。大きさも不定形で不規則な形状をしており、全て凝灰岩が使用されていた。石垣の傾斜角は約75度であった。

また、胴木や敷石などは検出しなかった。現在残る石垣の天端は元来の天端か、もしくはまだ積まれていたとしても7トレンチの結果からあと1段程度であると考えられる。



第77図 3トレンチ土層断面図及び検出遺構

イ 土塁

砂のみで積まれ、浚渫土砂を用いて積み上げたことがうかがえる。現在は風雪に耐えず崩壊しているが、本来はしっかりとした土塁であったと思われる。

(2) 遺物 (第78図)

遺物は、砲座、胸墻の土塁ともに出土があったが、砲台の時期だけでなくそれ以前の遺物も出土している。

また、遺跡全体でも陶磁器だけでなく瓦器なども出土しており、種類も生活用具から仏具までと種類に富んでおり、砲台築造に使用された土砂が、甲突川の浚渫土であるため、様々な時期の遺物が混在しているものと考えられる。

ア 碗

1は、染付の筒形碗で雪持ち笹が描かれている。9は、染付碗で見込みにコンニャク印旛の文様が描かれている。

10・11は、染付碗の底部である。11は、見込みに蛇の目釉剥ぎが施され18世紀から19世紀のものである。10は、18世紀後半のフタ虫が描かれているものである。

イ 皿

2は、染付の皿、3は、白薩摩の皿である。

ウ 鉢

5は、薩摩焼の播り鉢である

エ 甕

6は、薩摩焼の甕で苗代川産の19世紀終末から20世紀初頭のものである。

オ 壺

4は、薩摩焼の壺で、産地は分からないが18世紀前半頃のものである。肩部から胴部にかけて内面には指頭圧調整の痕跡がよく残っている。

カ その他

8は、焙烙の把手である。

7は、素焼きの人形の一部と考えられる。器厚も薄く、胎土も精製された緻密なものである。

4 4トレンチ (第79～81図)

(1) 遺構 (第81図)

現在露出している軌条の構造を調べるためにL字にトレンチを設定し、胸墻の構造を調べるために軌条から1m×4mのトレンチを設定した。

結果、軌条の構造と3トレンチと一直線上に並ぶ胸墻の石垣の基部を検出した。また、軌条の先にある石組が7トレンチとの比較から軌条に伴う階段であることがわかった。

ア 砲座

標高約4.3m、外側の軌条の径7.6m、内側の軌条の径約4.5m、個々の石の短辺約0.6mの軌条を検出した。外側の軌条の敷石は、外側にゆく程長辺が短く、中心部程長いものを敷いている。

また、内側の軌条の真中から軌条の円弧の中心に向かい成形されていない石を2個配してあった。7トレンチでも見られたが用途は不明である。

このような砲床の軌条の調査例には福井県おおい町松ヶ瀬台場があり、軌条の円弧の中心からキスト砲架の固定のための軸を入れたピットが検出されているが、本軌条のこの場所には、天保山砲台跡の記念碑が建てられており調査することができなかった。

祇園之洲砲台跡で検出した硬化面等は無く、砲座は砂で構築されていた。

イ 轍

軌条の石の上面には、キスト砲架の車輪が通った轍が残っていた。天保山砲台で砲射訓練が行われていたことを示している。

ウ 階段

7トレンチの結果と比較すると、その位置関係から、軌条の北東側にあるH型の石は階段の最下段部分ではないかと思われる。

エ 石垣

最下段の1段を検出した。最下面の標高約3.9mで1～2段が地中となる構造が推測できる。正面にスタレ加工を施し、成層積みで積上げる。傾斜角度は不明である。つくりが全体として雑で正面から先細り、裏込は石が多く入れられておらず、胴木等は検出されていない。

(2) 遺物 (第80図)

遺物の出土は少なく、図化できるものも少なかった。砲台の時期だけでなくそれ以前の遺物も出土している。

また、遺跡全体でも陶磁器だけでなく瓦器など、生活用具から仏具までと種類に富む。

砲台築造に使用された土砂が、甲突川の浚渫土であるため、様々な時期の遺物が混在しているものと考えられる。

12は、竜門司焼の18世紀後半の碗である。

13は、耐火レンガである。耐火レンガが砲台に伴うものであるのか、浚渫土に由来するのかわからない。

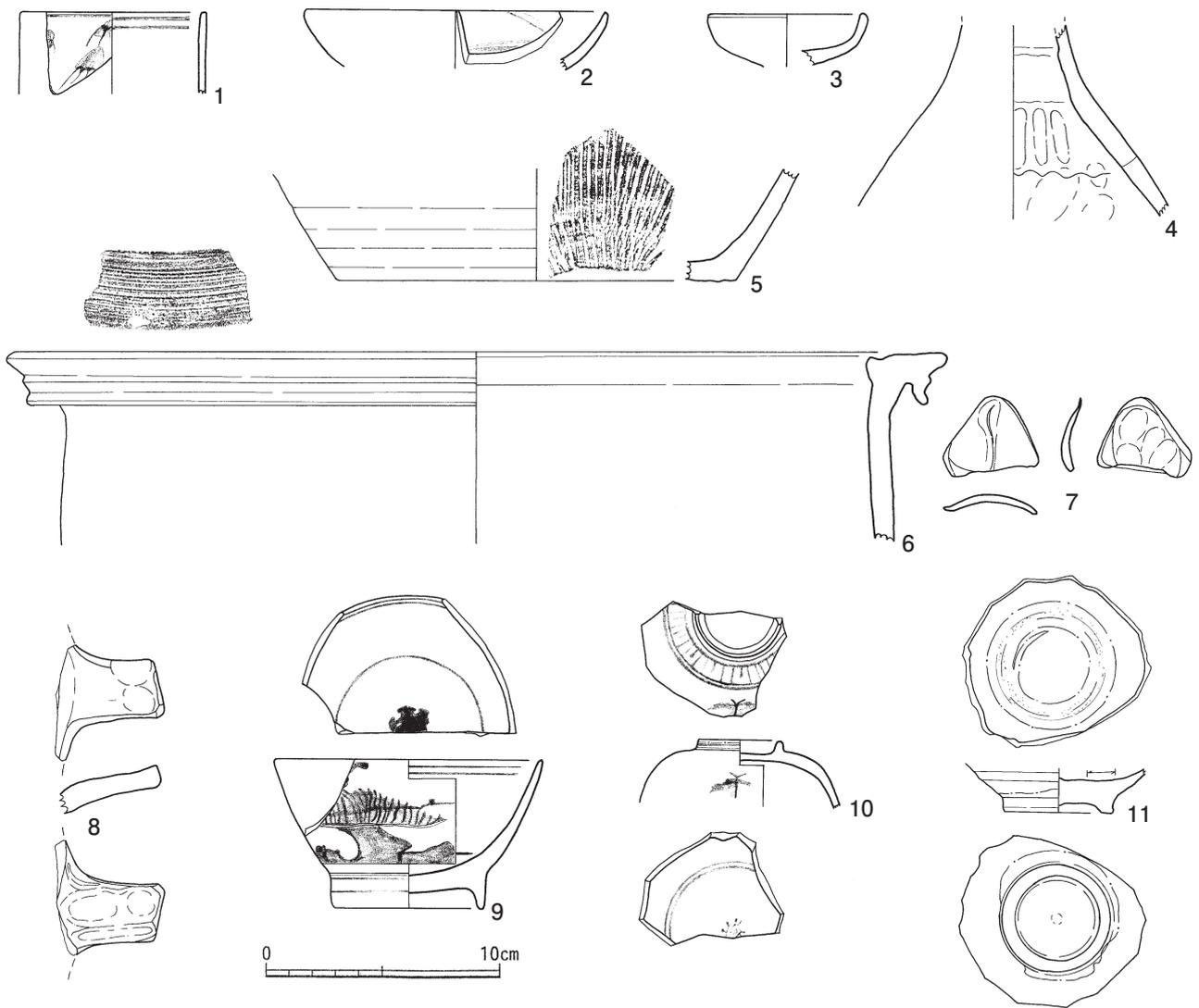
5 5トレンチ (第82, 84, 85図)

(1) 遺構 (第84図)

ア 石垣

5トレンチ(2×15m)では、石垣の最下段の1～2段のみを検出した。最下面の標高約4.6mで1～2段は地中であったと考える。

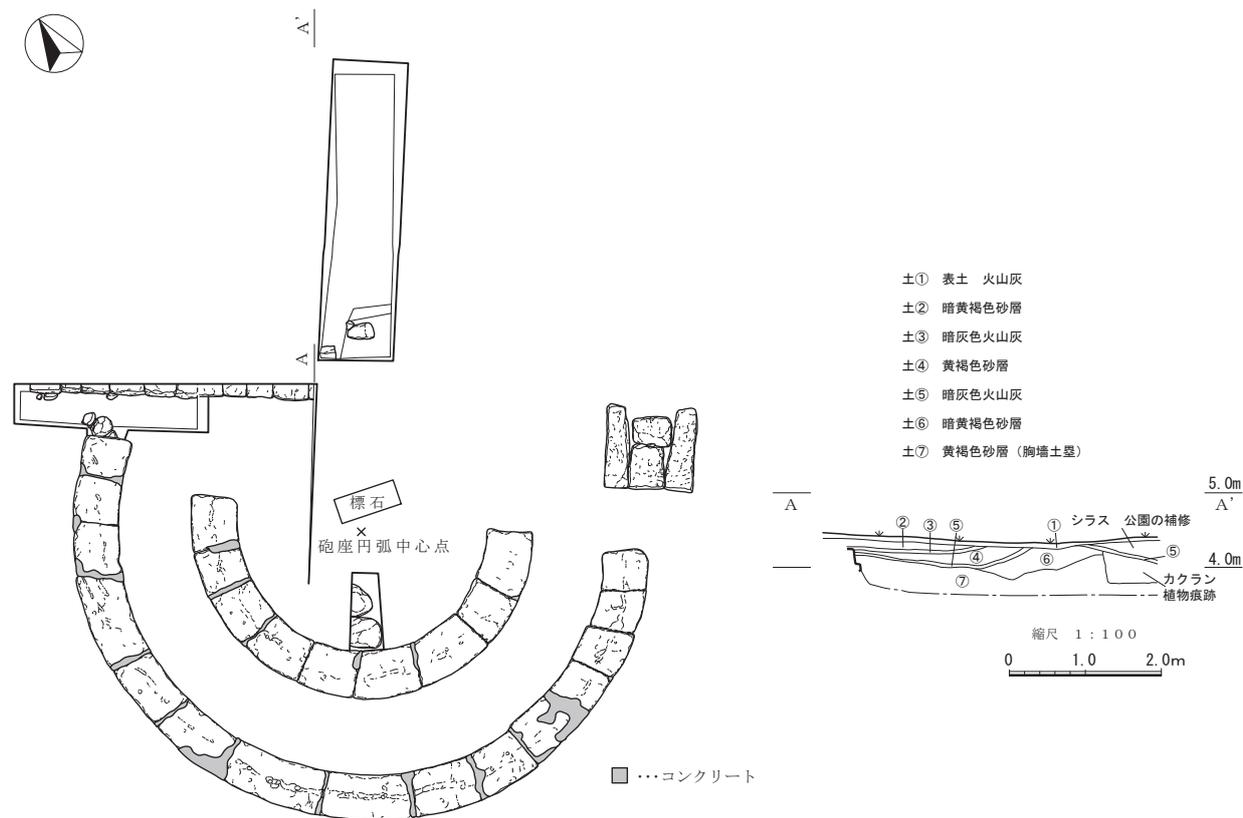
正面にスタレ加工を施し、成層積みで積まれている。



第78図 3トレンチ出土遺物

表17 3・4トレンチ出土遺物観察表

挿 図 番 号	掲 載 番 号	種別	分類	器種	産地	出土 区	層位	法量 (cm)			cm	胎土の色調	釉 薬		時 期	備 考
								口径	底径	器高			種類/色調	部 位		
	1	染付	碗	筒形碗	肥前	3T	ホ③	8.0	-	-		白色	透明釉	残存部全部		雪持世, 染付
	2	染付	皿	皿		3T	ホ③	12.8	-	-		灰白色	透明釉	残存部全部		
	3	磁器	坏	坏	白薩摩	3T	ホ③	6.8	-	-		黄白色	透明釉	残存部全部		
	4	陶器	瓶	徳利	薩摩	3T	ホ③	-	-	-		灰黄色	鉄釉/オリブ黒色	残存部全部	18世紀前半	回転ハケ目, 指おさえ
	5	陶器	鉢	播鉢	薩摩	3T	ホ③	-	17.0	-		灰褐色	鉄釉/オリブ黒色	底部外面無釉		ハケ目
	6	陶器	甕	甕	苗代川	3T	ホ③	40.0	-	-		灰黄褐色	鉄釉/オリブ黒色	口唇部無釉	19世紀末~20世紀初頭	ハケ目, 苗代川
79	7	人形?	人形?	人形?		3T	ホ③	-	-	-		にぶい橙色	-	-		ナデ, 指おさえ, 指紋
	8	土師質 土器	焙烙	焙烙		3T	ホ③	-	-	-		淡黄色	-	-		砂粒少ない
	9	染付	碗	碗	肥前	3T	土④	11.4	6.4	6.3		灰白色	透明釉		18世紀後半	コンニャク印施
	10	染付	蓋	蓋	肥前	3T	土④	-	3.6	-		白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	18世紀後半	
	11	陶器	壺	壺		3T	土④	-	4.6	-		灰色	鉄釉/暗赤褐色	腰部~ 高台内底無釉		砂粒少ない, 回転ヘラ調整, 蛇ノ目釉剥ぎ, 重ね焼痕
80	12	陶器	壺	壺	龍門司	4T	ホ⑦	-	3.9	-		にぶい褐色	透明釉/淡黄色	腰部~ 高台内底無釉	18世紀後半	ヘラ, 蛇ノ目釉剥ぎ, 化粧土
	13	レンガ	レンガ	耐火レンガ		4T	土⑦	-	-	-		淡黄色	-	-		砂粒多い, ナデ



第79図 4トレンチ土層断面図

イ 敷石

石垣の最下段から約3.5mの範囲に人頭大から拳大の円礫が敷いてあった。これが軌条に伴うものであるかは不明である。

ウ 階段

5トレンチ東側に凝灰岩の切石があった。石は現位置を保っていないが、4・7トレンチの軌条の標高とほぼ同一であり、形状も4トレンチで階段の最下段部分を想定したものとよく似ているため、これも軌条の階段で、原位置は保っていないが、大きく移動していないと考える。

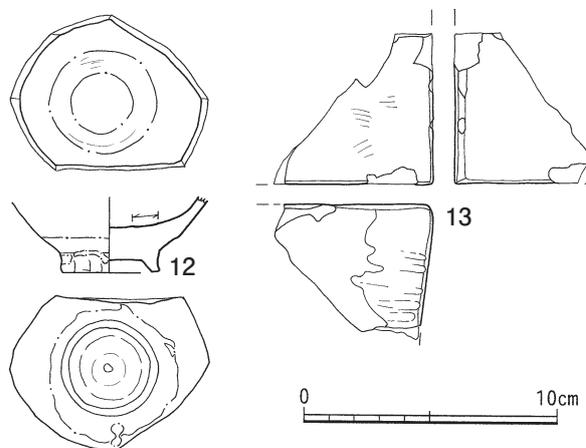
そのため、ここにも砲床や軌条があったことが想定できる。

エ 石列

石垣から約5m離れたところで、直線に並ぶ石列を検出したが、天保山砲台のその他の石が凝灰岩のみであることにに対し、この石列は凝灰岩の他に軽石などの石材を使っていること、石列周辺の土が乱れていることから、砲台に伴わない新しい時代のものと考えられる。このことは、20トレンチ、7トレンチ胸牆の土壘、8トレンチで検出した石列についても同様である。

(2) 遺物 (第85図)

遺物の出土は少なく、図化できるものも少なかった。砲台の時期だけでなくその前の遺物も出土している。



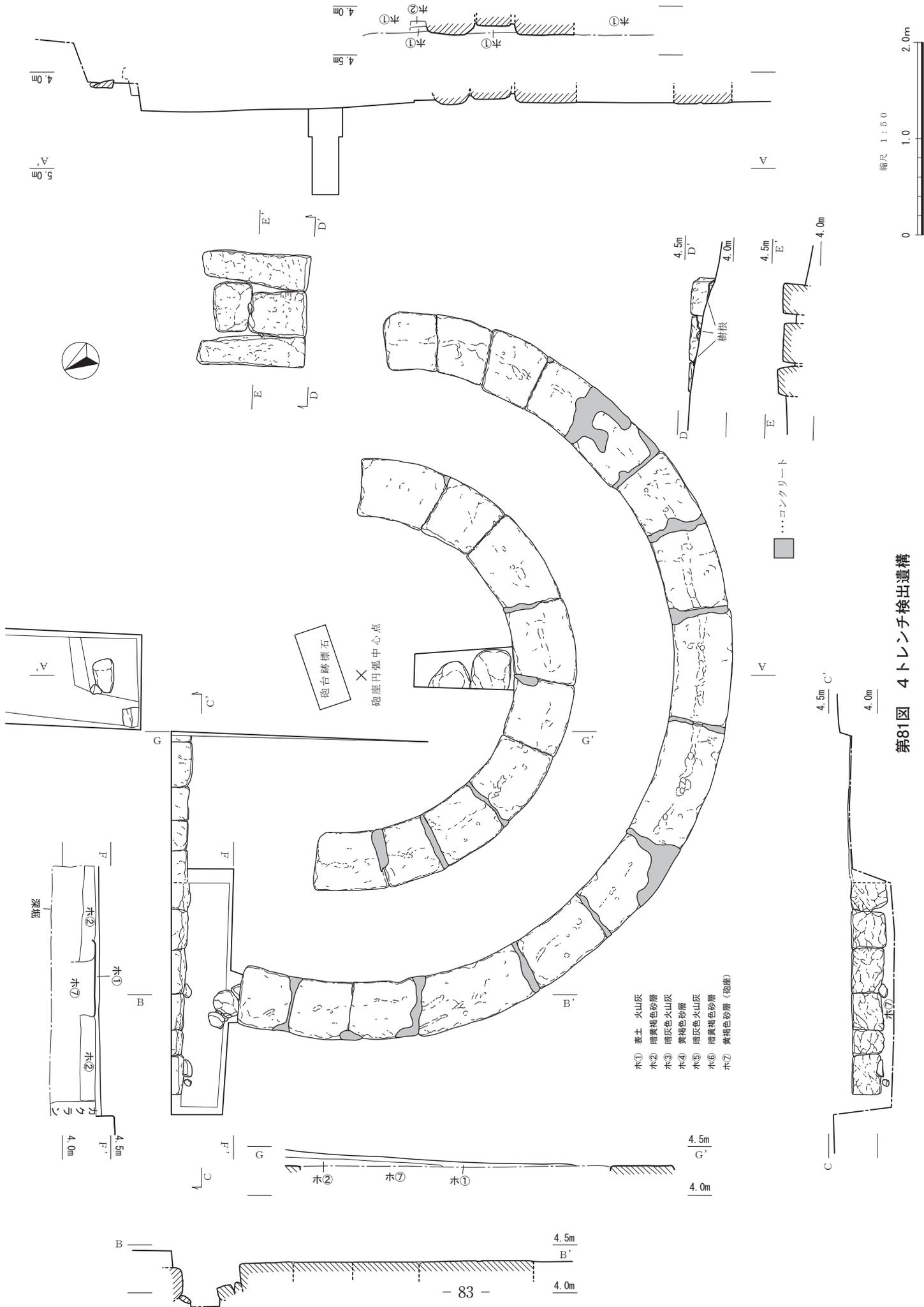
第80図 4トレンチ出土遺物

また、遺跡全体でも陶磁器だけでなく瓦器など、生活用具から仏具までと種類に富む。

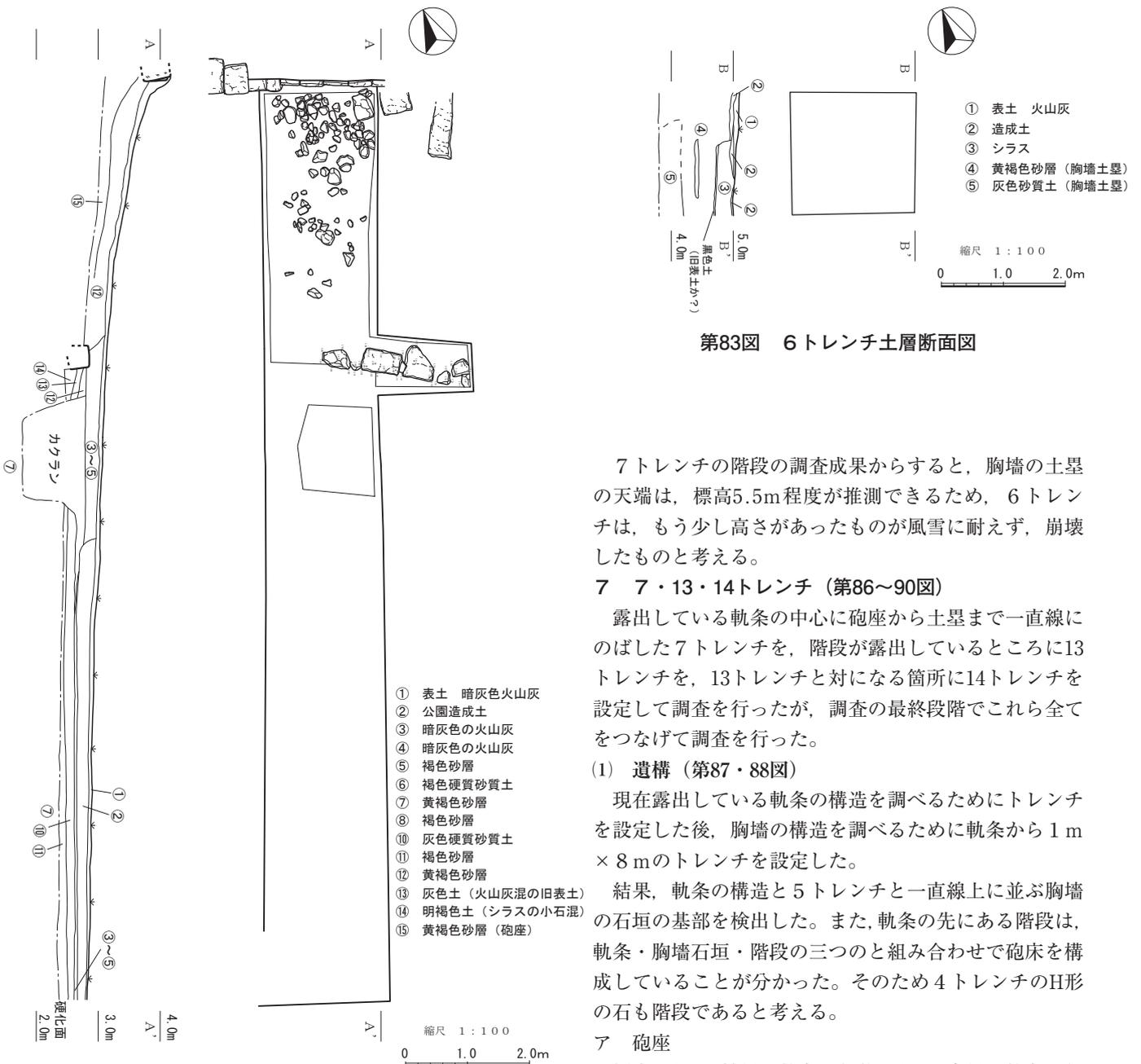
砲台築造に使用された土砂が、甲突川の浚渫土であるため、様々な時期の遺物が混在しているものと考えられる。

6 6トレンチ (第83図)

トレンチの北東側に2m×2mのトレンチを設定して胸牆の土壘の調査を行った。標高5mから2m程掘り下げたが、攪乱を受けていない層は分層できるような状態ではなく全て黄褐色の砂であった。また、遺物の出土もなかった。



第81図 4トレンチ検出遺構



第82図 5トレンチ土層断面図

第83図 6トレンチ土層断面図

7トレンチの階段の調査成果からすると、胸墻の土壁の天端は、標高5.5m程度が推測できるため、6トレンチは、もう少し高さがあったものが風雪に耐えず、崩壊したものと考えられる。

7 7・13・14トレンチ (第86～90図)

露出している軌条の中心に砲座から土塁まで一直線にのびた7トレンチを、階段が露出しているところに13トレンチを、13トレンチと対になる箇所には14トレンチを設定して調査を行ったが、調査の最終段階でこれら全てをつなげて調査を行った。

(1) 遺構 (第87・88図)

現在露出している軌条の構造を調べるためにトレンチを設定した後、胸墻の構造を調べるために軌条から1m×8mのトレンチを設定した。

結果、軌条の構造と5トレンチと一直線上に並ぶ胸墻の石垣の基部を検出した。また、軌条の先にある階段は、軌条・胸墻石垣・階段の三つのと組み合わせで砲座を構成していることが分かった。そのため4トレンチのH形の石も階段であると考えられる。

ア 砲座

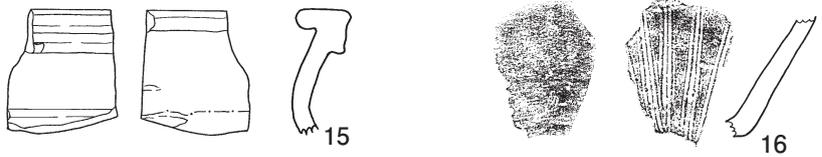
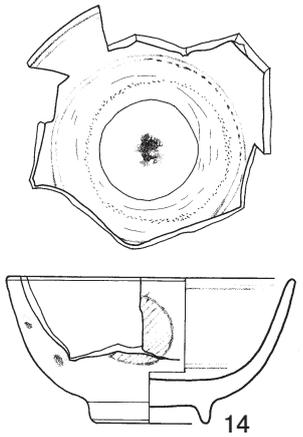
標高4.3m、外側の軌条の径約7.2m、内側の軌条の径4.4m、個々の石の短辺約0.6mの軌条を検出した。外側の軌条の敷石は、外側にゆく程長辺が短く、中心部程長いものを敷いている。

表18 5トレンチ出土遺物観察表

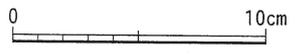
挿入番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量 (cm)			cm	胎土の色調	釉薬		時期	備考
								口径	底径	器高			種類/色調	部位		
85	14	染付	碗	碗		5T	15	11.2	4.6	5.7		白色	透明釉	量付は釉剥ぎ		重ね焼痕、蛇ノ目釉剥ぎ
	15	陶器	甕	甕	薩摩	5T	15	-	-	-		黄灰色	鉄釉/黒色	口唇部無釉		ハケ目
	16	陶器	鉢	播鉢	薩摩	5T	15	-	-	-		にぶい橙色	鉄釉/黒色	残存部全部		ケズリ、貝目



第84図 5トレンチ検出遺構



第85図 5トレンチ出土遺物



更に、軌条敷石は合わせ面に詰め物はなく、単純に切石を弧状に敷いたものである。合わせ面の加工は丁寧なものであると思われる。また、1段で構成され、不動沈下防止のために下に破碎礫などの石を若干敷き込み構築されている。表面は丁寧に加工され凹凸がないが、側面は天端から10cm程だけを丁寧に加工し、他は粗い加工のままである。地中に埋められ、構造上露出することのない部分であるため、作業工程の省略が行われたものと考えられる。

軌条の内側にある石列の円弧の頂点から、軌条の円弧の中心に向かい成形されていない石が配してあった。4トレンチでも見られたが用途は不明である。

このような砲床の調査例は、福井県おおい町松ヶ瀬台場があり、軌条の円弧の中心からキスト砲架の固定のための軸を入れたピットが検出されている。本軌条のこの場所には、大きな松の木があり調査することができなかった。

祇園之洲砲台跡で検出したような硬化面はなく、砲床は砂と土を突き固めた硬化面で構築されていた。

砲座の構造を調べるためにトレンチを軌条から延長して調査を行った。表面は既に流失しているものの、築造時の砲座の盛土と考えられる黄褐色の砂層が一部残存していた。

イ 轍

軌条の石の上面には、キスト砲架の車輪が通った轍が残っていた。天保山砲台で砲射訓練が行われていたことを示している。

ウ 階段

階段のような切石が見えたため、13トレンチを設定して調査を行った。

その結果、胸牆の石垣を構築した後に隙間無く積まれた階段であることが分かった。階段は5段で最下段は地中になっていたものと考えられる。

Fラインの様相から、階段の最上段は、胸牆石垣の天端に載っていたことが分かる。

そのため、胸牆石垣は、7トレンチ検出の胸牆の石垣と併わせ考えると石を4～5段積上げたもので、天端の標高が5m程度と推測でき、石垣の高さ80～90cmが推測できる。祇園之洲砲台と比較すると、地上にある石垣が1段少なくその分だけ砲座から見た胸牆の高さが低いものである。

オ 石垣

7・14トレンチで最下段の2段を検出した。最下面は標高3.8mで1～2段は地中だったことが分かる。正面はスダレ加工が施され、成層積みで積まれている。

石は全て凝灰岩で、つくりが全体として雑で正面から先細る形状である。裏込は石が多くなく、胴木等は検出されていない。石垣の傾斜は、約75度である。

オ 土塁

7トレンチでは、胸牆の土塁の調査も行った。

胸牆の石垣から1～1.5m離れたところに⑥に覆われた石列を検出したが、⑥はトレンチ全体に広がり、⑥までは、江戸時代末の遺物とともにガラスや近年の鉄片などが出土したため、石列及び土塁の上部は昭和期の盛土で構築されたものであると考えられる。そのため、断面図中の④のみが本来の土塁の層であり、④以下は残存していると考えられる。

胸牆の石垣も最下段の地中になっていた2段だけが残っていることから、胸牆が大きく壊れていた箇所を砲台の形状を意識して近代以降に修復されたものであることを示している。

(2) 遺物 (第89・90図)

遺物は、土塁からの出土はあったが、砲台の時期だけでなくそれ以前の遺物も出土している。砲座からは孔のあいた鉄製品が1点出土したのみである。同様な孔のある鉄製品が「旧集成館「鋳物場跡」発掘調査報告書」1991年株式会社島津興業にも掲載されているが用途不明である。

また、遺跡全体でも陶磁器だけでなく瓦器など、生活用具から仏具までと種類に富む。

砲台築造に使用された土砂が、甲突川の浚渫土であるため、様々な時期の遺物が混在しているものと考えられる。

5 21・22・23トレンチ

(1) 21・22トレンチ

現在露出している石垣の調査を行った。

その他のトレンチ同様に裏込の石はあまり使用されず、直接砲台の盛土層である黄褐色の砂層から積上げられている。

(2) 23トレンチ

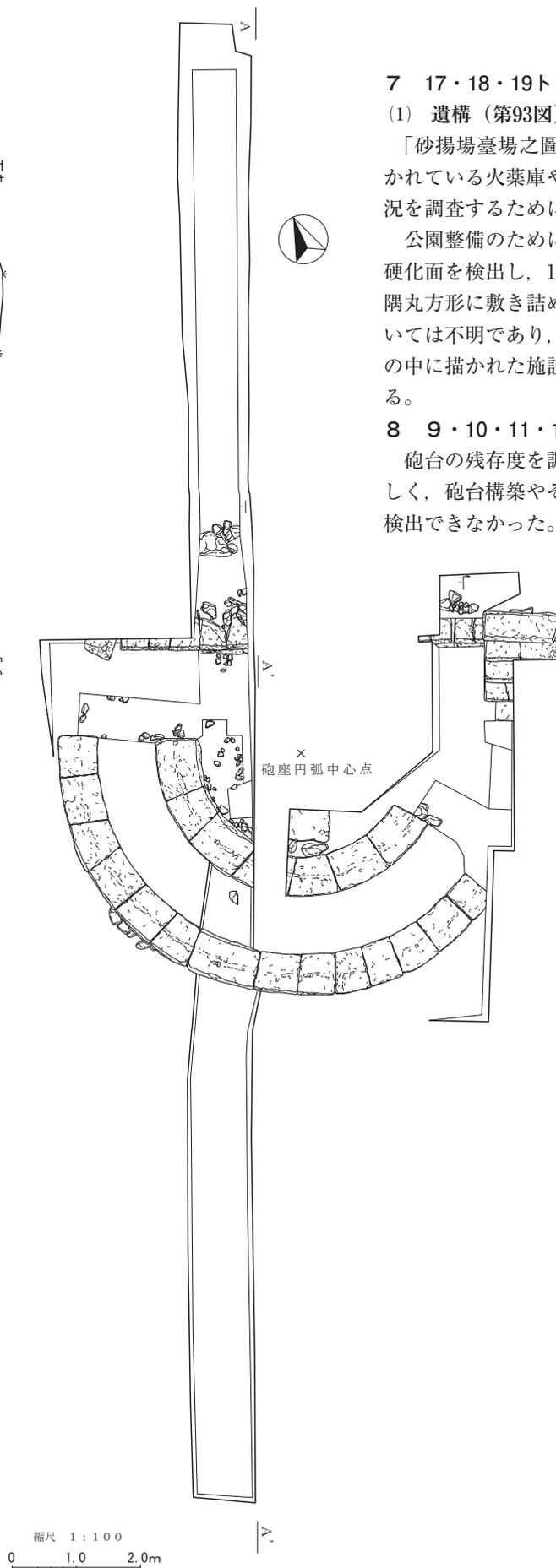
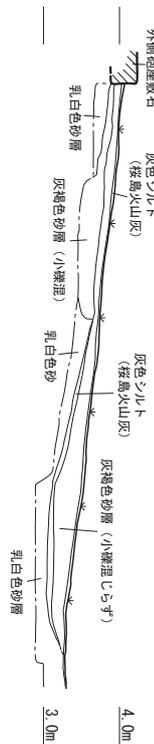
1・2トレンチと3トレンチの間にある胸牆の石垣に付く階段の調査を行った。

地中となっている下部までコンクリートで補強されており、新しく積み直された可能性が高いと考える。

6 8トレンチ (第91・92図)

現状で築山がある箇所が「砂揚場臺場之圖」『薩藩砲臺圖稿本』(第71図)の中央部に描かれた施設であるか調べるためにトレンチを設定した。

⑥が安定した盛土層のようであるが、砲台建設前の浚渫や砲台時のものと思われる時期の遺物に混じり鉄くずや新しい陶磁器が出土し、頂部にある円形のコンクリートの設置と公園整備に伴い変形されていた。そのため、砲台の時期のものであるか分からなかった。



7 17・18・19トレンチ (第93図)

(1) 遺構 (第93図)

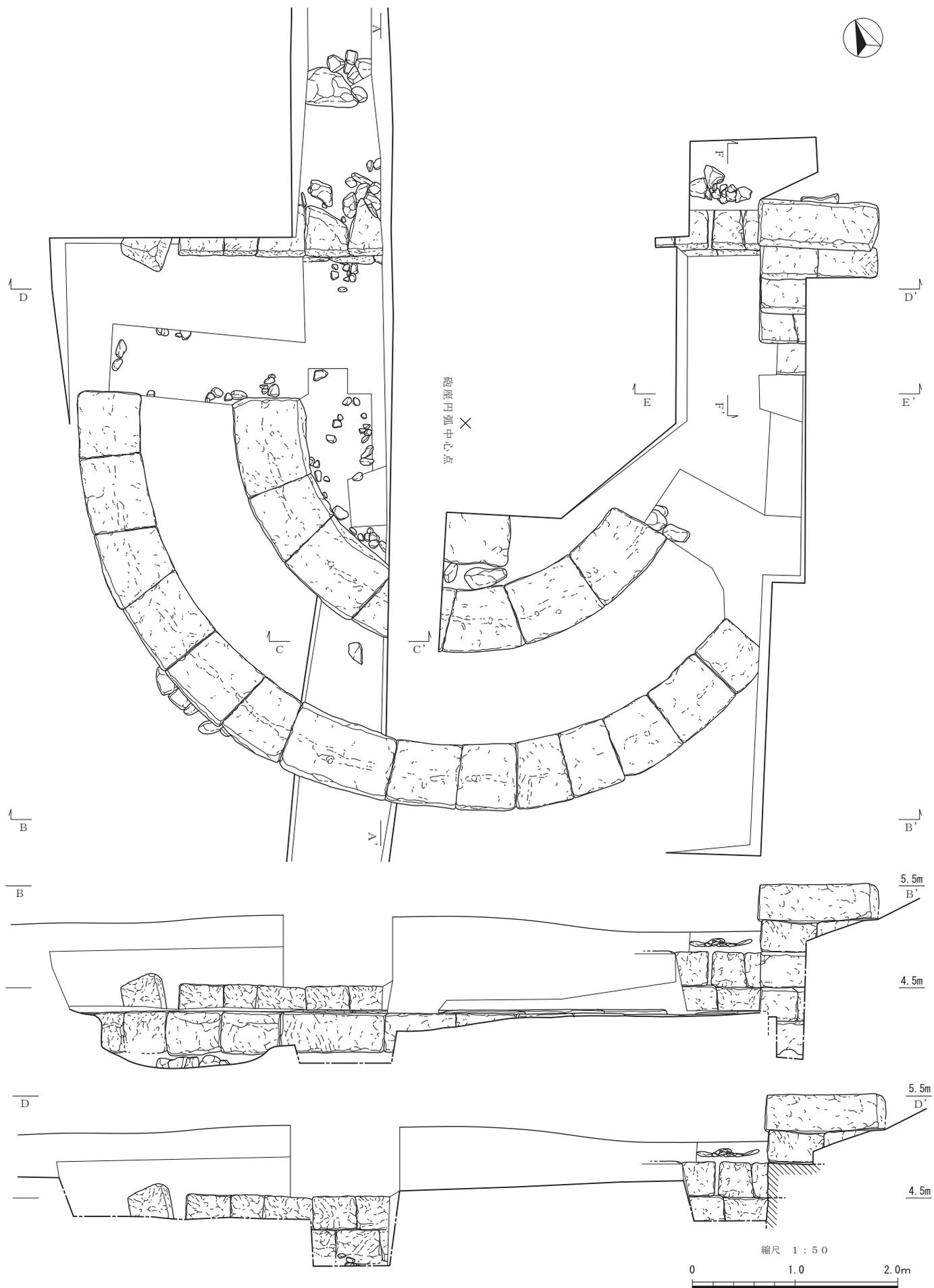
「砂揚場臺場之圖」『薩藩砲臺圖稿本』(第71図)に描かれている火薬庫やスロープ等の砲台関連施設の残存状況を調査するためにトレンチを設定した。

公園整備のために攪乱を受けていたが、19トレンチで硬化面を検出し、18トレンチで灰赤色の凝灰岩の破碎礫を隅丸方形に敷き詰めた遺構を検出した。用途や時期については不明であり、「砂揚場臺場之圖」『薩藩砲臺圖稿本』の中に描かれた施設等にも該当するものが無く不明である。

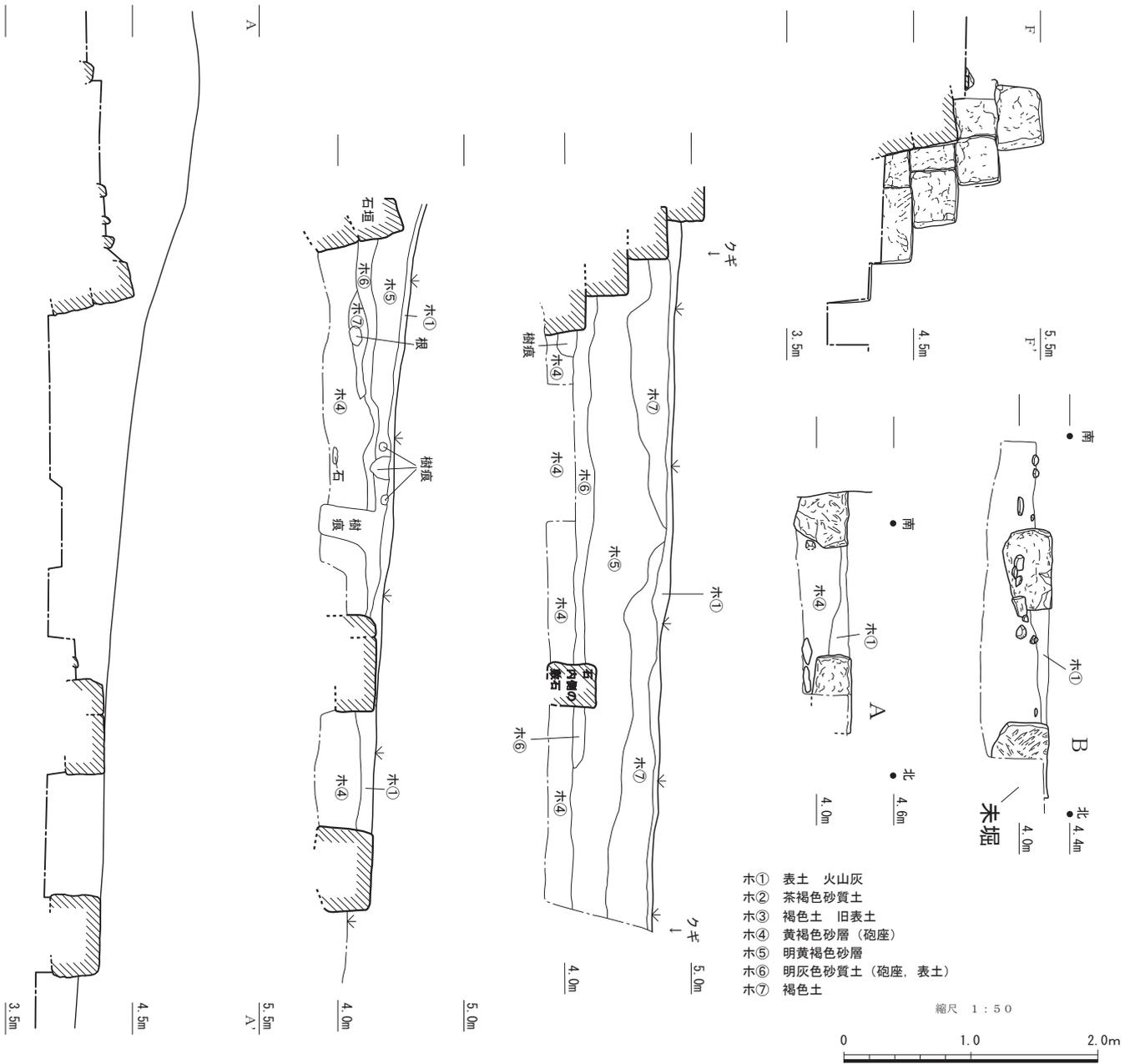
8 9・10・11・12・15・16トレンチ

砲台の残存度を調査するために設定したが、攪乱が激しく、砲台構築やそれ以前の浚渫に伴うと思われる層は検出できなかった。

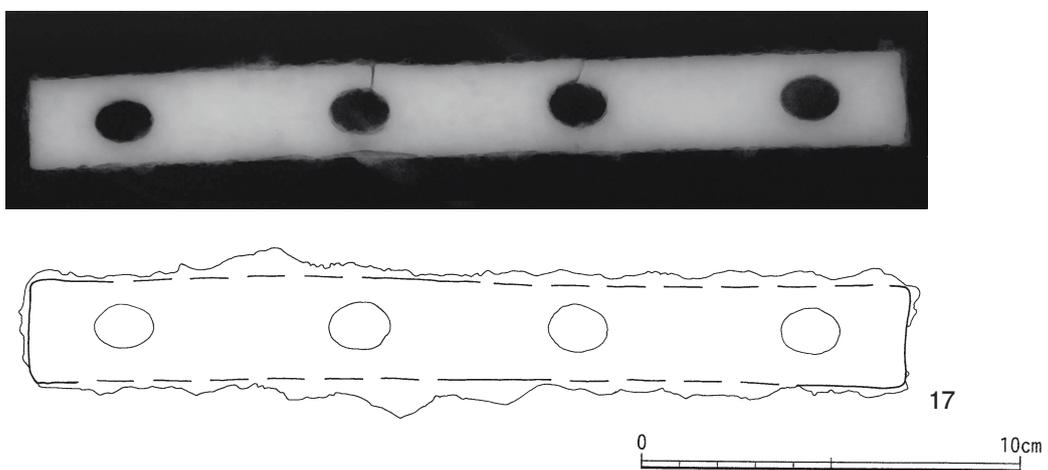
第86図 7トレンチ土層断面図



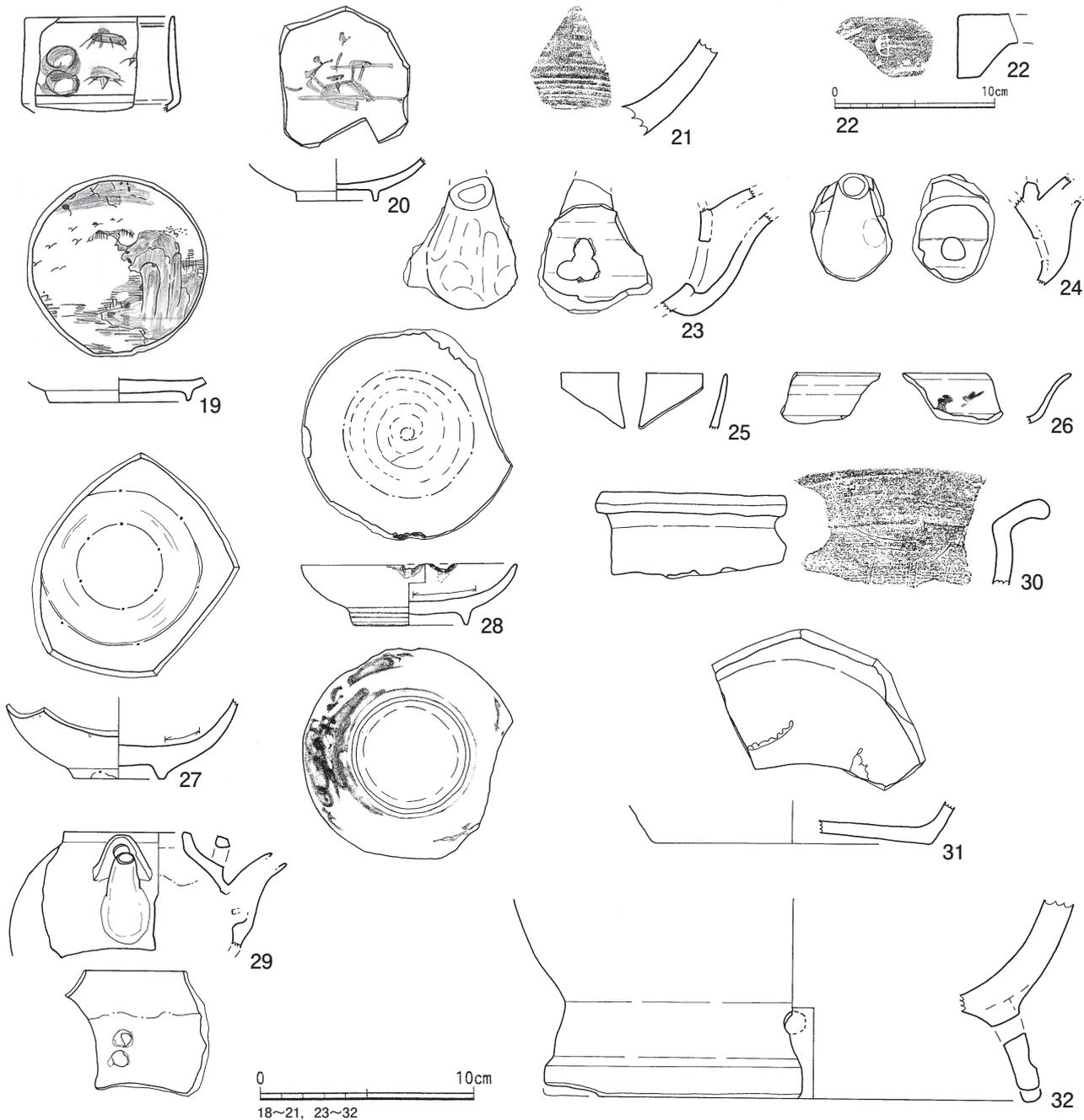
第87図 7トレンチ検出遺構①



第88図 7トレンチ検出遺構②



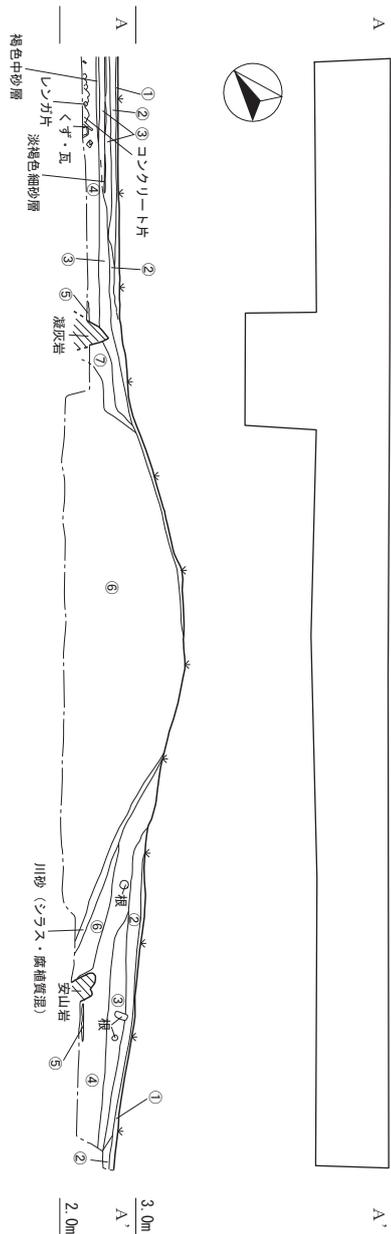
第89図 7トレンチ出土遺物①



第90図 7トレンチ出土遺物②

表19 7トレンチ出土遺物観察表

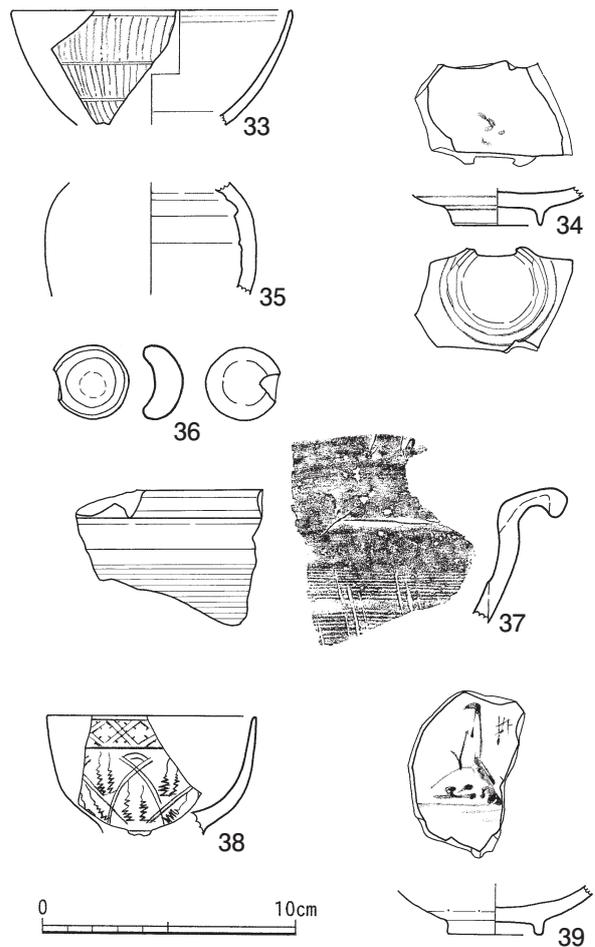
挿入番号	掲載番号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量 (cm)			cm	胎土の色調	釉 薬		時 期	備 考
								口径	底径	器高			種類/色調	部 位		
89	17	鉄	不明	不明		7T	砲床	-	-	-	長さ23.5/幅2.8 /厚さ0.8	-	-	-	-	-
	18	染付	碗	筒形碗		7T	表	7.0	-	-		白色	透明釉	残存部全部	18世紀末 ~19世紀初頭	雪持笹
	19	染付	皿	皿	肥前	7T	表	-	6.6	-		白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ		山水
	20	陶器	碗	碗	肥前	7T	土②	-	3.8	-		灰黄色	透明釉	腹部~高台内底無釉	18世紀代	回転ナデ, 京焼風, 帆かけ舟
	21	陶器	壺?	壺?		7T	土②	-	-	-		明褐色	不明	外面のみ施釉		ハケ目?
	22	瓦	瓦	瓦(軒瓦)		7T	土②	-	-	-		黄灰色	-	-		(中) スタンプ, つぎ目, ナデ, 砂粒少ない
	23	陶器	瓶	急須(土瓶)	薩摩	7T	土②	-	-	-		にぶい赤褐色	鉄釉/黄褐色	残存部全部		回転ナデ, 指おさえ
	24	陶器	瓶	土瓶	薩摩	7T	土④	-	-	-		にぶい橙色	鉄釉/オリブ灰色	残存部全部		回転ナデ, ローリング
90	25	磁器	碗	碗		7T	土⑤	-	-	-		灰白色	透明釉	残存部全部		
	26	磁器	碗	端反碗		7T	土⑤	-	-	-		白色	透明釉	残存部全部		
	27	染付	碗	碗	在地	7T	土⑤	-	4.2	-		灰白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ		赤絵, 近代以降 蛇ノ目釉剥ぎ, 重ね焼
	28	染付	皿	灯明皿	在地	7T	土⑤	10.0	5.5	2.8		白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ, 蛇ノ目釉剥ぎ		広東碗の蓋, 灯明皿へ転用
	29	陶器	瓶	土瓶	薩摩	7T	土⑤	5.9	-	-	胴部径11.0	にぶい橙色	鉄釉/暗オリブ色	内面・胴部無釉		回転ナデ
	30	陶器	鉢	搦鉢	薩摩	7T	土⑤	-	-	-		明赤褐色	鉄釉/オリブ灰色	内面・胴部無釉	18世紀代	回転ナデ
	31	陶器	鉢?	鉢? 甕?	薩摩	7T	土⑤	-	13.0	-		にぶい赤褐色	鉄釉/オリブ黒色	底部外面無釉		回転ハケ目, ハケナデ(底), 貝目
	32	瓦器? 素焼?	鉢?	火鉢?		7T	土⑤	-	23.2	-		明黄褐色	-	-		透し, 回転ナデ



- ① 褐色壤土 火山灰混
- ② 黄褐色シルト質土
- ③ 灰色シルト質土
- ④ 黒褐色砂質土
- ⑤ 黄褐色砂層 (白色軽石混)
- ⑥ 乳白色砂層
- ⑦ 灰色砂層 (シラス, 暗褐色土混じる)

縮尺 1:100
0 1.0 2.0m

第91図 8トレンチ土層断面図

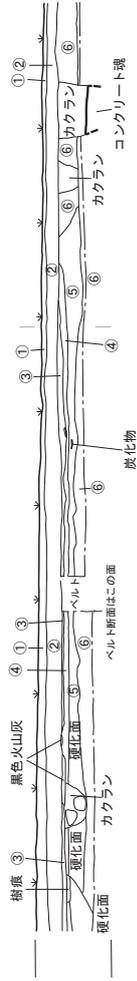


第92図 8トレンチ出土遺物

表20 8トレンチ出土遺物観察表

挿 図 番 号	掲 載 番 号	種別	分類	器種	産地	出土区	層位	法量 (cm)			cm	胎土の色調	釉 薬		時 期	備 考
								口径	底径	器高			種類/色調	部 位		
92	33	磁器	碗	丸碗	在地	8T	表土	11.0	-	-		灰白色	透明釉	残存部全部	19世紀代	梵字文
	34	染付	碗	碗	在地	8T	表土	-	3.6	-		白色	透明釉	畳付は釉剥ぎ	19世紀代	梵字文
	35	青磁	瓶	瓶	苗代川	8T	表土	-	-	-	胴部径8.3	白色	青磁釉	内側無釉		土瓶スク鉢?
	36	素焼	玩具?	おはじき?		8T	表土	-	-	-		にぶい橙色	-	-		ナデ
	37	陶器	鉢	掃鉢	薩摩	8T	表土	34.4	-	-		にぶい赤褐色	鉄釉/暗オリーブ褐色	口唇部無釉		ハケ目
	38	染付	碗	丸碗		8T	⑥	8.2	-	-		白色	透明釉	残存部全部		(新)?
	39	陶器	壺	壺	肥前	8T	⑥	-	3.8	-		にぶい黄橙色	透明釉	腰部~高台内底無釉		京焼風, 2つ絵, 型ぬき?

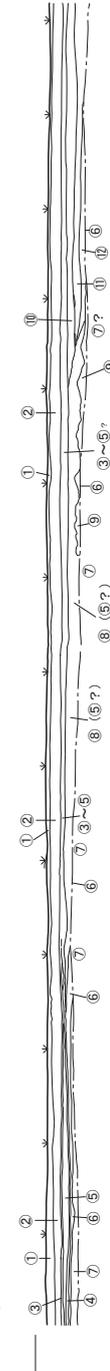
17トレンチ①



17トレンチ①

- ①表土 黒色土 (火山灰混じり)
- ②グラント産成土
- ③火山灰層
- ④茶灰色の水性堆積層
- ⑤シラスのような火山灰土 (軽石混じり)
- ⑥砂層 (川砂)

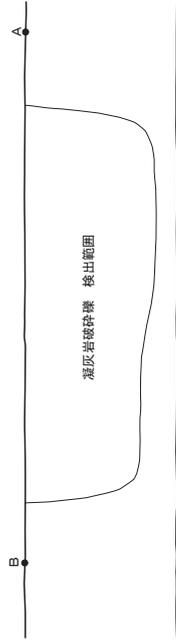
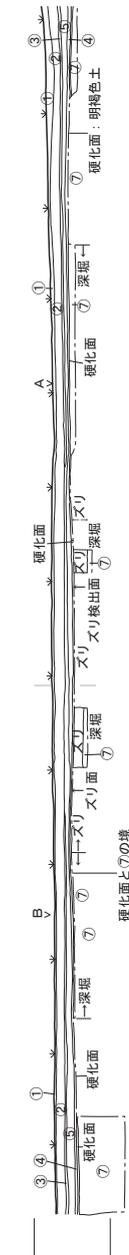
17T②



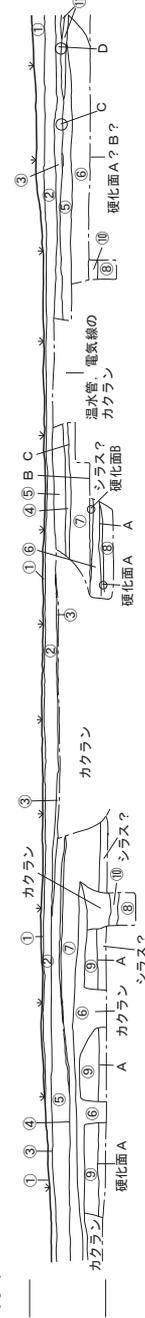
17トレンチ②と18トレンチ

- ①表土 火山灰
- ②褐色土 (褐色土ブロック混じる)
- ③暗灰色火山灰
- ④暗灰色火山灰
- ⑤褐色砂層
- ⑥褐色硬質土
- ⑦黄褐色砂層 (粘台の土?)
- ⑧褐色砂層 (瓦礫混)
- ⑨褐色土 (シラス、粘質土、瓦礫混)
- ⑩灰色砂層 (硬質)
- ⑪褐色砂層 (瓦礫混じる)
- ⑫明褐色砂層 (瓦礫混じる)

18 T



19 T



19トレンチ

- ①表土
- ②公園整備
- ③暗灰色の火山灰
- ④褐色土の火山灰
- ⑤明褐色土
- ⑥褐色砂層 (瓦礫、ガラス、鉄、軽石混)
- ⑦黄褐色砂層 (瓦礫、ガラス、鉄、軽石混)
- ⑧黄褐色砂層 地山?
- ⑨肌色のシラス (小石・小軽石混)
- ⑩ただし、硬化面Aのシラスは明灰色
- ⑪黄褐色砂層 (軽石混) 地山?
- ⑫白色砂層 硬化面は明褐色

18 T (北側) 1/100



第93図 17・18・19トレンチ土層断面図

第5節 総括

1 古絵図・古写真との比較と稿本中での位置

(1) 石垣

4トレンチで検出した胸墻の石垣と3トレンチの胸墻の石垣は一列に並び、同じものと思われる。また同様に7トレンチで検出した胸墻の石垣と5トレンチの胸墻の石垣も同じものと思われる。

しかし、この2つの石垣は並びが一直線上に並ばず、間隔を空けて互い違いになっている。

「砂揚場臺場之圖」『薩藩砲臺圖稿本』（第71図）の図を見ると北側に胸墻の石垣の並びが横墻の左右で異なっている箇所があり、図中のこの部分に先の石垣に間隔があいている部分が相当すると考える。そのため、4トレンチが先の横墻のすぐ脇になり、実際の間隔や7トレンチ横に高まりがあることを考慮すると7トレンチが一つ東側の横墻のすぐ横の位置になると考える。

また、絵図中には、胸墻の石垣に□が描かれており、これが砲床の階段の表現であると考えられる。

(2) 石畳

1・2トレンチで荷揚場の石畳と側面の石垣を検出した。これは、「砂揚場臺場之圖」『薩藩砲臺圖稿本』中に格子目が描かれている箇所に相当する。これは先述の石垣の並びから4トレンチ、7トレンチの位置を「砂揚場臺場之圖」図中で比定した位置関係とも合致する。天保

山砲台が鹿児島市指定文化財に指定されたときには既に土砂に埋もれ、全く地表に現れていなかったと考えられ、指定範囲から外れている。

埋土は一時に埋められたような様子で、かつガラスや鉄くず、タイルなど比較的新しいものが石畳の直上まである。調査時に聞き取り調査を行ったが、いつ埋められたかは分からなかった。周辺状況から判断すると隣接する河口の埋立て時の可能性が高い。

調査では、水際までを検出できなかったため、調査区外にまだ続いていることが想定できる。そのため、古絵図（第70、71図）に描かれている護岸の石垣も調査区外の埋立地に残存している可能性が高い。

8トレンチは砲台跡の中心部にある。調査の結果、公園整備やコンクリートの構築物で大きく攪乱され絵図中の焼玉竈であるか判断がつかなかった。周辺住民の方にも聞き取りを行ったが、新しくつくられたものか、以前からあったものかを記憶されている方がいなかった。



第94図 遺構位置推定図

2 薩英戦争絵巻中の天保山砲台

次いで薩英戦争絵巻中（第68図）での天保山砲台を見ても、描かれている大砲の砲架にキスト砲架は見られない。新波止砲台についても同様にキスト砲架が描かれず、祇園之洲砲台や弁天波止砲台、大門口砲台にキスト砲架が描かれていることと異なる。

このことから、天保山砲台には薩英戦争時キスト砲架の大砲は配備されていなかった可能性がある。そうすると、薩英戦争絵巻に描かれた大砲からは天保山砲台にキスト砲架用の石敷の軌条がなく、砲眼（砲門）を持つ胸墻であった可能性も考えられる（祇園之洲砲台は薩英戦争時には砲眼のない胸墻に造り替えられていた可能性がある。附編135頁参照）。

天保山砲台跡のキスト砲架の軌条は一部露出しているため以前から紹介されており、今回の調査で全体を調べることができた。軌条は、キスト砲架に用いられる砲床の構造物であるため、これが造られていなかった時期に築造された天保山砲台に築造時からあったものとは考えられない。しかし、砲台の改変を考古学的な見地から判断する材料は、今回の調査で得ることができなかった。

3 天保山砲台の残存状況

今回調査したトレンチで9・10・11・12・15トレンチについては、層が4トレンチや7トレンチで調査した層と全く異なる層で、コンクリート造りの構築物を造る際に攪乱されていたり、かつて地表面であったことをうかがわせるような層もなかった。

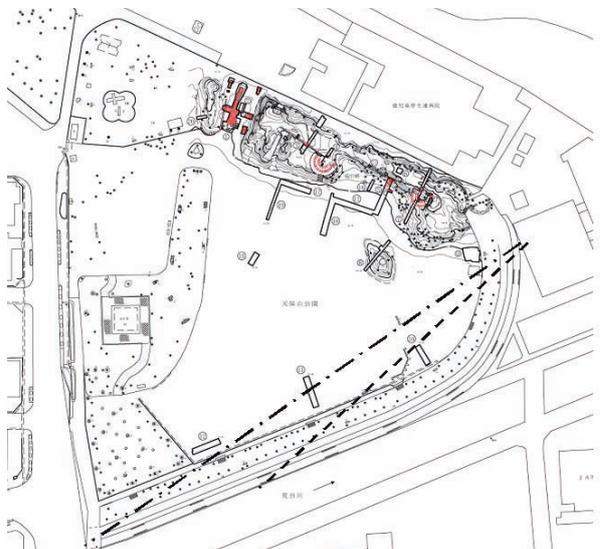
天保山砲台の現在の状況は、昭和7年に護岸工事が行われた後、埋立てが行われた姿であるが、大正時代以前に作成された地図を見ると、現在のようなU字状の地形で描かれておらず、レの字状に描かれ、砲台の一部が既に消失していることが想起され、このような砲台の消失や度重なる周囲の海岸線の台風被害等から守るために護岸が行われたものであろう。

鹿児島地方事務局に残る和紙の地籍図（作成年代不明、書き込み修正あり）を見ると、第95図に波線で示した箇所から南東側が公園地でそれより北が原野となっている。それぞれ地番が異なり、この箇所に修正等は見られない。また、先の地籍図を縮尺を合わせて現地地形図に当てはめてみると、護岸と思われるものの範囲が9トレンチ付近から始まることは一致するが、現状とその範囲が一致しない。そのため、第95図の地籍図に誤記載があったことを推測したものを書き加えて2本提示した。

いずれにせよ、10・11・12トレンチは先に述べたように地図や地籍図から判断すると昭和期の埋立部分であることが想定でき、天保山砲台の残存は、9トレンチで10・11・12トレンチの様相と異なる層があることを考慮すると9トレンチと10トレンチの間から12トレンチの少し北側を通る線より北側に砲台の元来の地形と層が残存

している可能性が高い。

更に、大正以前の地図に現在軌条などが残存している部分と考えられる砲座の盛土と考えられる波線が描かれ、「砂揚場臺場之圖」『薩藩砲臺圖稿本』（第71図）の図中にある背墻のようなものが波線で描かれている。現在の状況でこの背墻にあたると思われる部分は、コンクリートと石垣で囲われた土手となっており、一部は中国の長沙市と鹿児島市が姉妹都市盟約を結び、それを記念して建てた「共月亭」の一部となっている。この工事が行われる以前の写真には松の生えた土塁のようなものが写っており、この工事がそこにあるものを利用しているとすれば共月亭を含む土手にも砲台の一部が残存する可能性がある。今回は、植樹されている松のため調査が



第95図 天保山砲台跡
波線は地積図に見られる公園地と原野の境
—— は 地積図ライン
—— は 修正ライン



第96図 明治40年代の地図（縮尺不同）

できなかった。

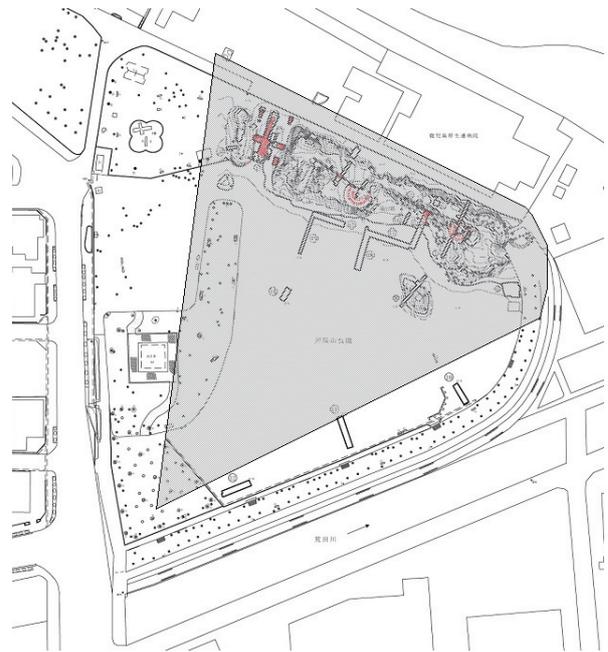
4 調査成果

第4節の調査成果を石畳、砲座、土塁、護岸についてまとめると表21のようになる。

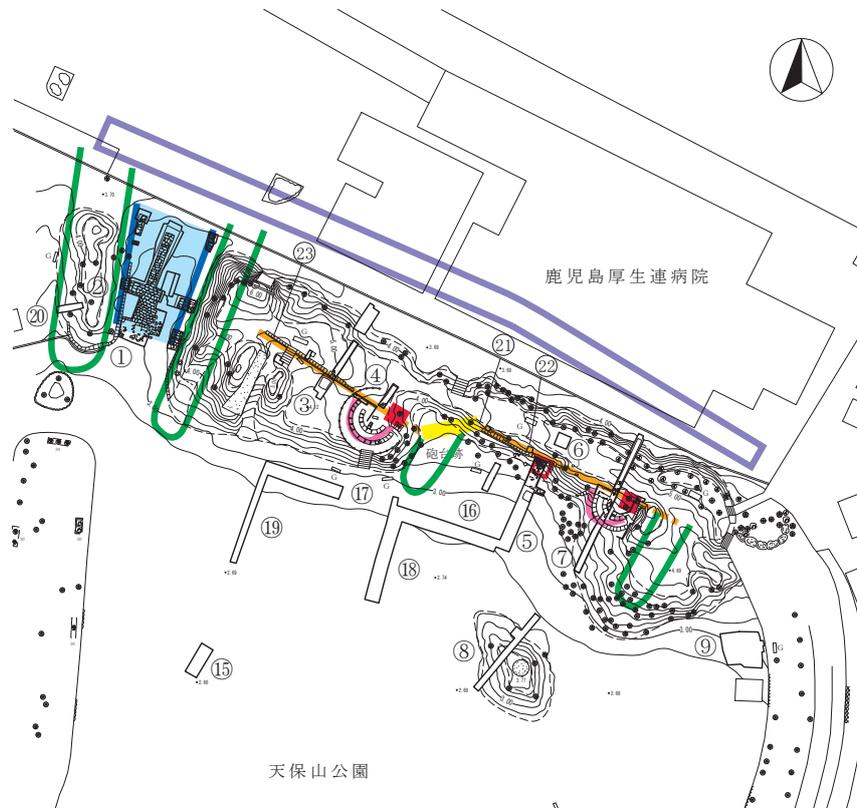
このことから砲台の層が残存する範囲については前項までと併せて第97・98図であると考える。

表21 天保山砲台調査成果

砲座	キスト砲架を置いた砲座の軌条敷石・階段の組み合わせを2箇所検出した。軌条に轍が残存している状況をつかむことができた。
胸墻	胸墻石垣の構造や残存状況、土塁の残存状況をつかむことができた。また古絵図との比較も行った。
石畳	砂揚場砲臺之圖『薩藩砲臺圖稿本』に描かれている石畳を検出した。国内の砲台跡の事例と比較しても河口や海に下る石畳は珍しく貴重である。
護岸	古絵図に描かれている護岸は、検出されなかった。現在埋立地の下であると思われる。
遺物	薩英戦争前(1850年～1863年)とその後などについて、細かな層位的差異は出土遺物では判断できなかった。



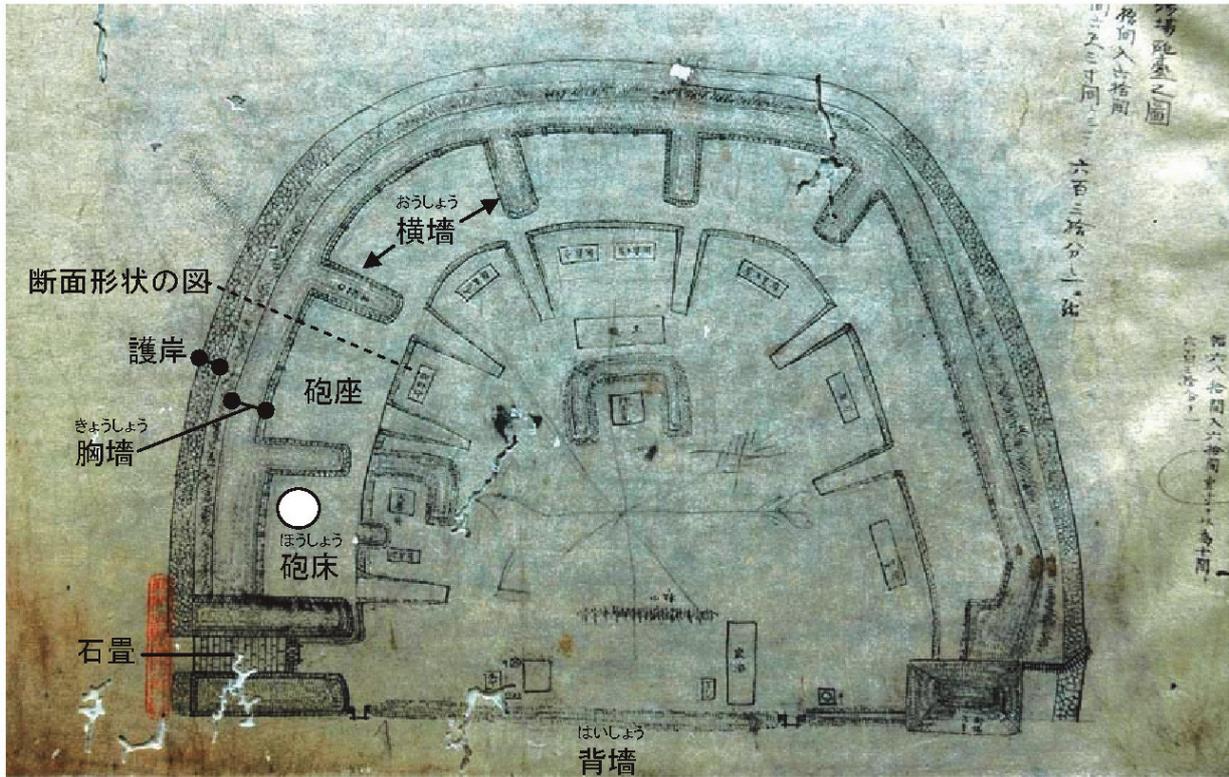
第97図 残存範囲図



凡例

- : 石畳
- : 石畳側面石垣
- : 軌条
- : 砲座階段 (□階段痕跡?)
- : 胸墻石垣
- : 胸墻石垣のズレ
- : 横墻 (推定)
- : 護岸 (推定)

第98図 良好な残存範囲



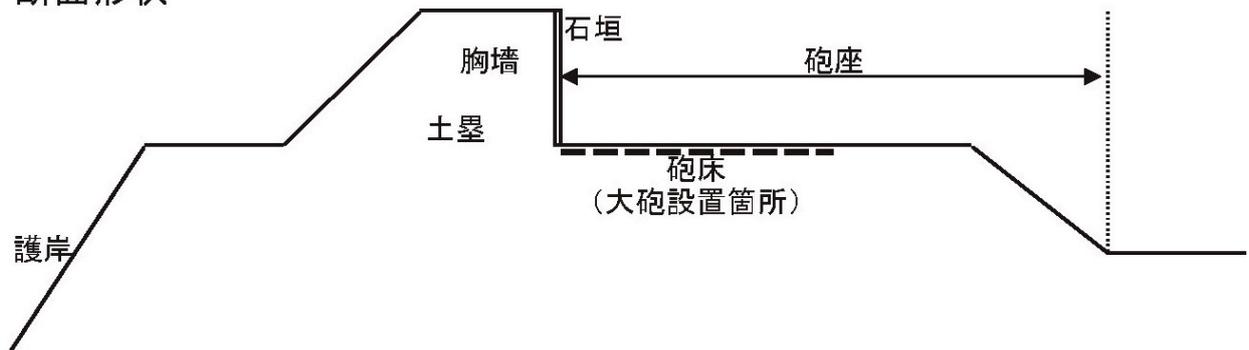
砲床



《参考》キスト^{ほうか}砲架と大砲



断面形状



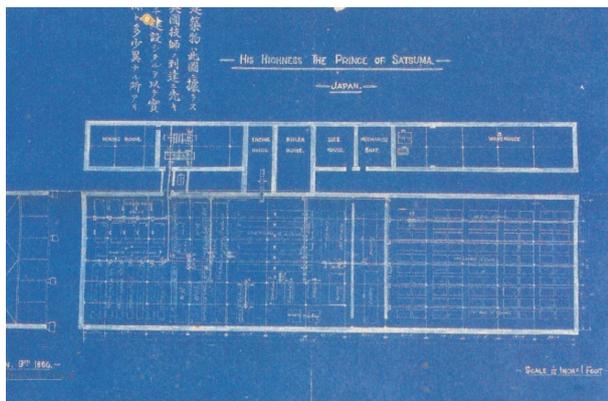
第99図 砲台各部位の名称

第6章 総括

第1節 鹿児島紡績所の推定位置

尚古集成館が所蔵している鹿児島紡績所の機械配置図によると、紡績所の規模は約75m×20mとなっている。

第27図にあるように、2トレンチ布基礎のラインと、3トレンチ布基礎のラインとの間隔は約20mである。第3章6節で述べたことを踏まえ、総合的に判断すると、この2つの布基礎は鹿児島紡績所の南北部分の基礎部分だと考えられる。



尚古集成館蔵

写真9 鹿児島紡績所 機械配置図

1トレンチ布基礎（一番下の平たい礫）は他のトレンチの布基礎に比べ、10～20cm程度レベルが高い。しかも、布基礎の方向が西に向かっており、鹿児島紡績所本体の基礎部分とは考えにくい。明治5・7年の古写真には紡績所本体の建物の西側に石造建築と木造建築の建物が一棟ずつ写っている。（写真9参照）1トレンチの切石布基礎は、この石造建築の倉庫らしき建物のものではないだろうか。そして、1トレンチの坪地業はこの木造建築の基礎部分なのではないだろうか。



長崎大学附属図書館蔵

写真10 明治7年頃の磯地区

そうすると、トレンチを設定する際に参考にした、薩摩のものづくり研究会報告書『薩摩藩集成館事業における反射炉・建築・水車動力・工作機械・紡績技術の総合的研究』で報告されている古写真のコンピュータ解析による配置復元図（以下、「復元図」とする）とのズレが生じることになる。ただ、「復元図」は鹿児島紡績所の敷地高を、「機械工場の敷地高-50cm」と仮定しているので、調査結果とのズレがでてくるのが当然かもしれない。

このズレは、平成23年度に実施された鹿児島紡績所技師館の発掘調査概要報告書（鹿児島市教委）でも指摘されている。調査の結果、技師館の推定位置がやや北東方向にずれることを想定しているのである。

「復元図」の推定位置を、技師館と同様にやや北東方向にずれるものと考え、1トレンチ検出の布基礎・坪地業は、古写真に見られる紡績所本体の手前の石造建築物・木造建築の位置に重なってくる。

これらのことを総合的に判断し、鹿児島紡績所の推定位置を第100図に示した。東西の基礎部分は検出できなかったが、南北の基礎部分は2～3トレンチのラインで間違いないだろう。その東西の位置関係も手前の石造建築と木造建築物から想定できる。

今回の調査では、鹿児島紡績所の敷地全体の範囲を特定することはできなかったが、古写真・地籍図等から推定した範囲を第100図に示した。これについては、今後の調査・研究に期待したい。

鹿児島紡績所は、薩英戦争後にイギリスの技術を導入し、建設された日本初の洋式紡績機械工場であり、その後の日本の紡績業の先駆けとなった。その工場本体の位置が特定できたことは大きな意義がある。



長崎大学附属図書館蔵

写真11 明治7年頃の鹿児島紡績所